

ピープルズバイブル
聖書ガイド

出エジプト記

アーンスト・H・ウェンドランド著
江川かをり訳

ウィスコンシン州ミルウォーキー

ノースウェスタン出版社

NORTHWESTERN PUBLISHING HOUSE

Milwaukee, Wisconsin

日本語聖書の引用は、新改訳 2017 年版（J-ぱいぶる 2017）を使用しています。

日本語訳の原稿は、翻訳・執筆会社スタークロス（所在地：東京都東久留米市本町 1-3-39）の監督のもと制作しています。

英語聖書の引用は、特に明記されていない限り、新国際版聖書（HOLY BIBLE, NEW INTERNATIONAL VERSION®, NIV®）からのもので、1973 年、1978 年、1984 年の国際聖書協会の著作権に基づき、ゾンダーヴァン出版社の許可を得て使用しています。すべての権利は保留されています。

「NIV」および「New International Version」は、国際聖書協会によってアメリカ合衆国特許商標局に登録された商標です。これらの商標の使用には国際聖書協会の許可が必要です。出版社の明示的な許可なく、この出版物の一部をどのような形式や手段でも—電子的、機械的、複写、録音など—複製、保存、送信することは禁じられています。これにはレビューでの短い引用も含まれます。

表紙のアートはフランク・オルダズが手掛け、内部イラストはグレン・マイヤーズ、地図はジョン・ローレンツ博士によるものです。初版及び一部の第二版の表紙には、ジェームズ・ティソ（1836-1902）のイラストが採用されています。

英語原本 *The People's Bible Exodus* by Ernst H. Wendland の出版社は、ノースウェスタン出版社（所在地：1250 N. 113th St., Milwaukee, WI, USA, 53226-3284）で、1984 年版の著作権はノースウェスタン出版社が保有しています。

なお、本稿を作成するにあたり、アメリカ・ウィスコンシン州に本部を置くルーテル教会 WELS、およびその姉妹教会である日本の LECC（ルーテル福音キリスト教会）のメンバーにご協力いただいたことに感謝いたします。

目次

編集者のまえがき

出エジプト記への序章

I. 契約の民がエジプトから救い出される(1:1-18:27)

II. 神とイスラエルとの間に契約が成立する (19:1-24:18)

III. 契約の場所、幕屋への入場 (25:1-40:38)

絵図

災い

ミリヤムの喜びの歌

モーセと十の戒め

契約の箱

黄金の子牛

神の幕屋

地図

編集者のまえがき

『ピープルズバイブル～聖書ガイド～』はその名前が示す通り、人々のため、つまり、皆さんのための聖書解説書です。難しく思える聖書の内容が、大勢の方に伝わるように書かれました。日本語での出版に際して、日本語聖書の引用には新改訳聖書2017を、英語聖書の引用にはNew International Version (NIV) を利用しています。それぞれの聖書箇所直後には解説が続き、著者の解釈や歴史的な背景とその説明が書かれています。

各巻の著者は、全員が神学者であり、長年の宣教経験に根差した、聖書の実用的な深い理解を持ち合わせています。また、文章においては、専門用語の使用をできる限り避け、専門家以外の読者にも広く読まれるよう工夫を重ねました。

この本の最も重要な特徴は、キリスト中心であるということです。旧約聖書でイエス・キリストは、「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです」（ヨハネ 5:39）と言っておられます。本シリーズすべての巻が、読者の意識をイエス・キリストに向けるように書かれています。聖書の中心はキリストであり、イエスこそが私たちの唯一の救い主だからです。

解説書内では、地図、イラスト、考古学的な情報が、必要に応じて使用されています。また、すべての巻に小見出しを付けることによって、目的の聖書箇所にすぐ参照できるよう工夫されています。

『ピープルズバイブル～聖書ガイド～』の全巻は、Wisconsin Evangelical Lutheran Synod (WELS)のクリスチャン文書委員会により編さんされました。

この文書伝道活動が長く続くことが私たちの祈りです。私たちは本書を、三位一体の神の栄光のため、また、まことの神を信じる人々の益のために捧げます。

出エジプト記への序章

出エジプト記はモーセ五書の1つとして、モーセによって書かれました。モーセ五書は聖書の最初の5冊の書を指します。モーセ五書のうち1番目である創世記には、イスラエル人の先祖であるアブラハム、イサク、ヤコブのことが記録されています。そして、ヤコブとその家族がエジプトに移住し、息子のヨセフが死ぬ場面で終わります。ヤコブ一族は、エジプトの高官となったヨセフが、飢饉の際に家族をエジプトに呼び寄せたことをきっかけにエジプトに移住しました。

出エジプト記は、創世記のエジプト移住での終結部分の続きを記録しています。この頃、ヤコブの子孫はイスラエル人と呼ばれるようになりました。出エジプト記の最初の数節では、ヤコブの名前が上げられ、その息子のヨセフについての記述が続きます。

す。「そしてヨセフもその兄弟たちも、またその時代の人々もみな死んだ。イスラエル人は多産だったので、おびただしくふえ、すこぶる強くなり、その地は彼らで満ちた」。これらの節は、創世記と出エジプト記のつなぎとして書かれていますが、そこには数百年にもわたる年月が流れています。イスラエル人は 430 年間エジプトに滞在しました（出エジプト記 12:40）。この長い年月を経てイスラエル人たちを取り巻く状況は、ヨセフの時代と比べて大きく変わりました。

神は歴史を動かして、人類の救いのご計画を実行されました。出エジプト記は、救いのご計画のために神が選んだイスラエルの民が、エジプトを後にして約束の地へと旅立つことになった経緯と、約束の地へ向かう旅の途中で起こった重要な出来事を記録しています。

書名の由来

出エジプト記という名前は、紀元前 285 年にギリシャ語で書かれた七十人訳聖書に由来します。英語訳である Exodus は「出発」または「旅立ち」という意味です。この書はイスラエル人がエジプト王の迫害から逃れ、エジプトを旅立ったことについて記録していることは事実です。しかし、出エジプト記には「旅立ち」という出来事よりもさらに重要な点があります。神の救済計画にとって最も重要なこの出来事については、まえがきの後半で説明します。

出エジプト記の著者

モーセが出エジプト記を含む聖書の最初の五書を書いたことが真実かどうかは、ここで詳しく議論する必要はないでしょう。しかし、この点に関して私たちの立場を明確にするため、いくつかの意見を挙げておきます。

イエスはしばしば旧約聖書を引用して教えました。イエスは、ご自身について証言していると話した聖書の 3 つの区分のひとつとして「モーセの律法」を挙げました。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」（ルカ 24:44）イエスの時代のユダヤ人が旧約聖書を 3 つに区分して学んでいたことを考慮に入れると、イエスの言った「モーセの律法」とはモーセ五書すべてを指していることは明らかなです。またイエスは、ご自分を信じようとしないユダヤ人に対して「もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことだからです」（ヨハネ 5:46）と言って、ユダヤ人たちの信仰を試しました。これらの事実から、イエスは聖書の最初の五書がモーセによって書かれたと明言しています。

モーセ五書のうち、神ご自身が選んだ民の指導者であるモーセの誕生とその活動をもっとも詳細に記録しているのは、出エジプト記です。その内容を読むと、著者はエジプトの習慣、神々の名前、気候や地理をよく知っていた人物だったことが分かります。また、イスラエル人がエジプトを出発し、砂漠からシナイ山へと旅をした際の説明は目撃証言と言えるほど詳細です。そして【主】がモーセに「このことを記録として、書き物に書きしるし、ヨシュアに読んで聞かせよ」（出エジプト 17:14）と指示し「モーセは【主】のことばを、ことごとく書きしるした」（出エジプト 24:4）と書かれていることから、出エジプト記の著者が、間違いなく、聖霊に導かれたモーセであることが分かります。

出エジプト記の内容と、書かれた目的

イスラエル人がエジプトに滞在していた 430 年間に、イスラエルの人口は 60 万人に増えました。なお、この数は、女性と子どもを含みません。ヨセフの時代には、イスラエル民族は客として歓迎されていました。しかし、彼らの人数が増えたことからエジプト王に憎まれ、迫害を受けるようになりました。出エジプト記のはじめの数節では、この状況の短い説明があった後にモーセの紹介が始まります。モーセは神の民をエジプトでの奴隷生活から解放し、約束の地に導き入れるために召されました（2,3 章）。そのあとに続くすべての章（4 章～40 章）は、2 年未満の期間に起こった出来事を詳しく記録しています。この 2 年間は、エジプトからイスラエル人を解放するためのモーセの交渉に始まり、約束の地カナンへ向かう旅の最初の 1 年間へと続きます。

イスラエル人救出の歴史の中でもっとも重要な出来事が、エジプトの圧政からの解放後すぐに起こります。その出来事とは、全能の主なる神が、イスラエル人をご自分の民として養子に迎え入れたことです。それは、イスラエル人を通して、救い主を送るというご自身の約束を成就し、救いを信じるすべての人々を救うためでした。神はイスラエル人をご自身の契約の民として聖別し、シナイ山で彼らに対して神聖な誓いを立てました。この契約に基づいた律法や規制についての記述が、出エジプト記の大部分を構成しています。この神聖な契約こそが、出エジプト記の最も重要な部分です。

あらすじ

イスラエル人が神の契約の民として聖別された、という出来事が出エジプト記の最も重要なテーマです。このテーマに従うと、本書の学びは次の流れに沿ったものになります。

テーマ：神（エホバ）とイスラエルの民との契約

I. エジプトからイスラエル人が救出される（1-18 章）

II. エホバとイスラエルとの間に契約が成立する（19-24 章）

III. 契約の場所である幕屋にイスラエルの民が入場する（25-40 章）

イスラエルを救った神であるエホバとの契約の経緯は注目に値し、多くのページにわたって詳細に記録されています。（訳注：「エホバ」という用語は、福音派プロテスタントの文脈で使われており、エホバの証人の教義とは無関係です。エホバは、ヘブライ語の神の名前 YHWH の一つの読み方です。）

出エジプト記の初章である 1 章から 18 章は、モーセの誕生と召命、イスラエル人の解放を巡るモーセとエジプト王との交渉、十の災い、過越の祭りの起源、エジプトからの出発、そして、紅海を渡り荒野を移動してから主の山であるシナイ山に到着するまでのイスラエル人について記録しています。これらの章は、シナイ山での契約の成立への導入となっています。

次の 19 章から 24 章までは、シナイ山での契約成立の経緯を伝えています。イスラエル人が神の民となることに関連した基本的な律法が制定される際の直近の準備と、条約の内容、またイスラエルがこれらの律法の守り方に同意する過程について記述しています。

25 章からは、イスラエルの神であるエホバが臨在する場所としての幕屋の設営と、その装飾に関する神の指示について書かれています。（訳注：幕屋は、イスラエルの民が荒野を彷徨う間に建てた移動式の聖所で、神の臨在と人々との契約を象徴していました。）幕屋の建設は、イスラエル人が金色の仔牛を拝んだことによって一時中断されます。しかし、モーセの仲介により神との契約が更新され、神の指示通りの幕屋が設営されました。「【主】の栄光が幕屋に満ちた」という荘厳な記述で出エジプト記は結ばれます。

歴史的な設定

聖書の研究者や歴史家は何年にもわたり、出エジプト記の初章の出来事がどの史実に当てはまるのか議論を重ねてきました。1 章に出てくる「ヨセフを知らない新しい王」とは誰だったのか。どのエジプト王つまりファラオがイスラエル人を迫害したのか。モーセがイスラエル人を解放するように懇願したのはどのファラオだったのか。これらの質問はすべて、イスラエル人がエジプトを出発した実際の日付に関連したもので、多くの異なる意見が出されました。

出エジプト記の年代や日付に関して、私たちの立場は明確です。それは第一に聖書の記述に基づいています。列王記には「イスラエル人がエジプトの地を出てから四百八十年目、ソロモンがイスラエルの王となってから四年目のジブの月、すなわち第二の月に、ソロモンは【主】の家の建設に取りかかった。」（I 列王記 6:1）とあります。つまりソロモンが王になった4年目に神殿の建築が始まり、それはイスラエル人がエジプトを出発してから480年目だったということです。考古学的発掘により見つかった、アッシリア帝国の高官の記録によると、ソロモン王の統治4年目は紀元前966年ごろだったという意見に多くの歴史家が賛同しています。そこから480年を引くと紀元前1446年になり、この年が、モーセがイスラエル人を連れてエジプトを出た年であるという結論が出ます。他にも、もう少し後の年代を提唱するネルソン・グルーク（Nelson Glueck）やキャスリーン・ケニヨン（Kathleen Kenyon）の考古学的な意見を採用する学者もいます。またジョン・ガースタング（John Garstang）のように、先に説明した、列王記第一の記録によって導き出された年代を提唱する考古学者もいます。私たちは、聖書の年代順に沿った彼の解釈を支持します。

以上を踏まえた上で、「ヨセフのことを知らない新しい王」がエジプトのどの王だったかの話題に移りましょう。この「新しい王」は、紀元前16世紀にエジプトを支配したヒクソス人というセム語族の民族をエジプトから追い出しました。歴史的には、ヒクソス人を追い払った王国は、およそ紀元前1580年から1085年の間に支配したエジプト新王国だったと言われています。

この考え方に基づけば、イスラエルを迫害したファラオは紀元前1500年から紀元前1450年ごろに支配したトトメス3世であり、イスラエル人がエジプトを脱出した時期のファラオは紀元前1450年から紀元前1425年頃に支配したアメンホテプ2世だということになります。エジプト人の歴史書の中には、出エジプト記の出来事は記されていません。イスラエル人の出エジプトという事件は、エジプト人にとっては国家権力とその栄光に影を落とす事件であったため、彼らの歴史の記録から消し去ったことは当然予想されることです。

ここで挙げた歴史上の名前や年代は、興味深い追加情報として取り上げたに過ぎません。考古学的な発見は、聖書の内容に興味を持たせるきっかけにはなりますが、それが聖書の真理を私たちに確信させるものではありません。列王記第一6章1節のように、具体的な歴史的情報が聖書に記載されている場合、私たちはそれを真理として受け入れ信じます。

出エジプト記における重要なテーマは、神が、ご自身の民であるイスラエル人と契約を結んだという点です。救いの神は、聖霊によってモーセを動かし、この大切な出来事について記録させました。神がモーセをそのように導いた真の目的は、イスラエル人と神が契約を結んだことを、私たちに強く印象づけるためでした。

第一部

契約の民がエジプトから救い出される

(1:1-18:27)

出エジプト記 1 章

創世記から出エジプト記へ

- 1 さて、ヤコブといっしょに、それぞれ自分の家族を連れて、エジプトへ行ったイスラエルの子たちの名は次のとおりである。
- 2 ルベン、シメオン、レビ、ユダ。
- 3 イッサカル、ゼブルンと、ベニヤミン。
- 4 ダンとナフタリ。ガドとアシェル。
- 5 ヤコブから生まれた者の総数は七十人であった。ヨセフはすでにエジプトにいた。
- 6 そしてヨセフもその兄弟たちも、またその時代の人々もみな死んだ。
- 7 イスラエル人は多産だったので、おびただしくふえ、すこぶる強くなり、その地は彼らで満ちた。

出エジプト記の最初の数節は、創世記と出エジプト記を分かりやすくつないでいます。創世記の最後の数章は、ヤコブの一族が大飢饉の際にエジプトに移り住んだことについて記録しており、出エジプト記でも再びこの民族移動についての記述が見られます。ヤコブの息子たちの名前は、その母親の順に記載されています。最初はレアとラケルの子ども達、続いて女奴隷のジルパとビルハの子ども達と続きます。この時、ヨセフは当然のことながら、エジプトの権力者として、すでにエジプトに住んでいました。ヤコブの子孫 70 人は、創世記 46:27 にも記されています。

続いて、その後の出来事の背景が短く記録されています。ヤコブの子ども達や直系兄弟世代は死んだことが記されています。その後、イスラエル人の人口は、通常では考えられないほど増加し、彼らが定住したゴシェンの地はイスラエル人でいっぱいになりました。こうして創世記 22:17 で「確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵の門を勝ち取る」と神がアブラハムに約束したことは実現したのです。

この驚くべきイスラエル人の人口増加は、異国の地での孤立した環境の中で、何世紀もわたる年月の中で起こったことです。この時期についての記録はほとんどないため、

その詳しい様子は分かりません。しかし神がイスラエル人を、他の国々と分け隔てられた契約の民となるべく準備なさっていたことをうかがい知ることができます。

当時のイスラエル人の多くは羊飼いでした。当時のエジプト人は羊飼いを嫌っていたことから、イスラエル人は何世紀にもわたってエジプト人から隔離され続けました。これこそ、イスラエルが国家としての土台を作るのにふさわしいこととして、神がご計画したことだったのです。

ここで、神の民にとってエジプトでの年月が何を意味していたかについて考えてみましょう。イスラエル人の歴史においてこの時期は数世紀に及びます。(筆者の祖国アメリカ合衆国は数年前に建国 200 周年を祝ったばかりです。) 信仰深いイスラエル人たちも、この長い期間にわたり、こう疑問に思ったことでしょう。「神が私たちの父祖アブラハム、イサク、ヤコブに約束したことは一体どうなっているのだろう。私たちは異国の地にいる。ここは約束の地ではない。神のご計画とはまったく違うではないか。」

この時のイスラエル人は、まだ割礼の習慣を守っていました。割礼とは神がアブラハムと契約を結んだことを証明するものです。また彼らは主に捧げ物をささげ、安息日には礼拝と賛美もささげていました。しかし、神はこの期間、イスラエル人に対して沈黙を貫きました。それはアブラハムとイサクとヤコブに対する態度と比べれば不思議なほどの沈黙です。神はイスラエル人の父祖たちに、彼らの子孫が大いなる国民となることを約束しました。その約束は、長い神の沈黙の期間にあっても、毎日果たされていたことを私たちは知ることができます。エジプトでの隔離は、神のご計画をよく表していたのです。

現代のクリスチャンは、罪に満ちた世界に住む異国人です。孤独と苦悩の中でクリスチャンはある時に、詩編の作者と同様に「主よ、いつまでですか。(詩編 13:1)」と神に訴えかけます。平安に満ちた神の御国は遠く感じられ、聖書に書かれた神の力強い励ましも空しく感じられます。

このような時に、神は私たちを救う完璧なご計画を立てておられることを覚えておきましょう。神は約束を必ず守ります。そして神のご計画は必ず成し遂げられるのです。そうです。地上の問題が山積し、この世の悪の力が私たちを滅ぼそうと迫り来る時、このことを覚えておくことは何よりも大切です。

次に続く節を読むと、イスラエルの苦悩と迫害による試練がさらに激しさを増すことが分かります。

8 さて、ヨセフのことを知らない新しい王がエジプトに起こった。

9 彼は民に言った。「見よ。イスラエルの民は、われわれよりも多く、また強い。

10 さあ、彼らを賢く取り扱おう。彼らが多くなり、いざ戦いというときに、敵側についてわれわれと戦い、この地から出て行くといけないから。」

11 そこで、彼らを苦役で苦しめるために、彼らの上に労務の係長を置き、パロのために倉庫の町ピトムとラメセスを建てた。

12 しかし苦しめれば苦しめるほど、この民はますますふえ広がったので、人々はイスラエル人を恐れた。

13 それでエジプトはイスラエル人に過酷な労働を課し、

14 粘土やれんがの激しい労働や、畑のあらゆる労働など、すべて、彼らに課する過酷な労働で、彼らの生活を苦しめた。

まえがきで触れたとおり、「ヨセフのことを知らない新しい王」は、エジプト新王朝の創始者であったことが予想できます。新王国が建国されたとされる紀元前 1580 年頃は、多くの問題を引き起こしたヒクソス人という侵略者がエジプトから追放され、その後エジプトが最も栄華を極める時期と重なります。聖書にはヒクソス人についての情報がほとんどありません。ヒクソス人は自身も異国人であったことから、同じくエジプトの寄留者であるヘブル人に、さほど危害を加えなかったことがうかがい知れます。しかし、エジプト新王朝が成立すると、イスラエル人の状況は急変しました。

新しい王は、かつてヨセフがエジプトの飢饉を救ったという事実には縛られることなく行動していました。ヨセフの功績を抜きにしてイスラエルの人々を見た王は、彼らをエジプトに対する脅威とみなすようになりました。そしてエジプト政府の厳しい管理下に置くために、前述の節にあるような厳しい措置を取るようになったのです。

王はイスラエル人の勢力を恐れてはいたものの、彼らがエジプトから出ていくことを望みませんでした。彼らは、エジプト王のためにピトムやラムセスといった町を作るうえで不可欠な存在でした。これらの町は、貯蔵都市として商売や軍隊の駐屯のために建設され、イスラエル人はその町作りの貴重な労働資源だったのです。

しかし、このパロ（王）の計画は惨めに失敗します。エジプトでの迫害は、故郷に帰りたいというイスラエル人の思いをさらに強めたことが容易に想像できます。もしエジプトの圧政がなく快適な生活が続いていれば、彼らの約束の地に対する思いは弱まっていたかもしれません。

神はイスラエル人がカナンの地に戻ることを望みました。イスラエル人たちは、耐え難い困難に直面しなければなりませんでした。そこにも神の救いの御手の働きをはっきりと見ることができます。

こうした困難の時期にイスラエル人を支えていたのは、主を愛する畏敬の念であったことが次に続く節で分かります。

15 また、エジプトの王は、ヘブル人の助産婦たちに言った。そのひとりの名はシフラ、もうひとりの名はプアであった。

16 彼は言った。「ヘブル人の女に分娩させるとき、産み台の上を見て、もしも男の子なら、それを殺さなければならない。女の子なら、生かしておくのだ。」

17 しかし、助産婦たちは神を恐れ、エジプトの王が命じたとおりにせず、男の子を生かしておいた。

18 そこで、エジプトの王はその助産婦たちを呼び寄せて言った。「なぜこのようなことをして、男の子を生かしておいたのか。」

19 助産婦たちはパロに答えた。「ヘブル人の女はエジプト人の女と違って活力があるので、助産婦が行く前に産んでしまうのです。」

20 神はこの助産婦たちによくしてくださった。それで、イスラエルの民はふえ、非常に強くなった。

21 助産婦たちは神を恐れたので、神は彼女たちの家を栄えさせた。

22 また、パロは自分のすべての民に命じて言った。「生まれた男の子はみな、ナイルに投げ込まなければならない。女の子はみな、生かしておかななければならない。」

シフラとプワは、疑いなく、ヘブル人を対象とした助産婦業を統括していた女性たちだといえます。産み台とは、当時のヘブル人女性が子どもを産む際に、ひざまずいたり座ったりする石や椅子でした。

この助産婦たちが、ヘブル人の女性たちは助産婦が行く前に子供を産んでしまう、と言って王を欺いたことの正当性が議論の対象となることがあります。彼女たちは王の命令に従って行動を起こすことを明らかに拒否しています。彼女たちは人よりも神を愛し、敬いました。彼女たちは良心に反して王の残虐な命令に従うことはできませんでした。神は、この女性たちが地上の王よりも神に従ったことを喜び、祝福を与えました。このことから、当時のイスラエルには全能の神に対する畏怖心があったことが分かります。イスラエルの人々が異国の地で長い年月暮らし続け、激しい苦難を経験した後であっても信仰は失われなかったのです。

「助産婦たちは神を恐れ」とあるように、私たちもイスラエル人と同様に厳しい試練や誘惑に直面しても、主を愛し敬うこと、つまり神を畏れることが、私たちを守り養うことを覚えておく必要があります。

ここで言う「おそれ（恐れ／畏れ）」とは、愛と信頼を意味する畏れであり、罰を恐れる恐怖の感情とは異なります。それはむしろ、どれほど困難や迫害が激しく迫ってきても、神がすぐ近くにおられ、私たちを守り導いてくださるという安心感の源となる意識です。罰をおそれて、いやいやながら従う心とは大きく異なります。心から神を敬い頼る者は、どんな危険に直面したとしても、正義の神が必ず悪を打ち負かすと信じる、子どものように純粋な信仰を持ち続けます。

このような主への「おそれ」を不信仰者が見る時、彼らの嫌悪感が刺激され信仰者に対してより激しい暴力をふるうことがあります。パロはエジプトにとって危険とみなし

たイスラエル人に、自分の力を見せつけることを心に決め、次の宣告を出します。「生まれた男の子はみな、ナイルに投げ込まなければならない。女の子はみな、生かしておかなければならない。」

しかし、イスラエル人を抹殺しようとするこの邪悪な計画は、ことごとく失敗しました。それだけではありません。神はエジプト王の無慈悲な企てを、神の民イスラエル人を保護するために用いられたのです。次の章でその出来事を見ていきましょう。

出エジプト記 2 章

イスラエル人が迫害される

1 さて、レビの家のひとりの人がレビ人の娘をめとった。

2 女はみごもって、男の子を産んだが、そのかわいいのを見て、三か月の間その子を隠しておいた。

3 しかしもう隠しきれなくなったので、パピルス製のかごを手に入れ、それに瀝青と樹脂とを塗って、その子の中に入れ、ナイルの岸の葦の茂みの中に置いた。

4 その子の姉が、その子がどうなるかを知ろうとして、遠く離れて立っていたとき、

5 パロの娘が水浴びをしようとナイルに降りて来た。彼女の侍女たちはナイルの川辺を歩いていた。彼女は葦の茂みにかごがあるのを見、はしためをやって、それを取って来させた。

6 それをあけると、子どもがいた。なんと、それは男の子で、泣いていた。彼女はその子をあわれに思い、「これはきっとヘブル人の子どもです」と言った。

7 そのとき、その子の姉がパロの娘に言った。「あなたに代わって、その子に乳を飲ませるため、私が行って、ヘブル女のうばを呼んでまいりましょうか。」

8 パロの娘が「そうしておくれ」と言ったので、おとめは行って、その子の母を呼んで来た。

9 パロの娘は彼女に言った。「この子を連れて行き、私に代わって乳を飲ませてください。私があなたの賃金を払いましょう。」それで、その女はその子を引き取って、乳を飲ませた。

10 その子が大きくなったとき、女はその子をパロの娘のもとに連れて行った。その子は王女の息子になった。彼女はその子をモーセと名づけた。彼女は、「水の中から、私がこの子を引き出したのです」と言ったからである。

ここでモーセは自己紹介をし、自分の命がエジプト王の残虐な命令からどう助かったかを語っています。これは教会の日曜学校でよく教えられる話です。この中で重要なことはモーセ本人が自分の歴史、つまり、神を畏れる自分の家族について記録している点

です。これはモーセの立派な信仰を示しています。ヘブル人への手紙の著者は「信仰によって、モーセは生まれてから、両親によって三か月の間隠されていました。彼らはその子の美しいのを見たからです。彼らは王の命令をも恐れませんでした」(ヘブル 11:23)と記しています。

先に生まれていた姉のミリアムと兄のアロンの命は王の命令に脅かされることはありませんでしたが、これから生まれてくるモーセの命は危険にさらされることが予想されました。モーセの両親がこの時期にモーセを生んだのは勇気のいることでした。

モーセは生まれてから3ヶ月間、家の中に隠して育てられましたが、外に泣き声が聞こえるようになると、彼の命を守るための別の方法が必要となりました。モーセの母(名前は不明)は、彼が特別な子どもであると認識していました。英語訳では「“fine child”立派な子ども」、日本語訳では「かわいい」と書かれていますが、これは彼が健康で好ましい特徴を持つ子どもであったことを示しています。

やがてモーセを助けるため、パピルスで編んで瀝青と樹脂で塗ったかごにモーセを入れ、ナイル川の安全な場所に浮かべる方法が選ばれました。これはモーセを、神の保護にゆだねることを意味しました。この場所が、エジプトの姫君がモーセを拾う場所として選ばれたのか、そして彼女にモーセを育ててもらいたいと両親が望んだのか、彼は明らかにしていません。重要なのは、これが、モーセが偉大な指導者に成長するための訓練であったということです。

その後、モーセの実の母が乳母となりました。この時代、乳母が子供の世話をするのはおよそ3年でした。その期間が過ぎてからモーセは、新約時代のステパノが記したとおり、「エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ」(使徒 7:22)しました。

この時代、エジプトは世界中のあらゆる科学の中心となっていました。そのためエジプトの最高の学問は、世界最高の学問を意味しました。この教育こそ、モーセにとって、神の任務を遂行するために必要な訓練でした。私たちは後に、神がイスラエルの迫害者となるエジプトの知識を逆手にとり、救いの偉大なわざを成し遂げるについて学びます。

10 節で、モーセという名前はパロの娘によって付けられたことが分かります。名前の意味について様々な聖書研究者の見解が存在しますが、モーセははっきりと自分の解釈を述べています。それは「水から引き上げられた者」という意味です。まさしく、モーセを通してイスラエル人は、エジプトでの奴隷生活という海で溺れていたところから引き上げられたのです。

ここで興味深い注釈として記しておきたいことは、イスラエル人が、子どもを非常に大切な存在として扱っていたということです。彼らは、子どもを、主からの大いなる遺産と思っていました。両親は子どもを、神からいただく地上でもっとも尊い祝福ととらえ、命をかけて子どもを生み育てていたのです。一方、現代社会では、神から頂いた大切な胎の実を、ただ欲しくないという安易な理由で堕胎することが頻繁に起こっています。こ

の時代のイスラエルと、なんと大きな考え方の違いでしょうか。(訳注：予期せぬ妊娠は、妊婦とその家族にとって大きな衝撃となりえます。そのような時に役立つ情報とクリスチャンカウンセリングを提供し、妊娠・出産あるいは堕胎後の心のケアを安全かつ献身的にサポートする団体 WELS Lutherans For Life が WELS 教会には用意されています。)

モーセが神から特異な賜物を受け、レビ人という無名な部族から生まれた後、何が起こったのかは次の章に記されています。

11 こうして日がたち、モーセがおとなになったとき、彼は同胞のところへ出て行き、その苦役を見た。そのとき、自分の同胞であるひとりのヘブル人を、あるエジプト人が打っているのを見た。

12 彼はそのエジプト人を打ち殺しあたりを見回し、ほかにだれもいないのを見届けると、これを砂の中に隠した。

13 次の日、また外に出てみると、なんと、ふたりのヘブル人が争っているではないか。そこで彼は悪いほうに「なぜ自分の仲間を打つのか」と言った。

14 するとその男は、「だれがあなたを私たちのつかさやさばきつかさにしたのか。あなたはエジプト人を殺したように、私も殺そうと言うのか」と言った。そこでモーセは恐れて、きっとあのことが知れたのだと思った。

15 パロはこのことを聞いて、モーセを殺そうと捜し求めた。しかし、モーセはパロのところからのがれ、ミデヤンの地に住んだ。彼は井戸のかたわらにすわっていた。

使徒の働き 7 章 23 節によると、モーセがミデヤンの地に逃れたのは 40 歳の時でした。彼はファラオの王宮で教育を受け、エジプトの最高の知識を得ていましたが、その間も自分がイスラエル人であるという意識を持ち続けていました。(訳注：ファラオはパロのギリシャ語読み。パロはヘブル語読み。) 彼は自分の同胞が奴隷として残酷な扱いを受けていることに、深い悲しみを覚えました。

前述の聖書の部分にもある通り、モーセはやがて、彼がイスラエル人の味方であることを示しました。そして同胞に対する強い共感が高じて、人を殺してしまいます。それは衝動的な罪の行為でした。彼は、イスラエル人を迫害していたエジプト人を打ち殺し、周囲を確認し、その遺体を地に埋めて隠しました。その行為から、モーセ自身もこれが犯罪だと知っていたことが分かります。しかし、モーセのこの行動は、信仰から発していたことも事実です。ヘブル人の手紙の著者も「信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです」と書いている通りです (ヘブル 11:24-26)。

この時、モーセはすでにイスラエル人を救出するための指導者としての自分の役割を自覚していました。そして彼は、自分の行動や意図がイスラエルの民から受け入れられ、評価されるものと信じていました。しかし、イスラエルの民はその時点で、彼の意図を理解し受け入れる準備ができていなかったのです。モーセはイスラエル人同士の対立を仲裁しようとした際に、民から否定的な反応を受けました。これに関連して、新約のステパノは使徒 7 章 25 節で、「(モーセは)、自分の手によって神が兄弟たちに救いを与えようとしておられることを、みな理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした」と述べています。

彼らはモーセに、彼が殺人を犯したことがエジプト中に知れ渡っていることを伝えました。これを受けてモーセは、初めて自身の立場の危うさを感じました。エジプト人を殺したことは、おおやけの反逆的行為でした。捕まって処刑されることを避けるため、モーセは、シナイ半島の寂しい所へ逃れました。そこはメディア人の部族が羊飼いと暮らしている地域でした。

これらの出来事から、モーセが若い時から勇敢で献身的な存在だったことが分かります。モーセは、自分の命をかけて同胞を救うことを恐れませんでした。モーセは、神の民を助ける使命を強く感じていました。それでエジプトでのすべての快樂を拒否し、パロの養子としての立場を捨てました。

しかし、彼の殺人行為は、彼の判断力が幼稚であったことを表しています。モーセは、ゲッセマネの園でイエスが逮捕されたときのペテロを思い出させます。ペテロはキリストを助けたいという熱意に動かされて剣を抜き、兵士の耳を剣で切り落としました。

私たちも時折、主に仕えることに強い熱意を持つあまり、忍耐を忘れてしまうことがあります。その動機は良いものかもしれませんが、勇気ある行為かもしれませんが、しかし、どれほど良い事のように思えても、「主のために」と言いながら、悪の行いに手を染めることはいけません。この場合、結果良ければすべて良し、とはいかないのです。

イスラエルの救いの時が来るまで、モーセは忍耐を学ばなくてはなりません。彼は神の救いの実現を待つため、遠く離れた地で 40 年もの長い期間を過ごしたのです。

ミデヤンの地でのモーセ

16 さて、ミディアンの祭司に七人の娘がいた。彼女たちは父の羊の群れに水を飲ませに来て、水を汲み、水ぶねに満たしていた。

17 そのとき、羊飼いたちが来て、彼女たちを追い払った。するとモーセは立ち上がって、娘たちを助けてやり、羊の群れに水を飲ませた。

18 彼女たちが父レウエルのところに帰ったとき、父は言った。「どうして今日はこんなに早く帰って来たのか。」

19 娘たちは答えた。「一人のエジプト人が、私たちを羊飼いたちの手から助けてくれました。そのうえ、その人は私たちのために水汲みまでして、羊の群れに飲ませてくれました。」

20 父は娘たちに言った。「その人はどこにいるのか。どうして、その人を置いてきてしまったのか。食事を差し上げたいので、その人を呼んで来なさい。」

21 モーセは心を決めて、この人のところに住むことにした。そこで、その人は娘のツイボラをモーセに与えた。

22 彼女は男の子を産んだ。モーセはその子をゲルショムと名づけた。「私は異国にいる寄留者だ」と言ったからである。

モーセがシナイ半島で遭遇したミディアン人は、創世記 25 章に登場するアブラハムがサライの死後に結婚した女性、ケトラとの間に生まれた子どもたちの子孫です。ミディアン人は主にカナンの東に住んでいましたが、この箇所に出てくる人々は、さらに奥まった南西部に暮らしていた人々です。ミディアン人は遊牧民で、移動しながら生活をしていました。彼らに関する話は、士師記でミディアン人がカナンに侵略し、イスラエル人を窮地に追い込んだエピソードで触れられています。モーセがこの地で羊飼いとして仕えていたレウエル（3 章ではイテロと呼ばれる）は祭司でした。彼の名は「神の友」という意味です。イテロとはおそらく彼の部族の地位を表していたと思われます。レウエルが真の神をどの程度知っていたかは、この時点では明確ではありません。しかし、後にモーセを通じてイスラエルのまことの神を礼拝する改宗者になったように見受けられます。

ここでモーセは、レウエルの娘のチッボラと結婚しました。のちにモーセとツイボラには子供が生まれ、ゲルショムと名付けられました。これは「異国人、寄留者」という意味で、40 年もこの地に住んだにもかかわらず、モーセは未だに自分が外国人だと感じていたことを示します。その後、モーセとツイボラにはもう一人の子供が生まれます。その子の名前は「エリエゼル」と言い、「神は助け主」という意味です。2 番目の息子の名前から、モーセの主への信仰が強められたことが分かります。この長い年月はモーセにとって非常に困難だったことが想像できます。未来の偉大な指導者である彼が、長年単なる羊飼いとして過ごしていたことを想像してみてください。モーセは忍耐を学びました。彼は後に民を導くことになる土地の特徴を多く学びました。神はモーセを訓練し、試し、強めていたのです。これを受け入れることは、モーセにとって非常に辛かったことでしょう。しかし、神はすべての準備が整った時に、彼をリーダーとして選び任命しました。

神に特別な方法で仕えている人々も、時折、神の意図を理解できなくなることがあります。特に、人々の注目を浴びにくい場所で働いている場合、奉仕が見過ごされ、誰にも感謝されないと思うでしょう。しかし、神はその人の働きにいつも目をとめておられ

ます。神はふさわしいと思われる時に、教会を通してその人をより責任のある高い立場に引き上げてくださいます。その間、神のしもべは、それがたとえどこであっても、忠実な働きを通じて忍耐を学ぶのです。

イスラエル人たちに対する神の心配

23 それから何年もたって、エジプトの王は死んだ。イスラエルの子らは重い労働にうめき、泣き叫んだ。重い労働による彼らの叫びは神に届いた。

24 神は彼らの嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。

25 神はイスラエルの子らをご覧になった。神は彼らをみこころに留められた。

この箇所は次の章への導入部分となっています。ここで示されるのは、神が独自の素晴らしい方法で彼の民の前にその存在を示すための下準備です。

エジプト王の死は、モーセがエジプトへ戻る障害が取り除かれたことを意味しました。神が「アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた」とは、神がこの約束を決して忘れなかった、という意味です。神はいつも同じで、いつもすべてのことをご存じです。これは、神がご自身の民のために直接行動を起こすことを決定されたと、聖なる著者は伝えているのです。神の深い愛から生まれる懸念は、最も適切なタイミングで、最も適切な行動をとるように神を動かしました。3章では、神が具体的にどのような行動をとったのかが語られます。

出エジプト記 3章

モーセと燃える柴

1 モーセは、ミディアンの祭司、しゅうとイテロの羊を飼っていた。彼はその群れを荒野の奥まで導いて、神の山ホレブにやって来た。

2 すると【主】の使いが、柴の茂みのただ中の、燃える炎の中で彼に現れた。彼が見ると、なんと、燃えているのに柴は燃え尽きていなかった。

3 モーセは思った。「近寄って、この大いなる光景を見よう。なぜ柴が燃え尽きないのだろう。」

4 【主】は、彼が横切って見に来るのをご覧になった。神は柴の茂みの中から彼に「モーセ、モーセ」と呼びかけられた。彼は「はい、ここにおります」と答えた。

5 神は仰せられた。「ここに近づいてはならない。あなたの履き物を脱げ。あなたの立っている場所は聖なる地である。」

- 6 さらに仰せられた。「わたしはあなたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは顔を隠した。神を仰ぎ見るのを恐れたからである。
- 7 【主】は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみを確かに見、追いつ立てる者たちの前で彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを確かに知っている。
- 8 わたしが下って来たのは、エジプトの手から彼らを救い出し、その地から、広く良い地、乳と蜜の流れる地に、カナン人、ヒッタイト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のいる場所に、彼らを導き上げるためである。
- 9 今、見よ、イスラエルの子らの叫びはわたしに届いた。わたしはまた、エジプト人が彼らを虐げている有様を見た。
- 10 今、行け。わたしは、あなたをファラオのもとに遣わす。わたしの民、イスラエルの子らをエジプトから導き出せ。」
- 11 モーセは神に言った。「私は、いったい何者なのでしょう。ファラオのもとに行き、イスラエルの子らをエジプトから導き出さなければならないとは。」
- 12 神は仰せられた。「わたしが、あなたとともにいる。これが、あなたのためのしるしである。このわたしがあなたを遣わすのだ。あなたがこの民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で神に仕えなければならない。」
- 13 モーセは神に言った。「今、私がイスラエルの子らのところに行き、『あなたがたの父祖の神が、あなたがたのもとに私を遣わされた』と言えば、彼らは『その名は何か』と私に聞くでしょう。私は彼らに何と答えればよいのでしょうか。」

これらの節は、義理の父の羊の群れの世話をしているモーセの前に神が現れたこと、そして神がモーセをイスラエル人の指導者に任命したことについて語っています。この出来事が起こった場所はホレブという山で、モーセは「神の山」と呼んでいます。後にモーセは、このホレブ山の山頂の一つであるシナイ山で、イスラエル人への戒めを神から受け取りました。

「【主】の使い」がモーセに現れた、とこの箇所には記されています。旧約聖書では「【主】の使い」が三位一体の神の第二神格であるイエス・キリスト、つまり、地上に人間の姿をとってベツレヘムで生まれる前のイエスを指す名として、しばしば使われています。

「【主】の使い」は、ハガルの前には男性の姿となって現れ（創世記 16:7）、アブラハムには3人の客人のひとりや（創世記 18:2）、天の声として現れ（創世記 22:11）、またヨシュアには神の軍の将軍として（ヨシュア 5:14）、さらにバラムの前には剣を持った天使として現れています（民数記 22:22）。

ここで「【主】の使い」「神」「主」という呼び名が、代わる代わる使われているため、「【主】の使い」が神ご自身を現す特別な呼び名だということは疑いの余地がありません。

神はモーセの目の前に、燃える柴の中に現れました。柴は燃えていたのに燃え尽きることがなかったということは、驚くべき神の奇跡です。モーセがこの不思議な光景を見るために近づくと、神はモーセの名を呼び、履き物を脱ぐように言いました。それはモーセが聖なる場所にいるからでした。この時代の人たちは、聖なる場所に入るときには履き物を脱ぐ習慣がありました。それは、その場所に対する深い尊敬の表れでした。

神はまずご自身を、「アブラハムとイサクとヤコブの神」として名乗りました。モーセは顔を隠し、神を直視することができませんでした。考えてみてください。何百年も沈黙を守っていたイスラエルの先祖の神が、今、燃える柴の中からモーセに語りかけているのです！

神は、イスラエル人がモーセによって、エジプトの奴隷生活から解放されることを保証しました。神は、アブラハムに約束した「蜜と乳の流れる」豊かな土地へと、彼らを導き入れるのです。神はモーセを選び、イスラエル人を解放するようエジプト王であるファラオに要求する任務を与えました。

この話を聞く際には、モーセが神の前で履き物を脱いだように、私たち自身も神の前にへりくだり、神に敬意を示す必要があります。私たちは今まさに聖書の中で、もっとも意味深い神の出現の現場のひとつを目の当たりにしているのです。私たちは神のご臨在を前にするとき、畏敬の念を込めて神の前に立ちます。この神は、ご自分の存在を聖なるみことばによって明らかにし、私たちのために素晴らしいことをなさると約束される神です。そのため、次のようなモーセの反応は当然の流れとも言えます。

モーセは、神の奇跡的な出現に驚き、次のように語りました。「私は、いったい何者なのでしょう。ファラオのもとに行き、イスラエルの子らをエジプトから導き出さなければならぬとは」。モーセは、以前のモーセではなくなっていました。かつてエジプト人を殺したモーセは、自らがイスラエル人の救世主となろうとしていました。羊飼いを40年しているうちに謙虚さが身についたモーセは、彼自身がイスラエル人の指導者になることへの自信を失いかけていました。

神はモーセの不安を和らげ、「わたしはあなたとともにいる」と告げました。「あなたがこの民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で神に仕えなければならない」とは、神がモーセに与えた誓いの印です。この約束のとおり、まさにこの場所で神はご自身の民であるイスラエル人に、神の律法をお与えになるのです。

次に、モーセはイスラエル人から神の名を問われたとき、どう答えるべきかを神に尋ねました。この質問も理解できます。なんととっても、モーセは40年も不在だったのです。自分が単なるなりすましではないと、人々にどのように証明したら良いのでしょうか。どうすれば、まことの神の存在を明らかにすることができるのでしょうか。

この答えとして続きの節を読みましょう。神は、素晴らしい方法でご自身の名をモーセに宣言します。それは、神がほかの神々の上に立つ存在であり、絶対の信頼を置ける

方だということを確認させる方法です。このように、まことの神の御名^{みな}を明らかにすることは、聖書全体を通じて非常に重要なテーマの一つであることは間違いありません。

神がご自身の御名^{みな}を明らかにする

14 神はモーセに仰せられた。「わたしは『わたしはある』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエルの子らに、こう言わなければならない。『わたしはある』という方が私をあなたがたのところに遣わされた、と。」

15 神はさらにモーセに仰せられた。「イスラエルの子らに、こう言え。『あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、【主】が、あなたがたのところに私を遣わされた』と。これが永遠にわたしの名である。これが代々にわたり、わたしの呼び名である。

「わたしは『わたしはある』という者である」とは、神自身の御名の証しです。この言葉はいたってシンプルですが、神についての偉大な真実を含んでいます。

「わたしはある」と神は宣言しています。「わたし」は、独自の個性を持った存在を指しています。多くの人は神の存在を、自然の中に漂う輪郭の定まらない魔法のような力だと信じていますが、燃える柴の中からモーセに語りかけた神は、決してそのようなものではありません。神は人間のように考え、感じ、話し、決定し、行動します。つまり、人間が持つような性格を持つ存在として、ご自身を現わされたのです。

「わたしは『わたしはある』という者である」。この言葉は、絶対的な独立性を含んだ表現です。神は制限なしの自由さを持って行動されます。パウロはローマ人への手紙で次のように言っています。「だれが主の心を知っているのですか。だれが主の助言者になったのですか。だれがまず主に与え、主から報いを受けるのですか。すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」(ローマ 11:34-36)

神は「わたしはある」と言っておられます。神は時間を超越し、一定であり、普遍です。聖書には「わたしはある」という表現が頻繁に登場します。黙示録では神は「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」(黙示録 22:13) ヨハネの福音書ではイエスがご自身について「まことに、まことに、あなたがたに言います。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』なのです。」(ヨハネ 8:58) と言っておられます。ヘブル人の手紙の著者はイエスのことを「イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません。」(ヘブル 13:8) と宣言しています。神は預言者マラキを通して「【主】であるわたしは変わることがない。」(マラキ 3:6) とも言っています。

神がモーセとイスラエル人たちにご自身のこうした神格を現されたのは、イスラエルの人々父祖達に神が約束された恵みと憐れみは今も有効だということを示すためでした。ヘブライ語に精通している人ならば、「わたしはある」という表現がさらに重要な意味を持っていることに気づくでしょう。ヘブライ語の「わたしはある」という表現と「主」という言葉は、同じ語幹を持っています。神は「主」という名前を使ってご自身の名前をアブラハムに明らかにしました。これは契約の神、無償の恵みと誠実な憐れみを与える神を示しました。「主」というヘブライ語は「ヤハウェ」と発音されます。その後、ユダヤ人たちは主の御名を不敬に扱うことを畏れるようになった歴史を経て、「ヤハウェ」の代わりに「主」と言う称号を神の呼び名として使用するようになりました。

神が「わたしは『わたしはある』という者である」と名乗ることは、この神こそが、恵みと憐れみをもってモーセとイスラエル人たちをご自分の民として選び、彼らへの約束をすべて果たされる神だということを、はっきりと伝える方法だったのです。14、15節で神は、ご自身の「わたしはある」という名と、イスラエル人の父祖の神である「主」という名を結び合わせ、「これが永遠にわたしの名である。これが代々にわたり、わたしの呼び名である」と宣言されました。

【訳注】この節の解説部分は日本人にとって特に理解しにくいと思われるので、下記に要点をまとめました。）

神の御名の特性

「わたしはある」という表現は、神自身の存在と独自の個性を示しています。

神は単なる抽象的な存在ではなく、感情や意志を持ち、行動する存在です。

神の絶対的な独立性

神は制約を受けずに行動し、全てのものの起源であり目的です。

それは、神が時間や変化の影響を受けない絶対的な存在であることを示しています。

神の永遠性

聖書の多くの部分で、神の永遠性や変わらない性質が強調されています。

イエスも、御自身が永遠の存在であることを確認しています。

ヘブライ語の「わたしはある」と「主（ヤハウェ）」の関係

「主」は「ヤハウェ」として知られ、神の名前としてアブラハムに明らかにされました。

ユダヤ人は、神の名前を尊重するために「主」という称号を使用するようになりました。

神の約束との関係性

神は「わたしはある」と名乗ることで、神御自身が約束を守る信頼できる存在であることを強調しています。

神のモーセに対する指示

16 行って、イスラエルの長老たちを集めて言え。『あなたがたの父祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神、【主】が私に現れてこう言われた。「わたしは、あなたがたのこと、またエジプトであなたがたに対してなされていることを、必ず顧みる。

17 だからわたしは、あなたがたをエジプトでの苦しみから解放して、カナン人、ヒッタイト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の地へ、乳と蜜の流れる地へ導き上ると言ったのである」と。』

18 彼らはあなたの声に従う。あなたはイスラエルの長老たちと一緒にエジプトの王のところに行き、彼にこう言え。『へブル人の神、【主】が私たちにお会いくださいました。今、どうか私たちに荒野へ三日の道のりを行かせ、私たちの神、【主】にいけにえを献げさせてください。』

19 しかし、エジプトの王は強いられなければあなたがたを行かせないことを、わたしはよく知っている。

20 わたしはこの手を伸ばし、エジプトのただ中であらゆる不思議を行い、エジプトを打つ。その後で、彼はあなたがたを去らせる。

21 わたしは、エジプトがこの民に好意を持つようにする。あなたがたが出て行くとき、何も持たずに出て行くことはない。

22 女はみな、近所の女、および自分の家に身を寄せている女に、銀の飾り、金の飾り、そして衣服を求め、それを、自分の息子や娘の身に着けさせなさい。こうしてあなたがたは、エジプト人からはぎ取りなさい。」

この箇所を詳しく読むと、いくつかの疑問が湧き上がってきます。はじめに、「荒野へ三日の道のりを行かせ、私たちの神、【主】にいけにえを献げさせてください」とは、ファラオを騙そうとしているのではないか、という疑問です。なぜイスラエル人の目的がエジプトからの自由であることを最初から素直に言わないのでしょうか。答えは簡単です。この要求は、最初の一步に過ぎなかったからです。小さな要求をまず先に願うこと、これはよい外交手段であると同時に、ファラオが、神に選ばれた人々に対してどのような気持ちを抱くかを知る手がかりにもなるのです。

モーセの最初の要求から、王の頑固さは明らかでした。神はモーセに前もって伝えた通り、ファラオがこの小さな要求さえも拒否することを知っておられました。神はファラオの頑固な性格や態度を示すためにこの要求をするよう、モーセに指示を与えたのです。神は、ご自分の偉大な力によって奇跡を起こさなければ、王がイスラエル人を解放しないことをモーセに教えました。

さらに神はモーセに、イスラエル人がエジプトの富を持って出て行くことを伝えました。果たして、高価な宝を手に入れた状態でエジプトを発つのは、神の民に相応しいことなのでしょうか。これは法外な要求ではありませんでした。イスラエル人がエジプトの富を持って出て行くことは、彼らが長年の奴隷労働の報酬として正当に受け取るものと見なされました。(ちなみに、英語の欽定訳聖書では、エジプト人から宝を「借りた」と訳されていますが、これは正確な訳とは言えません。原語にははっきりと「要求した」という単語が使われています。)

こうして神は、モーセにイスラエル人に対するご計画をはっきりと示されました。神のご計画は、イスラエル人が神の勝利を象徴する戦利品としてエジプトの宝を頂き、征服者のように出て行くことだったのです。次の章には、この計画に対するモーセの反応が記されています。

出エジプト記 4 章

モーセへのしるし

- 1 モーセは答えた。「ですが、彼らは私の言うことを信じず、私の声に耳を傾けないでしょう。むしろ、『【主】はあなたに現れなかった』と言うでしょう。」
- 2 【主】は彼に言われた。「あなたが手に持っているものは何か。」彼は答えた。「杖です。」
- 3 すると言われた。「それを地に投げよ。」彼はそれを地に投げた。すると、それは蛇になった。モーセはそれから身を引いた。
- 4 【主】はモーセに言われた。「手を伸ばして、その尾をつかめ。」 彼が手を伸ばしてそれを握ると、それは手の中で杖になった。
- 5 「これは、彼らの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、【主】があなたに現れたことを、彼らが信じるためである。」
- 6 【主】はまた、彼に言われた。「手を懐に入れよ。」彼は手を懐に入れた。そして出した。なんと、彼の手はツアラアトに冒され、雪のようになっていた。
- 7 また主は言われた。「あなたの手をもう一度懐に入れよ。」そこで彼はもう一度、手を懐に入れた。そして懐から出した。なんと、それは再び自分の肉のようになっていた。
- 8 「たとえ彼らがあなたを信じず、また初めのしるしの声に聞き従わなくても、後のしるしの声は信じるであろう。
- 9 もしも彼らがこの二つのしるしを両方とも信じず、あなたの声に聞き従わないなら、ナイル川の水を汲んで、乾いた地面に注ぎなさい。あなたがナイル川から汲んだその水は、乾いた地面の上で血となる。」

前の章でモーセが主の召命を受けた時、モーセは謙遜な態度を示しました。しかし、実際にどのようにその使命をまっとうするかについて具体的な指示を受けると、彼の心には疑いが沸き起こりました。「彼らは私の言うことを信じず、私の声に耳を傾けないでしょう。むしろ、『【主】はあなたに現れなかった』と言うでしょう。」とモーセは主に訴えました。

具体的な仕事を前にしたとき、私たちの心には「○○だったら、どうしよう。」という思いが頻繁に心に浮かんできます。モーセも私たちと変わりませんでした。彼も、主が彼に提示した責任ある仕事を前にしたときに、同じような反応を示したのです。私たちの反応も謙虚なものかもしれませんが。しかし実際に行動に移す必要があるときに見せる謙虚な反応は、自分の話をだれも聞いてくれないかもしれない、という疑いの気持ちです。信仰を持たない人の前でクリスチャンの証しが必要とされる時に、このように思ったなら、あなたの心にもモーセと同じ思いが湧き上がってきたことを、ぜひ思い出してください。

主はモーセに奇跡を行う力を授けました。これが神のモーセに対する答えだったのです。神はこれまでに、このような奇跡を起こす力を人間に与えたことはありませんでした。アブラハムとサラが高齢の時に子どもを授かったことは奇跡でした。ヨセフが夢を解き明かすことができたのも奇跡でした。しかし、今回のように明らかに自然の摂理に反する奇跡を行う力を人間が与えられたのは、聖書の歴史上初めてのことでした。

モーセの杖が蛇になり、手が重い皮膚病に冒され、ナイル川が赤い血になるという奇跡は、今までに様々な意味で解釈されてきました。モーセの杖は羊飼いととしての召命を意味している、その杖を地面に投げるとするのはモーセが危険に直面する心の準備ができていることを示している、重い皮膚病になった手はイスラエルがエジプトによって虐げられていることを現している、エジプト人にとって神の存在であったナイル川が血の川になるということは、モーセの力がファラオの神々の力を打ち砕くことを示している、などです。

こうした説明は興味深いといえますが、私たちはこれらの力について深読みするよりも、単純に解釈したいと思います。これは、エジプトとイスラエルの両国に、神の選んだ者の力を証明するものだったということです。これらの奇跡のしるしを見た後で、モーセがまことの神によって遣わされた者であることを疑う者がいるのでしょうか。モーセ自身も、この召命について疑いの思いを持ち続けることができるのでしょうか。

しかしモーセは、未だに自分がこの偉大な仕事を行うことについて不満に思っていました。それについて次の節で見ていきましょう。

モーセの言い訳と神の完全な計画

10 モーセは【主】に言った。「ああ、わが主よ、私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。」

11 【主】は彼に言われた。「人に口をつけたのはだれか。だれが口をきけなくし、耳をふさぎ、目を開け、また閉ざすのか。それは、わたし、【主】ではないか。

12 今、行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたが語るべきことを教える。」

13 すると彼は言った。「ああ、わが主よ、どうかほかの人を遣わしてください。」

14 すると、【主】の怒りがモーセに向かって燃え上がり、こう言われた。「あなたの兄、レビ人アロンがいるではないか。わたしは彼が雄弁であることをよく知っている。見よ、彼はあなたに会いに出て来ている。あなたに会えば、心から喜ぶだろう。

15 彼に語り、彼の口にことばを置け。わたしはあなたの口とともにあり、また彼の口とともにあって、あなたがたがなすべきことを教える。

16 彼があなたに代わって民に語る。彼があなたにとって口となり、あなたは彼にとって神の代わりとなる。

17 また、あなたはこの杖を手に取り、これでしるしを行わなければならない。」

イスラエル人とファラオとそれぞれ対面するという現実に向き合った時、モーセは以前にも増して、言い訳を探そうと必死になりました。彼は自分にはこの仕事を行うために必要な話術がない、と言い訳をしました。彼は自分が話し下手であり、話すスピードが遅いことを理由に、この仕事は自分にはできないと決めつけました。モーセの言い訳は、神が人に与える任務を遂行するための十分な備えを豊かに与えることができる、という神の能力に対する疑いの現れでした。神はモーセに「人に口をつけたのはだれか。…今、行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたが語るべきことを教える」と言い、モーセの不信仰を指摘しました。

とうとうモーセは、別の者を遣わすよう神に懇願しました。ここで彼は、このような言い訳をする本当の理由を白状します。彼は単純に行きたくなかったのです。

ここで「主の怒りがモーセに向かって燃え上」がったことに私たちは驚きませんが、どのように神の怒りが表現されたのかはここに示されていません。神は、このみじめな言い訳を聞かされてもご計画を曲げることはありませんでした。それでも神は、モーセに与えた困難な使命を共に果たす仲間として、モーセの兄アロンのことを思い出させています。神は怒りの中にあっても、アロンが彼の代わりに話してくれることを思い出させることによって、モーセに憐れみと共感を示したのです。主はまたモーセに彼の杖を手を持つように命じました。それは、主の奇跡的な助けに信頼できるという強い確信をモーセに持たせるためでした。

このモーセについての記述は、教会を通じて特別な宣教の役目を受けた人々や、主の使命を行うために選ばれ、特別な召命を受けた人々への励ましになります。民数記 12

章3節にはモーセについて「地の上のだれにもまさって柔和であった」と書かれています。謙遜は主に仕える上で、価値の高い美德です。しかし、謙遜さを、主のための特別な仕事を断るための言い訳として使っては本末転倒です。そもそも、主ご自身の代理人をさせて頂けるほど功績のある人間がこの世に存在するのでしょうか。生まれながらにして主のための仕事を行う資格のある人間はどこにもいません。主御自身が恵みによって、私たちが伝えるべきメッセージをあらかじめ備え、しかも、それを伝えるための十分な力をも備えてくださるのです。このように恵み深い神のことを知っているからこそ、私たちは「主よ、私はここにおります。私を遣わしてください!」と言うことができるのです。

モーセがエジプトに戻る

18 そこでモーセは行って、しゅうとイテロのもとに帰り、彼に言った。「どうか私をエジプトにいる同胞のもとに帰らせ、彼らがまだ生きながらえているかどうか、見させてください。」イテロはモーセに言った。「安心して行きなさい。」

19 【主】はミディアンでモーセに言われた。「さあ、エジプトに帰れ。あなたのいのちを取ろうとしていた者は、みな死んだ。」

20 そこでモーセは妻や息子たちを連れ、彼らをろばに乗せて、エジプトの地へ帰って行った。モーセは神の杖を手にとった。

21 【主】はモーセに言われた。「あなたがエジプトに帰ったら、わたしがあなたの手に授けたすべての不思議を心に留め、それをファラオの前で行え。しかし、わたしが彼の心を頑なにするので、彼は民を去らせない。

22 そのとき、あなたはファラオに言わなければならない。【主】はこう言われる。『イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。

23 わたしはあなたに言う。わたしの子を去らせて、彼らがわたしに仕えるようにせよ。もし去らせるのを拒むなら、見よ、わたしはあなたの子、あなたの長子を殺す。』

24 さて、途中、一夜を明かす場所でのことだった。【主】はモーセに会い、彼を殺そうとされた。

25 そのとき、ツィボラは火打石を取って、自分の息子の包皮を切り取り、モーセの両足に付けて言った。「まことに、あなたは私には血の花婿です。」

26 すると、主はモーセを放された。彼女はそのとき、割礼のゆえに「血の花婿」と言ったのである。

27 さて、【主】はアロンに言われた。「荒野に行って、モーセに会え。」彼は行って、山の山でモーセに会い、口づけした。

28 モーセは、自分を遣わすときに【主】が語られたことばのすべてと、彼に命じられたしるしのすべてを、アロンに告げた。

- 29 それからモーセとアロンは行って、イスラエルの子らの長老たちをみな集めた。
- 30 アロンは、【主】がモーセに語られたことばをみな語り、民の目の前でしるしを行った。
- 31 民は信じた。彼らは、【主】がイスラエルの子らを顧み、その苦しみをご覧になったことを聞き、ひざまずいて礼拝した。

義理の父イテロを説得した後、モーセは「妻や息子たちを連れ、彼らをろばに乗せて、エジプトの地へ」帰っていきました。モーセは神の杖を手に取りました。一組の夫婦がロバに荷物を積み、羊飼いの杖だけを武器として持ちながら、二人の息子を連れてエジプトに向かって砂漠の旅をしていました。このみすぼらしい旅人たちは、エジプトという、この時代の地上最強の国家権力と対峙するには少々不釣り合いにも思えます。本当にイスラエルの民全体をエジプトから導き出す使命を帯びていたのでしょうか。まさしく、この旅人の一行こそが神の選んだ使者でした。モーセの手に「神の杖」があったのですから！

主は、ファラオがイスラエル人の解放に反対することについて再びモーセに警告しました。「わたしが彼の心を頑なにするので、彼は民を去らせない」と神は宣告されました。神は、これからの出来事がどのように進むのかを、あらかじめモーセに伝えました。

続く章を読み進めると、ファラオは、イスラエル人を解放せよ、というモーセを通じた神の命令に心を留めなかったことが分かります。

主の命令を拒んだ責任はファラオ自身にあったことが明らかです。神は「決して悪しき者の死を喜ばない。悪しき者がその道から立ち返り、生きることを喜ぶ」方であり（エゼキエル 33:11）、「すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます」（1 テモテ 2:4）。ファラオは悔い改めに導く神の招きを繰り返し拒み、神への反抗と頑固な心を示しました。神はこうした態度を示したファラオの思惑プロセスをご覧になり、それを完了させたのです。

現代においても、主は「決して悪しき者の死を喜ばない。悪しき者がその道から立ち返り、生きることを喜ぶ」神であり、すべての人々の救いを望んでおられます。しかし人の魂が失われるのは、完全にその人自身の責任です。恵み深い神は、すべての人に悔い改めるよう招いています。もしこの聖霊の働きに対してその人が心を固くし、悔い改めることを拒むとき、神はその人の人生に介入してその過程を完了させます。つまり、命に関する判決が言い渡されるのです。残念ながら、その時点でその人の永遠の破滅が決定し、その後も、神の恵み深い悔い改めへの招きの声が心に届くことはありません。

神はモーセに「イスラエルはわたしの子、わたしの長子である」と言われました。イスラエル人は神に選ばれた人々でした。ファラオがその頑な心から、神に選ばれた長子を解放することを拒んだため、今度は神の手によるファラオ自身の長男の死を味わわな

くてはならなくなりました。神は、手短に、この先に待ち受けるファラオの暗い運命と、イスラエルの勝利という対照的な事柄について、モーセに語りました。

エジプトへ向かう道中、主がモーセを殺そうとする事件が起こります。神がどのようにモーセを殺そうとしたのか、聖書は記していません。もしかすると、急な病が彼を襲ったのかもしれませんが。モーセが命の危機に瀕した時、モーセの妻チッポラが息子に割礼を施したことによって、モーセの命は助かりました。

聖書はこの出来事を言葉すくなく説明しています。この時まで、モーセとチッポラの息子は割礼を施されていませんでした。妻が割礼を嫌ったために、モーセが息子にそれを行わなかったのかどうかは定かではありません。しかし、この後チッポラは、モーセを「血の花婿」と呼んでいます。それは、彼女による割礼という血の行ないによってのみ、夫が命を救われたからかもしれません。一つだけ確かなことは、神は、自分の大使としてイスラエル人を導く者には、神によって指示された恵みの手段を家族に対して忠実に行うことを求めておられた、ということです。「割礼を施せ」という神の命令に、イスラエル人のリーダーとなるべく人物が背くということは、神の民から「断ち切られなければならない」（創世記 17:14）ことを意味していたのです。

この章の終わりには、モーセとアロンが神の約束どおりに会い、イスラエル人の長老達に会って、好意的な反応を得たことが記されています。民は「信じ」、「ひざまずいて礼拝」しました。イスラエルの父祖達の約束は今も息づいていたのです。

彼らは、これから非常に驚くべき出来事を目の当たりにすることになります。

出エジプト記 5 章

藁(わら)のないれんが

- 1 その後、モーセとアロンはファラオのところに行き、そして言った。「イスラエルの神、【主】はこう仰せられます。『わたしの民を去らせ、荒野でわたしのために祭りを行えるようにせよ。』」
- 2 ファラオは答えた。「【主】とは何者だ。私とその声を聞いて、イスラエルを去らせなければならないとは。私は【主】を知らない。イスラエルは去らせない。」
- 3 彼らは言った。「へブル人の神が私たちと会ってくださいました。どうか私たちに荒野へ三日の道のりを行かせて、私たちの神、【主】にいけにえを献げさせてください。そうでないと、主は疫病か剣で私たちを打たれます。」
- 4 エジプトの王は彼らに言った。「モーセとアロンよ、なぜおまえたちは、民を仕事から引き離そうとするのか。おまえたちの労役に戻れ。」
- 5 ファラオはまた言った。「見よ、今やこの地の民は多い。だからおまえたちは、彼らに労役をやめさせようとしているのだ。」

- 6 その日、ファラオはこの民の監督たちとかしらたちに命じた。
- 7 「おまえたちは、れんがを作るために、もはやこれまでのように民に藁^{わら}を与えてはならない。彼らが行って、自分で藁を集めるようにさせよ。
- 8 しかも、これまでどおりの量のれんがを作らせるのだ。減らしてはならない。彼らは怠け者だ。だから、『私たちの神に、いけにえを献げに行かせてください』などと言って叫んでいるのだ。
- 9 あの者たちの労役を重くしたうえで、その仕事をやらせよ。偽りのことばに目を向けさせるな。」
- 10 そこで、この民の監督たちとかしらたちは出て行って、民に告げた。「ファラオはこう言われる。『もうおまえたちに藁は与えない。』
- 11 おまえたちはどこへでも行って、見つけられるところから自分で藁を取って来い。労役は少しも減らすことはしない。』」
- 12 そこで民はエジプト全土に散って、藁の代わりに刈り株を集めた。
- 13 監督たちは彼らをせき立てた。「藁があったときのように、その日その日の仕事を仕上げよ。」
- 14 ファラオの監督たちがこの民の上に立てた、イスラエルの子らのかしらたちは、打ちたたかれてこう言われた。「なぜ、おまえたちは決められた量のれんがを、昨日も今日も、今までどおりに仕上げないのか。」
- 15 そこで、イスラエルの子らのかしらたちは、ファラオのところに行って、叫んだ。「なぜ、あなた様はしもべどもに、このようなことをなさるのですか。
- 16 しもべどもには藁が与えられていません。それでも、『れんがを作れ』と言われていきます。ご覧ください。しもべどもは打たれています。でも、いけないのはあなた様の民のほうです。」
- 17 ファラオは言った。「おまえたちは怠け者だ。怠け者なのだ。だから『私たちの【主】に、いけにえを献げに行かせてください』などと言っているのだ。
- 18 今すぐに行って働け。おまえたちに藁は与えない。しかし、おまえたちは決められた分のれんがを納めなければならない。」
- 19 イスラエルの子らのかしらたちは、「おまえたちにその日その日に課せられた、れんがの量を減らしてはならない」と聞かされて、これは悪いことになったと思った。
- 20 彼らは、ファラオのところから出て来たとき、迎えに来ていたモーセとアロンに会った。
- 21 彼らは二人に言った。「【主】があなたがたを見て、さばかれますように。あなたがたは、ファラオとその家臣たちの目に私たちを嫌わせ、私たちを殺すため、彼らの手に剣を渡してしまったのです。」
- 22 それでモーセは【主】のもとに戻り、そして言った。「主よ、なぜ、あなたはこの民をひどい目にあわせられるのですか。いったい、なぜあなたは私を遣わされたのですか。

23 私がファラオのところに行って、あなたの御名によって語って以来、彼はこの民を虐げています。それなのに、あなたは、あなたの民を一向に救い出そうとはなさいません。」

モーセとアロンの提案に対するファラオの返答は、完全なる「ノー」でした。二人は、「イスラエルの神、主はこう仰せられます」と断った上で、主の命令に従うための祭りを荒野で行うことを提案しました。

ファラオは反論し、「主とは何者だ。私とその声を聞いて、イスラエルを去らせなければならないとは」と問いました。ファラオにとって「主」は異国の見知らぬ神でした。ファラオは、自分こそが他の神々と人間をつなぐことができる唯一の仲介者であると感じていました。ファラオにとっての神は、自然のもの、たとえば、太陽や月などの存在であり、彼だけが、それらを祭るためにナイル川沿いに建てられた美しい神殿の中で、神々に近づくことができる最高位の祭司である、と考えていました。こうした理由から、ファラオの返答は、質問というよりも嫌悪感の表れでした。

モーセとアロンは、「ヘブル人の神」が荒野で彼らがいけにえを献げることを求めている、とファラオに辛抱強く説明しました。主の要求に応えないことは、神の怒りを招きます。たとえ彼らの信じる主を信じないファラオであっても、神に敬意を払い礼拝したいと思う自分たちの気持ちを尊重してくれるだろう、とモーセとアロンは思ったのです。

ところがファラオの答えは、イスラエルの労務を増やす、というものでした。これはファラオの復讐とも見えました。イスラエル人は、今後、れんがを作る際に藁^{わら}を支給されず、藁を混ぜてれんがの強度を高める（当時の一般的な方法）こともできなくなったのです。これからは、自分たちで藁を集め、以前と同じだけのれんがを作らなくてはならなくなりました。日々のノルマを達成できなかった場合、そのイスラエル人のかしらは無慈悲にむち打たれることになったのです。

イスラエル人は、自らの苦役が増した原因としてモーセとアロンを責め、ファラオと彼の家臣たちの前で彼らの評価が落ち、エジプト人の手に剣が渡ってしまった、と苦言を言いました。それはつまり、イスラエルの名前は地に落ちた、ということです。今後ファラオとそのしもべは、彼らを滅ぼしに来るのです。神に対するすべての信頼を失ったにも関わらず、イスラエル人は、リーダーであるモーセとアロンを裁くよう神に願いました。彼らの救いの神に向かって、モーセとアロンを裁くように願うのはおかしいことです。モーセはこの時から、つむじ曲がりのイスラエル人の性質をよく味わうことになりました。

ここでモーセ自身も勇気を失い、「主よ、なぜ、あなたはこの民をひどい目にあわせられるのですか。いったい、なぜあなたは私を遣わされたのですか」と神に訴えました。

このモーセの感情はヨブ記や詩編にも共通するもので、困難や失望の中での神への疑問や不満が描かれています。ヨブ記は全書を通して、ヨブと友人たちが、困難と失望の中にある時の神の対応について、疑問を持ったことを記録しています。詩編でもしばしば、「主よなぜ…」や「主よ、いつまでですか」などの訴えが見られます。(詩編 10 章, 13 章参照)

今日でも、神の御心に従って主の戒めを守る人が、未信者からの非難や迫害に会う時があります。友人や親戚までもがキリストに忠実に従い続けることを非難する時、耐えがたい重荷に感じることもあるでしょう。このような時にクリスチャンは「主よ、なぜ…主よ、いつまでですか」と祈ります。神はそのような時にも確かにそこにいて、祈りを聞き入れます。神はご自身の方法で、ふさわしい時期に癒やしを与え、救いの力を示すことを約束しています。その時には分からなくても、神はすべてのことを、神を信じる人の益として働かせます。ローマ人への手紙 8 章 28 節が「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています」と教えている通りです。

次の章では、主がこの不確かな時に、どれほど速やかにモーセの前に現れ、彼に確信を抱かせたかについて学びます。

出エジプト記 6 章

神の救いが約束される

- 1 【主】はモーセに言われた。「あなたには、わたしがファラオにしようとしていることが今に分かる。彼は強いられてこの民を去らせ、強いられてこの民を自分の国から追い出すからだ。」
- 2 神はモーセに語り、彼に仰せられた。「わたしは【主】である。
- 3 わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、【主】という名では、彼らにわたしを知らせなかった。
- 4 わたしはまた、カナンの地、彼らがとどまった寄留の地を彼らに与えるという契約を彼らと立てた。
- 5 今わたしは、エジプトが奴隷として仕えさせているイスラエルの子らの嘆きを聞き、わたしの契約を思い起こした。
- 6 それゆえ、イスラエルの子らに言え。『わたしは【主】である。わたしはあなたがたをエジプトの苦役から導き出す。あなたがたを重い労働から救い出し、伸ばされた腕と大いなるさばきによって贖う。

7 わたしはあなたがたを取ってわたしの民とし、わたしはあなたがたの神となる。あなたがたは、わたしがあなたがたの神、【主】であり、あなたがたをエジプトでの苦役から導き出す者であることを知る。

8 わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓ったその地にあなたがたを連れて行き、そこをあなたがたの所有地として与える。わたしは【主】である。』

9 モーセはこのようにイスラエルの子らに語ったが、彼らは失意と激しい労働のために、モーセの言うことを聞くことができなかった。

10 【主】はモーセに告げられた。

11 「エジプトの王ファラオのところへ行って、イスラエルの子らをその国から去らせるように告げよ。」

12 しかし、モーセは【主】の前で訴えた。「ご覧ください。イスラエルの子らは私の言うことを聞きませんでした。どうしてファラオが私の言うことを聞くでしょうか。しかも、私は口べたなのです。」

モーセが不安と疑いを抱いている時に、神はモーセに「あなたには、わたしがファラオにしようとしていることが今に分かる」と言いました。神は御自身の力で、民をエジプトから解放します。つまり、ファラオは強いられてイスラエルを去らせるのです。これは神の確かな約束でした。

2と3節で神は、「わたしは【主】である。わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れた」と宣言しました。ここでもまた主は「契約の神」としてイスラエルの父祖達と結んだ契約について言及しています。「主」と称し、神はモーセにイスラエルの父祖たちとの契約を再認識させました。この契約は神の憐れみから結ばれたものです。この契約の神として、神は自らの民を救う義務を示しました。

神はまた、イサクの誕生を通してイスラエルの父祖達に、ご自身を「全能の神」として示しました。神はご自身の力によって、この家族が偉大な国へと成長するように保護したのです。神はこれらのことを言ってモーセに確信を持たせ、次の箇所です。「わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、【主】という名では、彼らにわたしを知らせなかった」と言っています。

実際のところ、イスラエルの父祖たちは「主」（契約の神—ヤハウェ）という名前に親しんでいました。創世記 12, 13 章によればアブラハムはこの名の元に祭壇を築き、「主」の御名を呼び求めました。モーセがホレブ山の上で羊の世話をしていた時にご自身を現された時も、神は同じ御名を使いました。そして、モーセが神の代表としてイスラエル人の前に進み出るときに使うように指示されたのも同じ名前です。イスラエル人は当然「主」という呼び名に親しんでいました。

しかし、この名の真の意味はまだ明かされていませんでした。この後、この御名の元で、イスラエル人を救い出す神の約束が実行されることを、神の民は体験することにな

りました。主は、イスラエルとの契約を忘れることなく、契約の神として民の問題に直接関与し、恵みと憐れみをもって、力強い御手のわざを示すことになります。「主」について父祖達が知らされなかったことを、モーセの時代のイスラエルの人々はその目で見ることになるのです！

次の数節（6-8 節）で、主はこのことについてさらに説明しています。神はエジプトの奴隷生活からイスラエルを解放し、ご自分の民としてイスラエルを養子に迎えます。神は、彼らを約束の地へと導き入れます。神は、「わたしは主である」と宣言することによって、なんと大きな確信をモーセと民に与えた事でしょう！

一部の学者は、「【主】という名では、彼らにわたしを知らせなかった」と書かれた箇所が、アブラハムとイサクとヤコブが神を「契約の神」を含めない、「全能の神」としてしか知らなかったと主張しています。言い換えると、イスラエルの父祖達は、原始的な宗教形式しか持っていなかったということです。これらの主張によると、宗教が発展していくにつれて、イスラエルは神を「主」という名でも知ることになったとされます。この同じ批評家は、逐語靈感を信じていません。

一方、私たちは聖書の一字一句が神の靈感（インスピレーション）によって書かれ、聖書の記述に誤りのないことを主張する逐語靈感を信じます。さらに、モーセがモーセ五書の著者であることを認めない彼らの解釈は、みことばを文脈から切り離し、自分の理論にねじ込んで解釈しようとする悪い例のひとつです。この理論は、神が聖書を私たちに与えた理由が、私たちを救い出すためである、という素晴らしい真理を無にしようとします。私たちは、みことばをみことばによって解釈します。そうすることによって、聖書の箇所が互いに結びつき、神の救いのご計画の全体像を美しく示す様子を見ることができます。

確信を与える神の働きかけにも関わらず、イスラエル人は自己憐憫によって目を曇らせ、耳を塞ぎました。このイスラエル人の否定的な反応はモーセの気持ちを萎えさせました。神の民さえも彼の言うことに耳を傾けないのなら、ましてやファラオが彼の言うことを聞いてくれる訳があるのでしょうか。「しかも、私は口べたなのです」とモーセは神に訴えました。ここで使われているヘブル語は、「無割礼の唇」という意味の言葉で、モーセは 4 章 10 節で言った「私は口が重く、舌が重いのです」と同じ訴えです。

モーセの訴えに対する神の答えは 7 章で明らかになります。しかし、その前に、6 章ではモーセの家系についての紹介があります。（【訳注】この箇所ですべて大切な点を、下記にてまとめました。）

神の約束

神は、モーセに、「あなたには、わたしがファラオにしようとしていることが今に分かる」と約束し、イスラエル人をエジプトから解放することを宣言しました。

「主」としての神

- ・神は御自身を「主」と称し、アブラハム、イサク、ヤコブには「全能の神」として現れました。
- ・神は「契約の神」としてイスラエルの父祖との契約をモーセに再確認させました。
- ・父祖たちは「主」という名前で神を呼び求めていましたが、この名前の真の意味はまだ明かされていませんでした。

私たちの信仰と学者の意見

一部の学者は、神の御名やイスラエル人の宗教観に関する異なる意見を持っていますが、私たちは聖書の逐語靈感を信じます。

モーセとアロン一族の記録

- 13 【主】はモーセとアロンに語り、イスラエルの子らをエジプトの地から導き出すよう、イスラエルの子らとエジプトの王ファラオについて彼らに命じられた。
- 14 彼らの一族のかしらたちは次のとおりである。イスラエルの長子ルベンの子はハノク、パル、ヘツロン、カルミで、これらがルベン族である。
- 15 シメオンの子はエムエル、ヤミン、オハデ、ヤキン、ツォハル、およびカナンの女から生まれたシャウルで、これらがシメオン族である。
- 16 家系にしたがって記すと、レビの子の名は次のとおり。ゲルシオン、ケハテ、メラリ。レビが生きた年月は百三十七年であった。
- 17 ゲルシオンの子は、氏族ごとに言うと、リブニとシムイである。
- 18 ケハテの子はアムラム、イツハル、ヘブロン、ウジエルである。ケハテが生きた年月は百三十三年であった。
- 19 メラリの子はマフリとムシである。これらが、彼らの家系によるレビ人の諸氏族である。
- 20 アムラムは自分の叔母ヨケベデを妻にした。彼女はアロンとモーセを産んだ。アムラムが生きた年月は百三十七年であった。
- 21 イツハルの子はコラ、ネフェグ、ジクリである。
- 22 ウジエルの子はミシャエル、エルツァファン、シテリである。
- 23 アロンは、アミナダブの娘でナフシヨンの妹であるエリシェバを妻にし、彼女はアロンにナダブとアビフ、エルアザルとイタマルを産んだ。
- 24 コラの子はアシル、エルカナ、アビアサフで、これらがコラ人の諸氏族である。
- 25 アロンの子エルアザルは、プティエルの娘の一人を妻とし、彼女はピネハスを産んだ。これらがレビ人の諸氏族の、一族のかしらたちである。
- 26 このアロンとモーセに【主】は、「イスラエルの子らを軍団ごとにエジプトの地から導き出せ」と言われたのであった。

27 エジプトの王ファラオに向かって、イスラエルの子らをエジプトから導き出すようにと言ったのも、このモーセとアロンである。

28 【主】がエジプトの地でモーセに語られたときに、

29 【主】はモーセに告げられた。「わたしは【主】である。わたしがあなたに語ることをみな、エジプトの王ファラオに告げよ。」

30 しかし、モーセは【主】の前で言った。「ご覧ください。私は口べたです。どうしてファラオが私の言うことを聞くでしょうか。」

イスラエル人のエジプトからの救出の物語の中で、なぜ突然家族の記録が出現するのでしょうか。この名前のリストには、一見「関連性がない」と感じるかもしれませんが、深く見ると意味が隠されています。さらに詳しく見てみましょう。

まず、ヤコブの長男と次男であるルベンとシメオンの家系についての記述があります。次いで3男のレビが登場し、詳しい家族関係が述べられています。これによって、モーセとアロンの先祖であるレビが、ヤコブの家系図の中でどこに位置するのかがはっきりと示されています。

レビの記録には、年齢のほかに、ゲルション、ケハテ、メラリの3人の息子の名前が挙げられています。これらの名前は、特に記憶しておく価値があります。レビの3人の息子から生まれる子孫はそれぞれイスラエルの祭司職の中で特別な職務を執り行いました。彼ら3人の名前は、ここから先の聖書の記述に頻繁に登場します。

レビの息子達の中でもケハテの名前が取り上げられ、レビ同様に年齢が記録されています。この箇所からモーセとアロンは、ケハテの子孫だと知ることができます。

ケハテの息子のうち、アムラムの年齢が記されています。アムラムが結婚した「自分の叔母ヨケベデ」は、モーセとアロンの先祖にあたります。ちなみに「叔母」は、ここでは「親戚」という広い意味の理解がふさわしいでしょう。20節について、多くの学者はアムラムとヨケベデは、モーセとアロンの両親の名前だと結論づけています。しかし、レビとモーセは3世代以上離れています。ケハテの息子として記されているアムラムは、直接の息子というより、家系図をさらに下った時代のアムラムと言えます。聖書の別の箇所でも行われているとおり、ここでは大切な名前のみが要約的に記されています。

アロンの名前がモーセの前に記載されていることから、アロンがモーセより年上であることが伺えます。

モーセとアロンの後、コラやナダブ、アビフ、エルアザル、イタマル、ピネハスなどの重要な名前が続きます。これらの名前は、特にイスラエルの祭司職の形成において、中心的な役割を担っています。

ここで、先の質問に戻ります。「なぜここで物語が中断され、名前が羅列されているのか」という質問です。モーセは神からイスラエルを救う使命を受け、アロンはその役

割をサポートするために選ばれました。2人はこれから起こる出来事の中で中心的な役割を果たすこととなります。この二人のリーダーに待ち受ける困難は、神によってはっきりと示されました。モーセが行う奇跡を皮切りに、ファラオとの大きな対立と災いが起こり、やがて出エジプトへとつながります。これらのことが起ころうとする前こそが、モーセとアロンの系図を提示するのにもっとも適した時だと言えます。

一部の批評家は聖書を単に様々な出来事の集まりと見ていますが、私は「神の言葉にもっとオープンに接してほしい」と感じます。そして、「心を開いて神のみことばを読みなさい。書かれた内容を肯定的に捉え、あらゆる細かい記述が、すべての人々を救いに導く神のご計画を美しく描写していることに目を向けなさい」と言いたいと思います。この「すべての人々」には、私たちも含まれているのです！

この章を終えるにあたり、イスラエル人の指導者として相応しいと立証されたアロンとモーセに思いを馳せます。彼らはこれから、当時の最高権力者だったファラオと対面し、非常な苦難を体験することとなります。アロンはモーセの代弁者となり、モーセの「重い口」を補う役目を果たします。神がモーセに、この約束をする様子を次の章で見えていきましょう。

出エジプト記7章

9つの災い

- 1 【主】はモーセに仰せられた。「見よ。わたしはあなたをパロに対して神とし、あなたの兄アロンはあなたの預言者となる。
- 2 あなたはわたしの命じることを、みな、告げなければならない。あなたの兄アロンはパロに、イスラエル人をその国から出て行かせるようにと告げなければならない。
- 3 わたしはパロの心をかたくなにし、わたしのしるしと不思議をエジプトの地で多く行おう。
- 4 パロがあなたがたの言うことを聞き入れないなら、わたしは、手をエジプトの上に置き、大きなさばきによって、わたしの集団、わたしの民イスラエル人をエジプトの地から連れ出す。
- 5 わたしが手をエジプトの上に伸ばし、イスラエル人を彼らの真ん中から連れ出すとき、エジプトはわたしが【主】であることを知るようになる。」

この部分は、イスラエル人がエジプトの奴隷から解放される過程の始まりを示しており、神がモーセに向けてどのような奇跡や災害を使用してパロとエジプト人にご自身の力を示すかの概要を明らかにしています。神は、モーセをパロに対して神のようにし、兄アロンをモーセの預言者にすると言いました。モーセは神から権威と奇跡的な力を得

ることになります。エジプトでこれらのしるしと不思議を多く行う、と神は言いました。神は今後多くの災いが起こることを示し、その結果、「わたしの民イスラエル人をエジプトの地から連れ出す」と告げたのです。

神はこれから起こる災いの目的も示しました。これまでに神はすでに、ご自身の力あるみわざが行われることによって、イスラエル人が神の民であることを知り、神が彼らの前でご自身を明らかにされると言っていました。これに神は「エジプトはわたしが【主】であることを知るようになる」と付け加えました。イスラエルの民にとって、神の力あるみわざは救いを意味しましたが、エジプトにとっては厳しい裁きを意味したのです。神から繰り返し示された警告にもかかわらず、頑固なファラオは、神に対して自分の心を固く閉ざし続けました。それはとうとう、神があらかじめ言った通り、神ご自身が彼の心を固くするまでに至りました。

以下の章で個々の災いを詳しく見ていく前に、最初の9つの災いについての概略を見ていきます。

1. 血 (7:14-25)
2. かえる (8:1-15)
3. ブヨ (8:16-19)
4. はえ (8:20-32)
5. 家畜の病気 (9:1-7)
6. できもの (9:8-12)
7. あられ (9:13-35)
8. いなご (10:1-20)
9. 暗闇 (10:21-27)

これらの奇跡を上記のように3のグループ(3×3)に分けることで、興味深いパターン、つまり規則性が見えてきます。以下にその内容を箇条書きで挙げていきます。

- ・最初の2つの災いはファラオに事前の警告があったが、3つ目の災いは警告がありませんでした。
- ・3つずつの災いが3回続き、その後に数字の10(10は完成を表す)という最高点にたどり着きます。
- ・災いは進行と共に深刻度を増しています。終わりの3つは特に深刻で破滅的な災いです。

- ・エジプトの魔術師は、最初の2つの奇跡と同じことを魔術によって行いました。しかし、3つ目の奇跡を試みて失敗し、それ以降は試そうとしませんでした。彼らはモーセを指して「これは神の指です」(8:19)と告白しました。
- ・ゴシェンに住むイスラエル人は、4から6番目の災いで守られました。この時に、神によってエジプト人とイスラエル人が区別されました。
- ・これら9つの災いは、すべて自然現象を基にしています。一部の学者はこれを誇張と評しています。しかし、信仰の視点からは、これは、神の超自然的な力の現われだと言えます。

私たちは、これらの自然災害が神による奇跡だと信じます。神はエジプトの自然を使って、ご自身の力を示したのです。エジプト人は、自然の力を崇拝していました。エジプト人が崇拝する自然をはるかに超越する神のみわざが示されることほど、主の力をエジプト人に対して効果的に示す方法はありません。神がこれらの災害を使って、エジプト人が崇拝する自然の力を超えるご自身の力を示すことが、この物語の核心的なテーマとなります。

モーセと魔術師

- 6 そこでモーセとアロンはそうした。【主】が彼らに命じられたとおりにした。
- 7 彼らがパロに語ったとき、モーセは八十歳、アロンは八十三歳であった。
- 8 また【主】はモーセとアロンに仰せられた。
- 9 「パロがあなたがたに、『おまえたちの不思議を行え』と言うとき、あなたはアロンに、『その杖を取って、パロの前に投げよ』と言わなければならない。それは蛇になる。」
- 10 モーセとアロンはパロのところに行き、【主】が命じられたとおりに行った。アロンが自分の杖をパロとその家臣たちの前に投げたとき、それは蛇になった。
- 11 そこで、パロも知恵のある者と呪術者を呼び寄せた。これらのエジプトの呪法師たちもまた彼らの秘術を使って、同じことをした。
- 12 彼らがめいめい自分の杖を投げると、それが蛇になった。しかしアロンの杖は彼らの杖をのみこんだ。
- 13 それでもパロの心はかたくなになり、彼らの言うことを聞き入れなかった。【主】が仰せられたとおりである。

モーセとアロンがファラオの前で杖を投げて蛇に変えたことは驚異的でした。しかし、エジプトの「呪法師」も「秘術」を使って同じことを行いました。ワーナー・フランツマンは『Bible History Commentary-Old Testament (仮題：聖書史解説書－旧約聖書)』の中で、この点について詳しく説明しています (P.227)。

呪法師たちはどうやってこのような超自然的なわざを行ったのでしょうか。聖書の記述から、彼らが明らかに「奇跡」を行ったことは確かです。事実、東洋の大道芸人の中にも、蛇を石のように固まらせて再び動かすわざを持つ者がいます。しかし、水が血に変わる、カエルがわいてくる、などの最初の2つの災いについては、同じような説明をすることができません。

彼らの行ったわざは、純粋な奇跡とは言えず、また神が明確に行った超自然的な出来事とも言えません。一方、モーセとアロンの場合には、神の明確な言葉や行動が示されていました。

また、「呪法師たちもまた彼らの秘術を使って同じようにした」と書かれていることに注目しましょう。呪法師たちの「秘技」は、サタンの力を借りて行われていました。公然と神に反抗する敵と偽教師たちは、神がサタンに許可した範囲でのみ、純粋な奇跡に近いわざを行うことができました。

しかし、それは、使徒パウロが、神を冒瀆する反キリスト勢力（教皇制）を根絶づけるためにキリストの敵が使う力を「偽りの力、しるし、不思議」と呼ぶものに当たります（Ⅱテサロニケ 2:8,9）。ここで、サタンは常に限られた力しか持っていないことを思い出しましょう。8章 18,19 節には、呪法師が地のちりをブヨにすることができなかったことが記されています。呪法師らは「これは神の指です」と認めました。

最後に、アロンの杖が呪法師の杖を飲み込むシーンは、モーセとアロンの神が、より優れていることを示しています。しかしファラオは、それにも関わらず神の警告を無視し、頑固に反抗し続けました。

血の災い

14 【主】はモーセに仰せられた。「パロの心は強情で、民を行かせることを拒んでい

15 あなたは朝、パロのところへ行け。見よ。彼は水のところに出て来る。あなたはナイルの岸に立って彼を迎えよ。そして、蛇に変わったあの杖を手にとって、

16 彼に言わなければならない。ヘブル人の神、【主】が私をあなたに遣わして仰せられます。『わたしの民を行かせ、彼らに、荒野でわたしに仕えさせよ。』ああ、しかし、あなたは今までお聞きになりませんでした。

17 【主】はこう仰せられます。『あなたは、次のことによって、わたしが【主】であることを知るようになる。』ご覧ください。私は手に持っている杖でナイルの水を打ちます。水は血に変わり、

18 ナイルの魚は死に、ナイルは臭くなり、エジプト人はナイルの水をもう飲むことを忌みきらうようになります。」

19 【主】はまたモーセに仰せられた。「あなたはアロンに言え。あなたの杖を取り、手をエジプトの水の上、その川、流れ、池、その他すべて水の集まっている所の上に差し伸ばしなさい。そうすれば、それは血となる。また、エジプト全土にわたって、木の器や石の器にも、血があるようになる。」

20 モーセとアロンは【主】が命じられたとおりに行った。彼はパロとその家臣の目の前で杖を上げ、ナイルの水を打った。すると、ナイルの水はことごとく血に変わった。

21 ナイルの魚は死に、ナイルは臭くなり、エジプト人はナイルの水を飲むことができなくなった。エジプト全土にわたって血があった。

22 しかしエジプトの呪法師たちも彼らの秘術を使って同じことをした。それで、パロの心はかたくなになり、彼らの言うことを聞こうとはしなかった。【主】の言われたとおりである。

23 パロは身を返して自分の家に入り、これに心を留めなかった。

24 全エジプトは飲み水を求めて、ナイルのあたりを掘った。彼らはナイルの水を飲むことができなかったからである。

25 【主】がナイルを打たれてから七日が満ちた。

モーセとアロンは、ナイル川の岸辺でファラオと対峙するよう神に指示されました。それはファラオが、その辺りを歩くことを習慣としていたからです。エジプト人はナイル川を神聖視していたので、ファラオのこの行動は明らかに礼拝の一環であったでしょう。

モーセがナイル川の水を血に変えたことは、年間の特定の時期にナイルで見られる自然現象の一部だったのでしょうか。一部の聖書学者は、この奇跡を自然現象として説明しようとする場合があります。しかし、魚が死に、水が臭くなったことについて読むと、超自然的な力によってナイル川の水質に化学変化が起きたことは明白です。これは、ナイル川に毎年起こる洪水によって、良質の赤い土が運ばれてくる現象とは明らかに違いました。さらに、ナイル川の上流であるこの場所は、下流よりも飲み水としての質が優れているのです。

一方、呪法師も秘儀を成功させ、水を血に変えることができました。ファラオの心はもう一度固くなり、モーセとアロンの要求を聞き入れることを拒絶しました。この呪法師たちはサタンのしもべと見なされていました。大きな危機が迫る時、サタンは主の行為に対抗するために全力を尽くすと言われています。神はこの場面でサタンがそのしもべを使って力を発揮することを容認しています。それでも、呪法師が行った技は、神の本物の奇跡にはまったく及びませんでした。後になると神は、この制限のかかった悪魔的な力すら使用を禁じるようになりました。

出エジプト記 8 章

- 1 【主】はモーセに仰せられた。「パロのもとに行って言え。【主】はこう仰せられます。
『わたしの民を行かせ、彼らにわたしに仕えさせるようにせよ。』
- 2 もし、あなたが行かせることを拒むなら、見よ、わたしは、あなたの全領土を、かえるをもって、打つ。
- 3 かえるがナイルに群がり、上って来て、あなたの家に入る。あなたの寝室に、あなたの寝台に、あなたの家臣の家に、あなたの民の中に、あなたのかまどに、あなたのこね鉢に、入る。
- 4 こうしてかえるは、あなたとあなたの民とあなたのすべての家臣の上に、はい上がる。』
- 5 【主】はモーセに仰せられた。「アロンに言え。あなたの手に杖を持ち、川の上、流れの上、池の上に差し伸ばし、かえるをエジプトの地に、はい上がらせなさい。」
- 6 アロンが手をエジプトの水の上に差し伸ばすと、かえるはい上がって、エジプトの地をおおった。
- 7 呪法師たちも彼らの秘術を使って、同じようにかえるをエジプトの地の上に、はい上がらせた。
- 8 パロはモーセとアロンを呼び寄せて言った。「かえるを私と私の民のところから除くように、【主】に祈れ。そうすれば、私はこの民を行かせる。彼らは【主】にいけにえをささげることができる。」
- 9 モーセはパロに言った。「かえるがあなたとあなたの家から断ち切られ、ナイルにだけ残るように、あなたと、あなたの家臣と、あなたの民のために、私がいつ祈ったらよいのか、どうぞ言いつけてください。」
- 10 パロが「あす」と言ったので、モーセは言った。「あなたのことばどおりになりますように。私たちの神、主のような方はほかにいないことを、あなたが知るためです。」
- 11 かえるは、あなたとあなたの家とあなたの家臣と、あなたの民から離れて、ナイルにだけ残りましょう。」
- 12 こうしてモーセとアロンはパロのところから出て来た。モーセは、自分がパロに約束したかえるのことについて、【主】に叫んだ。
- 13 【主】はモーセのことばどおりにされたので、かえるは家と庭と畑から死に絶えた。
- 14 人々はそれらを山また山と積み上げたので、地は臭くなった。
- 15 ところが、パロは息つく暇のできたのを見て、強情になり、彼らの言うことを聞き入れなかった。【主】の言われたとおりである。

前章の最後の節(7:25)にも述べられているように、かえるの災いは血の災いの7日後に起こりました。

ここで、すべての災いがどのくらいの期間起こったのかという疑問が沸き上がります。他の災いの間隔についての具体的な記述は聖書にはありません。^{ひょう}雹が降るという7つ目の災いは2月に起こったことは分かります。それは、「大麦は穂を出し、亜麻はつぼみをつけていた」(9:31)とあるからです。10番目の災いはイスラエル人がアビブと呼んでいた月である4月に起こりました。このことから、7番目と10番目は2か月、間があると言えるかもしれません。少なくとも最低限の間隔の目安となります。一般的に聖書学者たちは、災いが起こった総期間は9か月間だったと考えています。

かえるの大群が出現することはエジプトではよくある問題でしたが、これもまた、アロンがエジプトのあらゆる水源の上に杖を差し伸ばすことを通じて行われた、神の力あるみわざでした。かくして、かえるの大群が現れ、ファラオの宮殿、食料、人々すべてを含む至るところに群がりました。

呪法師たちもこの奇跡を真似ることはできましたが、それは限定的な力に過ぎませんでした。彼らは、あらゆる場所に侵入したかえるを取り除いて、国を災いから救うことはできなかったため、ファラオはモーセとアロンに助けを求めました。ファラオは、この災いが終われば、イスラエル人が主に捧げものを捧げることを許可すると約束しました。しかし、災いが終わったことを見たファラオは約束を破り、イスラエルを解放することを拒みました。

このような裏切り行為は、これから続く災いの際のファラオのお決まりパターンとなります。モーセは言葉と行いによって、これらの災いがイスラエルの全能の神によって行われていることをはっきりと示しました。ファラオは、このことを本当の意味で一度も認めませんでした。災いからの助けを求めて憐みを乞いましたが、助けが得られると「強情になり、彼らの言うことを聞き入れなかった」のです。神ご自身がそのファラオの態度を見て、破滅の道を決定づけました。

神の警告は、今この時も繰り返されています。

「きょう、もし御声を聞くなれば、御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。」(へブル3:15)

今日も、多くの人が神に対して、ファラオのように反抗的な行動に出ます。困った時の神頼みとばかりに、危機が迫った時には神の助けを求めます。しかし、その危険や問題が過ぎ去ると、自分の罪深いあり方を変えようと約束したことを忘れ、元の生活に戻るのです。この聖書の箇所による、神を頑なに拒否する人間に対する警告は明らかです。神の警告を繰り返し頑なに拒否し続けることで、人の心は、もはや悔い改めることができなくなるのです。

ブヨの災い

16 【主】はモーセに仰せられた。「アロンに言え。あなたの杖を差し伸ばして、地のちりを打て。そうすれば、それはエジプトの全土で、ぶよとなろう。」

17 そこで彼らはそのように行った。アロンは手を差し伸ばして、杖で地のちりを打った。すると、ぶよは人や獣についた。地のちりはみな、エジプト全土で、ぶよとなった。

18 呪法師たちもぶよを出そうと、彼らの秘術を使って同じようにしたが、できなかった。ぶよは人や獣についた。

19 そこで、呪法師たちはパロに、「これは神の指です」と言った。しかしパロの心はかたくなになり、彼らの言うことを聞き入れなかった。【主】の言われたとおりである。

出エジプト記のこのエピソードには、聖書翻訳によって異なる解釈がされています。英国の欽定訳聖書やドイツのルター訳では、lice（しらみ）の災いと書かれています。一方、私たちの使う聖書の翻訳では gnat（ブヨ）としており、この表現は、エジプト特有の、非常に小さな虫の不快さを効果的に表現しています。

このエピソードにおいて、アロンが杖で地を突くと、大量のブヨが現れる奇跡が描写されています。聖書学者たちは、これらのエピソードがエジプトで尊ばれた自然要素と深く関連していると指摘しています。例えば、ナイル川は、エジプト人がオシリス神の住処と信じており、最初の二つの災い（血とかえる）に関連があります。一方、ブヨの災いは、イシス神が住むとされる土地と関連しています。

ここで注目すべき点は、呪法師たちが災いを模倣することができなかったことです。呪法師たちは「これは神の指です」と宣言せざるを得なくなりました。これは、神の絶対的な力と、他の力（特にサタンの力）との明確な区別を示しています。

そして、この古代の物語は、現代のクリスチャンにも教訓として受け止められます。神は悪の力に制限を加え、信者を守り続ける存在です。パウロはコリント人への手紙で「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます」（I コリント 10:13）と言っています。ルターも、宗教改革の讃美歌で「裁き主の ただ一言あれば 敵滅びる」（*A Mighty Fortress Is Our God* 『主はかたい砦』3節）と悪魔の力について言っています。しかしながら、ファラオは神の力の前に敗北する自らの呪法師の姿を見ても、心を変えることはありませんでした。

あぶの災い

20 【主】はモーセに仰せられた。「あしたの朝早く、パロの前に出よ。見よ。彼は水のところに出て来る。彼にこう言え。【主】はこう仰せられます。『わたしの民を行かせ、彼らをわたしに仕えさせよ。』

21 もしもあなたがわたしの民を行かせないなら、さあ、わたしは、あぶの群れを、あなたとあなたの家臣とあなたの民の中に、またあなたの家の中に放つ。エジプトの家々も、彼らがいる土地も、あぶの群れで満ちる。

22 わたしはその日、わたしの民がとどまっているゴシェンの地を特別に扱い、そこには、あぶの群れがいないようにする。それは【主】であるわたしが、その地の真ん中にいることを、あなたが知るためである。

23 わたしは、わたしの民とあなたの民との間を区別して、救いを置く。あす、このしるしが起こる。』

24 【主】がそのようにされたので、おびたしいあぶの群れが、パロの家とその家臣の家とに入って来た。エジプトの全土にわたり、地はあぶの群れによって荒れ果てた。

25 パロはモーセとアロンを呼び寄せて言った。「さあ、この国内でおまえたちの神にいけにえをささげよ。」

26 モーセは答えた。「そうすることは、とてもできません。なぜなら私たちは、私たちの神、【主】に、エジプト人の忌みきらうものを、いけにえとしてささげるからです。もし私たちがエジプト人の目の前で、その忌みきらうものを、いけにえとしてささげるなら、彼らは私たちを石で打ち殺しはしないでしょうか。

27 それで私たちは荒野に三日の道のりの旅をして、私たちの神、【主】にいけにえをささげなければなりません。これは、主が私たちにお命じになることです。」

28 パロは言った。「私は、おまえたちを行かせよう。おまえたちは荒野でおまえたちの神、【主】にいけにえをささげるがよい。ただ、決して遠くへ行ってはならない。私のために祈ってくれ。」

29 モーセは言った。「それでは、私はあなたのところから出て行きます。私は【主】に祈ります。あす、あぶが、パロとその家臣とその民から離れます。ただ、パロは、重ねて欺かないようにしてください。民が【主】にいけにえをささげに行けないようにしないでください。」

30 モーセはパロのところから出て行って【主】に祈った。

31 【主】はモーセの願ったとおりにされたので、あぶはパロとその家臣およびその民から離れた。一匹も残らなかった。

32 しかし、パロはこのときも強情になり、民を行かせなかった。

4つめの災いには今までのものと異なる特徴がいくつかあります。まず、アロンが杖で地面や水面を強打する様子が見られなかったこと。そして、神が具体的な日時に災いが起こることをモーセに告げるだけであったことです。

もう一つの違いは、エジプト人が住んでいる場所とイスラエル人が住んでいる場所の違いです。今回の災いはエジプト人にだけ起こりました！

ファラオは今回の出来事で、今までの災いのすべてに主が関わっていたことをさらに思い知ることになります。刺された際に病気になることで知られる大量のあぶの群れが、富む者も貧しい者も区別せずに襲いかかりました。あぶの群れによって、ゴシェンの地を除くエジプト全土が荒廃したのを見たことで、ファラオの勢力も弱まったかのように思えました。やがて彼はイスラエル人に主への捧げものを献げることを許可しました。しかし、この時にも儀式をエジプトの領地内で行うこと、という自分にとって都合のよい条件を出したのです！



災い

モーセはこの条件に反対しました。というのも、イスラエル人がいけにえとして使う牛などの生き物は神聖とされ、エジプト国内でそのような儀式を行うとエジプト人との間での摩擦が生じる可能性があったからです。もし、ファラオの出した条件に従うならば、エジプト国内により大きな混乱を招くことは明白でした。ファラオはとうとう、彼らがエジプトを出て主へのささげものを献げることを許可しました。しかし、あぶの災いが取り除かれたとたん、ファラオは心を固くして彼らを行かせませんでした。

ファラオはモーセから、欺き行為をやめるよう再三言われていたにも関わらず、その警告に耳を貸さず、より頑固さを増していきました。神は寛容な態度を示しました。神

だけが、どのくらいこの工程を繰り返せば、神の御計画が達成されるのかご存じでした。このエピソードから、私たちにも教訓が得られます。ファラオが彼の行動の結果として受ける報いは、ガラテヤ人への手紙 6 章 7,8 節にも記されている教えと合致します。「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります」このことを心に留めて、私たちも適切な選択をするべきです。

出エジプト記 9 章

家畜の災い

- 1 【主】はモーセに仰せられた。「パロのところに行って、彼に言え。ヘブル人の神、【主】はこう仰せられます。『わたしの民を行かせて、彼らをわたしに仕えさせよ。』
- 2 もしあなたが、行かせることを拒み、なおも彼らをとどめておくなら、
- 3 見よ、【主】の手は、野にいるあなたの家畜、馬、ろば、らくだ、牛、羊の上に下り、非常に激しい疫病が起こる。
- 4 しかし【主】は、イスラエルの家畜とエジプトの家畜とを区別する。それでイスラエル人の家畜は一頭も死なない。』
- 5 また、【主】は時を定めて、仰せられた。「あす、【主】はこの国でこのことを行う。」
- 6 【主】は翌日このことをされたので、エジプトの家畜はことごとく死に、イスラエル人の家畜は一頭も死ななかった。
- 7 パロは使いをやった。すると、イスラエル人の家畜は一頭も死んでいなかった。それでも、パロの心は強情で、民を行かせなかった。

次にファラオは、野にいるすべての家畜に激しい疫病が襲うとの警告が与えられました。この疫病によって、馬、ろば、らくだ、牛、羊、山羊が感染するのです。この疫病は、私たちがよく知る疫病のように牛や鶏など一種類の家畜だけを襲うのではなく、多くの種類の家畜が同時に感染するものでした。この時ファラオは「イスラエル人の家畜は一頭も死なない」と告げられました。今回もファラオはこの警告に耳を貸しませんでした。「エジプトの家畜はことごとく死に」ました。この章の後半に、再び家畜に危害が及ぶ場面が登場することを考慮すると、「ことごとく」という言葉は「大多数の、大量の」という意味で解釈するのが適切です。「誰でも知っている」などという場合は、もちろん、大多数の人が知っているという意味になるからです。

できものの災い

8 【主】はモーセとアロンに仰せられた。「あなたがたは、かまどのすすを両手いっぱいに取り。モーセはパロの前で、それを天に向けてまき散らせ。

9 それがエジプト全土にわたって、細かいほこりとなると、エジプト全土の人と獣につき、うみの出る腫物となる。」

10 それで彼らはかまどのすすを取ってパロの前に立ち、モーセはそれを天に向けてまき散らした。すると、それは人と獣につき、うみの出る腫物となった。

11 呪法師たちは、腫物のためにモーセの前に立つことができなかった。腫物が呪法師たちとすべてのエジプト人にできたからである。

12 しかし、【主】はパロの心をかたくなにされ、彼はふたりの言うことを聞き入れなかった。【主】がモーセに言われたとおりである。

今回は、モーセの手によりファラオの面前で灰が撒かれました。それはうみの出る腫物となってエジプト中の人々と動物を襲いました。このわざわいは事前の警告なしで起こりました。

この腫物の影響は呪法師たちにも及びました。また、これはエジプトで起こった災いの内、人の体に直接被害が及ぶ最初の災いでした。そして、4章21節で予告されたとおり、「主はパロの心をかたくなにされ」ということが成就します。ファラオが繰り返された主の警告に従わなかったため、主はご自身の裁きをこの頑固な罪びとの上にしたのでした。これはファラオの選択と、主の審判が重なる重要な瞬間でした。

ひょう 雹の災い

13 【主】はモーセに仰せられた。「あしたの朝早く、パロの前に立ち、彼に言え。ヘブル人の神、【主】はこう仰せられます。『わたしの民を行かせ、彼らをわたしに仕えさせよ。

14 今度は、わたしは、あなたとあなたの家臣とあなたの民とに、わたしのすべての災害を送る。わたしのような者は地のどこにもいないことを、あなたに知らせるためである。

15 わたしが今、手を伸ばして、あなたとあなたの民を疫病で打つなら、あなたは地から消し去られる。

16 それにもかかわらず、わたしは、わたしの力をあなたに示すためにあなたを立てておく。また、わたしの名を全地に告げ知らせるためである。

17 あなたはまだわたしの民に対して高ぶっており、彼らを行かせようとしなさい。

18 さあ、今度は、あすの今ごろ、エジプトにおいて建国の日以来、今までになかったきわめて激しい^{ひょう}雹をわたしは降らせる。

19 それゆえ、今すぐ使いをやり、あなたの家畜、あなたが持っている野にあるすべてのものを避難させよ。野にいて家へ連れ戻すことのできない人や獣はみな雹が落ちて来ると死んでしまう。』

20 パロの家臣のうちで【主】のことばを恐れた者は、しもべたちと家畜を家に避難させた。

21 しかし、【主】のことばを心に留めなかった者は、しもべたちや家畜をそのまま野に残した。

22 そこで【主】はモーセに仰せられた。「あなたの手を天に向けて差し伸ばせ。そうすれば、エジプト全土にわたって、人、獣、またエジプトの地のすべての野の草の上に雹が降る。」

23 モーセが杖を天に向けて差し伸ばすと、【主】は雷と雹を送り、火が地に向かって走った。【主】はエジプトの国に雹を降らせた。

24 雹が降り、雹のただ中を火がひらめき渡った。建国以来エジプトの国中どこにもそのようなことのなかった、きわめて激しいものであった。

25 雹はエジプト全土にわたって、人をはじめ獣に至るまで、野にいるすべてのものを打ち、また野の草をみな打った。野の木もことごとく打ち碎いた。

26 ただ、イスラエル人が住むゴシェンの地には、雹は降らなかった。

27 そこでパロは使いをやって、モーセとアロンを呼び寄せ、彼らに言った。「今度は、私は罪を犯した。主は正しいお方だ。私と私の民は悪者だ。

28 【主】に祈ってくれ。神の雷と雹は、もうたくさんだ。私はおまえたちを行かせよう。おまえたちはもう、とどまってはならない。」

29 モーセは彼に言った。「私が町を出たら、すぐに【主】に向かって手を伸べ広げましょう。そうすれば雷はやみ、雹はもう降らなくなりましょう。この地が【主】のものであることをあなたが知るためです。

30 しかし、あなたとあなたの家臣が、まだ、神である【主】を恐れていないことを、私は知っています。」

31 ——亜麻と大麦は打ち倒された。大麦は穂を出し、亜麻はつぼみをつけていたからである。

32 しかし小麦とスペルト小麦は打ち倒されなかった。これらは実るのがおそいからである——

33 モーセはパロのところを去り、町を出て、【主】に向かって両手を伸べ広げた。すると、雷と雹はやみ、雨はもう地に降らなくなった。

34 パロは雨と雹と雷がやんだのを見たとき、またも罪を犯し、彼とその家臣たちは強情になった。

35 パロの心はかたくなになり、彼はイスラエル人を行かせなかった。【主】がモーセを通して言われたとおりである。

この災いは先に述べた3つのグループの最後となります。ここで神は、地上でイスラエルの神よりも強い神はいないということを思い知らせるために、ファラオに対して最高の怒りを表現しました。「建国以来エジプトの国中どこにもそのようなことのなかった、きわめて激しいものであった」と書かれているように、この嵐は前例のない猛烈さでした。ゴシェンの地にいたイスラエル人たちは、この大災害からも守られました。

嵐自体は自然の現象ですが、この特定の嵐は神の特別なみわざとしてもたらされました。この奇跡的な出来事は、モーセが予告した直後に起こったことが、その重要性を増しています。モーセが杖を空に突き上げた瞬間、天から激しい嵐が降り注ぎました。この嵐があまりにも激しかったために、さすがのファラオの心にも恐怖心が生まれ、モーセとアロンを呼び寄せて「今度は、私は罪を犯した」と言いました。これは悔い改めのように聞こえますが、「今度は」という条件が付いていることに注目してください。「今度は」とファラオが言うと、以前の災いの際はどう思っていたのか疑わしく思えます。

ファラオが後悔や悔い改めもどきの告白をしている間、ファラオの言葉の中には、後悔や真の悔い改めよりも傲慢さが感じられました。「主は正しいお方だ。私と私の民は悪者だ。【主】に祈ってくれ。神の雷と雹は、もうたくさんだ。私はおまえたちを行かせよう。おまえたちはもう、とどまってはならない」。この言葉は、手早くファラオの口から出ました。彼は少しでも早くモーセが目の前からいなくなり、このひどい嵐を去らせることを望みました。

モーセはファラオの心の中に真の主への敬意がないことを察知し、「しかし、あなたとあなたの家臣が、まだ、神である【主】を恐れていないことを、私は知っています」とはっきりと告げました。モーセは嵐を止めたにもかかわらず、ファラオは予想通り罪を犯し続けました。彼の悔い改めは偽物の悔い改めであり、単なる「困った時の神頼み」だったのです。ファラオは私たちの想像を上回るほど心をさらに固くしました。

出エジプト記 10 章

1 【主】はモーセに仰せられた。「パロのところに行け。わたしは彼とその家臣たちを強情にした。それは、わたしがわたしのこれらのしるしを彼らの中に、行うためであり、

2 わたしがエジプトに対して力を働かせたあのことを、また、わたしが彼らの中で行ったしるしを、あなたが息子や孫に語って聞かせるためであり、わたしが【主】であることを、あなたがたが知るためである。」

3 モーセとアロンはパロのところに行って、彼に言った。「ヘブル人の神、【主】はこう仰せられます。『いつまでわたしの前に身を低くすることを拒むのか。わたしの民を行かせ、彼らをわたしに仕えさせよ。』

4 もし、あなたが、わたしの民を行かせることを拒むなら、見よ、わたしはあす、いなごをあなたの領土に送る。

5 いなごが地の面をおおい、地は見えなくなる。また、雹の害を免れて、あなたがたに残されているものを食い尽くし、野に生えているあなたがたの木をみな食い尽くす。

6 またあなたの家とすべての家臣の家、および全エジプトの家に満ちる。このようなことは、あなたの先祖たちも、そのまた先祖たちも、彼らが地上にあった日からきょうに至るまで、かつて見たことのないものであろう。』」こうして彼は身を返してパロのもとを去った。

7 家臣たちはパロに言った。「いつまでこの者は私たちに陥れるのですか。この男たちを行かせ、彼らの神、【主】に仕えさせてください。エジプトが減びるのが、まだわかりにならないのですか。」

8 モーセとアロンはパロのところに連れ戻された。パロは彼らに言った。「行け。おまえたちの神、【主】に仕えよ。だが、いったいだれが行くのか。」

9 モーセは答えた。「私たちは若い者や年寄りも連れて行きます。息子や娘も、羊の群れも牛の群れも連れて行きます。私たちは【主】の祭りをするのですから。」

10 パロは彼らに言った。「私がおまえたちとおまえたちの幼子たちとを行かせるくらいなら、【主】がおまえたちとともにあるように、とでも言おう。見ろ。悪意はおまえたちの顔に表れている。

11 そうはいかない。さあ、壮年の男だけ行って、【主】に仕えよ。それがおまえたちの求めていることだ。」こうして彼らをパロの前から追い出した。

12 【主】はモーセに仰せられた。「あなたの手をエジプトの地の上に差し伸ばせ。いなごの大群がエジプトの地を襲い、その国のあらゆる草木、雹の残したすべてのものを食い尽くすようにせよ。」

13 モーセはエジプトの地の上に杖を差し伸ばした。【主】は終日終夜その地の上に東風を吹かせた。朝になると東風がいなごの大群を運んで来た。

14 いなごの大群はエジプト全土を襲い、エジプト全域にとどまった。実におびただしく、こんないなごの大群は、前にもなかったし、このあとにもないであろう。

15 それらは全地の面をおおったので、地は暗くなった。それらは、地の草木も、雹を免れた木の実も、ことごとく食い尽くした。エジプト全土にわたって、緑色は木にも野の草にも少しも残らなかった。

16 パロは急いでモーセとアロンを呼び出して言った。「私は、おまえたちの神、【主】とおまえたちに対して罪を犯した。

17 どうか今、もう一度だけ、私の罪を赦してくれ。おまえたちの神、【主】に願って、主が私から、ただこの死を取り除くようにしてくれ。」

18 彼はパロのところから出て、【主】に祈った。

19 すると、【主】はきわめて強い西の風に変えられた。風はいなごを吹き上げ、葦の海に追いやった。エジプト全域に、一匹のいなごも残らなかった。

20 しかし【主】がパロの心をかたくなにされたので、彼はイスラエル人を行かせなかった。

この災いの初めは、過去の災いと似ているように思えますが、ピークに向かうにつれて、以前のものよりも深刻になっているのが明らかです。

まず、神はモーセに、ご自身がファラオと彼の高官たちの心を固くしたことを告げました。神はその後も、目的を持って、もうひとつの災いを送ることにしました。これは、後世に生きるイスラエル人たちが、神の力の証として知ることができるためでした。イスラエル人は後世にこの出来事を伝えることを求められました。詩編 78 篇と 105 篇には伝えられた内容の記録があります。「神は、彼らの先祖たちの前で、エジプトの地、ツォアンの野で、奇しいわざを行われた。」(詩編 78:12)「主が命じられるといなごが来た。若いいなごがしかも無数に。それが彼らの国の緑を食い尽くし彼らの大地の実りを食い尽くした。」(詩編 105:34,35)

前章までに見てきたとおり、ファラオの破滅はすでに決定していました。これから起こる出来事は、神の全能の力を、イスラエルとファラオの両者に示すという目的を後押しするものでした。

地上のすべてのものは、主なる神が全能の統治者であることを知るべきです。「【主】に感謝し御名を呼び求めよ。そのみわざを諸国の民の間に知らせよ。」(詩編 105:1)とイスラエルは歌いました。

さらにここでは、ファラオの高官たちがイライラしだしていることも分かります。彼らは、もう、うんざりだ、という態度でファラオに次のように聞いています。「この男はどれだけわれらに嫌がらせをするのでしょうか」。エジプト人の高官たちが、これまでの度重なる災いに対して抱いている不満について聞くのはこの時が初めてです。

自分の相談役がイスラエル人を手放すことを進言するのを聞いて、ファラオはどうとう手綱を緩めるそぶりを見せはじめました。まず、モーセとアロンに戻るように命じ、彼らがエジプトを出る許可を与えました。彼はその直後に、誰が国を出ることになるのか尋ねました。モーセは当初の願い通り、男性だけでなく、女性と子どもを含むすべてのイスラエル人をエジプトから連れ出すことを申し出ました。すると、ファラオの不可解な文言が続いたのです。「私がおまえたちとおまえたちの幼子たちとを行かせるくらいなら、【主】がおまえたちとともにあるように、とでも言おう。見ろ。悪意はおまえたちの顔に表れている。そうはいかない。さあ、壮年の男だけ行って、【主】に仕えよ。それがおまえたちの求めていることだ」。

これらの文言は様々に解釈されています。皮肉、軽蔑、敵意、躊躇、偽善、戯れなどです。このファラオの言葉には、これらのすべてが少しずつ含まれています。そこには

脅迫観念を持ち、心の固くなった罪人の心が現れています。これは、どのように行動したらよいか分からなくなった人が、持っていると思われる最後の権力を使って怒りを爆発させる姿だと言えます。つまり神に敵対する悪者が力を使いきった状態であり、神の裁きのもとにある人間の発言です。

エジプトでは、いなごはよくいる害虫でした。しかし、聖書に書かれているようないなごの発生は実に異常なものでした。ある聖書学者は、風が日中と夜中に吹いたということは、いなごが非常に離れた場所からやってきたに違いないことを示していると指摘しています。これはエジプト人に、イスラエル人の神がエジプトの国境のはるか先まで続べ治めておられることを確かに証明する出来事でした。通常いなごの大群はエジプトの南からやってきました。今回のいなごは東からやってきており、その破壊力は今までエジプトが体験したことのあるものとは比べ物になりませんでした。

ファラオはモーセを呼び寄せて、罪を犯したことを告白し、この災いを取り除くように懇願しました。モーセがこの罪の告白に騙されたとは到底思えません。少なくとも神は騙されることはありませんでした。神の目的はすでに果たされました。神の力はすべて人間に分かるように明示されており、いよいよ終わりが近づきつつありました。

暗やみの災い

21 【主】はモーセに仰せられた。「あなたの手を天に向けて差し伸べ、やみがエジプトの地の上に来て、やみにさわれるほどにせよ。」

22 モーセが天に向けて手を差し伸ばしたとき、エジプト全土は三日間真っ暗やみとなった。

23 三日間、だれも互いに見ることも、自分の場所から立つこともできなかった。しかしイスラエル人の住む所には光があった。

24 パロはモーセを呼び寄せて言った。「行け。【主】に仕えよ。ただおまえたちの羊と牛は、とどめておけ。幼子はおまえたちといっしょに行ってもよい。」

25 モーセは言った。「あなた自身が私たちの手にいけにえと全焼のいけにえを与えて、私たちの神、【主】にささげさせなければなりません。」

26 私たちは家畜もいっしょに連れて行きます。ひづめ一つも残すことはできません。私たちは、私たちの神、【主】に仕えるためにその中から選ばなければなりません。しかも私たちは、あちらに行くまでは、どれをもって【主】に仕えなければならないかわからないのです。」

27 しかし、【主】はパロの心をかたくなにされた。パロは彼らを行かせようとはしなかった。

28 パロは彼に言った。「私のところから出て行け。私の顔を二度と見ないように気をつけろ。おまえが私の顔を見たら、その日に、おまえは死ななければならない。」

29 モーセは言った。「結構です。私はもう二度とあなたの顔を見ません。」

この災いは「やみにさわれるほど」の暗やみだったと、聖書には書かれています。なんとも不吉な、非常に深い暗闇であったことが伺えます。ヘリオポリスという一つの町を太陽神のために捧げるほど太陽を崇拜していたエジプト人の住む地では、3日間太陽の光が完全に遮断されました。

ある人々はこの災いを、この地方によく起こった砂嵐として説明することがあります。その説によると、砂が風によってひどく吹き付けられ、厚いベールのように空を覆い隠してしまうことで暗闇が生まれたことになります。本当のところ、神がこのように太陽を遮ったかどうか私たちには分かりません。しかし、「イスラエル人の住む所には光があった」という記述から、これが奇跡的な出来事だったことは明らかです。

ファラオは、「おまえたちの羊と牛は、とどめておけ」と言い、再びイスラエル人がエジプトから出ていく際の条件を出してきました。モーセはもちろん断り、神に捧げ物を献げるために家畜が必要だ、と説明をしました。するとファラオは激怒して「私のところから出て行け。私の顔を二度と見ないように気をつけろ。おまえが私の顔を見たら、その日に、おまえは死ななければならない」と言いました。こうしてファラオは自らの破滅を宣言したのです。

「結構です。私はもう二度とあなたの顔を見ません」とモーセは返事しました。モーセは事態が終局に近づいていることを知っていました。そのため、ファラオに対して「二度とあなたの顔を見ません」と断言したのです。モーセは神から、最後の災いについて聞いていました。それは、エジプト中のすべての初子が死ぬ時であり、それと同時に、イスラエル人の解放が保証される時なのです。

この出来事について、モーセはあらかじめ知らされていましたが、次の章で神はもう一度モーセに語りかけました。

出エジプト記 11 章

初子の災い

- 1 【主】はモーセに仰せられた。「わたしはパロとエジプトの上になお一つのわざわいを下す。そのあとで彼は、あなたがたをここから行かせる。彼があなたがたを行かせるときは、ほんとうにひとり残らずあなたがたをここから追い出してしまおう。
- 2 さあ、民に語って聞かせよ。男は隣の男から、女は隣の女から銀の飾りや金の飾りを求めるように。」
- 3 【主】はエジプトが民に好意を持つようにされた。モーセその人も、エジプトの国でパロの家臣と民とに非常に尊敬されていた。

- 4 モーセは言った。「【主】はこう仰せられます。『真夜中ごろ、わたしはエジプトの中に出て行く。』
- 5 エジプトの国の初子は、王座に着くパロの初子から、ひき白のうしろにいる女奴隷の初子、それに家畜の初子に至るまで、みな死ぬ。
- 6 そしてエジプト全土にわたって、大きな叫びが起こる。このようなことはかつてなく、また二度とないであろう。』
- 7 しかしイスラエル人に対しては、人から家畜に至るまで、犬も、うなりはしないでしよう。これは、【主】がエジプト人とイスラエル人を区別されるのを、あなたがたが知るためです。
- 8 あなたのこの家臣たちは、みな、私のところに来て伏し拝み、『あなたとあなたに従う民はみな出て行ってください』と言うでしょう。私はそのあとで出て行きます。」こうしてモーセは怒りに燃えてパロのところから出て行った。
- 9 【主】はモーセに仰せられた。「パロはあなたがたの言うことを聞き入れないであろう。それはわたしの不思議がエジプトの地で多くなるためである。」
- 10 モーセとアロンは、パロの前でこれらの9不思議をみな行った。しかし【主】はパロの心をかたくなにされ、パロはイスラエル人を自分の国から出て行かせなかった。

前章の 29 節でモーセは暗やみの災いの後に、「私はもう二度とあなたの顔を見ません」とファラオに言いました。11 章で述べられているシーンでは、モーセがファラオに次の災いを宣言します。しかし、これは実際には 10 章 29 節の前に起こった出来事です。つまり、これはモーセの記憶のフラッシュバックとして記録されていることになります。このような記述法は、現代同様、モーセの時代にも使われていました。モーセはすでに起こった出来事の故に、もう二度とファラオの前に姿を見せることがないと確信していました。11 章では、モーセがファラオに言った言葉の前の出来事が明かされているため、矛盾は生じていません。

ここで英語の NIV 訳は、11 章 1 節を“Now, the Lord *had* said to Moses...” と過去完了形を使い、過去のあるとき（この場合は 10 章 29 節）までの動作の完了や経験を表す形で訳されています。つまり、この箇所は、モーセがファラオに別れを宣言する以前に神が話された内容であり、暗やみの災いの後には、もう一つエジプトに災いが起こり、これがイスラエルの出エジプトにつながることを記録しているのです。

神はモーセに、イスラエル人たちがエジプトを発つ前に、エジプト人に金銀を要求するように念押しします。そして、神ご自身が、エジプト人がこの要請に応じるように介入することを再び約束しました。

ファラオに対するモーセの最後の言葉は、ファラオとエジプト人全員に対する神の最後の裁きのインパクトの大きさを物語っています。すべてのエジプト人の長男、そして家畜の雄の初子が死ぬのです。なんと恐ろしいことでしょう。実際にそれが起こった時

の悲劇を想像してみてください。エジプト中で泣き叫ぶ声が響き渡ります。対照的に、イスラエル人の家々では、犬のうなり声さえ聞こえないのです！

神のこのような行動は、一見、厳しすぎると思えるかもしれません。しかし、忘れてならないのは、神が長い期間にわたり、繰り返しファラオとエジプト人に対して、強い警告を発していたということです。主が警告の度合いを上げて行ったにも関わらず、ファラオはむしろ頑固な考えを強めていきました。主は確かに情け深く、あわれみ深く、なかなか怒らないご性質を持っています（詩編 145:8）。しかしある時点に到達すると、警告された通りの神の正義が実行されるのです。そうでなければ、神の警告は意味がなくなってしまうのです。

この真理、すなわち、神の警告や正義が真剣であることは、すべての人間に適用されるものです。これを知った人は、「もし神が愛の神であるなら、なぜ人々に永遠の罰を与えるのか」と聞く場合があります。このような人は、愛の神が、罰を容認することを理解していないのです。

私たちは、神はご自身の恵み深い救いの約束に対して真剣であると同様に、すべての不従順な人間を罰することにも真剣なのだ、ということを理解する必要があります。10の戒めにおける神の結論は明確です。これはキリスト教の基本教義と一致しており、ルターの小教理問答書（訳注：宗教改革時代の神学者マルティン・ルターによって書かれたカテキズム、つまりキリスト教解説書）でも同様の教えがされています。それは「信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます」（マルコ 16:16）という教えです。

エジプトでの災いの話は、厳しい警告であり、神はいつでも本気だ、ということを私たちに教えています。エジプト人の家の長男と雄の家畜の初子の死は、エジプト人が長年にわたって神の民であるイスラエル人を奴隷として使い、酷い扱いをすることを決めたことに対する神の罰でした。神は、4章 22 節で「イスラエルはわたしの子、わたしの初子である」と、ミデヤンの地からエジプトに向かうモーセに対して言っておられます。神はすでにモーセの将来に起こる出来事を要約していたのです。ファラオが、神の初子であるイスラエルを解放することを拒むので、「見よ、わたしはあなたの子、あなたの初子を殺す」（4:23）、とモーセは宣言することになります。

次の 12 章では、イスラエルがエジプトの圧政からついに解放される新しい幕開けの過程に焦点を当てます。そして、この章の終わりでは、イスラエルの歴史の一つの大きな節が閉じられます。

出エジプト記 12 章

過越

- 1 【主】は、エジプトの国でモーセとアロンに仰せられた。
- 2 「この月をあなたがたの月の始まりとし、これをあなたがたの年の最初の月とせよ。
- 3 イスラエルの全会衆に告げて言え。この月の十日に、おのおのその父祖の家ごとに、羊一頭を、すなわち、家族ごとに羊一頭を用意しなさい。
- 4 もし家族が羊一頭の分より少ないなら、その人はその家のすぐ隣の人と、人数に応じて一頭を取り、めいめいが食べる分量に応じて、その羊を分けなければならない。
- 5 あなたがたの羊は傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。
- 6 あなたがたはこの月の十四日までそれをよく見守る。そしてイスラエルの民の全集会は集まって、夕暮れにそれをほふり、
- 7 その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と、かもいに、それをつける。
- 8 その夜、その肉を食べる。すなわち、それを火に焼いて、種を入れないパンと苦菜を添えて食べなければならない。
- 9 それを、生のままで、または、水で煮て食べてはならない。その頭も足も内臓も火で焼かなければならない。
- 10 それを朝まで残してはならない。朝まで残ったものは、火で焼かなければならない。
- 11 あなたがたは、このようにしてそれを食べなければならない。腰の帯を引き締め、足に、くつをはき、手に杖を持ち、急いで食べなさい。これは【主】への過越のいけにえである。
- 12 その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人をはじめ、家畜に至るまで、エジプトの地のすべての初子を打ち、また、エジプトのすべての神々にさばきを下そう。わたしは【主】である。
- 13 あなたがたのいる家々の血は、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない。

聖書のすべての言葉は私たちに有益な教訓をもたらします。その中でも突出している聖書箇所がいくつか見られます。例えば、創世記3章は人間の堕落と、救い主を送ることの神の最初の約束について教えています。また申命記16章は、イスラエルにとって大事な贖罪の日の規定について記しています。そして、これから深く読み進めていく出エジプト記12章では、旧約聖書に描かれる救い主イエス・キリストの「型」が提示されます。型とは未来に起こる事柄を象徴する、しるしや出来事のことです。

12章には、神が過越の祭りを制定した経緯が記されています。過越の祭りの中心とされる小羊は、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ1:29)と書かれているとおり、イエス・キリストを象徴しています。

神は、過越の祭りを制定することによって、イスラエルの人々をご自分の民として聖別するご計画を実行しました。神は、預言者ホセアを通して「イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、わたしの子をエジプトから呼び出した」(ホセア 11:1) と宣言しました。神はイスラエル人をご自分の養子として迎えようとしていました。神は、ご自分の民をエジプトでの奴隷生活から救い出すことによって、分け隔てられた民になさろうとしていたのです。

神はイスラエルを"初子"と見なしていました。そして過越の祭りは、イスラエル人が神の特別な存在であることを思い出すために毎年祝われるよう制定されました。この章のはじめで神がモーセとアロンに告げた祭りの時期というのは、「あなたがたの月の始まり」でした。ヘブル語でのこの月の名前は「アビブの月」(13:4 を参照)、または「穂の月」でした。この名は、その時期に麦が穂をつけることから来ています。これは私たちの時代の4月に当たります。

神が出した過越の祭りの食事についての指示の全容を見ていくと、儀式の工程一つひとつが、私たちの過越の小羊である、キリストを指し示していることが分かります。

- 過越の小羊は、傷のない一歳の羊か山羊の雄とされました。洗礼者ヨハネは、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」(ヨハネ 1:29) と述べて、人々の意識を救い主に向けました。パウロはコリント人への手紙を書く際に、「私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。」(1 コリント 5:7)と記しました。
- 神は過越の小羊が「傷のない」ものであることを望まれました。後にペテロは、小アジアに離散したクリスチャンたちが救われたのは「傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」(1 ペテロ 1:19) と書いています。
- 過越の小羊は、いけにえとして殺されなくてはなりませんでした。パウロは仲間のクリスチャンたちに、「また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。」(エペソ 5:2) と書き送っています。ヘブル書の著者は、キリストが「ささげ物」であり「いけにえ」だったと繰り返し言及しています。
- イスラエル人は神に、「その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と、かもいに、それをつける」よう指示されました。過越の食事をする晩に神はエジプトにやってこられ、初子を打たれる時、神はイスラエル人に「わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない。」と約束されました。言い換えるなら、過越の小羊の血によって、イスラエルの民は破滅から救われたのです。これはもちろん、私たちが「傷もな

く汚れない小羊のようなキリストの、尊い血」(1ペテロ 1:19)によって罪と死と悪魔の力から救われたという聖書の中心的な教えを指し示しています。

- この章の後半では、神がモーセとアロンに「またその骨を折ってはならない。」(46節)と指示される箇所が出てきます。イエスの死後に、兵士たちは通常は行うであろう、受刑者イエスの足を折る行為を行いませんでした。ヨハネは、「これらのことが起こったのは、『彼の骨は、一つも折られることはない』とある聖書が成就するためであり」(ヨハネ 19:36)と記しています。

これらすべてのことから、過越の小羊が、私たちの唯一の救い主であり、この世界の罪をあがなうためにご自分の命を捧げた、神の小羊イエス・キリストを指し示していることがはっきりと分かります。主は、モーセとアロンに、過越の食事をどのようにして食べるかの細かい指示を出しました。過越の小羊は火で焼き、苦い薬草やパン種の入っていないパンと共に食べること、そして食事の際には上着の上にベルトを締め、サンダルをはき、杖を手に持ち、エジプトの地をすぐにでも出発できる準備をしておくこと、そして小羊はすべて食べ尽くし、残ったものは焼き尽くすことが命じられました。

とうとう救いの時がやって来たのです！神は、過越の食事の間にエジプトの初子を打つ際に、ご自身の初子であるイスラエルをエジプトの圧政から救うことになります。

記念すべき日

14 この日は、あなたがたにとって記念すべき日となる。あなたがたはこれを【主】への祭りとして祝い、代々守るべき永遠のおきてとしてこれを祝わなければならない。

15 あなたがたは七日間種を入れないパンを食べなければならない。その第一日目に、あなたがたの家から確かにパン種を取り除かなければならない。第一日から第七日までの間に種を入れたパンを食べる者は、だれでもイスラエルから断ち切られるからである。

16 また第一日に聖なる会合を開き、第七日にも聖なる会合を開かなければならない。この期間中、どんな仕事もしてはならない。ただし、みなが食べなければならないものだけは作ることができる。

17 あなたがたは種を入れないパンの祭りを守りなさい。それは、ちょうどこの日に、わたしがあなたがたの集団をエジプトの地から連れ出すからである。あなたがたは永遠のおきてとして代々にわたって、この日を守りなさい。

18 最初の月の十四日の夕方から、その月の二十一日の夕方まで、種を入れないパンを食べなければならない。

19 七日間はあなたがたの家にパン種があってはならない。だれでもパン種の入ったものを食べる者は、在留異国人でも、この国に生まれた者でも、その者はイスラエルの会衆から断ち切られるからである。

20 あなたがたはパン種の入ったものは何も食べてはならない。あなたがたが住む所ではどこでも、種を入れないパンを食べなければならない。」

これらの節は、イスラエルの人々が過越の祭りをどのようにして記念すべきかを説明しています。過越の食事を食べる前の7日間、イスラエル人は、パン種の入っていないパンを食べるように命じられました。これは、種を入れないパンの祭りと呼ばれました。これに背いた人は、19節にあるように「イスラエルの会衆から断ち切られる」のです。パン種は、パンやケーキを膨らませるために使われる生地発酵を促進する成分であり、この文脈では道徳的な腐敗や罪を象徴するものとして扱われています。儀式的にけがれていることを象徴しているので、それは過越の祭り際には家々にあってはならない物だったのです。古いパン種を捨て去ることで、イスラエル人はエジプトを後にした時に与えられた神の民としての新しい生活について思い起こすことが求められました。

使徒パウロも、コリントの教会の人々に向かってパン種の入っていないパンの祭りを参照して次のように言っています。「新しいこねた粉のままでいられるように、古いパン種をすっかり取り除きなさい。あなたがたは種なしパンなのですから。私たちの過越の子羊キリストは、すでに^{ほふ}屠られたのです。ですから、古いパン種を用いたり、悪意と邪悪のパン種を用いたりしないで、誠実と真実の種なしパンで祭りをしようではありませんか。」（1コリント5:7,8）パウロは、この旧約聖書の描写を使って、新約時代の過越の小羊であるキリストの、偉大な勝利を喜んで祝うことを忘れないようにクリスチャンたちを励ましました。このことから、現代のクリスチャンたちも、イスラエル人たちが過越の食事をする際に古いパン種を捨て去ったように、古い罪深い生き方を捨てて、神に喜ばれる生き方をするよう励むべきです。

伝統的な教会では、イースターの日曜日の使徒書の朗読で、使徒パウロの1コリント人への手紙を慣習的に読み上げます。この箇所は、主の御名を輝かせる生活を励ます内容となっています。クリスチャンは、そうすることによって、罪と死と地獄の罰の力にキリストが打ち勝ったことを思い出すことができるのです。これは、復活祭を真に意味深く祝う良い方法だと言えます。

神の約束とイスラエル人の信頼

21 そこで、モーセはイスラエルの長老たちをみな呼び寄せて言った。「あなたがたの家族のために羊を、ためらうことなく、取り、過越のいけにえとしてほふりなさい。

22 ヒソプの一束を取って、鉢の中の血に浸し、その鉢の中の血をかもいと二本の門柱につけなさい。朝まで、だれも家の戸口から外に出てはならない。

23 【主】がエジプトを打つために行き巡られ、かもいと二本の門柱にある血をご覧になれば、【主】はその戸口を過ぎ越され、滅ぼす者があなたがたの家に入って、打つことがないようにされる。

24 あなたがたはこのことを、あなたとあなたの子孫のためのおきてとして、永遠に守りなさい。

25 また、【主】が約束どおりに与えてくださる地に入るとき、あなたがたはこの儀式を守りなさい。

26 あなたがたの子どもたちが『この儀式はどういう意味ですか』と言ったとき、

27 あなたがたはこう答えなさい。『それは【主】への過越のいけにえだ。主がエジプトを打ったとき、主はエジプトにいたイスラエル人の家を過ぎ越され、私たちの家々を救ってくださったのだ。』すると民はひざまずいて、礼拝した。

28 こうしてイスラエル人は行って、行った。【主】がモーセとアロンに命じられたとおりに行った。

神がモーセとアロンに出した指示は、長老たちを通じて人々に伝えられました。ヒソプとは、葉の多い植物です。（訳注：ヒソプは、中東地域に自生する植物で、その柔らかい茎と葉が液体をよく吸収する特性を持っています。このため、宗教的儀式で液体を塗るのに適していました。）神は、それを小羊の血の入った鉢に入れ、かもいと門柱にその血を付けるために使うよう指示しました。後にヒソプは詩編 51:7 に書かれているように、罪を洗い清める描写として使われるようになりました。

モーセはこの時、人々に向かって神の約束を再確認し、約束された救い主が近い将来に現れ、彼らを罪の罰から解き放つだろうと伝えました。そして、エジプトからの脱出を記念する過越の祭りを毎年祝うように命じました。この祭りは、ただの記念行事ではなく、後に来られる救い主の到来を人々に強く意識させるものとなりました。

このようにして、神の偉大な救出を受け入れる準備が整えられました。彼らは感謝の心を持ちながら、神の指示を受け入れ、その指示に従う決意をしました。イスラエル人の、長年にわたる奴隷生活からの偉大な救出劇が、今まさに起ころうとしていたのです！

イスラエル人の出エジプト

29 真夜中になって、【主】はエジプトの地のすべての初子を、王座に着くパロの初子から、地下牢にいる捕虜の初子に至るまで、また、すべての家畜の初子をも打たれた。

30 それで、その夜、パロやその家臣および全エジプトが起き上がった。そして、エジプトには激しい泣き叫びが起こった。それは死人のない家がなかったからである。

31 パロはその夜、モーセとアロンを呼び寄せて言った。「おまえたちもイスラエル人も立ち上がって、私の民の中から出て行け。おまえたちが言うとおりに、行って、【主】に仕えよ。

32 おまえたちの言うとおりに、羊の群れも牛の群れも連れて出て行け。そして私のためにも祝福を祈れ。」

33 エジプトは、民をせきたてて、強制的にその国から追い出した。人々が、「われわれもみな死んでしまう」と言ったからである。

34 それで民は練り粉をまだパン種を入れないままに取り、こね鉢を着物に包み、肩にかついだ。

35 イスラエル人はモーセのことばどおりに行い、エジプトから銀の飾り、金の飾り、それに着物を求めた。

36 【主】はエジプトがこの民に好意を持つようにされたので、エジプトは彼らの願いを聞き入れた。こうして、彼らはエジプトからはぎ取った。

37 イスラエル人はラメセスから、スコテに向かって旅立った。幼子を除いて、徒歩の壮年の男子は約六十万人。

38 さらに、多くの入り混じって来た外国人と、羊や牛などの非常に多くの家畜も、彼らとともに上った。

39 彼らはエジプトから携えて来た練り粉を焼いて、パン種の入っていないパン菓子を作った。それには、パン種が入っていなかった。というのは、彼らは、エジプトを追いつ出され、ぐずぐずしてはおられず、また食料の準備もできなかったからである。

40 イスラエル人がエジプトに滞在していた期間は四百三十年であった。

41 四百三十年が終わったとき、ちょうどその日に、【主】の全集団はエジプトの国を出た。

42 この夜、【主】は彼らをエジプトの国から連れ出すために、寝ずの番をされた。この夜こそ、イスラエル人はすべて、代々にわたり、【主】のために寝ずの番をするのである。

「真夜中になって」神のご計画がいよいよ実行に移されました。この災いは、かえるやぶよなどの自然災害とはまったく関係のない現象でした。今回は、神ご自身が直接手を下し、「エジプトの地のすべての初子」を打ったのです。この結果は壊滅的で「死人のない家がなかった」と書かれています。

次の出来事はとても早く起こりました。ファラオはイスラエル人が国を出て行くよう要請を出しました。イスラエル人はせき立てられて出発したので、その時にあるだけの

パン種を抱えて出発しました。練り粉の中にパン種を入れて、新たなパン生地を練る暇もありませんでした。

彼らは神の指示通り、エジプト人に金や銀や衣類を渡すように要求しました。これは、支払い期限をとうに過ぎたエジプトでの労働の対価でした。エジプト人は一刻も早くイスラエル人に出て行って欲しかったので、喜んで金品を渡しました。戦利品を携えた勝利者のように、イスラエルの民は長年囚われの身となっていた土地を出発しました。主はとうとう、イスラエルを奴隷生活から解放したのです！

イスラエルの民はラメセスから出発しました。ラメセスは、自分たちの血と汗と涙で建てた貯蔵都市です。今回その場所を発つにあたって、自分たちがその町を建設していた頃のような悲しみや苦しみ涙を流す者は誰もいなかったでしょう。

かれらはスコテという南東にある町に向かいました。この時、男性だけで 60 万人、女性と子供を入れると 200 万人ほどの人数の大群が、所有するすべての家畜とともに移動したのです。その壮大な光景を思い描いてください！

さらに、「多くの入り混じって来た外国人」も、一緒に移動したことが記されています。召使の中には、エジプト人が混じっていたことが容易に予想できます。イスラエル人以外の民族も、エジプトを出ることに対してメリットを感じ、民と行動を共にしたことが考えられます。おべっか使いやごますりは、どの社会にも存在します。のちに民数記に記されるように、このような人々は旅の途中で問題を起こします。

イスラエル人がエジプトに暮らしていた期間は 430 年です。私たちは、その年数を疑うことはありません。それは歴史的な状況に当てはまっているからです。神は、アブラムに対して、「あなたの子孫は、自分たちのものでない国で寄留者となり、彼らは奴隷とされ、四百年の間、苦しめられよう」（創世記 15:13）と、奴隷生活の長さを 400 年というおおよその数字を使って言っています。

使徒パウロは出エジプトの出来事を、出エジプト記のこの箇所での数字どおりの 430 年と説明し、神がアブラハムに対する契約を全うするためにシナイ山で十戒を民に与えるまでに、長い年月がかかったことを解き明かしました。パウロはこの数字が正しいことを知っていました。彼はひとつの約束（救い主が与えられること）が、もうひとつの契約（十戒）の前に、短く見積もってもこの年月がかかったことを説明しています。

イスラエルの救いの日は、まさしく記念されるべき日でした。主は、「寝ずの番」をしてイスラエルをエジプトから救い出しました。その主の栄光を記念するために、イスラエル人は代々にわたり、過越の祭りの日には寝ずの番をすることが定められたのです。

過越の規定

43 【主】はモーセとアロンに仰せられた。「過越のいけにえに関するおきては次のとおりである。外国人はだれもこれを食べてはならない。

- 44 しかし、だれでも金で買われた奴隷は、あなたが割礼を施せば、これを食べることができる。
- 45 居留者と雇い人は、これを食べてはならない。
- 46 これは一つの家の中で食べなければならない。あなたはその肉を家の外に持ち出してはならない。またその骨を折ってはならない。
- 47 イスラエルの全会衆はこれを行わなければならない。
- 48 もし、あなたのところに異国人が在留していて、【主】に過越のいけにえをささげようとするなら、彼の家の子はみな割礼を受けなければならない。そうしてから、その者は、近づいてささげることができる。彼はこの国に生まれた者と同じになる。しかし無割礼の者は、だれもそれを食べてはならない。
- 49 このおしえは、この国に生まれた者にも、あなたがたの中にいる在留異国人にも同じである。」
- 50 イスラエル人はみな、そのように行った。【主】がモーセとアロンに命じられたとおりに行った。
- 51 ちょうどその日に、【主】はイスラエル人を、集団ごとに、エジプトの国から連れ出された。

この章に過越の食事の規定が書かれていることから、モーセがその重要性を認識し、これを記録したことが明らかです。外国人はこの祭りに参加することはゆるされませんでした。無割礼の男子も過越の食事を食べることを禁じられました。もし外国人がイスラエルの神を賛美したいと思った場合、その人はイスラエル社会の規定を守ること、つまりこの場合は、割礼を受けることが必要でした。過越の食事にあずかることにより、イスラエル人は神とお互いの交わりを公に告白したのです。

神の人々のために処方された旧約聖書での儀式と、キリストによって制定された新約聖書の儀式の比較対照をすることができます。過越の祭りと洗礼の礼典は、両者ともに神が人を神の家族の交わりの中に迎えるための契約の儀式です。神が過越を、キリストが主の晩餐を、それぞれ交わりを深めるために制定しました。両者はまったく同じということはありません。しかし、それぞれ異なる特徴を持っているにせよ、大きな類似性が見られます。

過越の祭りはすべての人のためではありませんでした。今日の主の晩餐も同様です。私たちのルーテル教会では、特定の信仰の交わりを持つ人々だけのために行われる"閉じた聖餐式"を執り行っています。それは主の晩餐が、信仰の交わりのある者のためにある、ということを意味します。「私たちは、多数であっても、一つのからだです」(1 コリント 10:17) とパウロは述べています。同じ信仰を持たない人は、この礼典を共に祝うことを制限されています。

出エジプト記 13 章

初子を聖別する

- 1 【主】はモーセに告げて仰せられた。
- 2 「イスラエル人の間で、最初に生まれる初子^{ういご}はすべて、人であれ家畜であれ、わたしのために聖別せよ。それはわたしのものである。」
- 3 モーセは民に言った。「奴隷の家であるエジプトから出て来たこの日を覚えていなさい。【主】が力強い御手で、あなたがたをそこから連れ出されたからである。種を入れたパンを食べてはならない。
- 4 アビブの月のこの日にあなたがたは出発する。
- 5 【主】があなたに与えるとあなたの先祖たちに誓われたカナン人、ヘテ人、エモリ人、ヒビ人、エブス人の地、乳と蜜の流れる地に、あなたを連れて行かれるとき、次の儀式をこの月に守りなさい。
- 6 七日間、あなたは種を入れないパンを食べなければならない。七日目は【主】への祭りである。
- 7 種を入れないパンを七日間、食べなければならない。あなたのところに種を入れたパンがあってはならない。あなたの領土のどこにおいても、あなたのところにパン種があってはならない。
- 8 その日、あなたは息子に説明して、『これは、私がエジプトから出て来たとき、【主】が私にしてくださったことのためなのだ』と言いなさい。
- 9 これをあなたの手の上のしるしとし、またあなたの額の上の記念としなさい。それは【主】のおしえがあなたの口にあるためであり、【主】が力強い御手で、あなたをエジプトから連れ出されたからである。
- 10 あなたはこのおきてを年々その定められた時に守りなさい。
- 11 【主】が、あなたとあなたの先祖たちに誓われたとおりに、あなたをカナン人の地に導き、そこをあなたに賜るとき、
- 12 すべて最初に生まれる者を、【主】のものとしてささげなさい。あなたの家畜から生まれる初子もみな、雄は【主】のものである。
- 13 ただし、ろばの初子はみな、羊で贖わなければならない。もし贖わないなら、その首を折らなければならない。あなたの子どもたちのうち、男の初子はみな、贖わなければならない。
- 14 後になってあなたの子があなたに尋ねて、『これは、どういうことですか』と言うときは、彼に言いなさい。『【主】は力強い御手によって、私たちを奴隷の家、エジプトから連れ出された。
- 15 パロが私たちを、なかなか行かせなかったとき、【主】はエジプトの地の初子を、人の初子をはじめ家畜の初子に至るまで、みな殺された。それで、私は初めに生まれる雄

をみな、いけにえとして、【主】にささげ、私の子どもたちの初子をみな、私は贖うのだ。』

16 これを手の上のしるしとし、また、あなたの額の上の記章としなさい。それは【主】が力強い御手によって、私たちをエジプトから連れ出されたからである。」

「最初に生まれる初子^{ういご}はすべて、人であれ家畜であれ、わたしのために聖別せよ」との初子^{ういご}の聖別の指示は、おそらく出エジプト後のスコテの町での仮庵の祭りで与えられたものです。初子の聖別は過越の出来事と密接に関連していました。イスラエル人の初子の命が助けられたので、主はご自身の恵みを民が覚えておくように、初子を特別な礼拝のために聖別することを命じたのです。主はまたイスラエルの民を「イスラエルはわたしの子、わたしの初子である」（4章22節）と言っています。イスラエルは自分の初子を主に捧げることによって、主の救いの御手を常に思い出し、主のイスラエルの民に対する愛を知ることができました。

初子の聖別は、カナンの地から民が救い出された後に行われるようにと指示されました。民数記と申命記には、その具体的な方法がより詳しく書かれており、出エジプト記では、イスラエルの民の初子が主に捧げられることが短く伝えられるにとどまっています。食料といけにえに相応しいきよい家畜の初子の雄は「【主】のもの」であり、主に捧げられるものでした。そして、きよらかでない家畜、例えばロバは、きよい家畜、例えば羊での贖いが必要とされました。贖わない場合は、「その首を折らなければならない」、つまり殺すよう命じられました。

後に民数記では、神がレビ部族を神の特別な奉仕のために分け隔てたことが記録されています。これは、イスラエルの存在とその所有物すべては、救い主である主への捧げ物であることを絶えず思い出させるためのものでした。私たちは旧約聖書の時代のすべての規定に縛られているわけではありません。しかし使徒パウロは新約時代の信者に次のように言いました。「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい」（1コリント 6:19,20）

イスラエル人たちが、何年も後に、カナンの地に住むことになっても、神は彼らに、エジプトから救い出されたことを決して忘れて欲しくありませんでした。神が初子を聖別したのはそのためです。「これを手の上のしるしとし、また、あなたの額の上の記章としなさい」とモーセは言って、この出来事を人々に印象づけました。

あるユダヤ人達は、モーセの言ったことを文字通りに解釈しました。儀式的にきよいとされる動物の皮から聖句箱と呼ばれる小さな袋を作り、その中に戒めの聖句が書かれた羊皮紙を入れ、男性たちの額や左腕にくくりつけました。残念ながら、このような解釈は、神のご命令の真意に沿ったものではありませんでした。神は、人々が思い（額）

と行い（腕）において、彼らへの限りなく深い恵みと憐れみについて、いつも思いを馳せることを望まれました。この考え方は新約聖書にも共鳴しており、使徒パウロは「あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」（1 コリント 10:31）と新約時代の信者に教えています。

17 さて、パロがこの民を行かせたとき、神は、彼らを近道であるペリシテ人の国の道には導かれなかった。神はこう言われた。「民が戦いを見て、心が変わり、エジプトに引き返すといけない。」

18 それで神はこの民を葦の海に沿う荒野の道に回らせた。イスラエル人は編隊を組み、エジプトの国から離れた。

19 モーセはヨセフの遺骸を携えて来た。それはヨセフが、「神は必ずあなたがたを顧みてくださる。そのとき、あなたがたは私の遺骸をここから携え上らなければならない」と言って、イスラエルの子らに堅く誓わせたからである。

20 こうして彼らはスコテから出て行き、荒野の端にあるエタムに宿営した。

21 【主】は、昼は、途上の彼らを導くため、雲の柱の中に、夜は、彼らを照らすため、火の柱の中にいて、彼らの前を進まれた。彼らが昼も夜も進んで行くためであった。

22 昼はこの雲の柱、夜はこの火の柱が民の前から離れなかった。

神がご自身の民を導く

カナンへの最短の道は北東方向で、争い好きなペリシテ人の住む地域でした。エジプトを出たばかりの神の民は武器を持っておらず、戦争に備えていないことを神はよくご存じでした。そのため、神は彼らに紅海に向かわせる南東の道を選ばせました。

イスラエル人は「編隊を組み」ながら進みました。さらにモーセがヨセフの遺骸を持参したことが明記されており、これは創世記の中で、ヨセフがイスラエルの子らに誓わせた内容を反映しています。「ヨセフはイスラエルの子らに誓わせて、『神は必ずあなたがたを顧みてくださるから、そのとき、あなたがたは私の遺体をここから携え上ってください』と言った。」（創世記 50:25）

神はアブラハムに、彼の子孫がカナンの地で大いなる国民になること、そしてその子孫によって地上のすべての国々が祝福されることを約束しました。ヨセフはその約束を堅く信じました。モーセは、何百年も前に交わされたヨセフとの約束を実行することで、モーセ自身もヨセフ同様に神の約束を信頼したことを示したのでした。

イスラエル人が次に宿営した場所はエタムでした。それはエジプトの東側の国境にあり、砂漠地帯に隣接していました。この場所での出来事は次のように記されています。「昼は、彼らを導く雲の柱、夜は彼らを照らす火の柱として【主】が彼らの前を進まれた。」主は雲の柱として彼らの前に現れ、彼らを導きました。次の章で主は、敵からイ

イスラエル人を守るために雲の柱を用いました。そこで私たちは、神が雲の柱を使ってご自身の栄光を高らかに宣言する様子を見ることになります。荒野での旅全体を通して、目に見える主なる神の存在は、イスラエル人の側をひとときも離れなかったことを私たちは学びます。

人生におけるクリスチャンとしての歩みの中で、神はご自身が私たちのすぐ側にいらっしゃることを宣言します。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」（ヘブル 13:5）ここで、イザヤの次の美しい言葉を思い出しましょう。

だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、【主】はこう仰せられる。

イスラエルよ。あなたを形造った方、【主】はこう仰せられる。

「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしが、あなたの神、【主】、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。わたしは、エジプトをあなたの身代金とし、クシュとセバをあなたの代わりとする。」（イザヤ 43:1-3）

私たちクリスチャンにとっての雲の柱や火の柱とは何でしょうか。私たちは詩編の作者とともに「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」（詩編 119:105）とすることができます。そして次の聖句を心に刻みましょう。「また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」（マタイ 28:20）

クリスチャンは、喜びの日も悲しみの日も、神に「私の手を取り、導いてください」と祈ります。イスラエル人も同じことを学ばなくてはなりません。彼らは神の憐れみ深い臨在の中にありましたが、約束の地カナンに着くまでに、多くの苦難を味わわなくてはならなかったのです。

出エジプト記 14 章

紅海のほとりで宿営する

1 【主】はモーセに告げて仰せられた。

2 「イスラエル人に、引き返すように言え。そしてミグドルと海の間にあるピ・ハヒロテに面したバアル・ツェフォンの手前で宿営せよ。あなたがたは、それに向かって海辺に宿営しなければならない。

3 パロはイスラエル人について、『彼らはあの地で迷っている。荒野は彼らを閉じ込めてしまった』と言うであろう。

4 わたしはパロの心をかたくなにし、彼が彼らのあとを追えば、パロとその全軍勢を通してわたしは栄光を現し、エジプトはわたしが【主】であることを知るようになる。」そこでイスラエル人はそのとおりにした。

イスラエル人はスコテを出発し、荒野の端のエタムに宿営しました。その後、主は彼らに紅海の近くのピ・ハヒロテへ戻るよう指示しました。神の目的は、エジプト人に、イスラエルの民が混乱していると思込ませることでした。

イスラエル人が宿営した地の近くの水辺はヘブル語で「葦の海」として知られる場所でした。この水辺は紅海の一部で、南に位置していました。一部の批評家は、ここで指摘されている海が、潮が引いた際に乾地となる湿地帯であると主張します。しかし、これはこの地域の自然条件を知っている人からすると的外れな意見です。そして、神の奇跡によらなければ、決して大水を渡りきることはできなかったとする聖書の記述とも一致しません。

主はモーセに、イスラエル人達をこの奇妙な方向へと導くよう命じました。このことは、ファラオとエジプト人に対して主が再びご自身の栄光を示す機会となるのです。

エジプト人の追っ手

5 民の逃げたことがエジプトの王に告げられると、パロとその家臣たちは民についての考えを変えて言った。「われわれはいったい何ということをしたのだ。イスラエルを去らせてしまい、われわれに仕えさせないとは。」

6 そこでパロは戦車を整え、自分でその軍勢を率い、

7 えり抜きの戦車六百とエジプトの全戦車を、それぞれ補佐官をつけて率いた。

8 【主】がエジプトの王パロの心をかたくなにされたので、パロはイスラエル人を追跡した。しかしイスラエル人は臆することなく出て行った。

9 それでエジプトは彼らを追跡した。パロの戦車の馬も、騎兵も、軍勢も、ことごとく、バアル・ツェフォンの手前、ピ・ハヒロテで、海辺に宿営している彼らに追いついた。

イスラエルの人々がエジプトを去ったという知らせがファラオに届きました。彼らがただ砂漠でいけにえを捧げるために数日間出かけるだけでないことは明らかでした。実際、彼らはエジプトから逃亡しており、これはエジプトの貴重な労働力の損失を意味していました。

ファラオは 600 台の最上級の戦車を率いて、イスラエル人を追いかけました。そしてエジプト軍はピ・ハヒロテの宿営所に迫ってきました。エジプト人から見ると、イスラ

エル人の進行方向は無秩序で、混乱しているように見えました。エジプト人たちは「これは簡単だ。すぐに彼らを打ち負かせるだろう。」と自信に満ちていたことでしょう。

10 パロは近づいていた。それで、イスラエル人が目を上げて見ると、なんと、エジプト人が彼らのあとに迫っているではないか。イスラエル人は非常に恐れて、【主】に向かって叫んだ。

11 そしてモーセに言った。「エジプトには墓がないので、あなたは私たちを連れて来て、この荒野で、死なせるのですか。私たちをエジプトから連れ出したりして、いったい何ということ私たちにしてくれたのです。

12 私たちがエジプトであなたに言ったことは、こうではありませんでしたか。『私たちのことはかまわないで、私たちをエジプトに仕えさせてください。』事実、エジプトに仕えるほうがこの荒野で死ぬよりも私たちには良かったのです。」

13 それでモーセは民に言った。「恐れてはいけない。しっかり立って、きょう、あなたがたのために行われる【主】の救いを見なさい。あなたがたは、きょう見るエジプト人をもはや永久に見ることはできない。

14 【主】があなたがたのために戦われる。あなたがたは黙っていなければならない。」

イスラエル人たちが、戦闘態勢を整えたファラオ軍が急速に接近してくるのを目の当たりにしたときの恐怖は、私たちにも容易に想像できるでしょう。目の前には海が広がっています。たくさんの女性と子供と家畜を抱えて、どうやったらエジプト人に対してまともな戦闘ができるというのでしょうか。恐怖のあまり、彼らが主に助けを求めたことは自然な反応であろうと考えられます。

しかし、彼らの主に対する叫びは意外にもその反対でした。彼らは主への信頼のかけらもない訴えをモーセにしました。それは次の言葉に凝縮されています。『私たちのことはかまわないで、私たちをエジプトに仕えさせてください。』事実、エジプトに仕えるほうがこの荒野で死ぬよりも私たちには良かったのです。」

モーセがそれに対して彼らに言った言葉を、私たちも覚えておくべきです。「恐れてはいけない。しっかり立って、・・・【主】の救いを見なさい。【主】があなたがたのために戦われる。」

このような状況下で、モーセの言葉は、彼の敬虔かつ希望的観測にしか聞こえなかったことでしょう。モーセには、迫り来る武装したエジプト人の姿が見えなかったのでしょうか。この危機的状況を理解できなかったのでしょうか。モーセの頭は、どうにかなってしまったのでしょうか。

危機が追い迫った時の私たちも、元来の怖がりの性質から来る同様の反応を示します。敵を見て、危機的な状況を把握します。そして、主に向かって目を上げることを忘れてしまうのです。主が、私たちをすべての悪から心も体も救い出してくださいと約束して

いるのにも関わらず、です。神はみことばの中で、私たちに確証を与えてくださっています。詩編 121 篇がよい例です。

私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。
私の助けは、天地を造られた【主】から来る。
主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。
見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。
【主】は、あなたを守る方。【主】は、あなたの右の手をおおう陰。
昼も、日が、あなたを打つことがなく、夜も、月が、あなたを打つことはない。
【主】は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。
【主】は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。
(詩編 121:1-8)

また、ローマ 8 章 18-39 節の例もあります。

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。

被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子と

なられるためです。神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。

では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。

私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。

「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。

しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

(ローマ 8:18-39)

これらの箇所は敬虔な礼儀などではありません。これは、真実の救いの約束です。イエスは私たちに次のように教えています。「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです」(マルコ 9:23)。願わくは、神の約束に対し、私たちが「信じます。私の不信仰を助けてください」(マルコ 9:24)と心から答えることができますように。

この状況の中で、続く箇所で見ると、主は直ちにモーセを助けられました。

15 **【主】**はモーセに仰せられた。「なぜあなたはわたしに向かって叫ぶのか。イスラエル人に前進するように言え。

16 あなたは、あなたの杖を上げ、あなたの手を海の上に差し伸ばし、海を分けて、イスラエル人が海の真ん中のかわいた地を進み行くようにせよ。

17 見よ。わたしはエジプト人の心をかたくなにする。彼らがそのあとから入って来ると、わたしはパロとその全軍勢、戦車と騎兵を通して、わたしの栄光を現そう。

18 パロとその戦車とその騎兵を通して、わたしが栄光を現すとき、エジプトはわたしが**【主】**であることを知るのだ。」

- 19 ついでイスラエルの陣営の前を進んでいた神の使いは、移って、彼らのあとを進んだ。それで、雲の柱は彼らの前から移って、彼らのうしろに立ち、
- 20 エジプトの陣営とイスラエルの陣営との間に入った。それは真っ暗な雲であったので、夜を迷い込ませ、一晩中、一方が他方に近づくことはなかった。
- 21 そのとき、モーセが手を海の上に差し伸ばすと、【主】は一晩中強い東風で海を退かせ、海を陸地とされた。それで水は分かれた。
- 22 そこで、イスラエル人は海の真ん中のかわいた地を、進んで行った。水は彼らのために右と左で壁となった。

「イスラエル人に前進するように言え！」と主はモーセに命じました。この強い命令に伴い、人々がどのように海を進むべきかが示されました。モーセが杖を海の水の上に上げると、神は、海の水を分け、イスラエル人が海の中央の乾燥した地を進むことができるようになるのです。ファラオが軍隊を派遣してイスラエル人を追跡すると、主はエジプト軍を撃退し、壮麗な勝利をもたらします。

この後、事件はすばやく起こりました。神は雲の柱を用いてイスラエル人とエジプト人を隔て、敵は暗闇に閉ざされた一方、神の民は光の中にとどまり続けました。モーセが海に向かって杖を伸ばすと、強い風が吹きました。風によって海の水が二つに分かれ、左右に壁のようにせき止められたことで、イスラエルの人々は乾いた地を通ることができたのです。

聖書物語の絵本にはこの情景がよく描かれていますが、そのどれも、この圧倒的な事件の規模を物語ることにはできないでしょう。200 万人もの人がその荷物と家畜を連れて、たったひと晩の間に大海を渡っていく様子を想像してみてください。人々が歩いた乾いた土地は、最低でも幅 800 メートルかそれ以上あったはずです。海底の土を乾かし、左右に水の壁を作るほどの風は、とてつもない強風だったことでしょう！

懐疑的な考えを持つ人々は、この出来事をただの自然現象として説明しようとするはずです。引き潮の時に強い風が吹いたなら、このような現象は不自然なことではないと。このような時、私たちは聖書に正しい解釈を求めます。詩編の著者は、神の救いを次のように説明しています。「あなたは、御力をもって海を分け、海の巨獣の頭を砕かれました」（詩編 74:13）。また、詩編 77 篇では次のように書かれています。

あなたの道は海の中にあり、
あなたの小道は大水の中にありました。
それで、あなたの足跡を見た者はありません。
あなたは、ご自分の民を、モーセとアロンの手によって、
羊の群れのように導かれました。（詩編 77:19,20）

「あなたの足跡を見た者はありません」とは、どれほど美しい言葉でしょう。これが意味するのは、私たちが信じるためには、神の足跡、つまり神のなさることを、すべて見る必要はないということです。ペテロは使徒書の中で次のように書き記しています。「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。」(Ⅰペテロ 1:8,9)

「前進するように言え」と主は言われました。そうです。主は、キリスト教会にも、同様に言っておられます。時折、私たちは目の前の危険にだけ焦点を合わせることがあります。信仰を持たない人々の考えが迫ってくるときがあります。働いて得たお金がインフレによって底をついてしまうことがあります。始めた教会活動を維持するのがやっとの時もあります。このような時、私たちはどのように前進したらよいのでしょうか。宣教活動をどう進めたらよいのでしょうか。腐敗し、邪悪に満ちたこの世界で、私たちの言葉を真剣に受け取る人は存在するのでしょうか。なぜ私たちは活動の拡大に関わってしまったのでしょうか。地面に穴を掘って、隠れてしまおう！このように思ってしまうことが多いのではないのでしょうか。

まことの神を信じる人々に、前進するように言いましょう！神に敵対する者がどのようになるか、次の節に鮮やかに描写されています。

敵が滅ぼされる

23 エジプト人は追いかけて来て、パロの馬も戦車も騎兵も、みな彼らのあとから海の中に入って行った。

24 朝の見張りのころ、【主】は火と雲の柱のうちからエジプトの陣営を見おろし、エジプトの陣営をかき乱された。

25 その戦車の車輪をはずして、進むのを困難にされた。それでエジプト人は言った。「イスラエル人の前から逃げよう。【主】が彼らのために、エジプトと戦っておられるのだから。」

26 このとき【主】はモーセに仰せられた。「あなたの手を海の上に差し伸べ、水がエジプト人と、その戦車、その騎兵の上に返るようにせよ。」

27 モーセが手を海の上に差し伸べたとき、夜明け前に、海がもとの状態に戻った。エジプト人は水が迫って来るので逃げたが、【主】はエジプト人を海の真ん中に投げ込まれた。

28 水はもとに戻り、あとを追って海に入ったパロの全軍勢の戦車と騎兵をおおった。残された者はひとりもいなかった。

29 イスラエル人は海の真ん中のかわいた地を歩き、水は彼らのために、右と左で壁となったのである。

30 こうして、【主】はその日イスラエルをエジプトの手から救われた。イスラエルは海辺に死んでいるエジプト人を見た。

31 イスラエルは【主】がエジプトに行われたこの大いなる御力を見たので、民は【主】を恐れ、【主】とそのしもべモーセを信じた。

イスラエル人が海の東側に到着したとき、雲の柱が上り、エジプト人はイスラエル人たちが前方にいるのを見ました。海の中の道はまだあり、エジプト人たちはイスラエル人の後を追ひ、勇んで道を進んで行きました。神はそこでさまざまな方法でその力を示され、エジプト人が前に進むのを困難にしました。詩編の著者は困難とはどのようなものだったのかを説明しています。

神よ。水はあなたを見たのです。

水はあなたを見て、わななきました。

わたつみもまた、震え上がりました。

雲は水を注ぎ出し、雷雲は雷をとどろかし、

あなたの矢もまた、ひらめき飛びました。(詩編 77:16,17)

猛烈な嵐がエジプト軍を襲いました。神は「その戦車の車輪をはずして、進むのを困難にされ」ました。ある聖書の古文書には「神は、車輪が動かないようにした」ともあります。海底の砂の上で戦車の車輪が動かず身動きが取れなくなったエジプト人の様子が目に浮かびます。モーセが海に向かって腕を伸ばすと、左右にそびえ立っていた水の壁が崩れ、海の中央の道を覆いました。その水はファラオの軍隊すべてに襲い掛かり、あとを追って海に入った全軍勢の戦車と騎兵をおおいました。その結果エジプト軍で「残された者はひとりもいなかった」のです。

驚くべき方法でファラオの軍隊が滅ぼされた様子の一部始終を見ていたイスラエル人は、神に対する畏れの念を抱き、主とそのしもべモーセを信じるようになりました。神は救いの主であり、同時に裁きの主でもあります。イスラエル人はそのことを後の日々にさらに体験することになります。

次の章では、モーセがこの輝かしい勝利の栄光を、賛美の歌で表現しています。

モーセの賛歌

ケンブリッジ聖書は、15 章においてこの詩を「ヘブル語の詩の中でも特に素晴らしい作品の一つ」と称えています。モーセがその著者であるという説は取り上げていません。一部の聖書学者たちは、この詩はイスラエルがより進化した後の時期に書かれたと考えています。

一方、私たちは、モーセがこの詩の著者であることに疑いを持たないという立場を、内容と形式の両面から支持します。モーセは、主の奇跡的な力を持って神の民を敵の手から救い、敵を打ち倒したのです！そのため、モーセ本人に、この詩を書く能力が与えられ、イスラエルの民を賛美の道へと導いたと考えるのが最も適していると言えます。

本書では、この詩を三つの部分に分けて詳しく考察していきます。

出エジプト記 15 章

一番

1 そこで、モーセとイスラエル人は、【主】に向かって、この歌を歌った。彼らは言った。

【主】に向かって私は歌おう。

主は輝かしくも勝利を収められ、
馬と乗り手とを海の中に投げ込まれたゆえに。

2 主は、私の力であり、ほめ歌である。

主は、私の救いとなられた。
この方こそ、わが神。私はこの方をほめたたえる。
私の父の神。この方を私はあがめる。

3 【主】はいくさびと。その御名は【主】。

4 主はパロの戦車も軍勢も
海の中に投げ込まれた。

えり抜きの補佐官たちも
葦の海におぼれて死んだ。

5 大いなる水は彼らを包んでしまい、
彼らは石のように深みに下った。

ヘブル語の詩には、修飾語や比喻表現など、現代にも共通する技法が見られます。例えば歌の一番に当たる部分では、「私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救い」、「私の父の神」、「【主】はいくさびと。その御名は【主】」など、主を誉めたたえる多様な表現が使われています。対照的に、敵は「石のように深みに下った」とあるように、敵が神に対してまったく無力であった様子が表現されています。こうした表現を使うことに

よって、詩篇の著者は、一番の主題として、イスラエルの敵を滅ぼした主の偉大さを伝えていきます。

ヘブル語の詩は、現代英語の詩とは異なり、各文の最後に韻を持たない特徴があります。その代わり、一つのテーマが提示されてから、そのすぐ後にも同じテーマを別の言葉で言い換えた表現が繰り返される、という方法で詩が続きます。別の文章に同じテーマを繰り返すことをパラリズム（対句法）と言います。これは、表現が同じ、もしくは似た句を並べ、対称・強調させる技法であり、2つめの文章は多くの場合、最初の文の繰り返しや変化形として現れます。この技法が使われている2節を見てみましょう。

主は、私の力であり、ほめ歌である。

主は、私の救いとなられた。

同様のことが4節でも行われています。

主はパロの戦車も軍勢も

海の中に投げ込まれた。

えり抜きの補佐官たちも

葦の海におぼれて死んだ。

この歌の二番では、モーセが美しい詩で主の敵への勝利を賛美しているのが伝わります。

二番

6 【主】よ。あなたの右の手は力に輝く。【主】よ。

あなたの右の手は敵を打ち砕く。

7 あなたは大いなる威力によって、

あなたに立ち向かう者どもを打ち破られる。

あなたが燃える怒りを発せられると、

それは彼らを刈り株のように焼き尽くす。

8 あなたの鼻の息で、

水は積み上げられ、流れはせきのように、まっすぐ立ち、

大いなる水は海の真ん中で固まった。

9 敵は言った。

『私は追って、追いついて、略奪した物を分けよう。

おのれの望みを彼らによってかなえよう。

剣を抜いて、

この手で彼らを滅ぼそう。』

10 あなたが風を吹かせられると、

海は彼らを包んでしまった。

彼らは大いなる水の中に鉛のように沈んだ。

ヘブル語の詩では、主の御手は神の力の象徴としてしばしば描写されます。詩編 18 篇 35 節や 98 篇 1 節がそのよい例です。「こうしてあなたは、御救いの盾を私に下さいました。あなたの右の手は私をささえ、あなたの謙遜は、私を大きくされます。」(詩編 18:35)「新しい歌を【主】に歌え。主は、奇しいわざをなさった。その右の御手と、その聖なる御腕とが、主に勝利をもたらしたのだ。」(詩編 98:1) これらの節では、神の右の御手が「聖なる御腕」として描写され、「驚くべき業をなし、主に勝利をもたらした」と伝えられています。

モーセはエジプトに対する勝利について以下のように述べています。敵が高慢にも勝利の美酒を味わおうとした瞬間、神は大風を差し向け、「大いなる水の中に鉛のように」彼らを沈めました。

さらにモーセの賛歌の三番は、神がその力を使い、神の民を約束の地へと導く未来を前景に歌われています。

三番

11 【主】よ。神々のうち、だれかあなたのような方があるでしょうか。だれがあなたのように、聖であって力強く、たたえられつつ恐れられ、奇しいわざを行うことができますでしょうか。

12 あなたが右の手を伸ばされると、地は彼らをのみこんだ。

13 あなたが贖われたこの民を、あなたは恵みをもって導き、御力をもって、聖なる御住まいに伴われた。

14 国々の民は聞いて震え、もだえがペリシテの住民を捕らえた。

15 そのとき、エドムの首長らは、おじ惑い、モアブの有力者らは、震え上がり、カナンの住民は、みな震えおののく。

16 恐れとおののきが彼らを襲い、あなたの偉大な御腕により、彼らが石のように黙りますように。【主】よ。あなたの民が通り過ぎるまで。あなたが買い取られたこの民が通り過ぎるまで。

17 あなたは彼らを連れて行き、あなたご自身の山に植えられる。【主】よ。御住まいのためにあなたがお造りになった場所に。主よ。あなたの御手が堅く建てた聖所に。

18 【主】はとこしえまでも統べ治められる。」

これらの節の中では、主の御力と栄光と主権への賛美が美しく表現されています。「主はとこしえまでも統べ治められる」という最後の言葉は、黙示録 11 章 15 節に記された天国での賛美の歌を思い起こさせます。

この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。
主は永遠に支配される。(黙示録 11:15)

私たちは、ヨハネの記述に基づき、天の御国に入った者たちの様子を想像します。彼らは「神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついている。もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらない。彼らは永遠に王である。」(黙示録 22:4,5) 実際、主がイスラエル人に得させてくださった栄光に満ちた勝利は、私たちを含むすべての時代のクリスチャンたちが経験することの型であり、私たちが将来、天の御国を相続することを指し示しています。

ミリヤムの喜びのリフレイン

19 パロの馬が戦車や騎兵とともに海の中に入ったとき、【主】は海の水を彼らの上に返されたのであった。しかしイスラエル人は海の真ん中のかわいた土の上を歩いて行った。

20 アロンの姉、女預言者ミリヤムはタンバリンを手に取り、女たちもみなタンバリンを持って、踊りながら彼女について出て来た。

21 ミリヤムは人々に応えて歌った。

「【主】に向かって歌え。

主は輝かしくも勝利を収められ、

馬と乗り手とを海の中に投げ込まれた。」

ミリヤムはモーセとアロンの姉で、預言の賜物を受けていました。彼女は祝いの際にタンバリンを叩きながら主を賛美し、踊る女性たちを指導していたことが記されています。ミリヤムの歌は、おそらくモーセが歌った一番、二番、三番それぞれの後に、リフレイン、つまり繰り返しとして歌われたことでしょう。



ミリヤムの喜びの歌

マラとエリムの水

22 モーセはイスラエルを葦の海から旅立たせた。彼らはシュルの荒野へ出て行き、三日間、荒野を歩いた。彼らには水が見つからなかった。

23 彼らはマラに来たが、マラの水は苦くて飲むことができなかった。それで、そこはマラと呼ばれた。

24 民はモーセにつぶやいて、「私たちは何を飲んだらよいのですか。」と言った。

25 モーセは【主】に叫んだ。すると、【主】は彼に一本の木を示されたので、モーセはそれを水に投げ入れた。すると、水は甘くなった。その所で主は彼に、おきてと定めを授け、その所で彼を試みられた。

26 そして、仰せられた。「もし、あなたがあなたの神、【主】の声に確かに聞き従い、主が正しいと見られることを行い、またその命令に耳を傾け、そのおきてをことごとく守るなら、わたしはエジプトに下したような病気を何一つあなたの上に下さない。わたしは【主】、あなたをいやす者である。」

27 こうして彼らはエリムに着いた。そこには、十二の水の泉と七十本のなつめやしの木があった。そこで、彼らはその水のほとりに宿営した。

紅海での救いのみわざの後、イスラエルの人々が向かったのはシュルの荒野でした。そこは家畜に餌を与えることができたものの、石灰岩の露出した丘や谷が広がり、旅の

進行が困難になりました。乾燥地帯において大人数が旅をするとなると、水の供給は当然のことながら大きな問題となりました。飲み水がなくなってしまったのです。マラという場所に來た時、小さな泉に來ましたがその水は苦くて飲むことができませんでした。マラとは「苦い」という意味です。人々は例によって不満を口にしました。そして主は奇跡的な力によってこの問題を解決されたのです。

これはイスラエル人にとって初めての荒野の体験でした。神は苦い水の件によって、これからの彼らの旅路は同様の試練が待ち受けていることを警告しました。こうした試練は信仰の試練となります。彼らが主の助けを求めれば、神は彼らを救い、守ってくださるのです。神はその約束をお与えになりました。ここで私は、なじみ深い讃美歌を思い起こします。

あなたに従います
御手が見えないときも
主を信じ心静めて
御心を求めます

マラで飲む苦水に
人々が悩んでも
救いぬし、主キリストは
飲み水を甘くした (CW473 1,3節)

エリムという近くの地で、イスラエル人は美しいオアシスを発見しました。この場所は今も存在してこの地方を旅する人々の主要な立ち寄り場所になっていると言われていいます。その先には別の荒野があり、そこでは再び不思議なことが起こりました。

出エジプト記 16 章

主の栄光

- 1 ついで、イスラエル人の全会衆は、エリムから旅立ち、エジプトの地を出て、第二の月の十五日に、エリムとシナイとの間にあるシンの荒野に入った。
- 2 そのとき、イスラエル人の全会衆は、この荒野でモーセとアロンにつぶやいた。
- 3 イスラエル人は彼らに言った。「エジプトの地で、肉なべのそばにすわり、パンを満ち足りるまで食べていたときに、私たちは【主】の手にかかって死んでいたらよかった

のに。事実、あなたがたは、私たちをこの荒野に連れ出して、この全集団を飢え死にさせようとしているのです。」

4 【主】はモーセに仰せられた。「見よ。わたしはあなたがたのために、パンが天から降るようにする。民は外に出て、毎日、一日分を集めなければならない。これは、彼らがわたしのおしえに従って歩むかどうかを、試みるためである。

5 六日目に、彼らが持って来た物を整える場合、日ごとに集める分の二倍とする。」

6 それでモーセとアロンは、すべてのイスラエル人に言った。「夕方には、あなたがたは、【主】がエジプトの地からあなたがたを連れ出されたことを知り、

7 朝には、【主】の栄光を見る。【主】に対するあなたがたのつぶやきを主が聞かれたのです。あなたがたが、この私たちにつぶやくとは、いったい私たちは何なのだろう。」

8 モーセはまた言った。「夕方には、【主】があなたがたに食べる肉を与え、朝には満ち足りるほどパンを与えてくださるのは、あなたがたが主に対してつぶやく、そのつぶやきを【主】が聞かれたからです。いったい私たちは何なのだろうか。あなたがたのつぶやきは、この私たちに対してではなく、【主】に対してなのです。」

9 モーセはアロンに言った。「イスラエル人の全会衆に、『【主】の前に近づきなさい。主があなたがたのつぶやきを聞かれたから』と言いなさい。」

10 アロンがイスラエル人の全会衆に告げたとき、彼らは荒野のほうに振り向いた。見よ。【主】の栄光が雲の中に現れた。

11 【主】はモーセに告げて仰せられた。

12 「わたしはイスラエル人のつぶやきを聞いた。彼らに告げて言え。『あなたがたは夕暮れには肉を食べ、朝にはパンで満ち足りるであろう。あなたがたはわたしがあなたがたの神、【主】であることを知るようになる。』」

イスラエルの人々はエリムの泉を後にし、シンの荒野に到着しました。この土地を訪れた者たちは、この地域を乾燥し切った荒地と形容しています。エジプトから持ち出した食料が尽きてきたのは、一ヶ月の旅の後であり、予想されることでした。この時、人々は再度、不満を口にしました。

しかし、主はあわれみ深く、不平を言う彼らに助けの手を差し伸べることを約束しました。さらに、主は彼らに自らの特別な存在をも示しました。主の栄光は、人々を導く雲の中に現れました。それは、人々が「荒野のほうに振り向いた」方角に、明瞭に輝いていました。

出エジプト記において「主の栄光」が明示的に現れたのは、これが初めてのことでした。以前、モーセはホレブ山で燃え盛る柴の中に主の栄光を目撃していました。しかし、「主の栄光」という言葉そのものが使われたのは、今回が初めてです。「主の栄光」という表現は、明るい雲と関連して使われています。出エジプト記を詳しく読み進めると、この表現の頻出に気付くでしょう。これは、主が自らの救いの約束を力強く示すための

証となりました。「主の栄光」は、今後、雲や炎、煙として多く現われることになりま
す。これにより、イスラエルの人々に、主の恵みと憐れみが特別に示されました。この
言葉が、聖書にどれほど頻繁に現れるかを注視することで、主の深い恵みとその臨在を
感じ取ることができるでしょう。

今回、主は人々のつぶやきの声を聞き、彼らが荒野の中での食料の必要を満たされる
ことをイスラエル人が知ることを望まれました。「あなたがたはわたしがあなたがたの
神、【主】であることを知るようになる。」と主はモーセに告げました。

次の部分では、神が自らの栄光を雲で示すだけでなく、人々の食糧の必要にも配慮し
ていることが伝えられています。

マナとうずら

13 それから、夕方になるとうずらが飛んで来て、宿営をおおい、朝になると、宿営の
回りに露が一面に降りた。

14 その一面の露が上がると、見よ、荒野の面には、地に降りた白い霜のような細かい
もの、うろこのような細かいものがあつた。

15 イスラエル人はこれを見て、「これは何だろう」と互いに言った。彼らはそれが何か
知らなかったからである。モーセは彼らに言った。「これは【主】があなたがたに食物
として与えてくださったパンです。

16 【主】が命じられたことはこうです。『各自、自分の食べる分だけ、ひとり当たり一
オメルずつ、あなたがたの人数に応じてそれを集めよ。各自、自分の天幕にいる者のた
めに、それを取れ。』

17 そこで、イスラエル人はそのとおりにした。ある者は多く、ある者は少なく集めた。

18 しかし、彼らがオメルでそれを計てみると、多く集めた者も余ることはなく、少
なく集めた者も足りないことはなかった。各自は自分の食べる分だけ集めたのである。

19 モーセは彼らに言った。「だれも、それを、朝まで残しておいてはいけません。」

20 彼らはモーセの言うことを聞かず、ある者は朝まで、それを残しておいた。すると、
それに虫がわき、悪臭を放った。そこでモーセは彼らに向かって怒った。

21 彼らは、朝ごとに、各自が食べる分だけ、それを集めた。日が熱くなると、それは
溶けた。

22 六日目には、彼らは二倍のパン、すなわち、ひとり当たり二オメルずつ集めた。会
衆の上に立つ者たちがみな、モーセのところに来て、告げたとき、

23 モーセは彼らに言った。「【主】の語られたことはこうです。『あすは全き休みの日、
【主】の聖なる安息である。あなたがたは、焼きたいものは焼き、煮たいものは煮よ。
残ったものは、すべて朝まで保存するため、取っておけ。』

24 それで彼らはモーセの命じたとおりに、それを朝まで取っておいたが、それは臭くもならず、うじもわかなかった。

25 それでモーセは言った。「きょうは、それを食べなさい。きょうは【主】の安息であるから。きょうはそれを野で見つけることはできません。

26 六日の間はそれを集めることができます。しかし安息の七日目には、それは、ありません。」

27 それなのに、民の中のある者は七日目に集めに出た。しかし、何も見つからなかった。

28 そのとき、【主】はモーセに仰せられた。「あなたがたは、いつまでわたしの命令とおしえを守ろうとしないのか。

29 【主】があなたがたに安息を与えられたことに、心せよ。それゆえ、六日目には、二日分のパンをあなたがたに与えている。七日目には、あなたがたはそれぞれ自分の場所にとどまれ。その所からだれも出てはならない。」

30 それで、民は七日目に休んだ。

聖書に書かれた上記の出来事が、単なる誇張された物語に過ぎない、と言う人々には、その人たちなりの説明があります。

うずらは渡り鳥で、特定の時期に大量に飛来することが知られています。うずらが地面で休憩するときは、確かに簡単に素手で捕まえることができます。しかし、今回の場合、ウズラは主の指定した時にやってきました。そして、主の求める場所にピンポイントで飛来しました。それはなんと、200 万もの人々の空腹を満たす量だったのです！このようなことが、神の導きなしに起こることはまずあり得ないでしょう。

イスラエル人が旅していたこの地域には、ギョリュウという木が生えており、この木から蜜の小さな塊が地面に落ちます。アラブの人々はこれを集め食料としていました。主の奇跡を信じない人々は、この塊こそがイスラエル人達が拾い集めたマナだと主張します。しかし、聖書に記されたマナは、ギョリュウの生息地以外からも採取されました。そしてイスラエル人は、これを旅する先々で 40 年間も受け続けたのです。

ギョリュウの蜜とは違い、マナは生で食べるだけではなく、焼くことも茹でることもできました。そしてイスラエル人には必要な分だけの量が正確に与えられました。「各自、自分の食べる分だけ、ひとり当たり一オメルずつ、あなたがたの人数に応じてそれを集めよ」とあります。1 オメルは 2.2 リットルほどの量に当たります。6 日目に 2 日分の食料が必要な時には、まさにそれに値する量の食料が主によって与えられたのです。

イスラエルの人々は、このような食べ物を今までに見たことがありませんでした。そのため、この食物に「これは何だ？」を意味するヘブライ語、「マナ」という名前が付けられました。これらの事実すべては、神がイスラエル人は日々の食物を、まさに奇跡的な方法で豊かにお与えになったことを示しています。

マナを与えたことと関連して、後に主がイスラエルの人々に、7日目の安息日を聖日として守る戒めを与えることを計画していたのは興味深い点です。6日目に、人々は2日分のマナを集めることを命じられました。7日目は休みの日となるため、マナは供給されませんでした。「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。」(20:8)という戒めは、この後にシナイ山で人々に与えられました。

この戒めでは、7日目にどんな仕事も休むことが命じられました。しかし、人々がマナを受け取り始めたこの時点で、すでに7日目を安息の日として休む習慣を持っていたことが推測できます。神は天地創造の際に、6日間でこの宇宙から始まる世界のすべてを創造しました。そして神はシナイ山で、同様の6日間の後の7日目に休むという法則を、イスラエルが旧約聖書の時代のすべてを通して守り行う習慣として命じたのです。

マナを記念として保存する

31 イスラエルの家は、それをマナと名づけた。それはコエンドロの種のように、白く、その味は蜜を入れたせんべいのようであった。

32 モーセは言った。「【主】の命じられたことはこうです。『それを一オメルたっぷり、あなたがたの子孫のために保存せよ。わたしがあなたがたをエジプトの地から連れ出したとき、荒野であなたがたに食べさせたパンを彼らが見ることができるために。』」

33 モーセはアロンに言った。「つぼを一つ持って来て、マナを一オメルたっぷりその中に入れ、それを【主】の前に置いて、あなたがたの子孫のために保存しなさい。」

34 【主】がモーセに命じられたとおりである。そこでアロンはそれを保存するために、あかしの箱の前に置いた。

35 イスラエル人は人の住んでいる地に来るまで、四十年間、マナを食べた。彼らはカナンの地の境に来るまで、マナを食べた。

36 一オメルは一エパの十分の一である。

ここで、マナについての最後の指示が与えられています。主は、1オメル(2.2リットル)のマナをつぼの中に入れて「あかしの箱」の前に置くように命じられました。「あかし」とは25:16によると、モーセがシナイ山で受け取った戒めの書かれた石板だとされています。新約聖書には「そこには金の香壇と、全面を金でおおわれた契約の箱があり、箱の中には、マナの入った金のつぼ、芽を出したアロンの杖、契約の二つの板がありました」(ヘブル9:4)との記述があります。幕屋の至聖所に置かれたあかしの箱については、本書で後述します。マナは後に、あかしの箱と共に置かれた契約の箱の中に納められました。これは、イスラエル人が約束の地カナンに到着するまで、主が絶えず人々の必要を満たしてくださったことを彼らに思い起こさせるためのものでした。

40年もの間、マナによる日々の祝福は途絶えることがありませんでした。

私たち自身も、天の御国を目指して旅する旅人です。私たちも天国の永遠のいのちの遺産を受け継ぐ者として、天の父なる神が日々私たちの体と命を守り、必要なものを供給してくださることを忘れてはなりません。そのために、主イエスは主の祈りの中で「私たちの日ごとの糧を毎日お与えください。」(ルカ 11:3) と祈るように教えておられるのです。

もうひとつマナに関して説明すべきことがあります。イエスは次のように述べました。「わたしはいのちのパンです。あなたがたの父祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことがないのです。わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です」(ヨハネ 6:48-51)。マナがイスラエルの人々の身体を支えたように、イエスは私たちの霊的な命を守り続けます。いのちのパンであるイエスは、永遠のいのちを私たちに差し出します。イエスはニコデモに「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」(ヨハネ 3:16) と言われました。

私たちは「主よ、このパンを私たちに与えてください。」と祈ります。イエスだけが私たちの救い主であると信じる信仰が強められるよう私たちは祈ります。主は天の父の家に行き、私たちのために場所を用意してくださった方であり、イエスこそが、私たちが永遠の天国の遺産を受け継ぐための道なのです。

出エジプト記 17 章

岩から水が出る

- 1 イスラエル人の全会衆は、【主】の命により、シンの荒野から旅立ち、旅を重ねて、レフィディムで宿営した。そこには民の飲む水がなかった。
- 2 それで、民はモーセと争い、「私たちに飲む水を下さい。」と言った。モーセは彼らに、「あなたがたはなぜ私と争うのですか。なぜ【主】を試みるのですか。」と言った。
- 3 民はその所で水に渴いた。それで民はモーセにつぶやいて言った。「いったい、なぜ私たちをエジプトから連れ上ったのですか。私や、子どもたちや、家畜を、渇きで死なせるためですか。」
- 4 そこでモーセは【主】に叫んで言った。「私はこの民をどうすればよいのでしょうか。もう少しで私を石で打ち殺そうとしています。」
- 5 【主】はモーセに仰せられた。「民の前を通り、イスラエルの長老たちを幾人か連れ、あなたがナイルを打ったあの杖を手にとって出て行け。

6 さあ、わたしはあそこのホレブの岩の上で、あなたの前に立とう。あなたがその岩を打つと、岩から水が出る。民はそれを飲もう。」そこでモーセはイスラエルの長老たちの目の前で、そのとおりにした。

7 それで、彼はその所をマサ、またはメリバと名づけた。それは、イスラエル人が争ったからであり、また彼らが、「【主】は私たちの中におられるのか、おられないのか」と言って、【主】を試みたからである。

シンの荒野の次にイスラエルの人々が宿営した場所は、シナイ山にほど近いレフィディムという所でした。水を得るためにモーセが岩を打った場所はホレブでした。ホレブとは以前にも話題にした通り、モーセが義父イテロのために羊を飼っていた山脈です。シナイ山はホレブ山脈の一つの山でした。シンの荒野でマナとうずらを食料として与えられた経験の後、イスラエルの人々はレフィディムに着くまでに他2カ所で宿営しました。これらの場所は民数記 33:12,13 でモーセが回想しているとおりに（「シンの荒野から旅立ってドフカに宿営し、ドフカから旅立ってアルシュに宿営し」）、ドフカとアルシュでした。

これらの2カ所では特別な出来事は起こらなかったようです。しかし、レフィディムの状況をよりよく理解するためにこの場所に注意を払いましょう。イスラエルは再び数日間移動を始めました。山はより高くなり、谷はより狭く大きな岩で覆われ、飲み水となる泉はどこにも見当たりませんでした。

イスラエルの人々は文句を言うだけでなく、モーセと争いました。石を投げようとすらしめました。モーセの導きによってここまで旅をし、マナとうずらで養われてきたのに、なんと恩知らずな行為でしょうか。しかし主は、忍耐強く彼らに対応しました。まるで、かんしゃくを起こした幼い子どもに対応する父親のように、主はモーセにある岩を長老達の前で打つように指示しました。モーセがそれに従うと、岩から水が湧き出て、人々はその水を飲むことができました。

この時点でモーセが、すぐ近くに住む義父のところへ行き、再び羊を飼う生活を望んだとしたら、誰が彼を非難するでしょうか。すべてを捧げて人々に仕える努力をしたにも関わらず、はじめての問題が起きると、人々はすぐさまモーセに反旗を翻したのです。「この人々をどうしたらよいのでしょうか？」と失意のモーセは主に申し上げました。それでも主の指示に従い、モーセは岩を打ちました。彼は主が必ず水を岩から湧き出させることを信じていたからです。この場所が「マサ」つまり「試練」という意味、または「メリバ」つまり「言い争い」という意味の名前になったことにはうなずけます。イスラエル人たちは言い争うことによって主を試したのであり、主が共にいることを示す証拠を求めたのでした。主は憐れみのうちに、愛に値しないこの不信仰の人々にご自身の愛を再び示しました。

使徒パウロはこれらの出来事を比喻として使い、私たちの救いの岩であるキリストを通じて示される神の憐れみについて語っています。

そこで、兄弟たち。私はあなたがたにぜひ次のことを知ってもらいたいのです。私たちの父祖たちはみな、雲の下におり、みな海を通過して行きました。そしてみな、雲と海とで、モーセにつくバプテスマを受け、みな同じ御霊の食べ物を食べ、みな同じ御霊の飲み物を飲みました。というのは、彼らについて来た御霊の岩から飲んだからです。その岩とはキリストです。(1 コリント 10:1-4)

救い主なる神はご自身の恵みをこの砂漠の岩の奇跡を使ってご自分の民に示されました。それと同様に、神は私たち罪に満ちた人間がおよそ値しないほどの豊かな恵みをキリストの内に示してくださったのです。パウロは「にもかかわらず」と続けています。

彼らの大部分は神のみこころにかなわず、荒野で滅ぼされました。これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。(1 コリント 10:5-13)

なんと相応しい旧約聖書の適用でしょうか。パウロは見事に言い得ています。私たちはヨハネが次のように告げた救い主のみもとに、何度も戻っていく必要があります。「わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」(ヨハネ 4:14) 私たちは何度も神の方法を疑問視し、キリストの中の神の救いの計画を忘れがちです。私たちはサマリヤの女性と同じように、「先生。私が渇くことがなく、もうここまでくみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」(ヨハネ 4:15) と、主に尋ね求めなくてはなりません。

アマレクの敗北

8 さて、アマレクが来て、レフィディムでイスラエルと戦った。

9 モーセはヨシュアに言った。「私たちのために幾人かを選び、出て行ってアマレクと戦いなさい。あす私は神の杖を手にとって、丘の頂に立ちます。」

10 ヨシュアはモーセが言ったとおりにして、アマレクと戦った。モーセとアロンとフルは丘の頂に登った。

11 モーセが手を上げているときは、イスラエルが優勢になり、手を降ろしているときは、アマレクが優勢になった。

12 しかし、モーセの手が重くなった。彼らは石を取り、それをモーセの足もとに置いたので、モーセはその上に腰掛けた。アロンとフルは、ひとりはこちら側、ひとりはあちら側から、モーセの手をささえた。それで彼の手は日が沈むまで、しっかりそのままであった。

13 ヨシュアは、アマレクとその民を剣の刃で打ち破った。

14 【主】はモーセに仰せられた。「このことを記録として、書き物に書きしるし、ヨシュアに読んで聞かせよ。わたしはアマレクの記憶を天の下から完全に消し去ってしまう。」

15 モーセは祭壇を築き、それをアドナイ・ニシと呼び、

16 「それは『主の御座の上の手』のことで、【主】は代々にわたってアマレクと戦われる」と言った。

アマレク人はエサウの孫アマレクの子孫として知られています。(創世記 36:12 には次のように書かれています。「ティムナはエサウの子エリファズのそばめで、エリファズにアマレクを産んだ。これらはエサウの妻アダの子である」。) この話によって、アマレク人が、エジプトを出発したイスラエル人を最初に攻撃した民族であったことが分かります。申命記 25:18 にはこの出来事を「彼は、神を恐れることなく、道であなたを襲い、あなたが疲れて弱っているときに、あなたのうしろの落後者をみな、切り倒したのである。」と記録されています。このため、主はモーセに、この事件を巻物に記すように命じました。それはいつの日か神の民が「アマレクの記憶を天の下から消し去らなければならない」という神の命令を守るためでした。

この時モーセは、ヨシュアにアマレク人と戦うための指揮をとるように命じました。ヨシュアはモーセの後を継ぎ、イスラエルの指導者として神に選ばれる人物です。彼について私たちが知られるのは、これが初めてです。ヨシュアが敵と戦っている間、モーセは神の杖を持って山の上で立っていました。モーセが杖を持っている間、イスラエル人は勝ち続けました。モーセが疲れてくるとアロンとフルがその腕を支え、アマレク人は打ち負かされました。

主の杖はイスラエルの勝利の旗でした。それは主ご自身がその人々のために戦ってくださっているという確証でした。主に感謝を示すため、モーセは後に、この場所に祭壇を築き、「主の御座の上の手」と名付けました。

モーセが戦いの間手を挙げていたのは、祈りの象徴だと解釈されてきました。それは当時の人々が神に祈るときには手を挙げていたからです。このことを考えると、次の宣教の讃美歌が思い浮かびます。

天国の道を
示す牧者に
なれはせずとも、

われらは祈りと
賛美ささげる。
モーセの腕の
支えを続けた
アロンのように。(CW573 3節)

私たちクリスチャンは、霊的な敵と戦う際、「御霊の与える剣、すなわち神のことば」(エペソ 6:17)を持つことを常に念頭に置くべきです。救い主イエス・キリストを中心とする神のみことばによって、「これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となる」(ローマ 8:37) ことが約束されています。そうです。私たちが宣教活動を積極的に行うときに、イザヤは「その日、エッサイの根〔キリスト〕は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く」(イザヤ 11:10) と言って、私たちを励ましています。

主は、国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、
ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。(イザヤ 11:12)

主は私たちの旗として掲げられています。クリスチャン兵士の皆さん、宣教のために前進しましょう。罪は私たちを打ち負かすことはできません。サタンは私たちを支配することはできません。主を信じない国々も、福音のメッセージが広まることを止めることはできません。私たちの救い主である神ご自身が私たちのために戦ってくださっているのですから！

出エジプト記 18 章

イテロがモーセを訪ねる

- 1 さて、モーセのしゅうと、ミデヤンの祭司イテロは、神がモーセと御民イスラエルのためになさったすべてのこと、すなわち、どのようにして【主】がイスラエルをエジプトから連れ出されたかを聞いた。
- 2 それでモーセのしゅうとイテロは、先に送り返されていたモーセの妻チツポラと
- 3 そのふたりの息子を連れて行った。そのひとりの名はゲルシヨムであった。それは「私は外国にいる寄留者だ」という意味である。
- 4 もうひとりの名はエリエゼル。それは「私の父の神は私の助けであり、パロの剣から私を救われた」という意味である。
- 5 モーセのしゅうとイテロは、モーセの息子と妻といっしょに、荒野のモーセのところに行った。彼はそこの神の山に宿営していた。

- 6 イテロはモーセに伝えた。「あなたのしゅうとである私イテロは、あなたの妻とそのふたりの息子といっしょに、あなたのところに来ています。」
- 7 モーセは、しゅうとを迎えに出て行き、身をかがめ、彼に口づけした。彼らは互いに安否を問い、天幕に入った。
- 8 モーセはしゅうとに、【主】がイスラエルのために、パロとエジプトとになさったすべてのこと、途中で彼らに降りかかったすべての困難、また【主】が彼らを救い出された次第を語った。
- 9 イテロは、【主】がイスラエルのためにしてくださったすべての良いこと、エジプトの手から救い出してくださったことを喜んだ。
- 10 イテロは言った。「【主】はほむべきかな。主はあなたがたをエジプトの手と、パロの手から救い出し、この民をエジプトの支配から救い出されました。
- 11 今こそ私は【主】があらゆる神々にまさって偉大であることを知りました。実に彼らがこの民に対して不遜であったということにおいても。」
- 12 モーセのしゅうとイテロは、全焼のいけにえと神へのいけにえを持って来たので、アロンは、モーセのしゅうととともに神の前で食事をするために、イスラエルのすべての長老たちといっしょにやって来た。

出エジプト記2章で、私たちはモーセが、ミデヤンの地の祭司であったイテロのために羊を飼っていたことを思い起こします。これはまさにイスラエル人達が旅の末にたどり着いた場所であり、モーセがイテロの娘チツポラと結婚した場所です。モーセとチツポラは二人の息子ゲルショムとエリエゼルを授かりました。

モーセとイスラエル人が近くにいと知ったイテロは、モーセに会うために向かい、家族が再会する場を整えました。モーセがいつイテロの元に妻と子どもを送り返したか聖書には記されていません。もしかすると、イスラエルがエジプトから出発したことに関連する、多くの非日常的な出来事を経験するには信仰が弱いと判断したのかもしれませんが。

モーセとイテロはお互いに尊重しあい、丁重にあいさつを交わしました。モーセはイスラエルと自分の身に起こったすべてのこと、特に、「【主】が彼らを救い出された」一部始終をイテロに話しました。

彼らの再会に際して、イテロは主を賛美し「【主】があらゆる神々にまさって偉大な、まことの神であることを知った、と告白しています。そしてモーセとイテロは一緒に神への捧げ物をささげ、信仰の交わりをしました。イテロは、異邦人への伝道の初穂の一人として数えられています。

興味深いことは、アマレク人はイスラエル人と戦いましたが、ミデヤン人の祭司イテロがまことの神の信者になったことです。アマレク人もミデヤン人も共にアブラハムの子孫です。アマレクはエサウの家系の子孫であり、アブラハムの孫です。ミデヤン人は

アブラハムとケトラの子孫です。ここで、神がアブラハムに言われたことを思い出しましょう。

あなたを祝福する者をわたしは祝福し、
あなたをのろう者をわたしはのろう。
地上のすべての民族は、
あなたによって祝福される。（創世記 12:3）

旧約聖書の歴史の中で、アマレク人は何年にもわたってイスラエルをいじめてきましたが、とうとう滅ぼされたことが知られています。一方、ミデヤン人はイスラエルとの交流を持ち、カナンの地で彼らと共に暮らしました。そして何より、救い主なる神について知るようになったのです。

みことばに対する二つの異なる反応は今日でも同じです。キリスト教は、世界中で、特にアフリカ大陸で急速に広まっています。一方で、中国やインドなどの国々は、今もキリスト教に敵対する態度を取っています。

訳注：2022 年までの情報に基づくと、以下のような動向が確認されています。

アフリカ

アフリカ大陸はキリスト教の急速な成長が特筆される地域の一つです。2050 年までに、アフリカのキリスト教徒の数は現在の倍になると予測されています。

中国

中国では、公式には共産党が管理する国家教会が存在する一方で、非公式な家庭教会も非常に多く存在しています。実際のキリスト教徒の数については、公式の数字と実際の数字との間に大きなギャップがあると言われています。政府の厳しい制約にもかかわらず、キリスト教は中国内で急速に広がっているとの報告もあります。

インド

インドではキリスト教は少数派の宗教として存在しており、主に南部の州での信者が多い一方、一部の州では反転教育を禁止する法律が施行されており、宣教活動は制約を受けています。

総じて、アフリカ大陸のキリスト教の成長は非常に顕著で、中国におけるキリスト教の成長も注目されています。インドにおけるキリスト教の広がりや、比較的緩やかですが、特定の地域での信者数は増加しています。

イテロがモーセに助言する

- 13 翌日、モーセは民をさばくためにさばきの座に着いた。民は朝から夕方まで、モーセのところに立っていた。
- 14 モーセのしゅうとは、モーセが民のためにしているすべてのことを見て、こう言った。「あなたが民にしているこのことは、いったい何ですか。なぜあなたひとりだけがさばきの座に着き、民はみな朝から夕方まであなたのところに立っているのですか。」
- 15 モーセはしゅうとに答えた。「民は、神のみこころを求めて、私のところに来るのです。」
- 16 彼らに何か事件があると、私のところに来ます。私は双方の間をさばいて、神のおきてとおしえを知らせるのです。」
- 17 するとモーセのしゅうとは言った。「あなたのしていることは良くありません。」
- 18 あなたも、あなたといっしょにいるこの民も、きっと疲れ果ててしまいます。このことはあなたには重すぎますから、あなたはひとりでそれをするにはできません。
- 19 さあ、私の言うことを聞いてください。私はあなたに助言をしましょう。どうか神があなたとともにおられるように。あなたは民に代わって神の前において、事件を神のところに持って行きなさい。
- 20 あなたは彼らにおきてとおしえとを与えて、彼らの歩むべき道と、なすべきわざを彼らに知らせなさい。
- 21 あなたはまた、民全体の中から、神を恐れる、力のある人々、不正の利を憎む誠実な人々を見つけ出し、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長として、民の上に立てなければなりません。
- 22 いつもは彼らが民をさばくのです。大きい事件はすべてあなたのところに持って来、小さい事件はみな、彼らがさばかなければなりません。あなたの重荷を軽くしなさい。彼らはあなたとともに重荷をになうのです。
- 23 もしあなたがこのことを行えば、——神があなたに命じられるのですが——あなたはもちこたえることができ、この民もみな、平安のうちに自分のところに帰ることができましょう。」
- 24 モーセはしゅうとの言うことを聞き入れ、すべて言われたとおりにした。
- 25 モーセは、イスラエル全体の中から力のある人々を選び、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長として、民のかしらに任じた。
- 26 いつもは彼らが民をさばき、むずかしい事件はモーセのところに持って来たが、小さい事件は、みな彼ら自身でさばいた。
- 27 それから、モーセはしゅうとを見送った。彼は自分の国へ帰って行った。

上記のようなアドバイスは、大きな組織を管理する人ならだれにでも当てはまるものです。イテロはモーセが、イスラエル人の問題や言い争いを単独で解決しようとする姿を目にしました。彼はモーセに、モーセ自身のために彼の仕事を肩代わりしてくれる男

性たちを選び出すことを助言しました。モーセはこの助言を実践的で有用と感じ、直ちに行動に移しました。人々は千人、百人、五十人、十人に分けられ、長が決められました。そして長には、そのグループ内で、正義が手順通り行われるよう助ける役目が与えられたのです。

この仕組みはモーセが指導者を務めた間、採用され続けました。その後モーセは、別れの挨拶の際にこのことについて言及しています。多くの問題がこの方法で素早く効果的に解決するようになり、さらに重要な問題にモーセが意識を向けることができるようになったのです。

優れた管理者は、権限を適切に委譲する能力があると言われます。これは教会の中でも同じです。すべてを自分の手で行わなければと考える牧師や、他者の能力を低く見る牧師は、自身だけでなく、教会全体に悪影響を及ぼします。すべての教会には、実践的な事柄を受け持つことができる一般信者が必ず存在し、牧師が霊的なことに集中できるように仕事を譲ることが可能です。エルサレムの新約時代の新しい教会にも同じ組織作りの法則が適用されたことを思い出しましょう。

そこで、十二使徒は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。『私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。』（使徒 6:2)

教会活動において、信徒の参加は不可欠です。一般信徒は、牧師の導きのもと、霊的な助けを与えることができます。例えば日曜学校や使徒訓練クラスの教師やリーダー、伝道活動の手助けなどが挙げられます。

この章で、出エジプト記の第一部が終わります。本書全体のテーマが、神（エホバ）とイスラエルの民との契約、だったことを思い出しましょう。

最初の 18 章には、イスラエルの人々がエジプトから救い出される様子が記されていました。ここまで見てきたのは、モーセの召命、イスラエル人を奴隷生活から解放するためのモーセとファラオの間の交渉、災い、過越、エジプトからの出発、紅海を渡る、シナイ山へ向かうまでに荒野で起こった最初の出来事などです。これらの出来事は、すべて神がイスラエルとの契約を結ぶための前段階、つまり下地としての役割を果たしていました。

「彼らはレフィディムを旅立って、シナイの荒野に入り、その荒野で宿営した。イスラエルはそこで、山のすぐ前に宿営した。」(19:1,2) とあります。これより先の章で起こることは、聖書全体の中で、最も重要な出来事の一つです。

第二部

神とイスラエルとの間に契約が成立する

(19:1-24:18)

出エジプト記 19 章

シナイ山にて

- 1 エジプトの地を出たイスラエル人は、第三の月の新月のその日に、シナイの荒野に入った。
- 2 彼らはレフィディムを旅立って、シナイの荒野に入り、その荒野で宿営した。イスラエルはそこで、山のすぐ前に宿営した。
- 3 モーセは神のみもとに上って行った。【主】は山から彼を呼んで仰せられた。「あなたは、このように、ヤコブの家に言い、イスラエルの人々に告げよ。
- 4 あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたを^{わし}驚の翼に載せ、わたしのもとの連れて来たことを見た。
- 5 今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中であって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。
- 6 あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエル人にあなたの語るべきことばである。」
- 7 モーセは行って、民の長老たちを呼び寄せ、【主】が命じられたこれらのことばをみな、彼らの前に述べた。
- 8 すると民はみな口をそろえて答えた。「私たちは【主】が仰せられたことを、みな行います。」それでモーセは民のことばを【主】に持って帰った。
- 9 すると、【主】はモーセに仰せられた。「見よ。わたしは濃い雲の中で、あなたに臨む。わたしがあなたと語るのを民が聞き、いつまでもあなたを信じるためである。」それからモーセは民のことばを【主】に告げた。

モーセがしゅうとであるイテロの羊を飼いながら「神の山ホレブにやって来た」(3:1)と記されている時、神はモーセに現れ、燃える柴の中から「あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である」(3:5)と語りかけました。主はそこで自らをモーセの父祖達の神であると明らかにし、モーセをイスラエル人のリーダーに任命し、彼らをエジプトから導き出す任務を与えました。神はその際に、次のように言われ

ました。「あなたが民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で、神に仕えなければならない。」(3:12)

この約束が成就されるときがやってきました。イスラエルの人々全員がこの聖なる山に集まっていたのです。エジプトを脱して3ヶ月の後に、彼らはシナイ山の前に広がる荒れ地に宿営しました。一部の聖書学者たちは、ホレブ山のどの峰で彼らがとどまっていたのかを延々と論じています。実のところ、聖書にはこの場所の詳細な説明はありません。この場所はあまりにも聖なる場所であったため、主なる神は明らかに、人々がこぞって「ほら、ここが十の戒めが与えられた場所だ」と指し示して騒ぎ立てることを望まなかったのです。

しかし、ここで告げられた神の言葉は非常に重要です。神はその言葉を人々が忘れずにいることを望みました。それは神がイスラエルのすべての民と交した契約あるいは合意の内容だったのです。契約の一部として、神はシナイ山で与えられた律法全体の中心つまり主軸として、十戒を与えました。

この章には、主がシナイ山で与えた一連の律法を、主ご自身が紹介する内容が書かれています。主はシナイ山でモーセに個人的に話しかけ、主が告げた内容を人々に伝えるようモーセに命じました。それは、律法の総合的な原則を解説しているからです。これから、その内容を注意深く学んでいきましょう。

主は「あなたがたを^{わたし}驚の翼に載せ、わたしのもとに連れて来た」と宣言しました。主はまず、イスラエル人がそもそもどうしてこの場所にたどりついたのかを思い出させています。親驚が子どもに飛び方を教えるように、主は旅のすべての行程において、イスラエルと共におられ、守り導きました。モーセは自らの人生の終わりに近づいた時、この出来事を題材とした歌を歌いました。彼は主が「驚が巢のひなを呼びさまし、そのひなの上を舞いかけり、翼を広げてこれを取り、羽に載せて行くように。」(申命記 32:11) イスラエルの民を守り導いたことを説明しました。イスラエル人はエジプトを出発してから紅海を渡り、荒野からシナイ山までたどり着くまでに主の守りが必要であり、その後も導きと訓練を必要としていました。

「今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中であって、わたしの宝となる」と主は続けて言われました。ここで「もし」という言葉に注目してください。主とイスラエルとの間の契約には条件がついています。これは双務契約であり、互いに負うべき義務を負う性質のものです。主はイスラエル人を「わたしの宝」として選びました。神はご自身が選んだ民を、エジプトから救い出すことによってそれを証明したばかりです。彼らのご自分に属する国であり、全世界の国々の中で、一番祝福されることを約束したのです。しかしその代わりに、この民には従順が求められました。神は、彼らが主に属する国民であることを示す代わりに、戒めを守ることを望んだのです。

ここで、シナイ山で主がモーセと結んだ契約と、4世紀前にアブラハムと主が交した契約の違いに注目します。(創世記 12:1-3) アブラハムとの契約は、恵みのみでした。その中ではアブラハム側に責務が示されず、純粋な恵みだけが約束された内容でした。「わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し... 地上のすべての民族は、あなたによって祝福される」。アブラハムに示されたこの契約は福音の契約、永遠の契約、(一方にのみ債務が課される)片務契約です。具体的には、主ご自身が罪深い人間を救うためにわざわざ地上に降臨し、罪の代価を無償で支払い、アブラハムとその子孫とその他すべての人々のために祝福をもたらす、という契約内容でした。この世界の主権者である永遠の神が、罪深い人類のために、このような一方的な契約の責務を自らに負ったのです！

シナイ山で交わされた契約の詳細については後に見ていくことにします。主は初めから、イスラエル人が、主なる神にとって「わたしの宝」であることを示すため、神の与える規則や規定に従順に従う必要があることを明らかにしました。「全世界はわたしのものである」とした後に、主はイスラエルに向けて「あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる」と言いました。主はシナイ山での契約の中で、イスラエルの人々に、驚くべき大きな祝福を約束しました。実際、この節はモーセの五書全体のテーマを要約していると言えます。

すべての人々を救う計画を成就するため、主は地上の多くの民の中からイスラエル人を選び、祭司の王国、聖なる国民として立てたのです！

「祭司の王国」となるのは素晴らしい祝福ではありますが、同時に、非常に大きな責任でもあります。祭司とは仲介者です。イスラエルという国は、この世界において、主のための証人、つまり大使の役目を担うことになりました。彼らは、主からの救いの約束と、関連するすべての啓示を受け取りました。そして、これらの神からの恵みの賜物を守り、保護するのです。また、他のすべての国々に、イスラエルの神がすべての上に立つ主権者であり、憐れみの内に、すべての人々の救いを計画していることを証しすることになります。

この主への奉仕を実行するためには、彼らは「聖なる国民」となる必要がありました。彼らが聖なる国民となるためにどのように振る舞うべきかの規範は、律法全体に反映されました。主が与える決まりや規則に従うことで、神に属さない世の人々とは分け隔てられた者としてイスラエル人は振る舞うことになりました。イスラエルの民は、生活のすべての局面において、救い主である神と、その聖なる御心に完全に捧げられることになりました。

主は、このことをモーセに前もって伝え、イスラエル人が契約を受け入れるための準備を整えました。

新約時代に生きる私たちは、イスラエルに与えられた契約が、救い主イエス・キリストの到来まで有効だったことを知っています。キリストはこの契約で与えられたすべての律法を守りました。これは、昔から預言されていた救い主が、女の子孫として生まれるという到来の「型」を示すものでした。(コロサイ 2:16-17) キリストはこの律法の儀礼や儀式を終わらせました。(ローマ 10:4) キリストが罪なく生きた完全な生涯と、十字架の犠牲の死と復活によって、イエスはすべての人の永遠の救いを完成したのです。恵みの時代としての新約時代において、私たちはもはや、シナイ山で神によって示された儀式や政治的な規則に従うことを強いられません。それは、新約時代の信者が、霊的な弱者であった旧約時代の人々と違う時代に生きているからです。ガラテヤ人の手紙にも書かれている通り、神の恵みの契約に基づき、キリストが旧約時代の規則から私たちを解放したことにより、私たちは神の子として神の国の相続人の身分を持つようになりました。

信仰が現れる以前には、私たちは律法の監督の下に置かれ、閉じ込められていましたが、それは、やがて示される信仰が得られるためでした。

こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。

しかし、信仰が現れた以上、私たちはもはや養育係の下にはいません。あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。

ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。

ところが、相続人というものは、全財産の持ち主なのに、子どものうちは、奴隷と少しも変わらず、父の定めた日までは、後見人や管理者の下にあります。私たちもそれと同じで、まだ小さかった時には、この世の幼稚な教えの下に奴隷となっていました。

しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。

これは律法の下にある者を贖い出すため、その結果、私たちが子としての身分を受けるようになるためです。

そして、あなたがたは子であるゆえに、神は「アバ、父」と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。

ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子ならば、神による相続人です。(ガラテヤ 3:23—4:7)

新約時代に、信仰によりイエスの子どもとされた私たちは、使徒ペテロの言葉どおり「選ばれた種族、王の祭司、聖なる国民、神の所有民」とされています(1 ペテロ 2:9)。私たちは、感謝と愛と従順さの言葉と行いによって「〔私たちを〕やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを」宣べ伝えます。割礼や、ある種の生け贄を捧げることを避けるように設定されたモーセの時代の律法は、もはや私たちには該当しません。十戒に示された、神と隣人に対する愛を持つという基本的な律法のみが、私たちには当てはまります。それが、私たちが神と神の御心にそった生き方をするための規範と導きになるのです。

十戒については、後の章でより詳しく、神がシナイ山でどのようにモーセに与えられたのか説明します。ここでは、主ご自身によって紹介された律法の基本原則と、その内容について見てきました。

モーセはその後、イスラエル人の長老達に主が彼らと交わそうとしている契約の条件について説明しました。そして長老達は人々にその知らせを伝え、民はみな口をそろえて答えました。「私たちは【主】が仰せられたことを、みな行います。」これは全会一致の同意でした。モーセは、すぐにこの民の答えを主に申し上げました。

ここで一瞬立ち止まって、人々がこの返答をした後の近い未来に起こった出来事について思い巡らしましょう。なぜなら、この同じ場所においてイスラエルの民は金の子牛という偶像を作って礼拝していたからです。「私たちは【主】が仰せられたことを、みな行います」という発言は偽善、もしくは単なる建前だったのでしょうか。そして、現在も、この状況は変わっていないのではないのでしょうか。堅信式の際には、「死ぬまで」主に誠実に従います、と誓った若い人たちの多くが、短期間の後に、少なからず同じ祭壇の前で、主から離れて行っている現状は変わっていないのではないのでしょうか。信仰の薄い人々に、主が繰り返し辛抱強く接してくださることに、驚きを隠せません。

神の民が主の約束を忘れてしまいがちなことは、主の責任でないことは確かです。ここで主はモーセに、これから何が起ころうとしているかを告げました。主は「濃い雲の中で」現れ、人々はその雲の中から、神のみ声を聞くのです。驚きにあふれた出来事が、これから起ころうとしています。この偉大な出来事のために、イスラエルが準備を整える時が来たのです。

最後の準備

10 【主】はモーセに仰せられた。「あなたは民のところに行き、きょうとあす、彼らを聖別し、自分たちの着物を洗わせよ。

11 彼らは三日目のために用意をせよ。三日目には、【主】が民全体の目の前で、シナイ山に降りて来られるからである。

- 12 あなたは民のために、周囲に境を設けて言え。山に登ったり、その境界に触れたりしないように注意しなさい。山に触れる者は、だれでも必ず殺されなければならない。
- 13 それに手を触れてはならない。触れる者は必ず石で打ち殺されるか、刺し殺される。獣でも、人でも、生かしておいてはならない。しかし雄羊の角が長く鳴り響くとき、彼らは山に登って来なければならない。」
- 14 それでモーセは山から民のところに降りて来た。そして、民を聖別し、彼らに自分たちの着物を洗わせた。
- 15 モーセは民に言った。「三日目のために用意をしなさい。女に近づいてはならない。」
- 16 三日目の朝になると、山の上に雷といなずまと密雲があり、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。
- 17 モーセは民を、神を迎えるために、宿営から連れ出した。彼らは山のふもとに立った。
- 18 シナイ山は全山が煙っていた。それは【主】が火の中であって、山の上に降りて来られたからである。その煙は、かまどの煙のように立ち上り、全山が激しく震えた。
- 19 角笛の音が、いよいよ高くなった。モーセは語り、神は声を出して、彼に答えられた。
- 20 【主】がシナイ山の頂に降りて来られ、【主】がモーセを山の頂に呼び寄せられたので、モーセは登って行った。
- 21 【主】はモーセに仰せられた。「下って行って、民を戒めよ。【主】を見ようと、彼らが押し破って来て、多くの者が滅びるといけない。
- 22 【主】に近づく祭司たちもまた、その身をきよめなければならない。【主】が彼らに怒りを発しないために。」
- 23 モーセは【主】に申し上げた。「民はシナイ山に登ることはできません。あなたが私たちを戒められて、『山の回りに境を設け、それを聖なる地とせよ』と仰せられたからです。」
- 24 【主】は彼に仰せられた。「降りて行け。そしてあなたはアロンといっしょに登れ。祭司たちと民とは、【主】のところに登ろうとして押し破ってはならない。主が彼らに怒りを発せられないために。」
- 25 そこでモーセは民のところに降りて行き、彼らに告げた。

後に、山の上から主のみことばを聞くため、主の人々は身を正しく準備する必要がありました。神は、民がどのように聖別されるべきかモーセに伝えました。聖別とは、聖なる存在としてきよめ、きよくないものから分かつことを意味します。彼らは、このような聖なる出来事に参加するために自分たちの身を整える必要がありました。そのために服を洗い、誰も山に触ることが出来ないように境を立て上げ、すべての性的な交わりを避けることが求められました。

こうした準備がすべて終わった後、3 日目の朝、【主】がシナイ山の頂に降臨しました。主は、栄光に満ちた方法でご自身の存在を示しました。「山の上に雷といなずまと密雲があり」、山の全体が激しく揺れました。主はご自身の栄光を火と煙とで示し、すべての人の注意を集めるために、角笛を非常に高く鳴り響かせました。人々にとって、どんなに驚きに満ちた出来事だったことでしょう！

「宿営の中の民はみな震え上がった」と書かれている通り、私たちもこの状況下では同様に震え上がったはずです。神の御力と威光を前にして、立ってられる人などいるのでしょうか。しかし、恵み深い主は、人々が近くで神の御声を聞けるよう、雲というベールでご自身の姿を覆ってくださいました。

主は再びモーセを通じて、人々に境の向こうに行かないよう警告しました。「祭司たちもまた」警告を受けました。（レビ人が聖別される前までは、これらの「祭司」たちが、人々のための宗教的な儀式を執り行う役目を担っていました。）

いよいよ、偉大な瞬間がやってきました。これ以降、雷や、いなずまや、角笛の説明は出てきません。イスラエルの民が、主の御声を聞く準備がすべて整ったのです。

出エジプト記 20 章

神がシナイ山でご自身の契約を伝える

- 1 それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。
- 2 「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隸の家から連れ出した、あなたの神、【主】である。

雷といなずま、煙と角笛のとどろきが鳴り響いた後、この場所は静けさに包まれました。その静寂の中、神が話し始めました。イスラエルは神の声を聞き、その内容を理解することが出来ました。神は「ことば」を言いました。ここで聖書が言う「ことば」とは、十戒のことです。

聖書では、20 章で述べられる「ことば」と、21 章から 23 章に記される「定め」を明確に区別しています。ここでの「ことば」は十戒を意味し、「定め」はイスラエルの国のまつりごととして決められた規律を指します。十戒は道徳的な原則を示すもので、シナイ山で与えられたすべての規定の土台となりました。「律法」の中でこれらの原則は説明され、シナイ山で与えられたイスラエルのあらゆる政治的、儀式的律法に適用されました。それらは、これから先のモーセ五書の中に記録されています。

神は「ことば」つまり十戒を、イスラエルのすべての人々に向けて語りました。それに続く「定め」は神がモーセ一人に、シナイ山で語った内容です。

その後、神ご自身が「ことば」つまり十戒を2枚の石版に刻み、モーセに与えました。(31:18, 34:28)「定め」は、その後、シナイ山から降りてきたモーセが巻物に書き記しました。(24:4)

このことを強調するのは、律法が与えられたことに関して、「ことば」つまり十戒が、独特かつ重要な地位を持っているからです。律法の基盤である十戒が与えられ、すべてのイスラエル人に向けて語られました。そして神は「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隸の家から連れ出した、あなたの神、【主】である」と人々に伝えました。

「あなたの神、【主】」は以前、同じ場所で、モーセの父祖達に語った神としてモーセに現れました。かつて「わたしはある」とご自身について語ったこの神は、特有の神格を持っており、場所に縛られることなく移動することができ、永遠で不変であり、何よりも、神の民を救うと約束した契約の神です。私たちの教会の尊敬すべき教授の一人であるオーガスト・パイパー師は、この節に関して「この神の約束は、聖書の中でもっとも人の心を温かくする、純粋な福音である」と言っています。

神はご自身の約束を守り、人々を奴隸生活から救い出しました。イスラエル人は神の救いの御手が差し伸べられたことを実体験しています。神の民は神の憐れみと恵みに完全に頼っていることを認め、その助けの約束に信頼する中で、神からの戒めを受け取ることになりました。

十戒を理解する際には、主が述べた前置きの言葉との関連性を考慮することが重要です。主は、イスラエル人が神の歓心を買うためにこの戒めを守ることを求めたのではありません。神はまず、この関係がどのようなものであるかを明示しました。主は彼らの救いの神であることを様々な手段で明らかにしています。深い愛に基づいて、主はイスラエル人を契約の民として選び、養子に迎えました。この素晴らしい恵みに応えるために、イスラエル人がどのように神の御心に従って生きることができるのか、主は示しました。このような道徳的規範を示すことによって、彼らは自分たちが、主の完全な戒めからどれほど外れているかを知ることになりました。それと同時に、恵み深い神にしか与えることのできない愛と赦しを、どれだけ必要としているかを知ることができたのです。

主の前置きの言葉を心に留めて、ここから十戒の内容に目を向けてみましょう。

十戒

3 あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。

4 あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。

5 それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、【主】であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、

- 6 わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。
- 7 あなたは、あなたの神、【主】の御名を、みだりに唱えてはならない。【主】は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
- 8 安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。
- 9 六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。
- 10 しかし七日目は、あなたの神、【主】の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。——あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も——
- 11 それは【主】が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、【主】は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。
- 12 あなたの父と母を敬え。あなたの神、【主】が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。
- 13 殺してはならない。
- 14 姦淫してはならない。
- 15 盗んではならない。
- 16 あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。
- 17 あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」

十戒は、神がイスラエルの人々に与えた道徳的な戒めです。戒めは善と悪の基本的な区別を提示しました。禁止事項は、外面的な行動だけでなく、心の中にも関連しています。これは、すべての良いものの源である唯一の神を愛し、敬うことの重要性から始まるものです。そして最後に人々の内なる欲求、人々のよこしまな行動が諸悪の根源であることで結ばれます。モーセはその後、別れのあいさつの中で、主の十戒を守ることは神への畏れと愛から始まることを強調しました。（申命記 5, 6 章）キリストは、愛がすべての律法を成就することを指摘しました。山上の垂訓で、イエスは戒めに忠実に従うことは、心の中から始まることを繰り返しておっしゃいました。

マルティン・ルターは、自らの著書「小教理問答書」の中で十戒の解説を通して、神の戒めを教えています。ルターの説明は、みことば全体を通して、十の戒めの意味を解説しています。その詳しい内容は、小教理問答書を使用して聖書の主要な教えを教える聖書研究クラスで十分に教えられているので、本書ではすべてを解説することはせず、いくつかの質問に関してだけは説明を加えることにします。

聖書では、十戒を「十のことば」と記述していますが（出エジプト 34:28）、明確な順序が示されていないため、各教会でいくつかの異なる番号付けがされています。ほとんどのプロテスタント教会は、3 節の「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつ

てはならない」を第一の戒めとし、4 節の「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。」を第二の戒めとしています。17 節の「あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない」は第十の戒めとしています。

これは、マタイ 22:37-40 に記されているイエスの言葉に基づくもので、最初の 4 つの戒めが人と神の関係を示し、残りの 6 つが人間関係を示すとされています。

(*Handbook to the Bible*, Eederman 著 p.164 を参照)

ルーテル教会の十戒の順序は、神父アウグスチヌス（紀元 354-430 年）の提唱に従っています。彼は、4 節から 6 節の偶像礼拝に関する部分を「他の神々」に関する適切な説明と見なし、第一の戒めに取り入れました。彼は 17 節を分けて第九の戒めと第十の戒めにしました。第九は家や個人的な所有物について、第十は妻についての戒めです。アウグスティヌスは、誰かの所有物を欲しがることは、その妻を欲するのとは異なる種類の罪深い思いであると論じました。

ルターは偶像礼拝の節が 2 つに分けられなかったことに感謝しました。それは、ルターの同僚であったカールシュタットというドイツの急進的な宗教改革者が、偶像礼拝について誤った区分けをしたことによって、教会にあるすべての絵画や像を非難し、撤廃運動が行われたからです。

十の戒めの正確な区分は、聖書だけに基づいては決定できません。また、神がモーセに与えた石版にどのように戒めが刻まれていたかも正確には知ることができません。しかし、ルター派のクリスチャンとして、私たちはルターが小教理問答書に「神は、これらすべての戒めに対して、何と言われますか？」という質問に対し、「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神」と戒めの結びとして書いていることを知っています。それは、神が、罪を罰すると同時に、愛と感謝の思いから神に従うすべての人に、恵みと憐れみを与えることを真剣に約束していることを強調しているのです。

最後に、20 章に書かれている十の戒めの言葉は、旧約聖書の基準に沿っていることを覚えておくべきでしょう。これは特に、「安息日を覚え、これを聖とせよ」という戒めに該当します。旧約時代における安息日は儀式のための律法の一部でした。これは、主が 6 日間ですべてのものを創造し、7 日目に休息を取ったことに基づいています。安息日は、救い主イエスの完璧な救いのみわざがもたらす、クリスチャンの魂の休息を描写しています。次の聖句がその休息を表現しています。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」(マタイ 11:28,29) 主キリストは「人の子は安息日にも主です」(マルコ 2:28)。そして、新約時代のクリスチャンは、この儀式的な律法に縛られてはいません。(コロサイ 2:16,17)

イスラエル人の反応

18 民はみな、雷と、いなずま、角笛の音と、煙る山を目撃した。民は見て、たじろぎ、遠く離れて立った。

19 彼らはモーセに言った。「どうか、私たちに話してください。私たちは聞き従います。しかし、神が私たちにお話しにならないように。私たちが死ぬといけませんから。」

20 それでモーセは民に言った。「恐れてはいけません。神が来られたのはあなたがたを試みるためなのです。また、あなたがたに神への恐れが生じて、あなたがたが罪を犯さないためです。」

21 そこで、民は遠く離れて立ち、モーセは神のおられる暗やみに近づいて行った。

主が十の戒めを与えた後、シナイ山では再び激しい雷と稲光、炎と煙が起こり、角笛の音が鳴り響きました。このような強大な現象を前にして、人々は恐れを感じ、モーセが彼らの代わりに神と話すよう懇願しました。

モーセは、神がこのような力をお見せになっているのは、彼らが本当の意味で神を畏れるように試みておられるのだということを人々に確信させました。彼らは神に対して深い敬意を持ち、戒めを遵守することが求められました。

モーセは、「神のおられる」山の上にのぼって行き、人々のための仲介者となることを承知しました。他の戒めは、最初に神からモーセに、シナイ山の頂上で直接与えられました。

イスラエル人の砂漠での礼拝

22 【主】はモーセに仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう言わなければならない。あなたがた自身、わたしが天からあなたがたと話したのを見た。

23 あなたがたはわたしと並べて、銀の神々を造ってはならない。また、あなたがた自身のために金の神々も造ってはならない。

24 わたしのために土の祭壇を造り、その上で、羊と牛をあなたの全焼のいけにえとし、和解のいけにえとしてささげなければならない。わたしの名を覚えさせるすべての所で、わたしはあなたに臨み、あなたを祝福しよう。

25 あなたが石の祭壇をわたしのために造るなら、切り石でそれを築いてはならない。あなたが石に、のみを当てるなら、それを汚すことになる。

26 あなたは階段で、わたしの祭壇に上ってはならない。あなたの裸が、その上にあらわれてはならないからである。

これらの節では、主がイスラエル人に守るべき礼拝の原則を示しました。主は彼らが金や銀でできた像を造ることを望みませんでした。彼らは土や石でできた簡素な祭壇を作り、そこで主への捧げ物を捧げることが求められました。主ご自身が、これらのことがどこで行われるべきかを示しました。「わたしの名を覚えさせるすべての所で、わたしはあなたに臨み、あなたを祝福しよう。」と主は言われました。祭壇の石は切られることなく、自然のままの状態であるように指示されました。この祭壇が異教徒の祭壇と違うことをはっきりと示し、また人々が慎み深く捧げ物を捧げることができるよう、主は祭壇に階段をつけないように命じました。祭司が階段を上ることは、その者が「裸」であることを露わにしてしまう危険があるためです。

聖書の批評家の中には、初めに主がイスラエル人に「わたしの名を覚えさせるすべての所で」礼拝を命じ、後には一箇所での礼拝を命じたことについて、前者を原始的な礼拝、後者をより進化した礼拝だと評価する人がいます。

この時点でのイスラエル人の置かれた状況を考えると、これは愚かな学説だと言わざるを得ません。イスラエルはおよそ 40 年間も荒野をさまよったのです。彼らは様々なところで宿営しました。この命令は、イスラエル人がどこにとどまり、どこで祭壇を築くべきか、主が示したものであり、そのようにして「わたしの名を覚えさせるすべての所で」礼拝が行われたのです。このような礼拝の質に優劣はありません。

申命記で述べられている通り、後になって、モーセが彼らを約束の地カナンに導きました。このカナンの地において、神はイスラエル人が、神に選ばれた民としての一致を保つことができるよう、信仰生活の中心となる礼拝所を持つことを望みました。



モーセと十の戒め

次の章では、主が選び出した民に授けた市民的・社会的律法について検討していきます。

出エジプト記 21 章

ヘブル人のしもべの権利

- 1 あなたが彼らの前に立てる定めは次のとおりである。
- 2 あなたがヘブル人の奴隷を買う場合、彼は六年間、仕え、七年目には自由の身として無償で去ることができる。
- 3 もし彼が独身で来たのなら、独身で去り、もし彼に妻があれば、その妻は彼とともに去ることができる。
- 4 もし彼の主人が彼に妻を与えて、妻が彼に男の子、または女の子を産んだのなら、この妻とその子どもたちは、その主人のものとなり、彼は独身で去らなければならない。
- 5 しかし、もし、その奴隷が、『私は、私の主人と、私の妻と、私の子どもたちを愛しています。自由の身となって去りたくありません。』と、はっきり言うなら、
- 6 その主人は、彼を神のもとに連れて行き、戸または戸口の柱のところに連れて行き、彼の耳をきりで刺し通さなければならない。彼はいつまでも主人に仕えることができる。
- 7 人が自分の娘を女奴隷として売るような場合、彼女は男奴隷が去る場合のように去ることはできない。
- 8 彼女がもし、彼女を自分のものにしようと定めた主人の気に入らなくなったときは、彼は彼女が贖い出されるようにしなければならない。彼は彼女を裏切ったのであるから、外国の民に売る権利はない。
- 9 もし、彼が彼女を自分の息子のものとするなら、彼女を娘に関する定めによって、取り扱わなければならない。
- 10 もし彼が他の女をめとるなら、先の女への食べ物、着物、夫婦の務めを減らしてはならない。
- 11 もし彼がこれら三つのことを彼女に行わないなら、彼女は金を払わないで無償で去ることができる。

「あなたが彼らの前に立てる定めは次のとおりである。」と主はモーセに告げました。主は礼拝の原則について示した後に、イスラエルが神の民としての社会的生活を形成するための政治的律法を示しました。

聖書では、この箇所でも使われている「律法」という言葉を、20 章で見てきた十戒を指す「ことば」とは区別して使っています。この「律法」を読むと、現代の法典とは異なることが明らかです。これらは具体的な状況に注意を向けてはいますが、詳しい証拠の

提示を必要としていない点や、司法制度、犯罪人への刑罰執行法などの内容を見ると、現代社会の法律よりも詳細さに欠けていると言えます。そうとはいえ、シナイ山で与えられたこれらの律法は、人生の様々な場面についての指針を示しています。例えば、上記の箇所ではヘブル人の奴隷に関する権利が明記されています。

神がこの時にイスラエルのために作った律法が、現代の国や州で採用されている法典と異なることに驚くべきではありません。神は、その当時の人々が使っていた形式に、ご自身の律法を合わせています。なお、考古学者たちによって発見されている同時代の他国の法典の有名なものの中に、ハンムラビ法典が挙げられます。ハンムラビ王はバビロニアの王で紀元前 1700 年頃に生きました。これはモーセの生まれる数百年前の時代です。

一見するとハンムラビ法典は神がモーセに与えたものと似ているように見えますが、その内容には大きな違いがあります。この異教徒の国家法典は、人間の王を讃えるために書かれています。一方、モーセの法典は、主のみわざを褒め称えるために書かれました。異教徒の法典がその国の王の意向を反映したのに対し、モーセの法典は、イスラエル人が神の民としてどのように生きるよう神が望んだかについて示しています。奴隷、結婚、魔術、土地建物などのあらゆることに関する律法について違いが見られます。神によって与えられたモーセの律法は、人権に関する多くの配慮があり、不従順への刑罰が軽くなっています。

この時代、奴隷制度はすべての国家において日常的に採用されていました。他国では、奴隷や召使いは所有地などの財産と同等に扱われていました。前述された箇所に書かれた律法から、ヘブル人のしもべの権利が注意深く保護されていることが分かります。一生奴隷でいたいと思う者の耳をきりで刺し通すことや、男性のしもべは自由になれても、その妻と子どもが主人に所有され続けるなど、私たちには理解しづらい項目もあります。しかし、これは異なる時代と文化背景を持つ話です。その時代の人々にとっては、私たち現代人よりも状況が理解しやすかった点を留意する必要がありますでしょう。また、一人の男性が二人以上の妻をめとることについての律法もこれから登場します。その話題は、後に詳しく解説していきます。

人に傷を負わせる

12 人を打って死なせた者は、必ず殺されなければならない。

13 ただし、彼に殺意がなく、神が御手によって事を起こされた場合、わたしはあなたに彼ののがれる場所を指定しよう。

14 しかし、人が、ほしいままに隣人を襲い、策略をめぐらして殺した場合、この者を、わたしの祭壇のところからでも連れ出して殺さなければならない。

15 自分の父または母を打つ者は、必ず殺されなければならない。

- 16 人をさらった者は、その人を売っていても、自分の手もとに置いていても、必ず殺されなければならない。
- 17 自分の父または母をのろう者は、必ず殺されなければならない。
- 18 人が争い、ひとりが石かこぶしで相手を打ち、その相手が死なないで床についた場合、
- 19 もし再び起き上がり、杖によって、外を歩くようになれば、打った者は罰せられない。ただ彼が休んだ分を弁償し、彼が完全に直るようにしてやらなければならない。
- 20 自分の男奴隷、あるいは女奴隷を杖で打ち、その場で死なせた場合、その者は必ず復讐されなければならない。
- 21 ただし、もしその奴隷が一日か二日生きのびたなら、その者は復讐されない。奴隷は彼の財産だからである。
- 22 人が争っていて、みごもった女に突き当たり、流産させるが、殺傷事故がない場合、彼はその女の夫が負わせるだけの罰金を必ず払わなければならない。その支払いは裁定による。
- 23 しかし、殺傷事故があれば、いのちにはいのちを与えなければならない。
- 24 目には目。歯には歯。手には手。足には足。
- 25 やけどにはやけど。傷には傷。打ち傷には打ち傷。
- 26 自分の男奴隷の片目、あるいは女奴隷の片目を打ち、これをそこなった場合、その目の代償として、その奴隷を自由の身にしなければならない。
- 27 また、自分の男奴隷の歯一本、あるいは女奴隷の歯一本を打ち落としたなら、その歯の代償として、その奴隷を自由の身にしなければならない。

上記の節では、意図的な殺人と、偶発的に（つまり故意ではなく、神の意志で）起きた殺人が区別されています。偶然の事故として起こった殺人の場合は主が「彼ののがれる場所を指定」し、その人は逃げることができますが、もし計画的な殺人だった場合は死刑に処せられます。これはイスラエル人がカナンの地に住んでいた時に割り当てられた場所で、申命記 4 章 41-42 節に記されているとおり、自分たちの土地を所有しないレビ人のために取り分けられた町を指します。

父親と母親を襲った子どもが死刑に処されるとも書かれています。主は両親をご自身の代表とみなしておられるため、このように罰が重かったのです。誘拐者も厳しく罰せられ、死刑になりました。神が社会的な犯罪について決めた刑罰は、現代の私たちの社会が慣れ親しんでいる寛容な刑罰の仕組みよりもずっと厳しいものでした。

23 節から 25 節は、多くの人が疑問に感じる部分です。「殺傷事故があれば、いのちにはいのちを与えなければならない。目には目。歯には歯。手には手。足には足。やけどにはやけど。傷には傷。打ち傷には打ち傷。」とあります。

「目には目を」という裁判規約で、そのラテン語である *lex talionis* という言葉は、犯罪が行われた場合、その刑罰はその犯罪内容に釣り合ったものにするというものです。多くの人々がこれを旧約聖書の律法が、現代の同情的で進化を遂げた律法に比べていかに厳しく原始的であったかを示す例として挙げます。しかし、この規約が適用されるのは、極めて重篤な肉体的被害に関する犯罪に限られる点を忘れてはなりません。また、この時代には犯罪に対して復讐が行われることが慣習となっていました。そのような文化の中で、この規約は、被害者が被った被害以上の復讐を犯罪者に対して行うことを禁じました。言い換えると衝動的な復讐によって相手を殺してしまいかねない事態を防ぐためのチェック機能を果たしていたのです。

最後に、この規約は、イスラエル社会の規律を保つために神が与えていたことを覚えておく必要があります。これらは市民律法であり道徳的な法令ではありません。イスラエルは神権政治のもと統治されていました。つまりアメリカ合衆国や日本などのように教会と政治が分かれていなかったのです。このような違いを考慮した上でモーセの律法を理解する必要があります。さらに、聖書には「目には目を」という原則に基づいて他人に重篤な危害を与えた者が同様の被害を受けたという記述は存在しないことを明記しておきます。

26 節と 27 節は、しもべと自由なイスラエル人との扱いの違いを説明しています。主人から身体的な被害を被ったしもべは、自由の身分を与えられることでその償いを受けます。

動物への危害に関して

28 牛が男または女を突いて殺した場合、その牛は必ず石で打ち殺さなければならない。その肉を食べてはならない。しかし、その牛の持ち主は無罪である。

29 しかし、もし、牛が以前から突くくせがあり、その持ち主が注意されていても、それを監視せず、その牛が男または女を殺したのなら、その牛は石で打ち殺し、その持ち主も殺されなければならない。

30 もし彼に贖い金が課せられたなら、自分に課せられたものは何でも、自分のいのちの償いとして支払わなければならない。

31 男の子を突いても、女の子を突いても、この規定のとおり処理されなければならない。

32 もしその牛が、男奴隷、あるいは女奴隷を突いたら、牛の持ち主はその奴隷の主人に銀貨三十シェケルを支払い、その牛は石で打ち殺されなければならない。

33 井戸のふたをあけていたり、あるいは、井戸を掘って、それにふたをしないでいたりして、牛やろばがそこに落ち込んだ場合、

34 その井戸の持ち主は金を支払って、その持ち主に償いをしなければならない。しかし、その死んだ家畜は彼のものとなる。

35 ある人の牛が、もうひとりの人の牛を突いて、その牛が死んだ場合、両者は生きている牛を売って、その金を分け、また死んだ牛も分けなければならない。

36 しかし、その牛が以前から突くくせのあることがわかっていて、その持ち主が監視をしなかったのなら、その人は必ず牛は牛で償わなければならない。しかし、その死んだ牛は自分のものとなる。

これらの律法は、所有者の監督不足により動物が他の動物や人に危害を与えた際の規定です。この場合、危害を与えた動物だけでなく、その動物の所有者も責任を問われます。

また、動物に関するこの律法は、動物による所有地の損害にも適用されます。所有地の損害については、次章で詳しく解説します。

出エジプト記 22 章

所有物の保護

1 牛とか羊を盗み、これを殺したり、これを売ったりした場合、牛一頭を牛五頭で、羊一頭を羊四頭で償わなければならない。

2——もし、盗人が、抜け穴を掘って押し入るところを見つけられ、打たれて死んだなら、血の罪は打った者にはない。

3 もし、日が上っていれば、血の罪は打った者にある——盗みをした者は必ず償いをしなければならない。もし彼が何も持っていないなら、盗んだ物のために、彼自身が売られなければならない。

4 もし盗んだ物が、牛でも、ろばでも、羊でも、生きたままで彼の手の中にあるのが確かに見つかったなら、それを二倍にして償わなければならない。

5 家畜に畑やぶどう畑の物を食べさせるとき、その家畜を放ち、それが他人の畑の物を食い荒らした場合、その人は自分の畑の最良の物と、ぶどう畑の最良の物とをもって、償いをしなければならない。

6 火災を起こし、それがいばらに燃え移り、そのため積み上げた穀物の束、あるいは立穂、あるいは畑を焼き尽くした場合、出火させた者は、必ず償いをしなければならない。

7 金銭あるいは物品を、保管のために隣人に預け、それがその人の家から盗まれた場合、もし、その盗人が見つかったなら、盗人はそれを二倍にして償わなければならない。

8 もし、盗人が見つからないなら、その家の主人は神の前に出て、彼が隣人の財産に絶対に手をかけなかったことを誓わなければならない。

- 9 すべての横領事件に際し、牛でも、ろばでも、羊でも、着物でも、どんな紛失物でも、一方が、『それは自分のものだ。』と言う場合、その双方の言い分を、神の前に持ち出さなければならない。そして、神が罪に定めた者は、それを二倍にして相手に償わなければならない。
- 10 ろばでも、牛でも、羊でも、またどんな家畜でも、その番をしてもらうために隣人に預け、それが死ぬとか、傷つくとか、奪い去られるとかして、目撃者がいない場合、
- 11 隣人の財産に絶対に手をかけなかったという【主】への誓いが、双方の間に、なければならない。その持ち主がこれを受け入れるなら、隣人は償いをする必要はない。
- 12 しかし、もしそれが確かに自分のところから盗まれたのなら、その持ち主に償いをしなければならない。
- 13 もしそれが確かに野獣に裂き殺されたのなら、証拠としてそれを持って行かなければならない。裂き殺されたものの償いをする必要はない。
- 14 人が隣人から家畜を借り、それが傷つくか、死ぬかして、その持ち主がいっしょにいなかった場合は、必ず償いをしなければならない。
- 15 もし、持ち主がいっしょにいたなら、償いをする必要はない。しかし、それが賃借りの物であったなら、借り賃は払わなければならない。

上記から明らかなように、神がモーセに授けた律法の中には、所有物の保護に関する規定が含まれています。これらの節から、家畜、土地、畑、家などが、神の民がカナンの地に定住する予定を念頭に置いて述べられていることが解かります。

これらの律法が取り上げる状況はシンプルで明瞭です。私たちににとって一部の状況が異様に思えるかもしれませんが、それは私たちが異なる時代と文化背景を持っているためです。発展途上国に住んでいる人には、これらの状況と問題が私たちより理解できるでしょう。このモーセの律法と、いなかの地域で今も守られている慣習的な律法とは似た部分が多いからです。

モーセの律法と同時代の他の律法を比較した人々は、神の法令が、罪を犯した人に課す罰の重要性を強調していることに気付くでしょう。例えば古代バビロニア帝国で作られたハンムラビ法典は、強盗や盗みについては、ほぼすべての状況において死刑を命じています。それに対して、主がモーセに与えられた律法においては賠償や償いをする機会が与えられています。主は人間の命を厳粛な信託とみなしておられるのです。しかしながら、続く箇所を確認できるように、主の神聖を公然と侵す行為には、死刑を課す場合があります。

社会的責任

- 16 まだ婚約していない処女をいざない、彼女と寝た場合は、その人は必ず花嫁料を払って、彼女を自分の妻としなければならない。
- 17 もし、その父が彼女をその人に与えることを堅く拒むなら、その人は処女のために定められた花嫁料に相当する銀を支払わなければならない。
- 18 呪術を行う女は生かしておいてはならない。
- 19 獣と寝る者はすべて、必ず殺されなければならない。
- 20 ただ【主】ひとりのほかに、ほかの神々にいけにえをささげる者は、聖絶しなければならない。
- 21 在留異国人を苦しめてはならない。しいたげてはならない。あなたがたも、かつてはエジプトの国で、在留異国人であったからである。
- 22 すべてのやもめ、またはみなしごを悩ませてはならない。
- 23 もしあなたが彼らをひどく悩ませ、彼らがわたしに向かって切に叫ぶなら、わたしは必ず彼らの叫びを聞き入れる。
- 24 わたしの怒りは燃え上がり、わたしは剣をもってあなたがたを殺す。あなたがたの妻はやもめとなり、あなたがたの子どもはみなしごとなる。
- 25 わたしの民のひとりで、あなたのところにいる貧しい者に金を貸すのなら、彼に対して金貸しのようにあつてはならない。彼から利息を取ってはならない。
- 26 もし、隣人の着る物を質に取るようなことをするのなら、日没までにそれを返さなければならない。
- 27 なぜなら、それは彼のただ一つのおおい、彼の身に着ける着物であるから。彼はほかに何を着て寝ることができよう。彼がわたしに向かって叫ぶとき、わたしはそれを聞き入れる。わたしは情け深いから。
- 28 神をのろってはならない。また、民の上に立つ者をのろってはならない。
- 29 あなたの豊かな産物と、あふれる酒とのささげ物を、遅らせてはならない。あなたの息子のうち初子は、わたしにささげなければならない。
- 30 あなたの牛と羊についても同様にしなければならない。七日間、その母親のそばに置き、八日目にわたしに、ささげなければならない。
- 31 あなたがたは、わたしの聖なる民でなければならない。野で獣に裂き殺されたものの肉を食べてはならない。それは、犬に投げ与えなければならない。

ここで触れられている状況は、深い示唆を持っています。

例として、16 節に記述されている花嫁料を取り上げます。創世記では、イサクがリベカを花嫁とした際、アブラハムから多くの価値ある品々がリベカや彼女の家族に贈られました。またヤコブは、ラバンの娘達と結婚する際に、それぞれにつき 7 年間働くことに同意しました。金品や労働としての花嫁料の慣習は、日本の結納と同様、現代でも一部の国々で実践されています。上記の聖書箇所で問題とされているのは、まだ結婚の

誓いがなされていない処女を誘惑した場合です。そのような場合、男性は花嫁料を払い、結婚することが義務とされました。(申命記 22:23-27 は、男性が、別の男性と結婚を約束している処女と寝た場合です。このような場合は男女ともに死刑が言い渡されました。例外は女性が強姦されたことを証明できる場合です。そのような場合は、男性のみが石打ちによる死刑に処されました。)

続いて、神の律法が死刑を宣告する 3 つの状況が述べられています。

18 節では「呪術を行う女は生かしておいてはならない。」と書かれています。「呪術を行う女」というのは、事故や病気や死を引き起こす悪霊を人々の体の中から追い出す超自然的な力を持つことを主張する女性のことです。アフリカのように、今でもこのような行いが実施されている国で親しまれている呼び名は「魔術」です。魔術を行うことは偶像礼拝と同じです。それはまことの神ではなく、サタンの力を褒め称える行為です。神権政治の行われていたイスラエルにおいて、あらゆる形式の偶像礼拝が死刑の対象となっていたからこそ、主は、魔術を行うものに対して死刑を命じられました。今日の多くの文化や社会において、魔術は悪のもっとも大きな勢力のひとつです。例えばアフリカの人々は、多くの迷信的な行いによる多くの問題を抱えています。

19 節には「獣と寝る者はすべて、必ず殺されなければならない。」とありますが、これは獣姦と言ひ、多くのカナン人の社会ではバアル信仰の礼典の一巻として行われていました。そのため、神はこの行為に対しても死刑を定めています。

20 節には「ただ【主】ひとりのほかに、ほかの神々にいけにえをささげる者は、聖絶しなければならない。」と書かれています。ここで書かれている聖絶とは、完全に滅ぼすことによって、対象の物や人を主に捧げることを意味します。神はカナンを征服したとき、市全体を聖絶するようイスラエルに命じました。主に敵対していたカナンは、完全に破壊され滅ぼされることによって、主に捧げられたのです。

続く節で、主はやもめ、孤児、貧しい者に対しての憐れみを示しておられます。主はイスラエルの人々にも、生活の中で同様の憐れみの情を持つことを求められました。貧しいものに対する援助をしなかった人は主の怒りを招きます。極貧の人々に対してイスラエル人たちは、無利子で貸し付けを行うことが求められました。

28 節によると、主の御名を汚すことは禁じられていました。レビ記には主の御名を呪いとして口にした男のことが書かれていますが、その際にイスラエルの集会全員が彼を石打ちにしました。(レビ記 24:10-16) 祭司長カヤパは、イエスが誓いの元で神の子キリストであると告白したので、イエスを冒瀆罪に定めて死刑にしようとしてしました。私たちはもちろん、イエスが本当のことを話しておられたことを知っています。

22 章は、主への供物、長子、そして牛や羊の初子を捧げることで、イスラエル人が主の聖なる民としての役割や、主の尊厳を反映する意味を強調して終わります。

「あなたがたは、わたしの聖なる民でなければならない。野で獣に裂き殺されたものの肉を食べてはならない。それは、犬に投げ与えなければならない」と主はこの章の終わ

りに告げました。獣によって裂き殺された動物は正式に血を抜かれておらず、旧約時代のイスラエル人は血の入ったものを食べることが禁止されました。イスラエル人は、多方面で主によって聖化された民としての役割を果たすことが期待されていました。

新約時代に生きる私たちには、イスラエル人の時代のような儀式的な規約に従う生活の制約はありません。しかし、私たちの心にも神の恵みによって同様の献身的な思いが芽生えるべきだということを忘れてはなりません。パウロはローマ人への手紙の中で次のように述べています。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい」(ローマ 12:1,2)

出エジプト記 23 章

正義と憐れみの律法

- 1 偽りのうわさを言いふらしてはならない。悪者と組んで、悪意ある証人となってはならない。
- 2 悪を行う権力者の側に立ってはならない。訴訟にあたっては、権力者にかたよって、不当な証言をしてはならない。
- 3 また、その訴訟において、貧しい人を特に重んじてもいいけない。
- 4 あなたの敵の牛とか、ろばで、迷っているのに出会った場合、必ずそれを彼のところに返さなければならない。
- 5 あなたを憎んでいる者のろばが、荷物の下敷きになっているのを見た場合、それを起こしてやりたくなくても、必ず彼といっしょに起こしてやらなければならない。
- 6 あなたの貧しい兄弟が訴えられた場合、裁判を曲げてはならない。
- 7 偽りの告訴から遠ざからなければならない。罪のない者、正しい者を殺してはならない。わたしは悪者を正しいと宣告することはしないからである。
- 8 わいろを取ってはならない。わいろは聡明な人を盲目にし、正しい人の言い分をゆがめるからである。
- 9 あなたは在留異国人をしいたげてはならない。あなたがたは、かつてエジプトの国で在留異国人であったので、在留異国人の心をあなたがた自身がよく知っているからである。

イスラエルの社会的責任について書かれていた章において、主は、やもめ、孤児、困窮者について憐れみを持つことの重要性を強調しました。これから見ていく章では、裁判における証言の際の正義が強調されています。証言者は悪意や敵意を持ってはならず、偏見をもって判断してはなりません。虚偽の告発、賄賂の使用、在留異国人の虐待も禁じられました。

イスラエル人は自分たちを聖なる人々として見せることが求められました。これらの数節は、正義と憐れみの原則を見事に集約していると言えるでしょう。このような原則、特に証言者についての記述に見られるような正直さが今日の裁判においても実行されると良いのですが！

主がここで述べていることは重要です。「わたしは悪者を正しいと宣告することはないからである。」これは、イスラエル人に重要なことを思い出させています。それはここで警告された罪が人の目には見逃されていても、主の裁きという高位の裁きが存在するということです。主はどんなことも見逃さずに見ておられます。決してうわべに誤魔化されることがありません。アメリカの司法では、今も証言が真実であるか誓うことが求められます。これは「わたし、【主】が心を探り、思いを調べ、それぞれその生き方により、行いの結ぶ実によって報いる」(エレミヤ 17:10) ことのできる裁判官がおられることを思い出すよい機会となっています。裁判所での誓いにおける神への敬意が失われたとき、律法と秩序の崩壊は避けられないでしょう。

最後の判決は使徒パウロが「私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。」(2 コリント 5:10) と言っているとおおり、後になって必ず明らかになります。その日まで、聖霊が私たちの内にキリストの霊を遣わし、信仰によって正義を追求する道を示してくださいように！

安息日の律法

10 六年間は、地に種を蒔き、収穫をしなければならない。

11 七年目には、その土地をそのままにしておき、休ませなければならない。民の貧しい人々に、食べさせ、その残りを野の獣に食べさせなければならない。ぶどう畑も、オリーブ畑も、同様にしなければならない。

12 六日間は自分の仕事をし、七日目は休まなければならない。あなたの牛やろばが休み、あなたの女奴隷の子や在留異国人に息をつかせるためである。

13 わたしがあなたがたに言ったすべてのことに心を留めなければならない。ほかの神々の名を口にしてはならない。これがあなたの口から聞こえてはならない。

イスラエルの人々は7日目の安息日に休むだけでなく、7年に1回、畑を1年間休ませる期間を持つことも命じられました。現代にも「サバティカル」として知られる1年間の休養期間がありますが、この「サバティカル」は、安息日を意味する「Sabbath」に由来しており、この聖書の箇所が起源となっています。

この制度の詳細は、レビ記25章と申命記15章で説明されています。

毎年開催される3つの祭り

14 年に三度、わたしのために祭りを行わなければならない。

15 種を入れないパンの祭りを守らなければならない。わたしが命じたとおり、アビブの月の定められた時に、七日間、種を入れないパンを食べなければならない。それは、その月にあなたがエジプトから出たからである。だれも、何も持たずにわたしの前に出てはならない。

16 また、あなたが畑に種を蒔いて得た勤労の初穂の刈り入れの祭りと、年の終わりにあなたの勤労の実を畑から取り入れる収穫祭を行わなければならない。

17 年に三度、男子はみな、あなたの主、【主】の前に出なければならない。

18 わたしのいけにえの血を、種を入れたパンに添えてささげてはならない。また、わたしの祭りの脂肪を、朝まで残しておいてはならない。

19 あなたの土地の初穂の最上のものを、あなたの神、【主】の家に持って来なければならない。子やぎを、その母親の乳で煮てはならない。

ここでは、イスラエル人の宗教的行事としての3大祭りについて簡潔に説明されています。レビ記23章と申命記16章には、より詳しい説明が書かれています。カナンの地に到着した後、イスラエル人はこれら3つの祭りを主要な礼拝所で行うことが命じられました。ソロモンの統治下でエルサレムに宮が建てられた時には、エルサレムで行われました。イスラエルの男性達は年に3回「【主】の前に出なければならない」とされました。

私たちはすでに、過越に関連した「種を入れないパンの祭り」についての説明を聞いています。しかしながら、他の二つの祭りについてはここで初めて聞くことになります。それは「初穂の刈り入れの祭り」と「収穫の祭り」です。「初穂の刈り入れの祭り」は、過越の祭りの後の「種を入れないパンの祭り」から50日後に行われるもので、日本語では「五旬祭」や「五旬節」とも呼ばれます。

「収穫の祭り」は、レビ記にも記載があり、贖いの日の祭りと共に祝われ、後には「幕屋の祭り」とも関連づけられました

興味深いことに、イスラエルの宗教行事にも、現代キリスト教のクリスマス、イースター（復活祭）、ペンテコステと同様の3大祭りが存在します。旧約聖書における「種

を入れないパンの祭り」の時期は、現代におけるイースターの時期に相当します。「初穂の刈り入れの祭り」は、豊かな収穫の恵みに感謝を捧げる収穫祭と共通点を見いだすことができます

この箇所では社会的儀式的な律法の最後として述べられているのは、「子やぎを、その母親の乳で煮てはならない」というものです。最初にこの記述を読む人は、なぜ重要な箇所にこのような律法が出てくるのか疑問に思うことでしょう。この律法が重要な意味を持っていることが分かるのは、他のモーセの律法の中の同じくらい重要な箇所でも同じ律法が書かれているからです。

これはどういう意味でしょうか。何がそれほど重要なのでしょう。聖書学者達は多くの異なる答えを導き出しています。ルターは、イスラエル人が当時、山羊の乳で若い山羊の肉を煮込む料理をご馳走として食べていたことについて、神が、山羊が乳離れする前のこの調理法に対して警告したと述べています。それは、ルターによると、このような調理法は非人道的だったためです。他の学者はそれに加えて、母親の乳で子山羊の肉を煮込むことは、神の設立された親と子の関係への軽蔑を表わすことになることと付け加えました。また、乳と肉と一緒に食べることは、イスラエルの食事に関する律法に反していたとコメントしている学者もいます。しかしながら、みことばの中にこのような食事に関する律法を見い出すことができないため、この説を支持できる可能性は低いと言えます。

最近の考古学的な発見として、ウガリッドにおいてラス・シャムラ石版が挙げられます。それは、カナン人が異教徒の多産の宗教儀式の際に生まれたばかりの山羊をほふり、母親の乳で煮る料理があったと言われています。カナン人は、このような調理法によってバアル神に多産の恵みをかなえてもらうことができると信じていました。この発見がこの聖書箇所を最も的確に説明していると言えます。ここで主は、イスラエル人が祭りで行うべきさまざまな宗教的儀式について指示しています。主は異邦人のような方法で祝うことはせず、主の導かれる方法で感謝の捧げ物をするように警告しました。他の宗教の神々の名を口にする事や、その存在に敬意を示すことも、厳しく避けるようにとの警告がされています。次の聖書箇所は主のまとめの言葉であり、神の人々が、神の勧告にしたがって捧げ物を捧げるよう励ましが与えられています。

神の使いが道を備える

20 見よ。わたしは、使いをあなたの前に遣わし、あなたを道で守らせ、わたしが備えた所にあなたを導いて行かせよう。

21 あなたは、その者に心を留め、御声に聞き従いなさい。決して、その者にそむいてはならない。わたしの名がその者のうちにあるので、その者はあなたがたのそむきの罪を赦さないからである。

- 22 しかし、もし御声に確かに聞き従い、わたしが告げることをごとく行うなら、わたしはあなたの敵には敵となり、あなたの仇には仇となろう。
- 23 わたしの使いがあなたの前を行き、あなたをエモリ人、ヘテ人、ペリジ人、カナン人、ヒビ人、エブス人のところに導き行くとき、わたしは彼らを消し去ろう。
- 24 あなたは彼らの神々を拜んではならない。仕えてはならない。また、彼らの風習にならってはならない。これらを徹底的に打ちこわし、その石の柱を粉々に打ち砕かなければならない。
- 25 あなたがたの神、【主】に仕えなさい。主はあなたのパンと水を祝福してくださる。わたしはあなたの間から病気を除き去ろう。
- 26 あなたの国のうちには流産する者も、不妊の者もいなくなり、わたしはあなたの日数を満たそう。
- 27 わたしは、わたしへの恐れをあなたの先に遣わし、あなたがそこに入って行く民のすべてをかき乱し、あなたのすべての敵があなたに背を見せるようにしよう。
- 28 わたしは、また、くまばちをあなたの先に遣わそう。これが、ヒビ人、カナン人、ヘテ人を、あなたの前から追い払おう。
- 29 しかし、わたしは彼らを一年のうちに、あなたの前から追い払うのではない。土地が荒れ果て、野の獣が増して、あなたを害することのないためである。
- 30 あなたがふえ広がって、この地を相続地とするようになるまで、わたしは徐々に彼らをあなたの前から追い払おう。
- 31 わたしは、あなたの領土を、葦の海からペリシテ人の海に至るまで、また、荒野からユーフラテス川に至るまでとする。それはその地に住んでいる者たちをわたしがあなたの手に渡し、あなたが彼らをあなたの前から追い払うからである。
- 32 あなたは、彼らや、彼らの神々と契約を結んではならない。
- 33 彼らは、あなたの国に住んではならない。彼らがあなたに、わたしに対する罪を犯させることのないためである。それがあなたにとってわなとなるので、あなたが彼らの神々に仕えるかもしれないからである。」

この旅において人々を導く主の使いとは、主ご自身です。イスラエルは主のみを崇拜し、主の御名のみで栄光を帰することが求められました。そして主は、彼らの戦いを代わりに戦い、彼らを約束の地へと導き入れるのです。

「わたしは、また、くまばちをあなたの先に遣わそう。」と主は告げました。同様の描写が申命記 7 章 20 節とヨシュア書 24 章 12 節にも書かれています。主はイスラエルの敵に恐怖と害悪をもたらし、イスラエルが彼らに打ち勝つことができるようにすると述べました。くまばちの大群に襲われた経験のある人なら誰でも、この力強い描写の意味をすぐに理解できるでしょう。イスラエルがカナンの地を征服する際、カナン人たちが奇襲攻撃、嵐、洪水、その他の自然災害によって恐怖に怯えた様子について聖書に記

されています。これは主が以前に宣言した通り、一度に起こったわけではなく、段階的に起こったのです。それは、カナンの地が荒廃したり、野生の獣が多くなりすぎないようにするためでした。

カナンのおおまかな国境がどこにあるか説明した後、主はこの箇所における最後の警告を与えました。それはカナン人と契約を結んではならない、ということでした。彼らは追い出されるべきでした。それは、彼らの偶像礼拝が神の民を痛めつける基になってしまうからです。主はこのように異教徒の習慣に染まることについての警告を繰り返し強く行いました。イスラエルがこの警告に耳を貸してくれていたなら、どんなに良かったことでしょう！

神の警告に従わなかったのはイスラエル人ばかりではありません。新約時代のクリスチャンたちも社会的・宗教的な悪い交流から離れるように警告されています。多くの人がこのことの重要性を理解していないのと同じように、ペテロが自分の信仰を過信したとき、キリストの敵とともに火の側で身を暖めていたように、火を遊びと思い、火傷のリスクを考えない子どものような行動をとることもあります。キリストがクリスチャンの人生の目的であるにもかかわらず、その信仰を示す行動や言葉で他者と区別されることを恐れるクリスチャンが多いのは悲しい事実です。この神からのイスラエルへの警告が、良い模範となりますように！

出エジプト記 24 章

モーセへの指示

- 1 主は、モーセに仰せられた。「あなたとアロン、ナダブとアビフ、それにイスラエルの長老七十人は、【主】のところに上り、遠く離れて伏し拝め。
- 2 モーセひとり【主】のもとに近づけ。他の者は近づいてはならない。民もモーセといっしょに上ってはならない。」
- 3 そこでモーセは来て、【主】のことばと、定めをことごとく民に告げた。すると、民はみな声を一つにして答えて言った。「【主】の仰せられたことは、みな行います。」
- 4 それで、モーセは【主】のことばを、ことごとく書きしるした。そうしてモーセは、翌朝早く、山のふもとに祭壇を築き、またイスラエルの十二部族にしたがって十二の石の柱を立てた。

シナイ山の律法の基本的な規定がイスラエル人に示された後、主はモーセ、アロン、アロンの息子たちナダブとアビフ、そして 70 人の長老たちにシナイ山に上るよう指示しました。しかし、モーセだけが主の契約の承認に関する指示を受け取るために主に近づくこととされました。

モーセが戻った時、彼は人々に「【主】のことばと、定め」をすべて伝えました。ここの「【主】のことばと、定め」のすべてが何であったか、様々な解釈が存在しますが、私たちは20章に書かれた10の戒めが「ことば」であり、20章22節から23章32節に記された社会的また儀式的なイスラエル人の生活スタイルが「定め」であると解釈します。またモーセは、これらの「ことばと定め」を、24章7節にあるように「契約の書」にまとめて記すように導かれました。

「契約の書」に記された内容が読み上げられた後、イスラエルの人々はこの契約を厳粛に承認する準備が整ったのです。

契約が承認される

4 それで、モーセは【主】のことばを、ことごとく書きしるした。そしてモーセは、翌朝早く、山のふもとに祭壇を築き、またイスラエルの十二部族にしたがって十二の石の柱を立てた。

5 それから、彼はイスラエル人の若者たちを遣わしたので、彼らは全焼のいけにえをささげ、また、和解のいけにえとして雄牛を【主】にささげた。

6 モーセはその血の半分を取って、鉢に入れ、残りの半分以上を祭壇に注ぎかけた。

7 そして、契約の書を取り、民に読んで聞かせた。すると、彼らは言った。「【主】の仰せられたことはみな行い、聞き従います。」

8 そこで、モーセはその血を取って、民に注ぎかけ、そして言った。「見よ。これは、これらすべてのことばに関して、【主】があなたがたと結ばれる契約の血である。」

次の日の朝、モーセは「山のふもとに祭壇を築き、イスラエルの十二部族にしたがって十二の石の柱を立て」ました。その祭壇はそこで行われる儀式に主が臨在されることを表わし、石の柱がその周りに置かれました。この契約は主と主の民との間に交わされる契約でした。この時、レビ人の祭司職がまだ制定されていなかったため、イスラエル人の若者たちが祭司の役割を果たしました。「彼らは全焼のいけにえをささげ、また、和解のいけにえとして雄牛を【主】にささげた」と書かれているように、祭壇では牛が焼かれ、特別な場合に主へ捧げられる和解のいけにえとして捧げられました。和解のいけにえには、一般的な食事をすることによって感謝と和解の意味を表わすことも含まれました。このように主の御前で食べたり飲んだりすることは、この儀式の後半に行われました。（後にレビ記の中で記されているように、主がモーセに血の生け贄についての規定を与えた際に、全焼のいけにえと和解のいけにえの両方が含まれていました。）

この特別な儀式の際、動物の血の半分以上が祭壇に振りかけられ、残りの半分は人々の上に振りかけられました。これは犠牲の血であり、人間の罪の代価、つまり贖罪として捧げられました。罪は神と人との関係性を減ぼしました。壊れた関係を修復するために

は血による償いが必要でした。旧約聖書に記されている多くの動物の血による犠牲は、旧約時代の人々にこのことを強く印象づけました。旧約時代の動物の血の描写は、救い主イエス・キリストがゴルゴタの丘の上で偉大な犠牲を払ってくださった出来事を私たちに印象づけます。旧約時代の多くの動物の血による犠牲は、イエスの完璧な犠牲があってこそ意味を持ちます。

ヘブル9章11-14節は次のように記しています。「しかしキリストは、すでに成就したすばらしい事からの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えれば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです。もし、やぎと雄牛の血、また雌牛の灰を汚れた人々に注ぎかけると、それが聖めの働きをして肉体をきよいものにするにすれば、まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者とするものでしょう。」またヨハネは次のように記しています。「この方こそ、私たちの罪のための——私たちの罪だけでなく、世全体のための——なだめの供え物です。」(1ヨハネ2:2)

祭壇に血が振りかけられた後、人々は再び、主の契約に従うことを厳粛に約束しました。その後にモーセは血を人々の上に振りかけました。

聖書学者のアルフレッド・イデルシャイムは、この箇所の儀式について次のように述べています。「イスラエルの歴史の中でこの儀式が最も重要でした。この一度だけの儀式によって、イスラエルは正式に神の民として聖別されました。そしてこのことが、後に続くすべての犠牲による礼拝の基盤となりました。」(*Old Testament Bible History* P.120)

ヘブル人への手紙の著者は、私たち新約時代のクリスチャンにとっての、この出来事の重要性を説きました。「モーセは、律法に従ってすべての戒めを民全体に語って後、水と赤い色の羊の毛とヒソブとのほかに、子牛とやぎの血を取って、契約の書自体にも民の全体にも注ぎかけ、『これは神があなたがたに対して立てられた契約の血である。』と言いました。また彼は、幕屋と礼拝のすべての器具にも同様に血を注ぎかけました。それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」(ヘブル9:19-22)

私たちも次の受難節の讃美歌を歌う時、作詞者と共にこのことを思い出すことができます。

Thousand, thousand thanks shall be,
dearest Jesus, unto thee.

感謝ささげる

愛するイエスに (CW114 繰り返し)

神の御前に出る

9 それからモーセとアロン、ナダブとアビフ、それにイスラエルの長老七十人は上って行った。

10 そうして、彼らはイスラエルの神を仰ぎ見た。御足の下にはサファイヤを敷いたようなものがあり、透き通っていて青空のようであった。

11 神はイスラエル人の指導者たちに手を下されなかったので、彼らは神を見、しかも飲み食いをした。

雄牛の血を振りかける厳粛な儀式を経て、イスラエルの指導者たちは神の御前で食事により、その親しい交流を公に示しました。神は、通常とは異なる姿で、イスラエルの指導者たちの前に現れました。彼らは神の御前で「神を見」た、とあります。もちろん、彼らが主の完全な栄光を直接見たわけではありません。なぜなら、このしばらく後に主がモーセに「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである」（出エジプト記 33 章 20 節）と述べているからです。上記の節で「主（ヤハウェ）」の代わりに「神」という言葉が使われていることに重要性があるかどうかの判断は難しい所です。いずれにせよ、主は恵み深く、ご自身の絶対的な栄光を限定的な形で示しました。「御足の下にはサファイヤを敷いたようなものがあり」という光景は、預言者エゼキエルが記した内容を思い起こさせます。「彼らの頭の上方の大空から声があると、彼らは立ち止まり、翼を垂れた。彼らの頭の上、大空のはるか上のほうには、サファイヤのような何か王座に似たものがあり、その王座に似たもののはるか上には、人間の姿に似たものがあった。私が見ると、その腰と見える所から上のほうは、その中と回りところが青銅のように輝き、火のように見えた。その腰と見える所から下のほうに、私は火のようなものを見た。その方の回りには輝きがあった。その方の回りにある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、それは【主】の栄光のように見えた。私はこれを見て、ひれ伏した。そのとき、私は語る者の声を聞いた。」（エゼキエル書 1:25-28）

さらに、黙示録の中の美しい光景も心に浮かびます。あがない出された、すべての国々、部族、種族、言語の数え切れないほどの大勢の人々が神と神の子羊イエスの前に立ち、「神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついている。…神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらない。彼らは永遠に王である。」（黙示録 22:4,5）

モーセが神の山に登る

12 【主】はモーセに仰せられた。「山へ行き、わたしのところに上り、そこにおれ。彼らを教えるために、わたしが書きしるしたおしえと命令の石の板をあなたに授けよう。」
13 そこで、モーセとその従者ヨシュアは立ち上がり、モーセは神の山に登った。
14 彼は長老たちに言った。「私たちがあなたがたのところに帰って来るまで、ここにいなさい。ここに、アロンとフルとがあなたがたといっしょにいます。訴え事のある者は、だれでも彼らに告げるようにしなさい。」
15 モーセが山に登ると、雲が山をおおった。
16 【主】の栄光はシナイ山の上にとどまり、雲は六日間、山をおおっていた。七日目に主は雲の中からモーセを呼ばれた。
17 【主】の栄光は、イスラエル人の目には、山の頂で燃え上がる火のように見えた。
18 モーセは雲の中に入って行き、山に登った。そして、モーセは四十日四十夜、山にいた。

シナイ山で主とイスラエル人との契約を締結するため、モーセは主の要望に応じて山に登りました。そこでモーセは十の戒めが刻まれた石版と、契約の場所としての幕屋の建築についての詳細な指示を受け取りました。

「【主】の栄光はシナイ山の上にとどまり」と書かれています。ここで再び「主の栄光」という表現に注目しましょう。主は山を覆う雲を通じてご自身の存在をイスラエル人に示しました。イスラエル人が「主の栄光」を見たとき、それは「山の頂で燃え上がる火のように見え」ました。それは主の聖性、威光、および御力を人々に意識させました。そしてモーセは、燃える火のような聖性と威光を纏いながら雲の中に入って行き、山に登ったのです。同時に、神は恵みと憐れみをもってモーセを契約の仲介者として受け入れました。

モーセは 40 日 40 夜そこにとどまりました。モーセが飲み食いすることなくそうすることができたのは奇跡です。40 という数字は、エリヤがホレブ山までの旅の際にも言及されています。（Ⅰ列王記 19:1-9）イエスが荒野で試みを受けられた日数は 40 日であり（マタイ 4:1-11）、イスラエルの荒野でさまようことになった際の年数は 40 年でした（民数記 14）。これらすべての場合において、40 は試みの期間を示すと同時に、その期間を経て、恵み深い主によって力強められた事実が認められます。

24 章の最後の数節が、出エジプト記の第二部の締めくくりとなります。第一部では、主の契約の人々がエジプトから救い出されたことが語られました。第二部では、主とイスラエルとの間の契約の成立がテーマとなりました。これにより、第三章への移行の準備が整いました。次章では、契約の場所である天幕への入場について見ていきましょう。

第三部

契約の場所、幕屋への入場

(25:1-40:38)

シナイ山において、主はその民と契約を結びました。彼らにとって、主は唯一まことの神であり、契約の主でした。イスラエル人は主の御名に栄光を帰すために分け隔てられた人々でした。主とイスラエルの間には交わりの絆が存在しました。天幕は、人々が礼拝する際、主が常にそこに存在することを示すための場所でした。主は、御自身が人々の間に住まうことを知らせたかったのです。天幕は、主がご自身の存在を人々の中に表わす集会所であり、彼らの救い主なる神に近づくことができる特別な場所でした。

しかし、どのようにして罪深い人間が聖であり、義である神の御前に立つことができるのでしょうか。そもそも、主の一方的な恵みなしに、この交わりの絆は存在しえなかったのです。シナイ山での契約の数百年前に、主はすでに憐れみのうちに、アブラハムに彼の子孫を通して、地上のすべての国民が祝福されることを約束し、人類の救済計画を実行することを告げています。

アブラハムの子孫がイスラエルという国家に発展した時も、主はこの約束に忠実でした。主は彼らをエジプトの奴隷生活から救い出し、今度はアブラハムに約束した地へと彼らを導いているのです。主はシナイ山で契約を成立させることによって、彼らが祭司の国、聖なる国家となることを確信させたのです。主の一方的な恵みによってのみ、イスラエルの民は自らが主の大切な所有であると認識することができました。

しかし、シナイ山での契約は、アブラハムの時のような一方的な恵みだけの契約ではありませんでした。イスラエルは、主の人々として、主に対する忠誠を示すことが求められました。主は、御自身の前での聖さが何を意味するかを、戒めを通して示しました。また、神の下で仕える国としての社会的責任の原則も授けました。しかし、イスラエルは神の律法を完全に守ることができなかったのです。神の聖なる属性は、完璧さを求めましたが、彼らの実生活は完璧とはほど遠いものでした。

十の戒めに表わされる道德律法は、イスラエル人の罪を明確に示しました。彼らは、神の国家としての社会的要件を度々満たせなかったのです。そのため、主は幕屋の儀式を通じて、罪深い人々が聖なる神との交わりを維持できる方法を提供しました。

憐れみ深い神はここでも儀式の手順を設定しました。イスラエルは仲介者を通じて神に接することができました。神は祭司に仲介の役目を与えました。祭司、特に大祭司が主な仲介者となりました。人々のための取りなしは、幕屋に持ってこられる犠牲の捧げ物を通じて実施されました。主から、どの動物や穀物を捧げ物として持参すべきかの指示を人々は受けました。これらの捧げ物によって、罪深い人々と聖なる神との関係が修

復され、維持されたのです。(レビ記には、祭司が人々のために捧げるあらゆる種類の捧げ物の説明が記されています。)

用意されるべき幕屋の内装や祭司の服装は、恵み深い主と主に選ばれた民であるイスラエルとの関係を描写しています。主がこれらに関してモーセに出した指示については、次の七章にわたって記されていますが、それはイスラエルの礼拝が、主との契約関係を象徴するものであることを表わしています。主は主の人々の中に住まわれます。彼らは仲介者を通じて神に近づきます。彼らは、自分たちの多くの罪と失敗をつぐなう捧げ物を通じて、神との関係を示しました。これらの捧げ物は、主の御名を輝かせるためのものでした。天幕の建築やさまざまな約束を思い起こす際、私たちはイスラエルとしての主の礼拝について忘れないようにしましょう。これは、神の民が何世紀にもわたり約束の救い主を待ち望んでいる間、主ご自身によって定められたことだったのです。

イスラエルの旧約時代の儀式的礼拝は、神がひとり子を通して成就する、聖なる神と罪深い人間との完全な関係回復を象徴する型、描写、あるいは影でもありました。イエスがこの世に来られたとき「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」(ヨハネ 1:14) のです。このヨハネの言葉は、「主が私たちの間に天幕を張り、住まわれた。」という意味と同じです。イスラエルの天幕は、この罪深い世界でキリストの救いを示す描写です。

荒野の天幕で、神は雲の姿でご自身を示すことによって栄光を表しました。ヨハネもことばが人になったことについて、「私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」とヨハネ 1 章 14 節で続けて述べています。

イスラエル人の司祭による仲介と、血による犠牲は、ヘブル人への手紙 9 章 9 節によれば、「その時代のための比喻」とされています。ヘブル書には続けてこう記されています。「しかしキリストは、すでに成就したすばらしい事がらの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えれば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです。」(11,12 節)

旧約時代の捧げ物が、罪の償いにとって有効な手段となるのは、キリストがカルバリの丘で十字架にかけられた時に完成された救いを通してのみです。これはヘブル書全体、特に 8 章から 10 章での説明と一致しています。

最後に、イスラエルの幕屋は、救われた者たちと神との永遠の交わりを示す天国の幕屋を表していました。ヨハネは黙示録で「そのとき私は、御座から出る〔天の神の〕大きな声がこう言うのを聞いた。『見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて』」(黙示録 21:3) と記しています。「ともにおられて」という言葉は、やはり翻訳すると「天幕に住む」という言葉となります。

ヨハネはこの箇所が続けて、救われた人々の天国の様子を次のように描いています。「神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」(黙示録 21:3,4)

この象徴的な意味を念頭に、主がシナイ山で天幕の指示を出したことについて考えていきましょう。その建設と配置について、主ご自身が細部にわたって指示を出しています。主は人間の考えを何一つ加えませんでした。この幕屋もしくは「会見の天幕」(出エジプト記 27:21、40:2) は、主と主の選ばれた人々との間の契約関係を表現するものでした。これは、神のご臨在が見える形で表わし、人々が神の憐れみを信じ、神の選ばれた聖なる民として自らを捧げる誓いの証しだったのです。

出エジプト記 25 章

幕屋でのささげ物

- 1 【主】はモーセに告げて仰せられた。
- 2 「わたしに奉納物をささげるように、イスラエル人に告げよ。すべて、心から進んでささげる人から、わたしへの奉納物を受け取らなければならない。
- 3 彼らから受けてよい奉納物は次のものである。金、銀、青銅、
- 4 青色、紫色、緋色の撚り糸、亜麻布、やぎの毛、
- 5 赤くなめした雄羊の皮、じゅごんの皮、アカシヤ材、
- 6 燈油、そそぎの油とかおりの高い香のための香料、
- 7 エポデや胸当てにはめ込むしまめのうや宝石。
- 8 彼らがわたしのために聖所を造るなら、わたしは彼らの中に住む。
- 9 幕屋の型と幕屋のすべての用具の型とを、わたしがあなたに示すのと全く同じように作らなければならない。

主はモーセに、「わたしに奉納物をささげるように、イスラエル人に告げよ。」と言われました。ここで使われている「奉納物」を示すヘブル語を、そのまま訳すと「持ち上げられる贈り物」という意味になります。これが、所有物の中から持ち上げて取り分けることを意味していたのか、主に持って行く際に、祭司が物理的に持ち上げて捧げる物を意味していたのか、聖書研究者たちは明確に答えられていません。いずれにせよ、この奉納物は、人が自ら進んで捧げるべき物でした。捧げ物は誰かに強いられることなく、自らの自由意志で捧げる物という点を、イスラエル人の応答を見ていく際に、再度思い出すようにしましょう。

後に、神はこれらのものの使用方法を告げました。神は後にこれらのものがどのように使われるべきかを指示しています。主が指定した品々は手に入れるのが難しいものだったのでしょうか。

イスラエル人はどこからこれらを入手することができたのでしょうか。砂漠を、隊を組んで旅する商人の集団からでしょうか。まず、貴重な金属、布、宝石はエジプト人から受け取ったものでした。山羊の毛や雄羊の皮は豊富に所有していました。海牛またはじゅごんの皮は、そう遠くない距離にある紅海で手に入れることができました。アカシアの木は、宿営所の近くに生えていました。油、スパイス、香料は、砂漠を行き交う、隊を組んで旅をする商人集団から買うことができました。

この奉納物の目的は、ご自身の民の中で住まうことを約束した主のための聖所を作ることでした。この聖書箇所によると、主ご自身がモーセに、その幕屋と内装の絵図を実際に示したと記録しています。後にステパノがユダヤ人の議会の前で話した際に「それ〔あかしの幕屋〕は、見たとおりの形に造れとモーセに言われた方の命令どおりに、造られていました。」(使徒 7:44) と言っています。ヘブル書の著者は、神がモーセに山の上で見せた同じ図によると、神の聖所が「天にあるものの写しと影」(ヘブル 8:5) であると言及しています。幕屋は言い換えると、信者が主と過ごす、完全無欠な天の永遠の住まいを、地上において表現するためのものだったのです。

今日のキリスト教会の建造物は、主が旧約時代にモーセに与えた図と同様の形式で造られてはいません。新約時代の私たちは、礼拝において主の御前に近づく際に、イスラエル人に求められていた多くの儀式的な規約に縛られていないからです。キリストがこれらの儀式的な規約を、たった一度の十字架上であがないのみわざによって、廃棄してくださったからです。それでも私たちの教会は他の役目を負いつつ、主がご自身の民の所に来られる場所の表現として存在し続けています。主は、聖なるみことばと、尊い聖礼典を通してこれを実行しています。教会の多くは私たちの注意を十字架に向けます。主の祭壇の前で、会衆は祈りを通じて賛美と願いを主に捧げ、聖餐式で主の体と血を受け取ります。私たちも「神の家」と呼ぶ場所が、主の栄光を表わす場所であるようにすべきです。

時折「私たちは、たとえ家畜小屋でも神に祈ることができる」ので、「礼拝所のために多額のお金を使うのは馬鹿げている」と話す人の声が聞こえてくることがあります。このような意見に対しての私たちの答えは、「礼拝所は、神への私たちの愛と尊敬を真心から表わす場所であるべきです」となります。主は深い憐れみによって、自ら進んで極めて貴重な恵みの賜物を、キリストを信じる者に与えました。主は、今もクリスチャンにその賜物を与え続けています。各会衆は、主から与えられた富の初穂を捧げることで、主を讃えることができます。礼拝所の建築計画は、それぞれの会衆が主を心から愛し、自ら進んで奉納物を捧げるときに満たされます。礼拝所は、私たちの感謝の気持ちを、神の豊かな恵みに対して目に見える形で示す場所であるべきです。

契約の箱

- 10 アカシヤ材の箱を作らなければならない。長さは二キュビト半、幅は一キュビト半、高さは一キュビト半。
- 11 これに純金をかぶせる。それは、その内側と外側とにかぶせなければならない。その回りには金の飾り縁を作る。
- 12 箱のために、四つの金の環を鑄造し、それをその四隅の基部に取りつける。一方の側に二つの環を、他の側にほかの二つの環を取りつける。
- 13 アカシヤ材で棒を作り、それを金でかぶせる。
- 14 その棒は、箱をかつぐために、箱の両側にある環に通す。
- 15 棒は箱の環に差し込んだままにしなければならない。抜いてはならない。
- 16 わたしが与えるさとしをその箱に納める。
- 17 また、純金の『贖いのふた』を作る。長さは二キュビト半、幅は一キュビト半。
- 18 槌で打って作った二つの金のケルビムを『贖いのふた』の両端に作る。
- 19 一つのケルブは一方の端に、他のケルブは他方の端に作る。ケルビムを『贖いのふた』の一部としてその両端に作らなければならない。
- 20 ケルビムは翼を上の方に伸べ広げ、その翼で『贖いのふた』をおおうようにする。互いに向かい合って、ケルビムの顔が『贖いのふた』に向かうようにしなければならない。
- 21 その『贖いのふた』を箱の上に載せる。箱の中には、わたしが与えるさとしを納めなければならない。
- 22 わたしはそこであなたと会見し、その『贖いのふた』の上から、すなわちあかしの箱の上の二つのケルビムの間から、イスラエル人について、あなたに命じることをことごとくあなたに語ろう。



契約の箱

建物の設計は通常、構造そのものから始まり、次に内部の家具へと移行します。主を中心とした幕屋の計画はこの流れを逆にしています。この設計は、契約の箱、すなわち幕屋の中心的な要素から始まります。その他の部分はすべて、主の存在を人々の間で強調することを重点にして計画されました。

箱自体は金で覆われたアカシヤ材の長方形の箱でした。それはおよそ長さ $3\frac{3}{4}$ フィート (約 1.143m)、幅 $2\frac{1}{4}$ フィート (約 68.6cm)、高さ $2\frac{1}{4}$ フィート (約 68.6cm) でした ($2\frac{1}{2}$ キュビットの長さ、 $1\frac{1}{2}$ キュビットの幅、 $1\frac{1}{2}$ キュビットの高さ)。二つの金のリングが、箱の各側、下部の近くに固定されました。アカシヤ素材で金に覆われた棒は、箱が運ばれるためにこれらのリング(環)に挿入されました。棒は、箱を運んでいる人が箱に触ることのないように、常にリングに入れておくよう指示されました。

神はモーセに、この箱に「さとし」を入れるよう告げました。「さとし」とは、主ご自身が十戒を記録した二つの石の板に与えられた名前です。

箱のふたは「贖(あがな)いのふた」と呼ばれました。欽定訳聖書の翻訳はこれを「慈悲の席」と呼び、ヘブライ語では「覆う」という意味の言葉が使われています。この場所は大贖罪の日に大祭司が贖罪の血を振りかける場所だったので、「贖いのふた」という翻訳は適切だと言えます (レビ記 16:11-17)。大祭司が贖罪の血を振りかける行為は、人々の罪が覆われた、すなわち神の目から罪が取り除かれることを示しています。この覆いの下にあった十戒に対する違反は、すべて贖われるのです。

贖いのふた自体は純金で作られることになっており、それには二つの金のケルビムの姿が取り付けられることになっています。ケルビムは天使のような生き物です。神はエデンの庭に「命の木への道を守る」ためにケルビムを置きました (創世記 3:24)。ここでは二つのケルビムは互いに向かい合って、翼を広げてふたに向かい、その翼でふたを覆うようにしていました。

契約の箱と贖いのふたは、イスラエルの人々の中におけるエホバの王座、そしてイスラエルの神の足台となりました。ここに神の聖なる御心が、神ご自身の命令によって示され、保たれたのです。それは、罪を罰すると同時に、その罪を取り除く方法を人々に提供した神の恵み深い恩寵を示しました。

ダビデは契約の箱を「我々の神の足台」と呼びました (1 歴代記 28:2、詩 132:7 も参照)。ここで大祭司は「自分自身、彼の家族、そしてイスラエルの全体のコミュニティのための贖罪」を行いました (レビ記 16:17)。これは、我々の偉大な大祭司、イエス・キリストのなんと美しい型でしょうか。イエスは「しかしキリストは、すでに成就したすばらしい事からの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えれば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです。」 (ヘブル 9:11,12)

供えパンの机

- 23 机をアカシヤ材で作らなければならない。長さは二キュビト、幅は一キュビト、高さは一キュビト半。
- 24 これを純金でかぶせ、その回りに金の飾り縁を作り、
- 25 その回りに手幅のわくを作り、そのわくの回りに金の飾り縁を作る。
- 26 その机のために金の環を四個作り、その四隅の四本の足のところにその環を取りつける。
- 27 環はわくのわきにつけ、机をかつぐ棒を入れる所としなければならない。
- 28 棒をアカシヤ材で作し、これに金をかぶせ、それをもって机をかつぐ。
- 29 注ぎのささげ物を注ぐための皿やひしゃく、びんや水差しを作る。これらは純金で作らなければならない。
- 30 机の上には供えのパンを置き、絶えずわたしの前にあるようにする。

次に主がモーセに説明したのは、聖所の備品としての机でした。この机は「供えパンの机」と呼ばれています。この机は、長さ2キュビット、幅1キュビット、高さ1½キュビットとありますが、これは長さ3フィート(91.44cm)、幅1½フィート(45.72cm)、高さ2¼フィート(68.58cm)であり、アカシアの木で作られ、金で覆われていました。四つの足には、テーブルを運ぶための棒を通すリングが取り付けられ、パンを置くための金の器と、飲み物の供え物を注ぐための金のピッチャーが置かれることになりました。

レビ記には、このテーブルに置くべきパンに関する指示が書かれています。「あなたは小麦粉を取り、それで輪型のパン十二個を焼く。一つの輪型のパンは十分の二エパである。それを【主】の前の純金の机の上に、一並び六個ずつ、二並びに置く。それぞれの並びに純粋な乳香を添え、【主】への火によるささげ物として、これをパンの記念の部分とする。彼は安息日ごとに、絶えずこれを【主】の前に、整えておかなければならない。これはイスラエル人からのものであって永遠の契約である。これはアロンとその子らのものとなり、彼らはこれを聖なる所で食べる。これは最も聖なるものであり、【主】への火によるささげ物のうちから、彼の受け取る永遠の分け前である。」(レビ記 24:5-9)。

12のパンはイスラエルの12の部族を表しています。レビ記によれば、パンは定期的に「主の前に出される」ものであり、イスラエルが「永遠の契約」として提供する穀物の供え物でした。この節にはさまざまな解釈があります。その中にはかなり複雑なものもあります。最も単純な意味は、テーブルの上のパンがイスラエルに、主が民の中に臨在することを保証し、彼らの日々のパンに対する感謝の継続的な供え物を表していたこ

とでしょう。したがって、これらのものは契約の両当事者の間の絶え間ない交わりの象徴でした。

燭台

- 31 また、純金の燭台を作る。その燭台は槌で打って作らなければならない。それには、台座と支柱と、がくと節と花卉がなければならない。
- 32 六つの枝をそのわきから、すなわち燭台の三つの枝を一方のわきから、燭台の他の三つの枝を他のわきから出す。
- 33 一方の枝に、アーモンドの花の形をした節と花卉のある三つのがくを、また、他方の枝にも、アーモンドの花の形をした節と花卉のある三つのがくをつける。燭台から出る六つの枝をみな、そのようにする。
- 34 燭台の支柱には、アーモンドの花の形をした節と花卉のある四つのがくをつける。
- 35 それから出る一对の枝の下に一つの節、それから出る次の一对の枝の下に一つの節、それから出るその次の一对の枝の下に一つの節。このように六つの枝が燭台から出ていることになる。
- 36 それらの節と枝とは燭台と一体にし、その全体は一つの純金を打って作らなければならない。
- 37 それにともしび皿を七つ作る。ともしび皿を上げて、その前方を照らすようにする。
- 38 その心切りばさみも心取り皿も純金である。
- 39 純金一タラントで燭台とこれらのすべての用具を作らなければならない。
- 40 よく注意して、あなたが山で示される型どおりに作れ。

この節に記述されている燭台は、幕屋の中で唯一の光源でした。この燭台は、中央の直立する柱と、その両側から外向きに上へと伸びる三つの枝を持っており、全体で七つのランプを置くための部分がありました。柱と枝は、カップ状のアーモンドの花の模様に装飾されていました。これらの花は中央の柱に4つ、各枝に3つありました。

柱と枝の上に置かれた七つのランプは、油の容器から成り立っており、燭台の中で燃えるときに光を放つ突き出た灯心がついていました。ランプを扱うための器具、つまり灯心ばさみや使用済みの灯心を取り除くピンセット、トレイも燭台と同様に純金で作られていました。燭台の大きさは記されていません。古代の歴史家ヨセフスによると、燭台の高さは約5フィート（1.5メートル）で、各側の枝が約2フィート（60センチメートル）外側に伸びていたと言われています。

出エジプト記27章21節では、アロンとその息子たちが「夕方から朝まで、【主】の前にそのともしびを整えなければならない」こと、そして「これはイスラエル人が代々

守るべき永遠のおきて」とされることが語られています。(これらの家具が幕屋のどの位置にあったのかは、後で議論します。)

光は、しばしば聖書の中でキリスト、この世の真の光の象徴として使用されています。これは、イザヤ 9:2 やヨハネ 8:12 で示されています。キリストを信じる者は、イエスの光を反映させることが求められます (イザヤ 60:3、マタイ 5:14、使徒 13:47)。イスラエルは、主の契約の民として、地球上のすべての国々の前でその霊的な光を輝かせることを求められました。

数字の 7 は、聖書の中で頻繁に使用されています。預言者ゼカリヤは、7 つのランプを持つ金の燭台を、神の聖なる民の代表として見ました (ゼカリヤ 4)。新約聖書の 7 つの教会は、7 つの燭台として描写されています (黙示録 1:20)。闇の世界での光としてのイスラエルの役割は、イエス・キリストの教会に引き継がれています。

出エジプト記 26 章

幕屋の幕

- 1 幕屋を十枚の幕で造らなければならない。すなわち、撚り糸で織った亜麻布、青色、紫色、緋色の撚り糸で作り、巧みな細工でそれにケルビムを織り出さなければならない。
- 2 幕の長さは、おのおの二十八キュビト、幕の幅は、おのおの四キュビト、幕はみな同じ寸法とする。
- 3 その五枚の幕を互いにつなぎ合わせ、また他の五枚の幕も互いにつなぎ合わせなければならない。
- 4 そのつなぎ合わせたものの端にある幕の縁に青いひもの輪をつける。他のつなぎ合わせたものの端にある幕の縁にも、そのようにしなければならない。
- 5 その一枚の幕に輪五十個をつけ、他のつなぎ合わせた幕の端にも輪五十個をつけ、その輪を互いに向かい合わせにしなければならない。
- 6 金の留め金五十個を作り、その留め金で幕を互いにつなぎ合わせて一つの幕屋にする。
- 7 また、幕屋の上に掛ける天幕のために、やぎの毛の幕を作る。その幕を十一枚作らなければならない。
- 8 その一枚の幕の長さは三十キュビト。その一枚の幕の幅は四キュビト。その十一枚の幕は同じ寸法とする。
- 9 その五枚の幕を一つにつなぎ合わせ、また、ほかの六枚の幕を一つにつなぎ合わせ、その六枚目の幕を天幕の前で折り重ねる。
- 10 そのつなぎ合わせたものの端にある幕の縁に輪五十個をつけ、他のつなぎ合わせた幕の縁にも輪五十個をつける。
- 11 青銅の留め金五十個を作り、その留め金を輪にはめ、天幕をつなぎ合わせて一つとする。
- 12 天幕の幕の残って垂れる部分、すなわち、その残りの半幕は幕屋のうしろに垂らさなければならない。
- 13 そして、天幕の幕の長さで余る部分、すなわち、一方の一キュビトと他の一キュビトは幕屋をおおうように、その天幕の両側、こちら側とあちら側に、垂らしておかなければならない。
- 14 天幕のために赤くなめした雄羊の皮のおおいと、その上に掛けるじゅごんの皮のおおいを作る。

神の幕屋は、前章で述べられている家具を収納するためのもので、一時的な住居でした。ヘブライ語で「神の幕屋」という言葉は、場所を移動しながら住む砂漠の遊牧民の住居にも使われます。イスラエルの民は砂漠を旅しており、場所から場所へ移動してい

たため、神の幕屋は分解して、部品ごとに運び、再度組み立てられるように作られる必要がありました。この章で与えられる指示を考慮する際、これを念頭に置いておく必要があります。これらの指示を考慮すると、詳細であるにもかかわらず、聖書の学者たちは、神の幕屋の正確な仕様に関していくつか点で同意するのが難しいと感じています。この仕様に関する様々な絵やレプリカ模型を見ても、すべての点で同じものは2つとしてありません。

装飾カーテンは枠の内側に吊るされたのか、外側にかけられたのか、このカーテンの上部だけが見えたのか？枠は、装飾カーテンが外側に掛けられた場合、少なくとも側面で部分的に見ることができるように、四角形で形成されていたのか？それとも、フレームは固体の仕切りで形成されていたのか？外側のカバーは、尖った形や切妻を形成するためにポールに吊るされたのか？それとも、フレームの上部に単純に平らに伸ばされたのか？装飾カーテンにはどのようなパターンが織り込まれていたのか？

これらは専門家を悩ます質問の一部に過ぎません。しかし、指示はモーセにとって十分に明確でした。なぜなら、主は山の上で、彼に分かるような正確なパターンを示したからです。ここでの簡潔な説明は、主がモーセに与えた指示の私たち独自の理解に基づいていますが、一部の読者は異なる説明を好むかもしれません。

この章で最初に述べられているカーテンは装飾カーテンです。これは、それぞれ 42 フィートの長さ（約 12.8m）と 6 フィートの幅（約 1.8m）の 10 枚のカーテンから組み立てられました。連結すると、60 フィート×42 フィートのサイズ（約 18.3m×12.8m）の一つの掛け布になりました。この掛け布の布は、白いリネンと青、紫、赤い生地 of 美しいタペストリーであり、ケルビムの図が生地に織り込まれていました。白は聖さを象徴し、青は空の色、紫は王権を意味し、紅は生命が宿る血の色です。ケルビムは神の天の使いである天使を表しています。

このカーテンは、神の幕屋を形成するために枠の上に最初に取り付けられるものでした。私たちは、枠の壁がしっかりと合わさるように連結していたことを信じています。そのため、神の幕屋の内部から見ると、装飾カーテンの天井だけが見えました。このテーマに関するすべての専門家の中で、ウンベルト・カスストという名前の男が彼の『出エジプト記に関する注解』（ページ 351）で最も権威ある声で語っているようです。

これが彼の説明です。この装飾カーテンを形成する 10 枚のカーテンは、金の留め具で固定されたループを使用して連結されました。60 フィートのカーテン（約 18.3m）は、神の幕屋の背面に垂れ下がる必要があり、このカーテンに関しては、前部は開いている必要がありました。

カスストは、上部が平らな外観を持っていたという説明を好むようです。この装飾カーテンの上には、いくつかの追加の屋根カバーが伸びていました。最初のものは、当時のテントに一般的な材料である山羊の毛で作られました。これも小さなカーテンで組み立てられ、青銅の留め具と一緒に固定され、66 フィート×45 フィートの大きなカバ

ー (約 20.1m x 13.7m) を形成しました。このカーテンは、装飾カーテンを完全に覆い、前面にも保護スクリーンとして垂れ下がることができました。それは、外側でロープとペグでしっかりと固定されていました。

この山羊の毛のカバーの上には、赤く染められた雄羊の皮とじゅごんの皮の 2 つの外側のカバーがありました。次に、この章でこれらのカーテンが吊るされる予定の枠の説明が続きます。

幕屋の枠組

- 15 幕屋のために、アカシヤ材で、まっすぐに立てる板を作る。
- 16 板一枚の長さは十キュビト、板一枚の幅は一キュビト半。
- 17 板一枚ごとに、はめ込みのほぞ二つを作る。幕屋の板全部にこのようにしなければならない。
- 18 幕屋のために板を作る。南側に板二十枚。
- 19 その二十枚の板の下に銀の台座四十個を作らなければならない。一枚の板の下に、二つのほぞに二個の台座を、他の板の下にも、二つのほぞに二個の台座を作る。
- 20 幕屋の他の側、すなわち北側に、板二十枚。
- 21 銀の台座四十個。すなわち一枚の板の下に二個の台座。他の板の下にも二個の台座。
- 22 幕屋のうしろ、すなわち、西側に、板六枚を作らなければならない。
- 23 幕屋のうしろの両隅のために板二枚を作らなければならない。
- 24 底部では重なり合い、上部では、一つの環で一つに合うようになる。二枚とも、そのようにしなければならない。これらが両隅となる。
- 25 板は八枚、その銀の台座は十六個、すなわち一枚の板の下に二個の台座、他の板の下にも二個の台座となる。
- 26 アカシヤ材で横木を作る。すなわち、幕屋の一方の側の板のために五本、
- 27 幕屋の他の側の板のために横木五本、幕屋のうしろ、すなわち西側の板のために横木五本を作る。
- 28 板の中間にある中央横木は、端から端まで通るようにする。
- 29 板には金をかぶせ、横木を通す環を金で作らなければならない。横木には金をかぶせる。
- 30 あなたは山で示された定めのおりに、幕屋を建てなければならない。

幕屋の枠組はアカシア材で作られ、金で張られていました。各板の長さは 15 フィート (約 457cm)、幅は 2¼ フィート (約 68cm) でした。各板の下部には銀のベースにはまる突起がありました。これらの銀のベースは約 95 ポンド (約 43kg) の重さがあり、フレームをしっかりと固定するのに十分でした。20 枚の板で各側が形成され、後部に

は6枚の板が設置されていました。前の部分は板がなく、聖所の入り口として機能しました。板の数に基づいて、幕屋の全体的な寸法を知ることができます。すなわち、長さ45フィート（約13.7m）、幅15フィート（約4.5m）、高さ15フィート（約4.5m）です。（聖書の用語で測定すると、30キュビット×10キュビット×10キュビットになります。）この章で述べられている板の大きさと数からのみ、幕屋の全体的な寸法を計算することができます。ソロモンの神殿の半分の大きさで、神殿の部分には比例して高い壁もありました。

幕屋の角には、構造に追加の強度を持たせるための追加の板が取り付けられました。各側面と背面に、金で覆われたアカシア材の5本のバーが配置されており、これらは板に取り付けられた金のリングにはめられていました。カッスートは「バーの配置方法は議論の余地がある」と述べています（『出エジプト記の注解』、358ページ）。バーが幕屋の内側にあるのか外側にあるのか、どの解説者も、枠組上での正確な位置について異なる意見を展開しています。ここでも再び、モーセ自身が完成品の正確な模型を目の当たりにしていたため、彼はその詳細を確信していました。

幕屋の北と南の側面、さらに西側の背面が言及されており、これらの記述から、板のない側面は東側であったことが明らかです。

我々の手にする情報は、聖書の筆者の意図を鮮明に伝えています。これは堅固で堂々とした外観を持ちながらも、場所から場所へと容易に移動できる実用的な構造です。その全体的な概念の知恵に驚かざるを得ません。その計画は明らかに神によるもので、人の手によるものではないでしょう。

垂れ幕

31 青色、紫色、緋色の撚り糸、撚り糸で織った亜麻布で垂れ幕を作る。これに巧みな細工でケルビムを織り出さなければならない。

32 これを、四つの銀の台座の上に据えられ、その鉤が金でできている、金をかぶせたアカシア材の四本の柱につける。

33 その垂れ幕を留め金の下に掛け、その垂れ幕の内側に、あかしの箱を運び入れる。その垂れ幕は、あなたがたのために聖所と至聖所との仕切りとなる。

34 至聖所にあるあかしの箱の上に『贖いのふた』を置く。

35 机を垂れ幕の外側に置き、その机は幕屋の南側にある燭台と向かい合わせる。その机を北側に置く。

36 天幕の入口のために、青色、紫色、緋色の撚り糸、撚り糸で織った亜麻布で刺繍をした幕を作る。

37 その幕のためにアカシア材の柱五本を作り、これに金をかぶせる。その鉤も金で、また、それらの柱のために青銅の台座五つを鑄造する。

幕屋の内部を二つの部分に分けるためには、カーテン、つまり垂れ幕が必要でした。この垂れ幕は、1 節で述べられている最初の垂れ幕と同じ素材とデザインで作られることとされ、美しい色彩と素材に織り込まれたケルビムの図像があることとされました。この垂れ幕は、二つの区画に分ける場所である 4 本の柱上に金のフックで吊るされることとされました。これらの柱は、幕屋の入口から 30 フィート（約 914cm、20 キュビット）の距離に配置され、幕屋を内部の部屋に分けることとされました。内部の部屋は完璧な立方体で、15 フィート×15 フィート×15 フィート（約 457cm×457cm×457cm）でした。（聖書用語では 10 キュビット×10 キュビット×10 キュビット。）外部の部屋は長方形で、30 フィート×15 フィート×15 フィート（約 914cm×457cm×457cm）でした。（聖書用語では 20 キュビット×10 キュビット×10 キュビット）

二つの部屋の比率は、これらの節では示されていないため、33 節の記述から判断される必要があります。「その[仕切りの]垂れ幕を留め金の下に掛け、…」とあり、ウンベルト・カーストは、「前の留め金（最初のカバー上）の前に五つの垂れ幕が置かれることになっており、それぞれが四キュビットの幅を持つとされているので、垂れ幕の後ろには、10 キュビット×10 キュビット、10 キュビットの高さの空間が残ることがわかります」と説明しています（『出エジプト記の注解』、360 ページ）。他の学者も、この二つの部屋の大きさについて同意していますが、その結論をどのようにして導き出したかの説明はしていません。これらの比例は、ソロモンの神殿のものと一致しており、その神殿はこの二倍の大きさでした。

内側の垂れ幕は聖所と至聖所を分けていました。至聖所には契約の箱が収められており、聖所には北側に供え物のパンの台、南側にランプスタンドがありました。

幕屋の東側の入口には、それほど精巧でない別のヴェールがありました。これも金のフックで吊るされていました。この入口には 5 本の柱を置くことになっていました。

至聖所（「聖なる聖所」という意味）は、大祭司が一年に一度、大贖罪の日に「自分と、自分の家族、それにイスラエルの全集会のために贖い」を行うために入った幕屋の一部でした（レビ記 16:17）。

聖所と至聖所間のカーテンは、罪を犯した人間が、贖罪の血を通さなければ、最も神聖な神に近づくことはできないことを示していました。キリストが十字架上で無実の死を遂げたとき、エルサレムの神殿にあるこの垂れ幕は「上から下まで真っ二つに裂け」ました（マタイ 27:51）。イエスの贖罪の犠牲を通して、私たちは「神との平和」を受け取り、「いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた」ことによって神とのつながりを持っています（ローマ 5:1, 2）。「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方」です（エペソ 2:14,15）。「こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。イエスはご自分の肉体

という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。また、私たちには、神の家をつかさどる、この偉大な祭司があります。そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。」(ヘブル 10:19-22)。

これらの節によって、聖書は、礼拝の象徴的な意味を、どれほど美しく描写していることでしょう。そして同時に、新約時代のクリスチャンとしての私たちにとっての利点を、どれほど見事に示していることでしょう！

至聖所の寸法には特別な意味があります。数字の 10 は完全さを象徴します。10 キュビット×10 キュビット×10 キュビットの完璧な立方体としての至聖所は、天のエルサレムの像であり、その「都は四角で、その長さとは幅は同じである」(黙示録 21:16) とされています。この神の都は神の住まいであり、「神は彼ら〔人々〕とともに住み」ます。

(黙示録 21:3) この時代において、正方形は全世界を象徴するものとされていました。同様に、神の教会も、全世界を受け入れるためにイスラエルにおいて始められました。

聖書の一つの部分は他の部分を補完します。旧約聖書は型や影を提示しています。新約聖書はその具現化や真実そのものを示しています。キリストにある贖われた者たちに、主は言います。「しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。」(ヘブル 12:22,23)。事実、旧約時代の信者たちも、天国の永遠の住まいの一部を先取り体験していたのです！

聖所にはテーブルと燭台があり、また後に説明するように香壇も備えられていました。この場所は、祭司がその職務を果たすための特別な範囲として制限され、燭台の灯は常に保たれていました。安息日ごとに臨在のパンがここに置かれました。祭司たちは、毎朝毎晩、信者たちの祈りの象徴として、ここで香を焚きました。これは、装飾的な垂れ幕によって外からの視線やアクセスから隔てられていました。

旧約時代の信者たちが、こうして礼拝所に関する詳細な設計図を受け取ったことについて考えると、この内容が、イスラエルが主の契約の民として神のもとへ向かう道筋を見事に描いていることに驚かされます。同時に、私たちが新約時代に、私たちの大祭司であるイエス・キリストを通じて、神に近づけられ、「一つの御霊において、父のみもとに近づく」(エペソ 2:18) ことができる点について思い出すにはいられません。「イエスを通じて」とヘブル書の筆者が私たちに励ましているように、「善を行うことと、持ち物を人に分けることとを怠ってはいけません。神はこのようないけにえを喜ばれるからです。」(ヘブル 13:15, 16)。

出エジプト記 27 章

焼き尽くす献げ物の祭壇

- 1 祭壇をアカシヤ材で作る。その祭壇は長さ五キュビト、幅五キュビトの四角形でなければならない。高さは三キュビトとする。
- 2 その四隅の上に角を作る。その角は祭壇の一部でなければならない。青銅をその祭壇にかぶせる。
- 3 灰を取るつぼ、十能、鉢、肉刺し、火皿を作る。祭壇の用具はみな、青銅で作らなければならない。
- 4 祭壇のために、青銅の網細工の格子を作り、その網の上の四隅に、青銅の環を四個作る。
- 5 その網を下方、祭壇の出張りの下に取り付け、これを祭壇の高さの半ばに達するようにする。
- 6 祭壇のために、棒を、アカシヤ材の棒を作り、それらに青銅をかぶせる。
- 7 それらの棒は環に通されなければならない。祭壇がかつがれるとき、棒は祭壇の両側にある。
- 8 祭壇は中をからにして板で作らなければならない。山であなたに示されたところにしたがって、彼らはこれを作らなければならない。

この節で述べられている祭壇は、幕屋の入口前の中庭の東側に設置されたものでした。その基本構造は、青銅で覆われたアカシヤ材の中空の枠で、7½フィート四方（約 2.2m 四方）と高さ 4½フィート（高さ約 1.4 m）で構成されていました。（5 キュビット四方、高さ 3 キュビット）

祭壇の中央には青銅の網があり、この網の四隅には青銅の輪が取り付けられていました。祭壇の半分の高さには、全周にわたって柵も設けられていました。

しかし、学者たちの間で、この網の詳しい意味についての意見が分かれています。私たちの解釈では、この項目は祭壇の内部にあり、犠牲の供物が置かれる鉄格子ではなく、むしろ柵の下に垂直に取り付けられた青銅の網目模様のものであったと思われます。言い換えれば、この鉄格子は柵を支えており、四方すべての側面が地面に接していました。この網目の構造が、下からの空気の流入を可能にし、祭壇の火への通気を提供していました。その結果、祭壇の下部は上部よりも各側面でより広く設計されていました。この柵は、祭司が祭壇での役務をより円滑に行えるように設計されていました。

祭壇を運ぶための棒が指定され、それは青銅の輪に挿入されるよう設計されていました。また、さまざまな青銅の器具、例えばシャベル、肉用のフォーク、振りかけ用の鉢、

火の鍋などが挙げられています。祭壇は、簡単に運べるように中空にすることになっていましたが、使用中には土、砂利、石を入れることができました。

礼拝において祭壇は、聖書に記されているように、その始まりから重要な役割を果たしてきました。我々が知るカインとアベルは、主に供物を捧げました。彼らの供物のための場所として、何らかの種類の祭壇が使用されていたはずですが。箱舟から出た後のノアの最初の行動は、主のために祭壇を築き、それに焼き尽くす犠牲を捧げることでした。これは彼の礼拝の表現でした。創世記 12:8 には、アブラムが「【主】のため、そこに祭壇を築き、【主】の御名によって祈った。」と記されています。幕屋の中庭における祭壇は、レビ記に記されている多くの動物の犠牲を捧げる場所でした。具体的には、日常の礼拝のための焼き尽くす犠牲、特別な機会のための供物、感謝と共有の供物、贖罪と清めのための罪の供物、そして賠償を必要とする特定の罪のための過失の供物（レビ記 1-7 章を参照）です。レビ記 6:12 によれば、祭壇の火は絶え間なく燃え続けていました。イスラエルが野営地にいて、礼拝のために幕屋が設置されている間、その火は絶えることがありませんでした。

祭壇の角には特別な意味がありました。聖書は主を岩、盾、救いの角としてほめ讃えています（詩篇 18:2）。サムエルの母ハンナは主を賛美し、以下のように歌いました。「私の心は【主】を誇り、私の角は【主】によって高く上がります。」（1 サムエル 2:1）。バプテスマのヨハネの父ゼカリヤも主を讃える言葉の中で、次のように宣言しました。「救いの角を、われらのために、しもベダビデの家に立てられた。」（ルカ 1:69）。角がある動物がその角を防御の武器として使うように、角は主による保護の象徴として考えられていました。誰かが偶然人を殺してしまった場合、彼は祭壇の角に逃げて、その角にしがみつき、報復からの保護を求めることができました。

イスラエルの祭壇は、主の絶え間ない慈悲と赦しを人々に保証するための絶え間ない犠牲の場所を提供しました。一方、新約時代のクリスチャンである私たちは、救い主イエス・キリストに赦しの保証を見いだします。エペソ 5:2 には、キリストが私たちを愛し、「私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました」と記されています。イスラエルの人々が主の祭壇に供物を捧げて神への感謝を示したように、パウロはローマのキリスト者たちを次のように励ましました。「あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。」（ローマ 6:13,14）。

犠牲の祭壇は、イスラエルに贖罪の血と初穂の奉納、神の恵みと、その恩寵に対する信者の応答を思い起こさせました。キリストの十字架は、キリストの尊い血を通じての贖いの代価を思い起こさせ、私たちの罪のために死んだキリストのために生きるよう、私たちを励ましています。

中庭

- 9 幕屋の庭を造る。南側に面して、庭の掛け幕を、その側のための長さ百キュビトの撚り糸で織った亜麻布を、張る。
- 10 柱は二十本、その二十個の台座は青銅で、柱の鉤と帯輪は銀とする。
- 11 同じように、北に面して、その長さで、長さ百キュビトの掛け幕とする。柱は二十本、その二十個の台座は青銅で、柱の鉤と帯輪は銀とする。
- 12 また、西に面して庭の幅には五十キュビトの掛け幕、その柱十本、その台座十個とする。
- 13 前面の東に面する庭の幅も五十キュビト。
- 14 片側に寄せて、十五キュビトの掛け幕と、その三本の柱、その三個の台座とする。
- 15 他の片側にも十五キュビトの掛け幕と、その三本の柱、その三個の台座とする。
- 16 庭の門には、青色、紫色、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を使った長さ二十キュビトの刺繍した幕と、その四本の柱、その四個の台座とする。
- 17 庭の周囲の柱はみな、銀の帯輪を巻きつけ、その鉤は銀、台座は青銅とする。
- 18 この庭は、長さ百キュビト、幅は五十キュビトに五十キュビト、高さ五キュビト、幕は撚り糸で織った亜麻布、その台座は青銅とする。
- 19 幕屋の奉仕に用いるすべての用具、すべての釘、庭のすべての釘は青銅とする。
- 20 あなたはイスラエル人に命じて、燈火用に上質の純粋なオリーブ油を持って来させ、ともしびを絶えずともしておかなければならない。
- 21 アロンとその子らは、あかしの箱の前の垂れ幕の外側にある会見の天幕で夕方から朝まで、【主】の前にそのともしびを整えなければならない。これはイスラエル人が代々守るべき永遠のおきてである。

幕屋を取り囲む中庭は、150 フィート（約 45.7 m）の長さで 75 フィート（約 22.9 m）の幅の長方形でした。（100 キュビットの長さ、50 キュビットの幅）これは、アメリカのフットボール場の長さと比較すると、その約半分の長さです。中庭は、高さ 5½ フィート（約 1.7 m）の白いリネンのカーテンによって囲まれていました。長辺には 20 本の柱が、短辺には 10 本の柱が立てられていました。柱は青銅で作られ、青銅の台座にセットされていました。銀のフック、紐、青銅のピンで吊り下げをしっかりと固定していました。中庭の入口は東側にあり、青、紫、緋色の糸と細く撚ったリネンで作られた 30 フィート（約 9.1m）の入り口が取り付けられていました。夜から朝まで幕屋の灯りをともしためには、人々が供給する最高品質の澄んだオリーブオイルが必要でした。

中庭内には、東の入口の方向に、この章の初めに記述されている焼き尽くしの祭壇の場所や、祭司たちが幕屋に入る前に身を洗うための青銅の洗い鉢がありました。契約の

民だけが、供物や犠牲を主に捧げるために中庭に入ることが許されていました。聖所に入ることができるのは祭司だけでした。そして、大祭司だけが至聖所に入ることができ、これは年に一度、大贖罪の日にのみ許されていました。

以下はドイツ語の作品からの自由訳です。幕屋とその中庭に描かれた三つの偉大な時代との比較が示されているため、興味深いものです。

幕屋は、人々の中における主の住居でした。イスラエル人は、契約の民として、幕屋の中庭に入ることができ、神に特に近い存在であるという点で、他のすべての国民よりも優れていました。しかし、すべてのイスラエル人が幕屋自体に入ることができたわけではありませんでした。主のすぐ近くに行くことは、祭司の仲介を通じてのみ許されていました。

祭司たちは聖所に入ることができましたが、大祭司だけが年に一度、幕を越えて至聖所に入ることができました。大祭司が贖罪の蓋に血を振りかけるとき、それは新約時代においてキリストの贖罪の血を通じて完全に達成されることになる、神と人間との和解を示していました。

こうして、三つの部分からなる幕屋を、私たちは見ることができます。一つ目の部分は中庭です。これは主の祝福を仲介する司祭をまだ必要とした旧約時代の信者の集会を表しています。二つ目の部分である聖所は、新約時代の教会を表し、キリストがみわざを成就したために、すべてのキリスト者が司祭となり、主に直接近づくことができることを示しています。三つ目の部分である至聖所は、主と完全な交わりを永遠に持つことができる天国の集会を表します。

これは確かに興味深い比較です。私たちが神の聖なる美しさの中で主を礼拝し、言葉と聖餐を通してその絶え間ない存在を確信しているとき、私たちは黙示録の最後の節の言葉を思い出します。「これらのことをあかしする方がこう言われる。『しかり。わたしはすぐに来る。』アーメン。主イエスよ、来てください。主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。アーメン。」(22:20、21)。

出エジプト記 28 章

祭司の衣服

- 1 あなたは、イスラエル人の中から、あなたの兄弟アロンとその子、すなわち、アロンとその子のナダブとアビフ、エルアザルとイタマルを、あなたのそばに近づけ、祭司としてわたしに仕えさせよ。
- 2 また、あなたの兄弟アロンのために、栄光と美を表す聖なる装束を作れ。
- 3 あなたは、わたしが知恵の霊を満たした、心に知恵のある者たちに告げて、彼らにアロンの装束を作らせなければならない。彼を聖別し、わたしのために祭司の務めをさせるためである。
- 4 彼らが作らなければならない装束は次のとおりである。胸当て、エポデ、青服、市松模様の長服、かぶり物、飾り帯。彼らは、あなたの兄弟アロンとその子らに、わたしのために祭司の務めをさせるため、この聖なる装束を作らなければならない。
- 5 それで彼らは、金色や、青色、紫色、緋色の撚り糸、それに亜麻布を受け取らなければならない。

主はすべての国々の中からイスラエルを選び、特別なものとされました。主はイスラエル人に、ご自分の聖なる民として生きるよう望んでいました。彼らは聖なる神との交わりの中で生きるべきでした。しかし、イスラエルは直接主に近づくことを恐れました。主がシナイ山で十戒を授けた際、『民はみな、雷と、いなずま、角笛の音と、煙る山を目撃した。民は見て、たじろぎ、遠く離れて立った。』（出エジプト 20:18）と記されています。彼らはモーセに仲介者として介入してほしいと頼みました。

モーセが主からの律法を受け取る仲介者として役割を果たす一方、その律法は旧約時代の礼拝で民のための別の仲介方法も定めていました。それは祭司制度を通じて実現されました。これはアロンの家族の指導のもと、レビ族が担当することとなりました。この章で、主はモーセにアロンと彼の四人の息子たち、ナダブ、アビフ、エルアザル、イタマルを前に出し、祭司として仕えるよう命じました。アロンは大祭司として仕え、この役職は彼の家族を通して継続されることとなりました。

この章では主に、祭司が役職において身につけるべき衣服の指示について述べられています。これらの衣服は熟練した職人によって、金や青、紫、緋色の糸と細かいリネンを用いて織られることとなっていました。大祭司の衣服の個々の項目は、以下の節で詳しく述べられています。

エポデ

- 6 彼らに金色や、青色、紫色、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を用い、巧みなわざでエポデを作らせる。
- 7 これにつける二つの肩当てがあって、その両端に、それぞれつけられなければならない。
- 8 エポデの上に結ぶあや織りの帯は、エポデと同じように、同じ材料、すなわち金色や、青色、紫色、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布で作る。
- 9 二つのしまめのうを取ったなら、その上にイスラエルの子らの名を刻む。
- 10 その六つの名を一つの石に、残りの六つの名をもう一つの石に、生まれた順に刻む。
- 11 印を彫る宝石細工師の細工で、イスラエルの子らの名を、その二つの石に彫り、それぞれを金のわくにはめ込まなければならない。
- 12 その二つの石をイスラエルの子らの記念の石としてエポデの肩当てにつける。アロンは【主】の前で、彼らの名を両肩に負い、記念とする。
- 13 あなたは金のわくを作り、
- 14 また、二つの純金の鎖を作り、これを編んで、撚ったひもとし、この撚った鎖を、先のわくに、取りつけなければならない。

エポデは大祭司の衣服の中で最も際立った部分でした。後の旧約聖書の記述では、「エポデ」と言及されるたびに、それはイスラエルが悩んでいる何らかの問題や疑問に対して主から答えを受け取る、すなわち「主に尋ねる」大祭司の特別な力と関連しています。エポデがこのような意義を持っていたのは、ウリムとトゥミムがその胸当てに取り付けられていたからです。これらについては後で説明します。

エポデは、聖所のカーテン製造に使われたのと同じ素材で作られたウェストコートやエプロンのようなものでした。しかし、ケルビムの図像が織り込まれている代わりに、金の糸で織りなされていました。エポデは、前と後ろの2つの部分から成り、肩の部分で結ばれ、ベルトで腰の周りで固定されていました。

それぞれの肩のストラップには、金で取り付けられたオニキスの石があり、12のイスラエルの部族の名前が彫られていました。各石には6つずつの名前が刻まれていました。これは、祭司が主の前で人々を代表していることを示しています。名前は彼らの誕生の順序で刻まれていました。歴史家ヨセフスは、これが六人の兄たちの名前が右の肩に、そして六人の弟たちの名前が左の肩にあったことを意味すると考えています。

肩の部分には2つの「純金で編み上げられた鎖」が取り付けられており、それはロープのように織られていました。それらの目的は、胸当てを上からエポデに取り付けることでした。次に胸当てについて述べられています。

胸当て

- 15 あなたはさばきの胸当てを、巧みな細工で作る。それをエポデの細工と同じように作らなければならない。すなわち、金色や、青色、紫色、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布で作らなければならない。
- 16 それは、四角形で、二重にし、長さは一あたり、幅は一あたりとしなければならない。
- 17 その中に、宝石をはめ込み、宝石を四列にする。すなわち、第一列は赤めのう、トパーズ、エメラルド。
- 18 第二列はトルコ玉、サファイヤ、ダイヤモンド。
- 19 第三列はヒヤシンス石、めのう、紫水晶、
- 20 第四列は緑柱石、しまめのう、碧玉。これらを金のわくにはめ込まなければならない。
- 21 この宝石はイスラエルの子らの名によるもので、彼らの名にしたがい十二個でなければならない。十二部族のために、その印の彫り物が一つの名につき一つずつ、なければならない。
- 22 また編んで撚った純金の鎖を胸当てにつける。
- 23 胸当てに、金の環二個をつけ、その二個の環を胸当ての両端につける。
- 24 この二筋の金のひもを胸当ての両端の二個の環につける。
- 25 その二筋のひもの他の端を、先の二つのわくにつけ、エポデの肩当てに外側に向くようにつけなければならない。
- 26 ほかに二個の金の環を作り、これを胸当ての両端、すなわち、エポデの前に来る胸当ての内側の縁につける。
- 27 ほかに二個の金の環を作り、これをエポデの二つの肩当ての下端の外側に、すなわち、エポデのあや織りの帯の上部の継ぎ目に接した面の上につける。
- 28 胸当ては、青ひもで、その環のところをエポデの環に結びつけ、エポデのあや織りの帯の上にあるようにする。胸当てがエポデからずり落ちないようにしなければならない。
- 29 アロンが聖所に入るときには、さばきの胸当てにあるイスラエルの子らの名をその胸の上に載せ、絶えず【主】の前で記念としなければならない。
- 30 さばきの胸当てには、ウリムとトンミムを入れ、アロンが【主】の前に出るときに、それがアロンの胸の上にあるようにする。アロンは絶えず【主】の前に、イスラエルの子らのさばきを、その胸の上に載せる。

胸当てはエポデと同じ素材で作られていましたが、二重に折りたたむことで強度を増し、ポケットのような袋を形成していました。その大きさは約 9 インチ四方、すなわち約 22.9cm 四方です。この胸当てには、12 の宝石が、3 つずつの 4 列に固定されていました。それぞれの石には、イスラエルの 12 部族の 1 つの名前が彫られていました。使

用される宝石の種類は個別に指定され、このことは主が胸当ての製作に際して非常な心配りをしたことを示唆しています。いくつかの石の名前の意味については、専門家の意見が分かります。

前述のとおり、胸当ては、純金の編み鎖を用いてエポデの肩の部分に取り付けられていました。胸当ての下部でも同様の方法で、祭司の腰ベルトに取り付けられていました。

上記の聖書箇所によれば、「ウリムとトンミム」は、アロンが「【主】の前に出るときに、それがアロンの胸の上にあるようにする」(出エジプト 28:30) ように、胸当てに入れられていました。今日に至るまで、ウリムとトンミムが具体的に何であったのか、聖書学者たちも確定していません。これらの言葉は、ヘブライ語の「光」や「正しさ」の複数形に似ていますが、この解釈に関する完全な合意は得られていません。胸当ての一部であった以外の具体的な説明は与えられていないのです。最も納得がいくとされる見解は、これらの物体が胸当てのポーチ状のポケットに入れられた石であった可能性があるというものです。時には、ウリムとトンミムを介して得られる主の回答が、くじ引きの形で行われることがあったようです。

また上記の聖書箇所には、「アロンは絶えず【主】の前に、イスラエルの子らのさばきを、その胸の上に載せる。」とも記述されています。ウリムとトンミムの使用方法に関する多くの手順は謎のままですが、その使用に関する後の聖書の参照から、いくつかの情報を収集することができます。

- 民の頭である人物だけが、祭司を通じて主に問い合わせをすることができました(ヨシュア《民数記 27:21》、サウル《I サムエル記 14:37》、ダビデ《I サムエル記 23:2》)。

- 質問は、イエスまたはノーの答えのみが可能となるように構成されなければなりませんでした。主の答えは一度に一つの質問に対してのみ与えられました。

- ある状況では(物事が不順序である場合や、何らかの理由で正しくない場合)、主はウリムとトンミムを通して答えを与えるのを拒否しました。(I サムエル 14:37)

時折、ウリムとトンミムについての具体的な言及はなく、エポデの使用や祭司を通じての「主に問い合わせる」行為のみが言及されています。ダビデの時代以降、その使用に関する参照は見当たりません。

祭司のその他の衣服

31 エポデの下に着る青服を、青色の撚り糸だけで作る。

32 その真ん中に頭を通す口を作る。その口の周囲には、織物の縁をつけ、よろいのえりのようにし、ほころびないようにしなければならない。

33 そのすそに、青色、紫色、緋色の撚り糸で、ざくろを作り、そのすその回りにこれをつけ、その回りのざくろの間に金の鈴をつける。

- 34 すなわち、青服のすその回りに金の鈴、ざくろ、金の鈴、ざくろ、となるようにする。
- 35 アロンはこれを務めを行うために着る。彼が聖所に入り、【主】の前に出るとき、またそこを去るとき、その音が聞こえるようにする。彼が死なないためである。
- 36 また、純金の札を作り、その上に印を彫るように、『【主】への聖なるもの』と彫り、
- 37 これを青ひもにつけ、それをかぶり物につける。それはかぶり物の前面に来るようにしなければならない。
- 38 これがアロンの額の上にあるなら、アロンは、イスラエル人の聖別する聖なる物、すなわち、彼らのすべての聖なるささげ物に関しての咎を負う。これは、それらの物が【主】の前に受け入れられるために、絶えずアロンの額の上になければならない。
- 39 亜麻布で市松模様の長服を作り、亜麻布でかぶり物を作る。飾り帯は刺繍して作らなければならない。
- 40 あなたはアロンの子らのために長服を作り、また彼らのために飾り帯を作り、彼らのために、栄光と美を表すターバンを作らなければならない。
- 41 これらをあなたの兄弟アロン、および彼とともにいるその子らに着せ、彼らに油をそそぎ、彼らを祭司職に任命し、彼らを聖別して祭司としてわたしに仕えさせよ。
- 42 彼らのために、裸をおおう亜麻布のももひきを作れ。腰からももにまで届くようにしなければならない。
- 43 アロンとその子らは、会見の天幕に入るとき、あるいは聖所で務めを行うために祭壇に近づくとき、これを着る。彼らが咎を負って、死ぬことのないためである。これは、彼と彼の後の子孫とのための永遠のおきてである。

細かいリネンのチュニックは、大祭司の外衣を完璧にしていました。これは足首までの長さがあり、ローブの下に着る長袖の衣服でした。普通の祭司もこの白いチュニックを着用するように指示されていました。サッシュとヘッドバンドも着用するよう指示されていましたが、これらの具体的な説明は示されていませんでした。彼らの服はシンプルだが、それでいて尊厳を持っていました。

アロンと祭司たちは、チュニックの下に、リネンのズボンを下着として着用するように指示されていました。これらの衣服を身につけていない状態では、聖所に入ったり、祭壇に近づいて供犠の行為を行ったりすることはできませんでした。その規定が破られた場合、死刑が科されることとなりました。彼らは裸を覆う必要がありました。当時の周辺の異教徒の国々では、裸での宗教儀式が一般的でしたが、まことの神の奉仕においては、着衣における絶対的な謙虚さが厳格な要件とされていたのです。

これで、旧約聖書における礼拝の奉仕の際の祭司の衣服についての規定を終えます。彼らの彫り込まれた肩の部分、宝石で飾られた胸当て、神秘的なウリムとトンミム、鈴とザクロ、そして金で装飾された頭飾りは豊かな象徴性を持っています。繊細に織られ

た布地、編み込まれた鎖、全体的なデザインにより、これらの衣服は美しさと威厳を兼ね備えていました。これは主ご自身がデザインし、自らの民がその名に相応しい栄光を主に帰し、主のきよさの輝きの中で礼拝できるようになっていました。

新約時代の私たち牧師の衣服は、それほど精緻ではありません。礼拝において主の恵みの賜物を分け与える儀式と象徴は、遥かに控えめです。一部の牧師は、シンプルな黒いローブを着て自分の体を隠すことを好みます。またある牧師は、このローブの上に白色で、広袖で長めの丈のゆったりとした上衣（サープリス）、そして教会歴の節目に応じて色分けすることが一般的なストールや、両端にフリンジの付いた細長いスカーフを着用します。牧師は、これらの異なる衣服を、キリスト教の自由の精神のもとで、または仕える会衆の願いに応じて使用します。牧師が何を着用するにしても、それは礼拝における神の威厳を反映し、その栄光を表すべきです。

出エジプト記 29 章

祭司を聖別する

- 1 あなたは、彼らを祭司としてわたしに仕えるように聖別するため、次のことを彼らにしなければならない。すなわち、若い雄牛一頭、傷のない雄羊二頭を取れ。
- 2 種を入れないパンと、油を混ぜた種を入れない輪型のパンと、油を塗った種を入れないせんべいとを取れ。これらは最良の小麦粉で作らなければならない。
- 3 これらを一つのかごに入れ、そのかごといっしょに、あの一頭の雄牛と二頭の雄羊とをささげよ。
- 4 アロンとその子らを会見の天幕の入口に近づかせ、水で彼らを洗わなければならない。
- 5 あなたは、装束を取り、アロンに長服とエポデの下に着る青服と、エポデと胸当てとを着せ、エポデのあや織りの帯を締めさせる。
- 6 彼の頭にかぶり物をかぶらせ、そのかぶり物の上に、聖別の記章を掛ける。
- 7 そそぎの油を取って、彼の頭にそそぎ、彼に油そそぎをする。
- 8 彼の子らを近づけ、彼らに長服を着せなければならない。
- 9 アロンとその子らに飾り帯を締めさせ、ターバンを巻きつけさせる。永遠のおきてによって、祭司の職は彼らのものとなる。あなたは、アロンとその子らを祭司職に任命せよ。

この章で、祭司たちが特別な奉仕のために幕屋でどのように聖別されるべきかについて説明されています。描写されている儀式は非常に精緻で印象深いものです。レビ記第8章では、これらの指示に従い祭司たちがその職に就く様子が詳細に説明されています。さらに、レビ記を通して、さまざまな種類の犠牲の意義をより深く理解することができます。

ここで最初の節には、儀式で用いられるべきものが挙げられています。それは若い雄牛、雄羊二頭、無酵のパン、油混ぜの菓子、油塗りの薄焼きパンです。次の部分では、アロンと彼の息子たちを幕屋の入口まで連れてきて、水で洗い、聖なる衣服を着せる手続き（前章で説明されたとおり）が説明されています。アロンは大祭司の職を象徴する印として油を注がれることとなっていました。

この儀式の一部は、特に大祭司に油を注ぐことで主の聖霊を象徴的に授けることを通じて、祭司たちの霊的浄化を示していました。

罪のための犠牲

10 あなたが、雄牛を会見の天幕の前に近づけたなら、アロンとその子らがその雄牛の頭に手を置く。

11 あなたは、会見の天幕の入口で、【主】の前に、その雄牛をほふり、

12 その雄牛の血を取り、あなたの指でこれを祭壇の角につける。その血はみな祭壇の土台に注がなければならない。

13 その内臓をおおうすべての脂肪、肝臓の小葉、二つの腎臓と、その上の脂肪を取り、これらを祭壇の上で焼いて煙にする。

14 ただし、その雄牛の肉と皮と汚物とは、宿営の外で火で焼かなければならない。これは罪のためのいけにえである。

アロンと彼の息子たちが清められ、アロンが聖油で油を注がれた後、聖別式の次のステップとして雄牛が連れて来られることになりました。アロンと彼の息子たちは、自分たちの罪がこの犠牲となる動物に移されることを象徴するために、雄牛の頭に手を置くことになっていました。会見の幕屋の入口、つまり主の前で、雄牛は屠殺されます。その血の一部は焼き尽くす祭壇の角に塗り、残りは祭壇の基部に振りかけられました。

この血塗られた犠牲は、主がアロンの罪の償いとして「動物の命を受け入れる意志を示すために行われました。レビ記では、血の使用の意義について教えられています。「なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である。」（レビ記 17:11）。内臓を覆う脂肪と肝臓、腎臓は祭壇で焼かれることとなっていました。雄牛の肉、皮膚、臓物は宿営の外で焼かれることになっていました。これにより、より良い部分が罪の犠牲として主に捧げられ、主に喜ばれる香りとなることとされました。

ヘブル人への手紙の著者は、イエス、つまり私たちの偉大な大祭司が「ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。」（ヘブル 13:12）と読者の注意を引いています。彼はさらに、私たちに対して、「キリストのはずかしめを身に負って、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。私たちは、

この地上に永遠の都を持っているのではなく、むしろ後に来ようとしている都を求めているのです。」(ヘブル 13:13,14)と励ましています。イエスは、私たちの完全な罪の犠牲であり、旧約聖書の大祭司たちのように自らの罪のためにまず犠牲を捧げる必要はありませんでした。イエスの犠牲は、イエスご自身をカルバリ丘の十字架上で捧げたときの一度きりのものでした。イエスはこの恥辱と屈辱を、私たちの罪のゆるしのために受け入れ、全世界の罪を自ら背負いました。

雄羊のささげもの

- 15 あなたは雄羊一頭を取り、アロンとその子らはその雄羊の頭に手を置かなければならない。
- 16 あなたはその雄羊をほふり、その血を取り、これを祭壇の回りに注ぎかける。
- 17 また、その雄羊を部分に切り分け、その内臓とその足を洗い、これらをほかの部分や頭といっしょにしななければならない。
- 18 その雄羊を全部祭壇の上で焼いて煙にする。これは、【主】への全焼のいけにえで、なだめのかおりであり、【主】への火によるささげ物である。

聖別式の際、二頭の雄羊のうち一頭は全焼のいけにえとして使用される運命でした。このいけにえの準備と血を使った儀式は、後にレビ記 1 章で定められた規則に則って行われました。このいけにえでは動物の全身が祭壇上で焼かれ、これは主とその奉仕への完全なる奉献を象徴していました。このようにして、旧約時代の祭司たちは、主への奉仕に自らを完全に捧げる必要がありました。

このような犠牲は、パウロの言葉を思い出させます。彼はキリスト者たちに、主の新約の祭司として自分自身を捧げることを奨励しています。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」(ローマ 12:1,2)。

奉献とは、主の奉仕に自らを全て捧げることを意味しており、決して中途半端な奉仕ではありませんでした。旧約聖書において、この種の犠牲はいかに完全な奉献を的確に表していたことでしょう！

按手の雄羊

- 19 あなたはもう一頭の雄羊を取り、アロンとその子らはその雄羊の頭に手を置く。

- 20 あなたはその雄羊をほふり、その血を取って、アロンの右の耳たぶと、その子らの右の耳たぶ、また、彼らの右手の親指と、右足の親指につけ、その血を祭壇の回りに注ぎかける。
- 21 あなたが、祭壇の上にある血とそそぎの油を取って、アロンとその装束、および、彼とともにいる彼の子らとその装束とに振りかけると、彼とその装束、および、彼とともにいる彼の子らとその装束とは聖なるものとなる。
- 22 あなたはその雄羊の脂肪、あぶら尾、内臓をおおう脂肪、肝臓の小葉、二つの腎臓、その上の脂肪、および、右のももを取る。これは、任職の雄羊である。
- 23 【主】の前にある種を入れないパンのかごの丸型のパン一個と、油を入れた輪型のパン一個と、せんべい一個、
- 24 これらをみなアロンの手のひらと、その子らの手のひらに載せ、これらを奉獻物として【主】に向かって揺り動かす。
- 25 これらを、彼らの手から取り、全焼のいけにえといっしょに祭壇の上で焼いて煙とし、【主】の前になだめのかおりとする。これは、【主】への火によるささげ物である。
- 26 あなたはアロンの任職用の雄羊の胸を取り、これを奉獻物として【主】に向かって揺り動かす。これは、あなたの受け取る分となる。
- 27 あなたがアロンとその子らの任職用の雄羊の、奉獻物として揺り動かされた胸と、奉納物として、ささげられたももとを聖別するなら、
- 28 それは、アロンとその子らがイスラエル人から受け取る永遠の分け前となる。それは奉納物であり、それはイスラエル人からの和解のいけにえの奉納物、すなわち、【主】への奉納物であるから。

この儀式で「^{あんしゅ}按手の雄羊」として指定された雄羊は、非常に特別な方法で使用されました。動物の血の一部は、アロンと彼の息子たちの右耳の軟骨、右手の親指、そして右足のつま先に塗られました。祭司は耳で主の言葉を聞き、手で仕事を正しく行い、足で聖所を正しく歩むべきでした。したがって、祭司の体のこれらの部分は特別に主への奉仕のために聖別されました。残りの血は油と共に祭壇に撒かれ、アロンと彼の息子たち、さらに彼らの衣服にも振りかけられました。油は神の霊の象徴でした。このようにして、体、魂、霊の全てにおいて、この男性たちは主の霊的な奉仕のために聖別されました。また、彼らの衣服も主への奉仕に際して特別に聖別されました。

この雄羊の脂肪部分、肝臓の被膜、腎臓、右ももの部分は、パン種を入れていないパン、油で作られたケーキ、およびウエハースと共に取られ、「揺り動かしの供え物」として主の前で揺り動かされることになっていました。これらの品々はその後、「主に喜ばれる香り」として祭壇で焼かれることになっていました。雄羊の胸もまた主の前で揺り動かされるべきであり、胸と右ももはアロンと彼の息子たちの分として与えられることになっていました。

この種の供え物は、後にレビ記第3章で「共有の供え物」または「酬恩祭」として言及されています。それは主に栄光を捧げるため、献身と感謝の特別な機会に使用され、祭司に一部を与えることは、その代表者を通して神の民との交わりを象徴していました。

「揺り動かしの供え物」という表現は、ユダヤ人のタルムードにおいて、これを主に向かって行い、そして再び祭司に向かって行う前後運動の行為として説明しており、この犠牲の行為において双方の間の交わりを象徴しています。この場合、祭司には「振り動かしの供え物」の一部が返され、これによって主が司祭と共に自らの贈り物を分かち合っていることが示されています。交わりの供え物としての祭司の分として、胸は「揺り動かされ」、ももは「差し出され」（持ち上げられて返され）ました。

犠牲の食事

29 アロンの聖なる装束は、彼の跡を継ぐ子らのものとなり、彼らはこれを着けて、油をそそがれ、祭司職に任命されなければならない。

30 彼の子らのうち、彼に代わって祭司となる者は、聖所で務めを行うために会見の天幕に入るとき、七日間、これを着なければならない。

31 あなたは任職用の雄羊を取り、聖なる場所で、その肉を煮なければならない。

32 アロンとその子らは、会見の天幕の入口で、その雄羊の肉と、かごの中のパンとを食べる。

33 彼らは、彼らを祭司職に任命し、聖別するための贖いに用いられたものを、食べる。ほかの者は食べてはならない。これらは聖なる物である。

34 もし、任職用の肉またはパンが、朝まで残ったなら、その残りは火で焼く。食べてはならない。これは聖なる物である。

35 あなたが、わたしの命じたすべてのことをそのとおりに、アロンとその子らに行ったら、七日間、任職式を行わなければならない。

36 毎日、贖罪のために、罪のためのいけにえとして雄牛一頭をささげなければならない。祭壇のための贖いをするときには、その上に罪のためのいけにえをささげ、これを聖別するために油をそそぐ。

37 七日間にわたって祭壇のための贖いをしなければならない。あなたがそれを聖別すれば、祭壇は最も聖なるものとなる。祭壇に触れるものもすべて聖なるものとなる。

主はここで数々の規則を追加しています。

アロンの祭司服は、代々受け継がれるべきでした。（アロンの死の際、民数記 20:22-29 で記録されているように、私たちは、これがどれほど慎重に守られたかを注視しています。アロンの衣服はホル山で彼の息子エルアザルに渡されました。）

祭司の叙任式は7日間かけて行われ、先に述べた通り、毎日全ての儀式を繰り返すこととなります。7日間のそれぞれの日に、祭壇もまた主への奉仕に向けて聖別されるべきでした。イスラエルの人々は、この重要な出来事とその深い意味をどうやって忘れることができるでしょうか！

これらの節において祭司の叙任式に関連して追加された特徴は、犠牲の食事でした。アロンが受け取る雄羊の部分、すなわち胸ともも、そしてかごに入れられた無発酵のパンは、アロンと彼の息子たちによって幕屋の入り口で食べられるべきでした。これもまた交わりのしるしであり、主の御前での共同の食事でした。私たち新約時代のクリスチャンは、主の晩餐を祝う際に「聖餐」、すなわち交わりの食事を持ちます。私たちが罪の赦しのためにキリストの真の体と血を受ける時、私たちは救い主である神との交わり、そして共に信じるクリスチャンとの交わりを確信しています。使徒パウロは次のように書いています。「私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちの裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。パンは一つですから、私たちは、多数であっても、一つのからだです。それは、みなの方がともに一つのパンを食べるからです。」(1 コリント 10:16,17)。7日間のそれぞれの日に、祭壇もまた主の奉仕のために聖別されることになっていました。

これらの節によって、祭司の叙任式を描写するこの章の一部は締めくくられます。

毎日の犠牲

38 祭壇の上にささげるべき物は次のとおりである。毎日絶やすことなく一歳の若い雄羊二頭。

39 一頭の若い雄羊は朝ささげ、他の一頭の若い雄羊は夕暮れにささげなければならない。

40 一頭の若い雄羊には、上質のオリーブ油四分の一ヒンを混ぜた最良の小麦粉十分の一エパと、また注ぎのささげ物として、ぶどう酒四分の一ヒンが添えられる。

41 もう一頭の若い雄羊は夕暮れにささげなければならない。これには朝の穀物のささげ物や、注ぎのささげ物を同じく添えてささげなければならない。それは、なだめのかおりのためであり、【主】への火によるささげ物である。

42 これは、【主】の前、会見の天幕の入口で、あなたがたが代々にわたって、絶やすことのない全焼のいけにえである。その所でわたしはあなたがたに会い、その所であなたと語る。

43 その所でわたしはイスラエル人に会う。そこはわたしの栄光によって聖とされる。

44 わたしは会見の天幕と祭壇を聖別する。またアロンとその子らを聖別して、彼らを祭司としてわたしに仕えさせよう。

45 わたしはイスラエル人の間に住み、彼らの神となろう。

46 彼らは、わたしが彼らの神、【主】であり、彼らの間に住むために、彼らをエジプトの地から連れ出した者であることを知るようになる。わたしは彼らの神、【主】である。

祭壇で毎日捧げるべき供え物に関する指示がここに書かれています。これは祭司の聖別の指示の直後に配置されており、これらの供え物は幕屋で続けられる奉仕の一環でした。

毎朝毎晩、子羊が穀物の供え物と一緒に捧げられることになっていました。これらの供え物についての詳しい指示はレビ記に記載されています。これらの供え物は「主に喜ばれる香り、火で捧げられる供え物」とされていました。これらの品々の供え物は全て祭壇上で火で焼かれるべきでした。これら毎日の供え物は、イスラエルが日々の生活を主に捧げるべきであることを示していました。主は彼の民と常に共におられると約束されました。またここで、主は彼の栄光ある姿を民に示されました。

イスラエルにとって、主との契約に基づく奉仕は毎日のことでした。朝と夕方の奉仕は、彼らに主への毎日の献身の大切さをしっかりと教えるべきでした。主は特別な必要や特別な時だけでなく、常に彼らと共におられました。彼らが毎日示す奉仕のように、彼の存在もまた絶えず彼らと共にありました。

もし旧約聖書の時代のイスラエルにこれが当てはまるなら、私たち現代人にとっても、より一層当てはまるべきです！私たちの朝と夜の祈りは、法律で義務づけられているわけではありません。これらの祈りは、私たちの存在の基盤を成す、恵み深い主により頼む心を自由に表現するものであるべきです。このことを非常によく表現している讚美歌の一節がこちらです。

主イエスと共に 仕事はじめ
道たずねれば 主は導く
朝晩イエスと 共にあゆみ
すべてをゆだね 生きてゆこう

(CW 478,1 節)

出エジプト記 30 章

香の祭壇

- 1 あなたは、香をたくために壇を作る。それは、アカシヤ材で作らなければならない。
- 2 長さ一キュビト、幅一キュビトの四角形で、その高さは二キュビトでなければならない。その一部として角をつける。
- 3 それに、上面と回りの側面と角を純金でかぶせる。その回りに、金の飾り縁を作る。
- 4 また、その壇のために、その飾り縁の下に、二つの金環を作らなければならない。相對する両側に作らなければならない。これらは、壇をかつぐ棒を通す所となる。
- 5 その棒はアカシヤ材で作り、それに金をかぶせる。
- 6 それをあかしの箱をおおう垂れ幕の手前、わたしがあなたとそこで会うあかしの箱の上の『贖いのふた』の手前に置く。
- 7 アロンはその上でかおりの高い香をたく。朝ごとにともしびを整えるときに、煙を立ち上らせなければならない。
- 8 アロンは夕暮れにも、ともしびをともしるときに、煙を立ち上らせなければならない。これは、あなたがたの代々にわたる、【主】の前の常供の香のささげ物である。
- 9 あなたがたは、その上で異なった香や全焼のいけにえや穀物のささげ物をささげてはならない。また、その上に、注ぎのぶどう酒を注いではならない。
- 10 アロンは年に一度、贖罪のための、罪のためのいけにえの血によって、その角の上で贖いをする。すなわち、あなたがたは代々、年に一度このために、贖いをしなければならない。これは、【主】に対して最も聖なるものである。」

この節で述べられている「金の祭壇」は、39 章 38 節でも同様に呼ばれています。そのサイズは小さく、一辺が 1.5 フィート（約 45.7cm、1 キュビット）四方で、高さが 3 フィート（約 91.4cm、2 キュビット）でした。この祭壇はアカシアの木で作られ、純金で覆われることとされていました。さらに、上部の四隅には角があり、上部には金の飾り縁が施され、側面には棒で運ぶ際に使用する金の輪が設けられていました。この祭壇は聖所内に位置し、具体的には聖所と至聖所を分けるカーテンの前に置かれていました。そうすることで祭壇は契約の箱と緊密に関連しており、実際、複数の箇所でも内部の聖所の一部であると言及されています。しかし、祭壇が日々使用されていたことから、その位置が至聖所の内部にあることはあり得ませんでした。

毎朝と毎晩、アロンはこの祭壇で香り高い香を焚くことが定められていました。他の種類の犠牲はこの上で焼くことが許されていませんでしたが、アロンは年に一度、大いなる贖罪の日^つに、この祭壇の「角の上」で贖罪の儀式を行うことが求められていました。この行為は「それ〔祭壇〕をきよめ、イスラエル人の汚れからそれを聖別する」目的で

行われました（レビ記 16:19）。多くの人々が、教会の夕べの祈りまたは夕礼拝の際に行われる、以下の言葉に親しみを感じることでしょう。

夕べの祈りの香り

手を合わせイエスに捧げます

(CW p. 55)

この応答は「私の祈りが、御前への香として、私が手を上げることが、夕べのささげ物として立ち上りますように。」（詩編 141:2）を基にしており、香が祈りの象徴であるとしています。黙示録でも、24 人の長老が小羊の前にひれ伏し、「それぞれが琴を持ち、聖徒たちの祈りである金の鉢一杯の香を持っていた」と語られています（5:8）。香の煙が天に昇るように、私たちの祈りも絶え間なく神に届き、芳ばしい香りを放つべきです。聖書はテサロニケ人の手紙第一 5 章 17-18 節でクリスチャンに「絶えず祈り」、「すべての事について、感謝」することを励ましています。さらに、テモテへの手紙第一 2 章 1 節では「すべての人のために願い、祈り、仲裁、感謝を捧げる」ように勧めています。最終的に、パウロは「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもって」神に願い事を捧げるように宣言しています（ピリピ 4:6）。これを行う適切な時期は、毎朝と毎晩、主が旧約聖書の時代の人々に香の祭壇で日々行うよう命じたとおりです。

贖い金

11 【主】はモーセに告げて仰せられた。

12 「あなたがイスラエル人の登録のため、人口調査をするとき、その登録にあたり、各人は自分自身の贖い金を【主】に納めなければならない。これは、彼らの登録によって、彼らにわざわいが起こらないためである。

13 登録される者はみな、聖所のシェケルで半シェケルを払わなければならない。一シェケルは二十ゲラであって、おのおの半シェケルを【主】への奉納物とする。

14 二十歳、またそれ以上の者で登録される者はみな、【主】にこの奉納物を納めなければならない。

15 あなたがた自身を贖うために、【主】に奉納物を納めるとき、富んだ者も半シェケルより多く払ってはならず、貧しい者もそれより少なく払ってはならない。

16 イスラエル人から、贖いの銀を受け取ったなら、それは会見の天幕の用に当てる。これは、あなたがた自身の贖いのために、【主】の前で、イスラエル人のための記念となる。」

20 歳以上の男性イスラエル人は、人口調査の際に半シェケルを主に支払う義務がありました。これは「命の代価」として扱われました。これにより、イスラエルは自らの

罪深さを自覚し、主の恵みによって罪が覆われ、神の契約の民であり続けることができると教えられました。罪を償うため、支払い方法は主によって指示されました。

20 歳で、イスラエルの男性は軍役に就く用意があるとされていました。富裕層も貧困層も、誰もが同額を支払うことが求められていました。この奉納金は幕屋の奉仕活動に用いられることとなっていました。支払われる額、半シェケルという支払額は約½オンス、おそらくは銀と同等です。

サムエル記 24 章では、ダビデが許可なく行った人口調査が記述されており、それが原因でこの節で警告された恐ろしい疫病が民を襲ったとされています。その際、神がイスラエルに対してなぜこれほど厳しい罰を下したのか詳細は説明されていませんが、ダビデがこの法律の何かしらの規定を怠った可能性が考えられます。

新約聖書の時代において、私たちが贖われたのは、使徒ペテロが思い出させてくれるように、「銀や金のような朽ちる物にはよらず、…キリストの、尊い血によったのです。」(ペテロ第一 1:18, 19)

洗盤—儀式用の洗い桶

17 【主】はまたモーセに告げて仰せられた。

18 「洗いのための青銅の洗盤と青銅の台を作ったなら、それを会見の天幕と祭壇の間に置き、その中に水を入れよ。

19 アロンとその子らは、そこで手と足を洗う。

20 彼らが会見の天幕に入るときには、水を浴びなければならない。彼らが死なないためである。また、彼らが、【主】への火によるささげ物を焼いて煙にする務めのために祭壇に近づくときにも、

21 その手、その足を洗う。彼らが死なないためである。これは、彼とその子孫の代々にわたる永遠のおきてである。」

ここで紹介される洗盤は、焼き尽くす犠牲を捧げる祭壇と幕屋の間、中庭に設置されていました。そのサイズや形状については記述がありません。祭司たちは、聖職を行う時や幕屋に入る時に、ここで自らの手と足を洗わなければなりませんでした。これを怠った者は死ぬことになっていました。

注ぎ油と香

22 ついで【主】はモーセに告げて仰せられた。

23 「あなたは、最上の香料を取れ。液体の没薬五百シェケル、かおりの強い肉桂をその半分——二百五十シェケル——、におい菖蒲二百五十シェケル、

- 24 桂枝を聖所のシェケルで五百シェケル、オリーブ油一ヒン。
- 25 あなたはこれらをもって聖なるそそぎの油を、調合法にしたがって、混ぜ合わせの香油を作る。これが聖なるそそぎの油となる。
- 26 この油を次のものにそそぐ。会見の天幕、あかしの箱、
- 27 机とそのいろいろな器具、燭台とそのいろいろな器具、香の壇、
- 28 全焼のいけにえのための祭壇とそのいろいろな器具、洗盤とその台。
- 29 あなたがこれらを聖別するなら、それは、最も聖なるものとなる。これらに触れるものもすべて聖なるものとなる。
- 30 あなたは、アロンとその子らに油をそそぎ、彼らを聖別して祭司としてわたしに仕えさせなければならない。
- 31 あなたはイスラエル人に告げて言わなければならない。これはあなたがたの代々にわたって、わたしのための聖なるそそぎの油となる。
- 32 これをだれのからだにもそそいではならない。また、この割合で、これと似たものを作ってはならない。これは聖なるものであり、あなたがたにとっても聖なるものとしなければならない。
- 33 すべて、これと似たものを調合する者、または、これをほかの人につける者は、だれでもその民から断ち切られなければならない。」
- 34 【主】はモーセに仰せられた。「あなたは香料、すなわち、ナタフ香、シェヘレテ香、ヘルベナ香、これらの香料と純粋な乳香を取れ。これはおのおの同じ量でなければならない。
- 35 これをもって香を、調合法にしたがって、香ばしい聖なる純粋な香油を作る。
- 36 また、そのいくぶんかを細かに碎き、その一部をわたしがあなたとそこで会う会見の天幕の中のあかしの箱の前に供える。これは、あなたがたにとって最も聖なるものでなければならない。
- 37 あなたが作る香は、それと同じ割合で自分自身のために作ってはならない。あなたは、それを【主】に対して聖なるものとしなければならない。
- 38 これと似たものを作って、これがかぐ者はだれでも、その民から断ち切られる。」

幕屋とその備品、そして祭司を聖別する際に使用される特別な配合の油に注目してください。ミルラはパレスチナ原産ではない木から取れる樹脂です。ここで述べられている液状のミルラは非常に高価な素材でした。この油には、シナモン、葦、カシアといった甘くて芳香のある成分が含まれており、アラビアやインドから取り寄せた素材も使用されていたため、調製が複雑で非常に高価だったと考えられます。この油は、人体に塗るなど他の目的には使用してはならず、違反した場合は死刑に処されることとされていました。

旧約聖書における油での注ぎは常に、聖霊の賜物を授ける、または何かを主の奉仕のために高度に霊的な目的で別にするという象徴でした。預言者、祭司、王たちは油を注がれることでその職に就きました。旧約聖書の礼拝で使われる香についても、使用方法が厳格に定められていました。

その私的な使用も禁じられていました。この香は、この章の初めで説明された香の祭壇で焚かれることになっていました。言及されている成分の中には、南アラビアでしか手に入らないもの（例えば、乳香）もあります。シェヘレテ香は紅海沿岸の海洋動物から取れました。

油と香の香りは幕屋に独特の香りをもたらし、主の存在を常に思い起こさせるものでした。幕屋の細部に至るまで、油や香の種類でさえも、何もかもが神の指示に基づいていました。

出エジプト記 31 章

- 1 【主】はモーセに告げて仰せられた。
- 2 「見よ。わたしは、ユダ部族のフルの子であるウリの子ベツアルエルを名ざして召し、
- 3 彼に知恵と英知と知識とあらゆる仕事において、神の霊を満たした。
- 4 それは、彼が、金や銀や青銅の細工を巧みに設計し、
- 5 はめ込みの宝石を彫り、木を彫刻し、あらゆる仕事をするためである。
- 6 見よ。わたしは、ダン部族のアヒサマクの子オホリアブを、彼のもとに任命した。わたしはすべて心に知恵のある者に知恵を授けた。彼らはわたしがあなたに命じたものを、ことごとく作る。
- 7 すなわち、会見の天幕、あかしの箱、その上の『贖いのふた』、天幕のあらゆる設備品、
- 8 机とその付属品、純金の燭台と、そのいろいろな器具、香の壇、
- 9 全焼のいけにえの祭壇と、そのあらゆる道具、洗盤とその台、
- 10 式服、すなわち、祭司として仕える祭司アロンの聖なる装束と、その子らの装束、
- 11 そそぎの油、聖所のためのかおりの高い香である。彼らは、すべて、わたしがあなたに命じたとおりに作らなければならない。」

幕屋の建設に関する指示は完了しましたが、主からモーセへの指示はまだ終わりではありませんでした。主はまた、モーセに対して、幕屋とその備品、およびすべての装備を監督するための二人の男性を指名しました。主はこの人々と彼らの助手に特別な技能を授け、モーセに命じた通りに仕事を遂行できるよう約束しました。

ユダ族出身のベツアルエルが主によって主任建築士に選ばれ、ダン族出身のオホリアブが彼の主要な助手に選ばれました。

再度強調されるのは、幕屋とその中身に関連するすべてが何一つとして偶然に任せられていなかったということです。職人たちもまた、主が規定したとおりに仕事を行う特別な技能を主から授けられました。これは主の家であり、主はそこで民と共に住まいになります。したがって、この場所に関連するすべてのものは、威厳があり、意味があり、主の仕様通りに正確に作られるべきです。

また、主は自らの住まいの美しさを保つことにも真剣でした。私たちが知っているように、主イエスはエルサレムの神殿で商売を行っていた人々により、その美しさが損なわれていたことに非常に怒りました。彼はそのような人々を鞭で追い出し、そこで金銭を両替していた人々のテーブルをひっくり返しました。

私たちの礼拝の場所の設計はそれほど複雑ではありません。私たちは旧約聖書のすべての儀式的な法律を守る必要はありません。それにもかかわらず、私たちは教会を威厳

あるものとし、そこに主への愛を表現したいと考えています。また、私たちにも主の豊かな恵みの贈り物に感謝し、その聖なる御名に栄光を帰する特権があります。

安息日

12 【主】はモーセに告げて仰せられた。

13 「あなたはイスラエル人に告げて言え。あなたがたは、必ずわたしの安息を守らなければならない。これは、代々にわたり、わたしとあなたがたとの間のしるし、わたしがあなたがたを聖別する【主】であることを、あなたがたが知るためのものなのである。

14 これは、あなたがたにとって聖なるものであるから、あなたがたはこの安息を守らなければならない。これを汚す者は必ず殺されなければならない。この安息中に仕事をする者は、だれでも、その民から断ち切られる。

15 六日間は仕事をしてよい。しかし、七日目は、【主】の聖なる全き休みの安息日である。安息の日に仕事をする者は、だれでも必ず殺されなければならない。

16 イスラエル人はこの安息を守り、永遠の契約として、代々にわたり、この安息を守らなければならない。

17 これは、永遠に、わたしとイスラエル人との間のしるしである。それは【主】が六日間に天と地とを造り、七日目に休み、いこわれたからである。」

幕屋の建設に関するこれらの指示が終わった際、主はモーセを通じて再度、イスラエルの民に安息日の規定を慎重に守ることの重要性を強調しました。週の七日目である安息日は、「代々にわたり」主と彼の民の間で守られるべきでした。

安息日という言葉はヘブライ語で「休息」を意味します。20章で示されているように、その日には何の仕事もしてはならないとされていました。この法を破った者は死刑にされることになっていました。民数記 15:32-36 で、私たちは安息日に薪を集めた男の話を読みます。彼はイスラエルの陣営から連れ出され、石打ちで死刑にされました。

私たちは、安息日の法が「永遠の契約」であると読みます。「主とイスラエルの民との間の永遠のしるし」であるとされています。では、これらの言葉は私たちも今日においてこれらの安息日の規定を守るべきだと教えているのでしょうか？ 私たちが日曜日に礼拝を行うことを非難するセブンスデー・アドヴェンチスト教会の主張は正当なのでしょうか？ イエスが来られた時、イエスは自らを安息日の主であると宣言しました。イエスの贖いの業を通じて、旧約聖書の全ての儀式的規定は廃止されました。「だから、あなたがたを食べるもの、飲むもの、あるいは祭りや新月や安息日について、だれにも判断されてはなりません」とパウロはコロサイの信徒へ書いています。「これらは来るべきことの影であり、その実体はキリストにあります」(コロサイ人への手紙 2:16, 17)。

それでは、「永遠の契約」として、また「永遠に」続くべきとされている安息日の法をどのように理解すべきでしょうか？それは単純にキリストによる安息日の完全な成就の光の中で理解されるべきです。贖いの業を完成した後、主も安息日に休息しました。しかし、翌日には再び復活され、彼の業が完成されたことを世界に約束されました。私たちはイエスの罪、死、地獄に対する壮大な勝利を記念し、その復活の日を「主の日」として祝います。これはヘブライ人への手紙 4 章で描かれている、天における永遠の安息の休息を楽しみにしているからです。

あかしの板

18 こうして主は、シナイ山でモーセと語り終えられたとき、あかしの板二枚、すなわち、神の指で書かれた石の板をモーセに授けられた。

モーセが幕屋に関するすべての指示を受けたとき、主は彼に「あかしの石版」二枚を与えました。これらは十戒が書かれた二枚の石の板でした。32 章 15、16 節によれば、神ご自身がこれらの板を供給し、両面に文字を刻まれました。これらの戒めは神の聖なる法でした。主はこれらが保存されることを望まれました。板は「神の指で書かれた」とされています。言い換えると、板に書かれた文字は神聖な奇跡によるものでした。私たちは以前、20 章で戒めの数え方について議論し、さまざまな教派がこれについて異なる見解を持っていることを述べました。私たちは、神への愛を示す戒めを最初の石版に、隣人への愛を示す戒めを二枚目の石版に置いています。これは、モーセが申命記 6 章 5 節とレビ記 19 章 18 節で戒めをこのようにまとめているからであり、キリストご自身もマタイ 22 章 37 から 40 節でこの区別を示しています。ルター派の教えに従って、私たちは最初の三つの戒めを最初の石版に、残りの七つの戒めを二枚目の石版に配しています。これらのすべての指示を受けるためにシナイ山で 40 日 40 夜過ごしている間、イスラエルの民は苛立ち、彼らに対してこれほど慈悲深かった神に対して反抗しました。

出エジプト記 32 章

黄金の子牛

1 民はモーセが山から降りて来るのに手間取っているのを見て、アロンのもとに集まり、彼に言った。「さあ、私たちに先立って行く神を、造ってください。私たちをエジプトの地から連れ上ったあのモーセという者が、どうなったのか、私たちにはわからないから。」

- 2 それで、アロンは彼らに言った。「あなたがたの妻や、息子、娘たちの耳にある金の耳輪をはずして、私のところに持って来なさい。」
- 3 そこで、民はみな、その耳にある金の耳輪をはずして、アロンのところに持って来た。
- 4 彼がそれを、彼らの手から受け取り、のみで型を造り、鑄物の子牛にした。彼らは、「イスラエルよ。これがあなたをエジプトの地から連れ上ったあなたの神だ」と言った。
- 5 アロンはこれを見て、その前に祭壇を築いた。そして、アロンは呼ばわって言った。「あすは【主】への祭りである。」
- 6 そこで、翌日、朝早く彼らは全焼のいけにえをささげ、和解のいけにえを供えた。そして、民はすわっては、飲み食いし、立っては、戯れた。

ウェルナー・フランツマンが彼の「聖書歴史注解」でイスラエルの黄金の子牛への礼拝について言及しており、これを「信じがたい罪」と評しています。これは本当に信じがたいことであり、まさに主が選ばれた民と契約を結んだ直後に起こりました。フランツマンはコメントしています。「最も大きな罪は、罪に汚染された人間にとって可能である...。この話において本当に信じがたいのは主の恵みである」(264 ページ)。

フランツマンがイスラエルの罪をその正しい名前呼び、それを何らかの形で言い訳しようとしないう率直なアプローチに感謝します。一方で、多くの聖書学者はイスラエルを擁護し、人々が依然として真の神を別の形で礼拝していると考えていたと主張しています。たとえこれが真実であったとしても、それは神が 20 章 4,5 節で明確に与えた命令を破ることになります。アロンは「明日は主への祭りがある」と言って黄金の子牛を作り、これによってイスラエルの罪の深刻さを覆い隠そうとした可能性があります。

確かに、アロンは「主」(ヤハウェ)という名前を使用しました。しかし、続く話からは、イスラエル人が実際に何を望んでいたのか明らかです。彼らが食べたり飲んだり、この偶像への「礼拝」の一環として宴を楽しんだりする様子からこれを見ることができます。1 コリント 10 章 7 説で使徒パウロがこの事件に言及する際、彼はイスラエルの人々をはっきりと「偶像崇拜者」と呼んでいます。ステパノも使徒の働き 7 章 41 節で記録されたユダヤ教会への彼のスピーチの中で同様のことをしています。詩篇 106 篇 19-21 節では著者は次のように述べています。

彼らはホレブで子牛を造り、鑄物の像を拝んだ。

こうして彼らは彼らの栄光を、草を食らう雄牛の像に取り替えた。

彼らは自分たちの救い主である神を忘れた。

エジプトで大いなることをなさった方を。

彼らの宴が最高潮に達した時、後に見るように、モーセがシナイ山から降りてきた時、彼らの振る舞いは制御不能となりました。信じがたいことでしょうか？ええ、イスラエルが神という救い主の手を通じて経験した驚異的な恵みを考えれば、特にそうです。イスラエルの神は彼らを奴隷状態から救い出し、数多くの方法でその栄光を彼らに示しま

した。神は彼らと契約を結び、ちょうどその瞬間にも、モーセにこの契約に基づき彼らが神を礼拝する方法、つまり王と祭司としての役割を説明していました。しかし、聖書が何度も私たちに警告しているように、罪は最も予期せぬ瞬間に打撃を与えます。慈悲豊かな主を経験した人々さえもこのように罪を犯すのです。例えばダビデ、ソロモン、イスカリオテのユダのような人物がそれを証明しています。パウロはシナイ山でのイスラエル人のこの振る舞いを例にを使って警告しています。「ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。」(1 コリント 10:12)。

学者の間では、イスラエルの民がアロンに「複数の神々」を作るよう求めたのか、それとも「一つの神」を作るよう求めたのか、意見が分かれています。私たちが使っている聖書の英語翻訳では、この節は「神々」となっています。一般的に私たちは NIV 版が優れた翻訳を提供していると考えていますが、この箇所に関しては「来て、私たちのために神を作って…」という翻訳が好ましいでしょう。アロンが彼らの金のイヤリングを要求し、彼らの要望に応えたのは、彼らのこれ以上の要求を諦めさせるためであったならば、アロンは甚だしく計算を誤ったことになります。人々が偶像崇拝を真剣に考えているのであれば、なにも彼らを止めることはできません。人々は様々な種類の不道德な行為に没頭するために、いかなる金額も支払うでしょう。これは現代社会でも目の当たりにする現象です。

アロンがイスラエルのために子牛の偶像を作る決定を下したのは、彼らがエジプトでの経験を反映していたからです。エジプトの神アピスは若い雄牛を象徴とし、力と性のシンボルでした。間違いなく、イスラエル人はエジプトでこの神へのいわゆる礼拝に関連する熱狂的な祝祭を何度も目にしていたでしょう。これはまさに彼らが欲していたものでした。厳格な道德規範に縛られるよりもはるかに楽しかったことでしょう！厳格な生活規範に従う訓練を受けていた人々がその規律を破ると、彼らはしばしば全くもって自制心を失ってしまうことがあります。

しかし、この種の楽しみ—もし楽しみと呼べるのであれば—は実際には一瞬の出来事に過ぎません。清算の時は必ずやってきます。イスラエルの場合、それはモーセが山から降りてきた時に訪れました。というのも、神は起こっていることを全て知っていたからです。次の節では、主が黄金の子牛に対するイスラエルの礼拝にどのように反応したかが私たちに示されます。

仲介者としてのモーセ

7 【主】はモーセに仰せられた。「さあ、すぐ降りて行け。あなたがエジプトの地から連れ上ったあなたの民は、墮落してしまったから。」

8 彼らは早くも、わたしが彼らに命じた道からはずれ、自分たちのために鑄物の子牛を造り、それを伏し拝み、それにいけにえをささげ、『イスラエルよ。これがあなたをエジプトの地から連れ上ったあなたの神だ』と言っている。」

9 【主】はまた、モーセに仰せられた。「わたしはこの民を見た。これは、実にうなじのこわい民だ。」

10 今はただ、わたしのするままにせよ。わたしの怒りが彼らに向かって燃え上がって、わたしが彼らを絶ち滅ぼすためだ。しかし、わたしはあなたを大いなる国民としよう。」

11 しかしモーセは、彼の神、【主】に嘆願して言った。「【主】よ。あなたが偉大な力と力強い御手をもって、エジプトの地から連れ出されたご自分の民に向かって、どうして、あなたは御怒りを燃やされるのですか。」

12 また、どうしてエジプト人が『神は彼らを山地で殺し、地の面から絶ち滅ぼすために、悪意をもって彼らを連れ出したのだ』と言うようにされるのですか。どうか、あなたの燃える怒りをおさめ、あなたの民へのわざわいを思い直してください。

13 あなたのしもべアブラハム、イサク、イスラエルを覚えてください。あなたはご自身にかけて彼らに誓い、そうして、彼らに、『わたしはあなたがたの子孫を空の星のようにふやし、わたしが約束したこの地をすべて、あなたがたの子孫に与え、彼らは永久にこれを相続地とするようになる』と仰せられたのです。」

14 すると、【主】はその民に下すと仰せられたわざわいを思い直された。

主のイスラエルに対する偶像崇拜への反応は、正当な怒りの言葉で表されました。「あなたの民が」と神は山でモーセに言いました。「墮落してしまった」のは「わたしの民」ではなく、「あなたがエジプトから連れ出したあなたの民」である、と神は告げたのです。罪で自らを汚した国と、きよく正しい神が、どうして関わり合うことができるでしょうか！全てのことを常に知る主は、その後モーセに、この墮落したイスラエルの人々が何をしたかを正確に告げました。

さらに、主はモーセに、彼が選んだ民がどれほど「頑固な」民であるかを指摘し続けます。進むべき道に導かれない牛のよう—それがイスラエルでした。神はさらに強い言葉でご自身を表現しています。「今はただ、わたしのするままにせよ。わたしの怒りが彼らに向かって燃え上がって、わたしが彼らを絶ち滅ぼすためだ。しかし、わたしはあなたを大いなる国民としよう。」これはつまり、「今、わたしを一人にしておいてくれ。そうすればわたしの怒りが彼らに対して燃え上がり、彼らを滅ぼすことができる。そのあと、わたしはあなたを偉大な国民にしよう。」という意味です。

これらの言葉で主はモーセを試みました。神は本当に怒りに任せてイスラエルを滅ぼすところまで行くのでしょうか？モーセは本当に神の救済計画の一端を担う者となるのでしょうか？これらの疑問が私たちの頭に浮かびますが、主がすぐにイスラエルを滅ぼすことはありませんでした。「今、わたしを一人にしておいてくれ…」と神は宣言し

ました。主はモーセに別の提案をすることで、少なくともその時点では問題をモーセの手に委ねました。

そしてモーセはその試練に立ち向かいました！彼は怒りに満ちた神と罪深い民との間で、真の仲介者として働きました。「なぜあなたの怒りがあなたの民に対して燃え上がるのでしょうか」とモーセは答えます。「あなたが大いなる力と強力な手でエジプトから連れ出したあなたの民です。」モーセは主に、彼が取り扱っているのはモーセの民ではなく、神ご自身の契約の民であるという事実を注意深く伝えました。そしてモーセは続けました。「エジプト人は何と言うのでしょうか？彼らは神がこの国民を荒野に連れ出し、ただ滅ぼすためだけに連れ出したと非難するのではないのでしょうか？」イスラエルの神である主の名誉がかかっていました。最終的にモーセは最も説得力のある論点を使います。「あなたのしもべアブラハム、イサク、イスラエルを覚えてください。」つまり、この国民の祖先たちへの約束を思い出してください！と願い出たのです。

主は、ご自分の約束に忠実であり、「思いとどまって」イスラエルを滅ぼすという脅しを実行しませんでした。主は心を変えたわけではありません。全ての恵みの神である主は、自らの子供たちの祈りを聞くと約束しており、彼らにご自身の約束の言葉を守らせようとしています。彼は私たちに対しても、困難な時に同じように神の約束を信じてより頼むことを望んでいます。列王記第一 8 章 56 節、57 節で、ソロモンはエルサレムの神殿奉獻の際に祈り、「【主】はほむべきかな。しもべモーセを通して告げられた良い約束はみな、一つもたがわなかった。私たちの神、【主】は、私たちの先祖とともにおられたように、私たちとともにいて、私たちを見放さず、私たちを見捨てられませんように。」と祈りました。私たちもソロモンのように祈ることができます。使徒パウロはコリント人への第二の手紙 1 章 20 節で、「神の約束はことごとく、この方において「しかり」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです。」と言っています。私たちが同じ主に悩みを持ち寄り、神の言葉を守るよう求めることができるというのは、どれほど慰めとなることでしょうか。特に私たちが覚えておくべきはヨハネの言葉です。「それがキリストご自身の私たちにお与えになった約束であって、永遠のいのちです。」(1 ヨハネ 2：25)。

モーセの仲介行為からも、私たちにとって慰めとなる考え方が得られます。モーセは多くの時、罪深いイスラエルと正しい神との間で仲介者として行動しました。それはタブエラで民が食物について文句を言った時(民数記 11 章)、カデシュ・バルネアで民がカナンから戻ってきた 12 人の報告に対して不平を言った時(民数記 14 章)、主が不満を抱いた民を罰するために毒蛇を送った時(民数記 21 章)などです。詩篇 106 篇 23 節では、作者はモーセについて次のように記しています。

それゆえ、神は、「彼らを滅ぼす。」と言われた。

もし、神に選ばれた人モーセが、滅ぼそうとする激しい憤りを避けるために、御前の破れに立たなかったなら、どうなっていたことか。

しかし、私たちにはモーセよりも偉大な仲介者がいます。それはイザヤが告げるように、「彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしを」したイエス・キリストです（イザヤ 53:12）。ヘブル人への手紙の著者はイエスについて、「ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。」（ヘブル 7:25）と言っています。ですから私たちもキリストの名によって父なる神に祈り、主がご自身の言葉で私たちに約束されたすべてを守ってくださると確信を持って祈りましょう。

モーセが行動に出る

15 モーセは向き直り、二枚のあかしの板を手にして山から降りた。板は両面から書いてあった。すなわち、表と裏に書いてあった。

16 板はそれ自体神の作であった。その字は神の字であって、その板に刻まれていた。

17 ヨシュアは民の叫ぶ大声を聞いて、モーセに言った。「宿営の中にいくさの音がします。」

18 するとモーセは言った。「それは勝利を叫ぶ声ではなく、敗北を嘆く声でもない。私の聞くのは、歌を歌う声である。」

19 宿営に近づいて、子牛と踊りを見るなり、モーセの怒りは燃え上がった。そして手からあの板を投げ捨て、それを山のふもとで砕いてしまった。

20 それから、彼らが造った子牛を取り、これを火で焼き、さらにそれを粉々に砕き、それを水の上にまき散らし、イスラエル人に飲ませた。

21 モーセはアロンに言った。「この民はあなたに何をしたのですか。あなたが彼らにこんな大きな罪を犯させたのは。」

22 アロンは言った。「わが主よ。どうか怒りを燃やさないでください。あなた自身、民の悪いのを知っているでしょう。」

23 彼らは私に言いました。『私たちに先立って行く神を、造ってくれ。私たちをエジプトの地から連れ上ったあのモーセという者が、どうなったのか、私たちにはわからないから。』

24 それで、私は彼らに、『だれでも、金を持っている者は私のために、それを取りはずせ』と言いました。彼らはそれを私に渡したので、私がこれを火に投げ入れたところ、この子牛が出て来たのです。」

25 モーセは、民が乱れており、アロンが彼らをほうっておいたので、敵の物笑いとなっているのを見た。

26 そこでモーセは宿営の入口に立って「だれでも、【主】につく者は、私のところに」と言った。するとレビ族がみな、彼のところに集まった。

27 そこで、モーセは彼らに言った。「イスラエルの神、【主】はこう仰せられる。おのおの腰に剣を帯び、宿営の中を入口から入口へ行き巡って、おのおのその兄弟、その友、その隣人を殺せ。」

28 レビ族は、モーセのことばどおりに行った。その日、民のうち、おおよそ三千人が倒れた。

29 そこで、モーセは言った。「あなたがたは、おのおのその子、その兄弟に逆らっても、きょう、【主】に身をささげよ。主が、きょう、あなたがたに祝福をお与えになるために。」

シナイ山で主がイスラエル人の偶像礼拝の罪を明らかにされた後、民のために祈りを捧げたモーセは、主によって十戒が刻まれた石の板を携えて山を下りました。途中ヨシユアと合流し、二人で陣営に近づくと、黄金の子牛の周りで歌い踊る人々の騒音が耳に届きました。この後の出来事は簡潔な言葉で語られ、細部にはほとんど触れていませんが、これはモーセが状況に対してすぐに怒りを爆発させたことを反映しています。

モーセは板を投げ捨て、それを粉々にしました。黄金の子牛を粉末にし、山を流れる川の水に混ぜて、イスラエル人に飲ませました。モーセはアロンの情けない言い訳にすら耳を貸さず、アロンが民衆を非難し、自分は単に黄金を火に投げ入れたら「子牛が出てきた」と主張しているのを聞き流しました。追いかけてまわり、制御を失っていた人々の混乱を目の当たりにしたモーセは、秩序を回復するための助け手と呼ばけました。彼自身の部族であるレビ人が主のために立ち上がりました。彼らは陣営を巡り、三千人のイスラエル人を剣で討ちました。偶像礼拝は止められました。

この簡潔な説明と関連して、聖書自体では完全には答えられていないいくつかの疑問が生じます。なぜモーセは黄金の子牛を溶かして人々にその水を飲ませるという行為を選んだのでしょうか？これは人々に、彼らの偶像の神がいかに無力かを示すためだったのでしょうか？彼は彼らが崇拜していた神を飲むことで彼らに屈辱を味わわせたかったのでしょうか？これは、水が生命の源であることから、彼らが唯一まことのいのちの源を冒涇したことへの罰だったのでしょうか？ 35 節で言及されている疫病は、この飲み物の結果、主が民に与えたものだったのでしょうか？これは単にモーセの燃えるような怒りの結果であり、特別な意味は何もなかったのでしょうか？聖書はこれについては具体的に語っていませんが、聖書学者たちが出したこれらの意見全てに、何らかの真実が含まれている可能性があります。

また別の疑問も提起されています。もし全ての人々が関与していたとすると、レビ人の部族が、どうして他の全ての部族を圧倒することができたのでしょうか？もし人々の中で三千人だけが死んだとすると、この偶像礼拝の罪に関与していたのは、イスラエル人の一部だけだったのでしょうか？

たとえ国民の一部だけが直接関与していたとしても、全国民が責任を負うことになりました。神はイスラエルを一つの共同体として扱いました。これは後の出来事で、アカンという一人の男が主の明確な命令に反して征服されたアイの町からいくつかの物を盗んだ際にも見られる事例です。その際、ヨシュア記7章で見られるように、主はこの罪に対して全ての人々に責任を負わせました。この金の子牛を崇拝する事件において、モーセの怒りは全国民に対して向けられていました。



黄金の子牛

この出来事から生まれた幸せな展開はレビ人の行動にあります。ヤコブが人生の最末期にそれぞれの息子に預言の言葉を述べた際、シメオンとレビを呪いました。その理由は、彼らがシェケム人に暴力をふるい、怒りにまかせて彼らを殺害したからです。「私は彼らをヤコブの中で分け、イスラエルの中に散らそう。」とヤコブは創世記 49:7 で述べています。この場でモーセは助けを求める自身の呼びかけに応じて集まった部族の仲間たちに対し、「あなたたちは今日、主に選ばれました。自らの息子や兄弟に立ち向かったあなたたちを、主は今日、祝福しています。」と語りました。自らの命の終わりが近づいた時、モーセは申命記 33 章 9 節でレビとその子孫について下記のように述べました。

彼は、自分の父と母とについて、「私は、彼らを顧みない」と言いました。

また彼は自分の兄弟をも認めず、その子どもをさえ無視し、
ただ、あなたの仰せに従ってあなたの契約を守りました。

シナイでのこの出来事で、モーセの命令に従ったレビ人は、主の名誉を守るために、家族との絆や部族とのつながりを置き去りにする必要がありました。こうして彼らは、真に全国民に仕える祭司や仲介者としての資格を示すことができました。ヤコブの預言どおり、カナンに到着した彼らは実際に散らばりました。彼らは自らの土地を相続として受け取ることはありませんでしたが、彼ら自身が主の相続物であったのです。彼らは約束の地にある 48 のレビ人の都市に住み、神の律法を教える祭司として人々に仕えました。

モーセが再び仲介する

30 翌日になって、モーセは民に言った。「あなたがたは大きな罪を犯した。それで今、私は【主】のところに上って行く。たぶんあなたがたの罪のために贖うことができるでしょう。」

31 そこでモーセは【主】のところに戻って、申し上げた。「ああ、この民は大きな罪を犯してしまいました。自分たちのために金の神を造ったのです。」

32 今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら——。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。」

33 すると【主】はモーセに仰せられた。「わたしに罪を犯した者はだれであれ、わたしの書物から消し去ろう。」

34 しかし、今は行って、わたしがあなたに告げた場所に、民を導け。見よ。わたしの使いが、あなたの前を行く。わたしのさばきの日にわたしが彼らの罪をさばく。」

35 こうして、【主】は民を打たれた。アロンが造った子牛を彼らが礼拝したからである。

モーセが初めてイスラエル人のために取り成しを行った際(出エジプト記 32:11-13)、主は彼にイスラエル人の扱い方に関して直接的な返答をしませんでした。その間にモーセは山を下り、人々が金の子牛を崇拜する罪に対して厳しく叱責しました。その後、モーセは人々に対して再び主のもとへ上ることを告げ、「もしかしたら、あなたたちの罪の償いができるかもしれません」と語りました。

「償いをする」とは、神の怒りを和らげるために、人々の罪の代価を支払うことを意味します。モーセはイスラエルの赦しを求めるだけでなく、自らを代価として捧げました。もし主がこの赦しの懇願を受け入れないのであれば、モーセは「それならば、あなたが記録した書から私の名を消し去ってください」と述べました。

モーセはこれらの発言の中で、「いのちの書」を話題に出しています。その中には義人の名が記されており、その人々は天国で永遠の命を享受します。黙示録では、「いのちの書」に名が記されている者たちが天国における贖われた聖徒であると、様々な箇所と言及されています（黙示録 3:5; 13:8）。この書から名が消されることは、主との交わりから永遠に切り離されることを意味します。

モーセがこの提案を主に持ちかけた際、彼は感情に流されて自分の言葉の意味を十分に理解していなかったのでしょうか？あるいは、多くの聖書学者が主張するように、この提案は聖書全体で見られる最も偉大な自己犠牲の愛の一例なののでしょうか？いずれにせよ、本来、人間は罪の償いをすることはできません。それを成し遂げることができたのは、唯一イエス・キリストのけがれなき聖なる血のみでした。使徒パウロも、自分の民の多くがキリストを拒否し、それによって彼らの永遠の運命を封じてしまったことを思い、大きな悲しみを覚えました。「もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。」と、パウロはローマの手紙 9 章 3 節で宣言しています。しかし、パウロは「人は自分の兄弟をも買い戻すことはできない。」と詩篇 49 章 7 節が正しく言っていることを知っていました。

主はモーセへの返答の中でこれを明確に示しました。「わたしに対して罪を犯した者は、わたしの書物から消し去る」と。審判を下す権利は、神だけが持っています。同時に、主はモーセに対して、「神の使い」つまり天使が彼らの前に進むであろうと保証しました。（主がこれによって何を意味していたかについては、次の章で見ることになります。）しかし、偶像崇拜の罰として、主は人々に疫病を下しました。

この行為で、イスラエルの黄金の子牛への悲劇的な罪を報告する章は終わりを迎えます。これで主と反抗的な民の間に一種の休戦があったと言えるかもしれません。しかし、イスラエルは非常に重大な方法で主との契約関係を破っていました。これは神がその契約を確立した直後に起こりました。主との良好な契約関係は、イスラエルにおいて完全に回復されるのでしょうか？この重要な疑問に対する答えは、次の二つの章で明らかにされます。

出エジプト記 33 章

「わたしの使いが、あなたの前に行く」

- 1 【主】はモーセに仰せられた。「あなたも、あなたがエジプトの地から連れ上った民も、わたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓って、『これをあなたの子孫に与える』と言った地にここから上って行け。
- 2 わたしはあなたがたの前にひとりの使いを遣わし、わたしが、カナン人、エモリ人、ヘテ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人を追い払い、
- 3 乳と蜜の流れる地にあなたがたを行かせよう。わたしは、あなたがたのうちにあっては上らないからである。あなたがたはうなじのこわい民であるから、わたしが途中であなたがたを絶ち滅ぼすようなことがあるといけないから。」
- 4 民はこの悪い知らせを聞いて悲しみ痛み、だれひとり、その飾り物を身に着ける者はいなかった。
- 5 【主】はモーセに、仰せられた。「イスラエル人に言え。あなたがたは、うなじのこわい民だ。一時でもあなたがたのうちにあって、上って行こうものなら、わたしはあなたがたを絶ち滅ぼしてしまうだろう。今、あなたがたの飾り物を身から取りはずしなさい。そうすれば、わたしはあなたがたをどうするかを考えよう。」
- 6 それで、イスラエル人はホレブの山以来、その飾り物を取りはずしていた。

前の節で触れられているモーセの執り成しに対して、主はご自身の天使が、民と共に旅を続ける中で彼らの前に行くと言いました。これはどういう意味でしょうか？これは「主の使い」、すなわち、主ご自身を指しているのでしょうか？それとも、主に創造された天使を指しているのでしょうか？

上記の節で主はこの発言を明確にしました。主は再び「わたしはあなたがたの前にひとりの使いを遣わし」、と言いました。主は父祖たちへの約束を守ります。主はカナンの住民を追い払い、彼らに「乳と蜜の流れる地」を与えます。「しかし、私はあなたと共に行かない」と主は宣言しました。そして、この変わった状況の理由を付け加えました。「あなたがたはうなじのこわい民であるから、わたしが途中であなたがたを絶ち滅ぼすようなことがあるといけないから」。民は自らを頑なな心を持つ者と示しました。もし彼らがこのようであり続けるならば、主は正当な怒りによって彼らを滅ぼすことになるかもしれません。それが、主ご自身が共に行く代わりに、天使を彼らの前に送ると言った理由です。

主のこの宣言に対する民の反応は悔い改めの行為でした。彼らは悲しみを示すために装飾品を取り除き、嘆きました。主は脅しの言葉を繰り返しましたが、その後に「今、あなたがたの飾り物を身から取りはずしなさい。」と続け、状況を変える可能性のある

希望の光も示したのです。同様に、主はすべての時代を通じて、恵み深く民と関わり続けます。主は自らの言葉を通して私たちに罪とその罰を指摘します。しかし、私たちが絶望しないように、主は確かな恵みの約束も述べています。これは私たちが生きている限り必要とする悔い改めの訓練と正義の指導です。

会見の天幕

- 7 モーセはいつも天幕を取り、自分のためにこれを宿営の外の、宿営から離れた所に張り、そしてこれを会見の天幕と呼んでいた。だれでも【主】に伺いを立てる者は、宿営の外にある会見の天幕に行くのであった。
- 8 モーセがこの天幕に出て行くときは、民はみな立ち上がり、おのおの自分の天幕の入口に立って、モーセが天幕に入るまで、彼を見守った。
- 9 モーセが天幕に入ると、雲の柱が降りて来て、天幕の入口に立った。主はモーセと語られた。
- 10 民は、みな、天幕の入口に雲の柱が立つのを見た。民はみな立って、おのおの自分の天幕の入口で伏し拝んだ。
- 11 【主】は、人が自分の友と語るように、顔と顔とを合わせてモーセに語られた。モーセが宿営に帰ると、彼の従者でヌンの子ヨシュアという若者が幕屋を離れないでいた。

金の子牛を拝むという罪によって、主とイスラエルの間の交わりは一時的に中断されました。前の節で見たように、主はモーセに「私はあなたと共に行かない」と述べるに留まらず、かつてのようにご自身の民との密接な関係を示すことを実際に拒絶しました。しかし、主はなおモーセと対話を続けており、その場所はモーセが宿営の外に設置した天幕でした。そこでは雲の柱が現れ、主が「人が自分の友と語るように」モーセと対話しました。

つまり、主はモーセと以前と変わらずコミュニケーションをとり続けました。一方で、民はまだ試練を受ける必要があり、彼らの心の中で契約の関係が完全に回復することを切望する思いを再び抱かせることが求められていました。私たちはこの目標が達成されつつあることを確認できます。というのも、民は自らの天幕から注視し、モーセが宿営の外にある彼の天幕に向かい、主が雲の柱の中でモーセの天幕へと来られる様子を見守っていたからです。

主がモーセとの対話を続けたというこの保証は、彼に自信を与え、かつての主とイスラエルの関係が再び完全に回復可能かどうかを見極めるための一助となりました。

モーセと主の栄光

- 12 さて、モーセは【主】に申し上げた。「ご覧ください。あなたは私に、『この民を連れて上れ』と仰せになります。しかし、だれを私といっしょに遣わすかを知らせてくださいませんか。しかも、あなたご自身で、『わたしは、あなたを名ざして選び出した。あなたは特にわたしの心になっっている』と仰せになりました。
- 13 今、もしも、私があるあなたのお心になっっているのですしたら、どうか、あなたの道を教えてください。そうすれば、私はあなたを知ることができ、あなたのお心になうようになれるでしょう。この国民があるあなたの民であることをお心に留めてください。」
- 14 すると主は仰せられた。「わたし自身がいっしょに行って、あなたを休ませよう。」
- 15 それでモーセは申し上げた。「もし、あなたご自身がいっしょにおいでにならないなら、私たちをここから上らせないでください。
- 16 私とあなたの民とが、あなたのお心になっっていることは、いったい何によって知られるのでしょうか。それは、あなたが私たちといっしょにおいでになって、私とあなたの民が、地上のすべての民と区別されることによるのではないのでしょうか。」
- 17 【主】はモーセに仰せられた。「あなたの言ったそのことも、わたしはしよう。あなたはわたしの心にかない、あなたを名ざして選び出したのだから。」
- 18 すると、モーセは言った。「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」
- 19 主は仰せられた。「わたし自身、わたしのあらゆる善をあなたの前に通らせ、【主】の名で、あなたの前に宣言しよう。わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」
- 20 また仰せられた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」
- 21 また【主】は仰せられた。「見よ。わたしのかたわらに一つの場所がある。あなたは岩の上に立て。
- 22 わたしの栄光が通り過ぎるときには、わたしはあるあなたを岩の裂け目に入れ、わたしが通り過ぎるまで、この手であなたをおおっておこう。
- 23 わたしが手をのけたら、あなたはわたしのうしろを見るであろうが、わたしの顔は決して見られない。」

モーセは、天使がイスラエル人をカナンの地へと導き続けるという主からの約束を受けていました。私たちがこれまでに見てきたように、主の保証には一定の条件がついていました。過去のように主自身が導くのではなく、創造された天使が先導を務めることになるのです。また、前の数節には、モーセが人々の悔い改めの表現を経験した様子が記されていました。彼らは自分たちの装飾品を脱ぎ捨て、主との交わりの絆が再び確立されることを心から望んでいることを示しました。最終的には、自分自身と主との間の個人的な交わりの絆が以前と変わらず強いままであることを知り、モーセは安心しまし

た。主は過去と同様に「面と向かって」モーセとコミュニケーションをとり続けていました（33:11）。

そこで今、モーセは勇気を持って行動を起こし、イスラエルのためにさらに自分の主張を押し進める決意をしました。私たちの前にある節に記録されている主とモーセとの対話は、ヤコブがかつて行ったように、モーセが主との祈りの中で格闘している様子を示しています。彼は主から祝福を受ける前に主を手放したくありませんでした。

モーセはまず最初に、自分と主との間の密接な関係を主に思い出させます。次に、モーセはイスラエルに関しての主の意図についてさらなる情報を求めて懇願します。「あなたの道を教えてください。…この国民があなたの民であることを覚えてください。」私がこのあなたの民の指導者であるならば、モーセは懇願します、彼らに対するあなたの意図を私に知らせてください。私たちは、モーセがルターが小教理問答で主の祈りについて説明する際に私たちを励ますように、「大胆かつ自信を持って」主の恵みの座に近づいているのを見ます。

主はモーセを安心させ、「わたしの臨在があなたと共にあり、あなたに安息を与える」と言われました。モーセは自分が求めたものを受け取りました！主はご自身の臨在が常に民と共にあることを約束しました。彼らは被造物である天使以上のものを導き手として持つことになるのです！モーセはこの保証の言葉をしっかりと主に求めました。「もし、あなたご自身がいっしょにおいでにならないなら、私たちをここから上らせないでください。私とあなたの民とが、あなたのお心にかなっていることは、いったい何によって知られるのでしょうか。それは、あなたが私たちといっしょにおいでになって、私とあなたの民が、地上のすべての民と区別されることによるのではないのでしょうか。」モーセのこれらの言葉は、問いかけとして述べられていますが、実際には神の言葉と約束にしっかりと結びついた信者の言葉です。彼は詩篇の作者のように主に心から近づき、「天では、あなたのほかに、だれを持つことができます。地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。この身とこの心とは尽き果てましょう。しかし神はとこしえに私の心の岩、私の分の土地です。」と宣言しました（詩篇 73:25、26）。

再び主は次の言葉でモーセを安心させます。「あなたの言ったそのことも、わたしはしよう。あなたはわたしの心にかない、あなたを名ざして選び出したのだから。」モーセは喜びに満ち溢れました。この喜びに満ちた気持ちで、彼はさらに大胆な願いを申し出ます。「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」と彼は主に言いました。モーセは主と「顔と顔を合わせて」話をしていましたが（出エジプト 33:11）、主の栄光の外的な表れ以上のものは見ていませんでした。モーセは神をその完璧なきよさ、威厳、完全性と共に見たいと願っています。果たしてモーセは自ら何を求めていたのか、本当に理解していたのでしょうか？彼の願いは突然の衝動的な行動だったのでしょうか？モーセがこの願いを持った理由にはさまざまな説明があります。一部の人々は、これがイスラエルの罪の重大さを反映していると考えています。他方で、モーセが主と民の間の

仲介者として感じている極度のプレッシャーが、彼が主の栄光全体を見たくなる動機となったと主張する人もいます。さらに、単純に彼が喜びと畏敬の念に打ち震えていた、と見る向きもあります。

モーセの理由が何であれ、主はモーセの要求に応じることができませんでした。主ご自身が「あなたは私の顔を見ることはできません。私を見て生き延びることは誰にもできません。」と述べている通り、人間が太陽の光を直視してその輝きに目をくらませずにいられないように、この地上に生きる罪深い私たちもまた、聖なる神の栄光を目の当たりにし、それに耐えることはできません。信者もまた罪深い人間です。彼らには神を完全に把握したり、彼の道を完全に理解したり、彼の聖なる光の中に留まることは不可能です。ただし、永遠においてのみ、信者と聖なる神との間にあるヴェールが取り払われ、「私たちはキリストのありのままの姿を見る」(1 ヨハネ 3:2) のです。

しかし、この異例の要求をしたモーセに対して、主が怒りを示すことはありませんでした。かわりに、主はモーセに対してこう語りかけました。「わたし自身、わたしのあらゆる善をあなたの前に通らせ、【主】の名で、あなたの前に宣言しよう。わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」これらは神の神格をなんと美しく思い起こさせる言葉でしょうか！また、私たち人間にとって、主の栄光は主が私たちに明かした名前、即ち「私はある」者、「契約の主」であり、主の言葉を通じて、私たちに最も顕著に示された憐れみ、慈しみに富んだ、自由かつ忠実な恵みの神なのです！

続いて、主はモーセに非日常的な経験をさせます。シナイ山の頂で、主は自らモーセを岩の裂け目に納めました。通り過ぎた後、主はモーセに自らの「背中」、すなわちご自身の栄光の一端を見せます。ここでモーセが具体的に何を目撃したのかを言葉で表現するのは難しいことです。モーセ自身、これ以上何も語りませんでした。主ご自身が使う言葉でさえも、私たちの理解を超えています。主はその状況でできる限り多くをご自分のしもべモーセに啓示しました。モーセにとって重要な啓示は主の御名の宣言であり、これについては次の章でさらに詳しく聞くことになります。

キリスト者として、私たちの人生では地上の存在としての圧力が時折強く感じられることがあります。人生の困難や失望は次第に増していき、私たちの責任も決して軽減されることはありません。「私たちにはこれ以上、何を背負うことが求められているのでしょうか？」と私たちは自問し、祈りの中で主と格闘します。私たちは、主が約束した通り、彼が本当に私たちと共にいるという確かな証拠を切望しています。

私たちはペテロと共に宣言します。「主よ。私たちがだれのところに行きましょう。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。」(ヨハネ 6:68)。そうです。「永遠の命の言葉」です。しかし、言葉以上の証拠は頂けないのでしょうか？天国はとても遠く感じられます。『In Dulci Jubilio』(ラテン語原題：『祝福された喜び』)というクリスマス賛美歌の最後の節では「ああ、み国にあこがれる！」と、歌われるほどです。

「私たちにあなたの栄光を見せてください」と、私たちはモーセと共に言います。私たちは主なる神に、その栄光の現れを何らかの形で示してほしいと願います。

モーセも同様に望みました。エリヤもまた、旧約聖書の預言者の一人として、同様の確証を求めました。よく知られているように、エリヤは絶望の淵に立って、この同じ神の山に辿り着きました。「ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。」(Ⅰ列王記 19:10)。主はまた、エリヤに対してこの山で非日常的な体験をもたらししました。具体的には、山を裂く強風、岩を砕く地震、そして火をも引き起こしました。しかし、聖書に記されている通り、主は「風にも、地震にも、火にも」いませんでした。主は「静かなささやき声」の中でエリヤの元にやって来ました。主はエリヤに対し、ご自身の威厳や力などの外面的な証しではなく、主ご自身からの確証を求めるべきであると教えました。私たち信者に対し、主は力強い言葉と、いのちと救いの福音を、静かな声で語りかけてくださいます。それによって私たちは十分に力を得ることができると、主は私たちに再び保証します。それは、私たちが天で主の栄光を存分に見るその日まで続くのです。

この後の章では、主はこの真理を再び強調し、モーセに自らの名を告げ、またご自身の民との契約を新たに確認します。

出エジプト記 34 章

主の御名に関する説教

- 1 【主】はモーセに仰せられた。「前と同じような二枚の石の板を、切り取れ。わたしは、あなたが砕いたこの前の石の板にあったあのことばを、その石の板の上に書きしるそう。
- 2 朝までに準備をし、朝シナイ山に登って、その山の頂でわたしの前に立て。
- 3 だれも、あなたといっしょに登ってはならない。また、だれも、山のどこにも姿を見せてはならない。また、羊や牛であっても、その山のふもとで草を食べていてはならない。」
- 4 そこで、モーセは前と同じような二枚の石の板を切り取り、翌朝早く、【主】が命じられたとおりに、二枚の石の板を手にとって、シナイ山に登った。
- 5 【主】は雲の中であって降りて来られ、彼とともにそこに立って、【主】の名によって宣言された。
- 6 【主】は彼の前を通り過ぎるとき、宣言された。「【主】、【主】は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、
- 7 恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。」

モーセが岩の割れ目で主の栄光が通り過ぎるのを目の当たりにした後、主は彼に「最初のものと同じように二枚の石板を彫り出せ」と命じ、翌朝それらをシナイ山に持参するよう指示しました。今回は主が以前のように石板を提供しなかったことに注目しましょう。モーセが主から与えられた石板を壊したため、彼が自ら新しいものを用意するのは当然でした。主はこれらの石板に改めて十戒を記すと約束しました。

翌朝早く、モーセは再びシナイ山に登りました。この時は雷も、ラッパの音もなく、ヨシュアも同行しませんでした。モーセは一人で二枚の石板を持って雲の中の主と会い、ルターが「主の御名に関する説教」と称した主の言葉を聞きました。ここで再び、主が「彼の前を通り過ぎるとき」、その御名、主を中心とするこの説教をしたと伝えられています。「主、主、…」がこの説教の最初の言葉です。私たちは、この同じ山で主が燃える茂みにおいてモーセに栄光を現したことを思い出します。その時、主がモーセを呼んで彼の民をエジプトから導き出すように命じたとき、主はご自身を「私は私である」と「主」として、個人的で永遠の、変わることはない恵みの神として現しました。この説教で主が再度強調される重要な真理は次の通りです。「【主】、【主】は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく」、恵みとまことに富む神です。

アウグスト・パイパーは、「真の恵みはただひとり、全能にして絶対的に独立した神からのみ生じ得る」と述べています。「それは、他者からの寵愛や他者を脅かすことを一切必要とせず、無償の善意、愛、慈悲に満ちた心から恵みを注ぐ唯一無二の存在です」(『ワウワトーサ神学』、第2巻、480ページ)。

主はご自身を「怒るのにおそく」と自己紹介します。主は実際に「怒りをおそく発する」方です。神は愛であり、憤りではありません。神の愛と慈悲が軽んじられるとき、確かに怒りを内に感じることはありますが、主は怒りをおそく発し、「恵みとまことに富み」ます。神は揺るぎません。主の恵みと忠実さは一体であり、主は約束を守る方です。

主は「恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者」とであると、続きます。ここでの「千代」は、数え切れないほどの多くの人々や世代を象徴しています。神の恵みは、神そのものと同じく、無限です。そしてこれこそが主の栄光の偉大さです！主は悪の罪、法に反する反逆の罪、日々の罪など、あらゆる種類の罪をゆるします。

しかし、主はこの説教の最後の言葉でご自身の別の一面を宣言します。「罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。」とある通り、主の恵みが無限であっても、それは罪の重大さを見過ごしているということではないのです。すべての罪は、主の聖なる法を破ることであり神の栄光を汚します。したがって、どんな罪も神の罰を免れることはありません！どうやって主は、これら二つの側面を調和させるのでしょうか？アウグスト・パイパーはこの点について次のように記述しています。

キリスト教徒にとって、神の本質と意志に潜む全ての神秘は、私たちの理解を超えた信仰によって解明されています。私たちが知るのは、抽象的な神ではなく、エホバ、主、イスラエルの救い主にして聖なるものとされる神だけです…このエホバの神における律法と福音、無限の恵みと恐るべき怒りは、この世でも来世でも、時の中においても永遠においても、他のどんな二項対立よりも栄光に満ちた調和を成しています。主は千代にわたる不義、過犯、罪を赦す一方で、完全な無罪をゆるさず、父の罪を子や孫に三代、四代に渡って報いるのです。

そして、神とその道すべてにおける矛盾が解消される存在、すなわちイエス・キリスト、エホバの神は、天と地、永遠と時におけるあらゆる神秘の体現者であり啓示者です。『肉となった神』(1 テモテ 3:16)

(484,485 ページ)

パイパー教授は次のように説明します。イエスが私たちの罪の代償として罰されたのは、恵みが治めるため、そして私たちが永遠の平安を享受できるようになるためです。この

救いの恵みに立つとき、主は時に厳しく私たちを戒めます。しかし、これは愛する父として、私たちを最終的な滅びから救うためです。「これが私たちの救い主である神の恵みと怒りの真で幸いな調和です」とパイパー教授は結論づけます（486 ページ）。

私たちはキリスト教徒として信仰によって歩み、見た目だけで判断せずに進みます。「私たちは神を完全に理解することはできません。」とパイパー教授は記していますが、それはあくまでも「主の厳格な律法と確かな福音の約束に基づくことを超えては」という意味です。私たちは、モーセのように主の栄光を見たいと切望しています。いつかはそれが叶うでしょう。その日まで私たちは、神がご自身を私たちに全て啓示し、いつか主の臨在で永遠の生命を享受できることを知っています。この希望をもって、私たちは詩篇 16 編 9-11 節の言葉でともに歌います。

それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。

まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。

あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。

契約の回復

8 モーセは急いで地にひざまずき、伏し拝んで、

9 お願いした。「ああ、主よ。もし私があなたのお心にかなっているのであれば、どうか主が私たちの中にいて、進んでくださいますように。確かに、この民は、うなじのこわい民ですが、どうか私たちの咎と罪を赦し、私たちをご自身のものとしてくださいますように。」

10 主は仰せられた。「今ここで、わたしは契約を結ぼう。わたしは、あなたの民すべての前で、地のどこにおいても、また、どの国々のうちにおいても、かつてなされたことのない奇しいことを行おう。あなたとともにいるこの民はみな、【主】のわざを見るであらう。わたしがあなたとともに行うことは恐るべきものである。

11 わたしがきょう、あなたに命じることを、守れ。見よ。わたしはエモリ人、カナン人、ヘテ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人を、あなたの前から追い払う。

12 あなたは、注意して、あなたが入って行くその地の住民と契約を結ばないようにせよ。それがあなたの間で、わなとならないように。

13 いや、あなたがたは彼らの祭壇を取りこわし、彼らの石柱を打ち砕き、アシェラ像を切り倒さなければならない。

- 14 あなたはほかの神を拜んではならないからである。その名がねたみである【主】は、ねたむ神であるから。
- 15 あなたはその地の住民と契約を結んではならない。彼らは神々を慕って、みだらなことをし、自分たちの神々にいけにえをささげ、あなたを招くと、あなたはそのいけにえを食べるようになる。
- 16 あなたがその娘たちをあなたの息子たちにめとるなら、その娘たちが自分たちの神々を慕ってみだらなことをし、あなたの息子たちに、彼らの神々を慕わせてみだらなことをさせるようになる。
- 17 あなたは、自分のために鑄物の神々を造ってはならない。
- 18 あなたは、種を入れないパンの祭りを守らなければならない。わたしが命じたように、アビブの月の定められた時に、七日間、種を入れないパンを食べなければならない。あなたがアビブの月にエジプトを出たからである。
- 19 最初に生まれるものは、すべて、わたしのものである。あなたの家畜はみな、初子の雄は、牛も羊もそうである。
- 20 ただし、ろばの初子は羊で贖わなければならない。もし、贖わないなら、その首を折らなければならない。あなたの息子のうち、初子はみな、贖わなければならない。だれも、何も持たずに、わたしの前に出てはならない。
- 21 あなたは六日間は働き、七日目には休まなければならない。耕作の時も、刈り入れの時にも、休まなければならない。
- 22 小麦の刈り入れの初穂のために七週の祭りを、年の変わり目に収穫祭を、行わなければならない。
- 23 年に三度、男子はみな、イスラエルの神、【主】、主の前に出なければならない。
- 24 わたしがあなたの前から、異邦の民を追い出し、あなたの国境を広げるので、あなたが年に三度、あなたの神、【主】の前に出るために上る間にあなたの地を欲しがめる者はだれもいないであろう。
- 25 わたしのいけにえの血を、種を入れたパンに添えて、ささげてはならない。また、過越の祭りのいけにえを朝まで残しておいてはならない。
- 26 あなたの土地から取れる初穂の最上のものを、あなたの神、【主】の家に持って来なければならない。子やぎをその母の乳で煮てはならない。」
- 27 【主】はモーセに仰せられた。「これらのことばを書きしるせ。わたしはこれらのことばによって、あなたと、またイスラエルと契約を結んだのである。」
- 28 モーセはそこに、四十日四十夜、【主】とともにいた。彼はパンも食わず、水も飲まなかった。そして、彼は石の板に契約のことば、十のことばを書きしるした。

主から直接、主の御名についての説教を聞いた後、モーセは地面にひれ伏し、救い主である神を礼拝しました。彼はもう一度勇気を出して、主に、神聖な臨在をもってご自

身の民と共にいてくださるよう願いました。「この民は頑固な民ですが」とモーセは祈りました。「どうか私たちの悪と罪を赦し、私たちをご自身のものとして受け入れてくださいますように。」

主は、シナイ山で確立された契約を再確認することで応じました。イスラエルは黄金の子牛を崇拝することによってその契約を破っていました。上記の節では、主はシナイの契約の主要な点を要約しました。特にカナンの地の民といかなる種類の条約も結ばないように警告しました。偶像崇拝のあらゆる形跡——異教徒の祭壇、記念碑、アシェラの女神に捧げられた柱——は破壊されるべきであるとされました。主はその後、エホバへのまことの礼拝に関する指示を簡潔に繰り返しました。安息日、特別な祭り、初子の奉納に関する法律も再び言及されました。これらの法律は、イスラエルが約束されたカナンの地に入ることへの希望を象徴し、契約が完全に復活したことをモーセと民に保証しています。これによりモーセと民に、契約が完全に回復されたという保証が与えられました。シナイの法の要約は、シナイ山での最初の契約の際と同様、「子やぎをその母親の乳で煮てはならない」という声明で結ばれました。

モーセは再度、以前と同様に契約の言葉を記録するよう命じられ、40 日 40 夜、パンも水も摂らずにシナイ山に留まりました。契約の規定は同じでした。十戒は同じ言葉で二枚の石板に再び刻まれました。モーセの 40 日間の不在を通じて、民は再び試されましたが、今度は耐え忍び、彼の帰還を忍耐強く待ち続けました。

モーセの光輝く顔

29 それから、モーセはシナイ山から降りて来た。モーセが山を降りて来たとき、その手に二枚のあかしの石の板を持っていた。彼は、主と話したので自分の顔のはだが光を放ったのを知らなかった。

30 アロンとすべてのイスラエル人はモーセを見た。なんと彼の顔のはだが光を放つではないか。それで彼らは恐れて、彼に近づけなかった。

31 モーセが彼らを呼び寄せたとき、アロンと会衆の上に立つ者がみな彼のところに戻って来た。それでモーセは彼らに話しかけた。

32 それから後、イスラエル人全部が近寄って来たので、彼は【主】がシナイ山で彼に告げられたことを、ことごとく彼らに命じた。

33 モーセは彼らと語り終えたとき、顔におおいを掛けた。

34 モーセが【主】の前に入って行って主と話するときには、いつも、外に出るときまで、おおいをはずしていた。そして出て来ると、命じられたことをイスラエル人に告げた。

35 イスラエル人はモーセの顔を見た。まことに、モーセの顔のはだは光を放った。モーセは、主と話すために入っていくまで、自分の顔におおいを掛けていた。

モーセの顔に映る主の栄光は、契約が復活した証として民に与えられました。この栄光は、モーセを介して再び民の中に宿りました。しかし、モーセは自らの顔が輝いていることに気づいていませんでした。その輝きにより、アロンとイスラエルの民はモーセの近くに来ることを恐れるようになりました。民の恐怖を軽減するために、モーセは人々に話しかける時や、シナイ山で受けた主の命令を伝える時に顔に「おおい」をかけました。

残念ながら、欽定訳の英語聖書の翻訳、ならびにルターのドイツ語訳は、モーセの顔のベールの主な目的が主の栄光を隠すこと、そして民が恐れないようにすることにあると伝えています。しかし実際は、英語の NIV（新国際版）など他の翻訳が示すとおり、イスラエルの民はモーセの顔に映る主の栄光を実際に目にしていました。モーセが顔にベールをかけたのは、民の恐怖に応じるだけでなく、パウロがコリント人への手紙第二の 3 章 13 節で指摘するように、「消えうせるものの最後をイスラエルの人々に見せないように」するためでした。

モーセの顔はシナイの法の栄光を反映していました。パウロがコリント人への手紙第二の 3 章で私たちの注意を引くその栄光は、消えゆく栄光でした。モーセの「おおい」は「キリストによって取り除かれる」とパウロは 14 節で宣言しています。パウロが比較を通じて指摘しているように、私たちの新約時代の宣教の栄光はモーセの時代のものよりもはるかに大きなものです。律法を完全に成就したキリストを中心とする新約の宣教は、消えることのない霊の働きを世に広めるものです。これは条件や制限を設けない、不朽の神の福音の栄光を映し出す奉仕であり、永遠に続きます。私たち新約のキリスト者は、迷える罪人に、終わりのない喜びを伝えるという、何よりも価値ある使命を帯びています。これほどの特権を無償で与えてくださる慈悲深い主に、感謝せずにはいられません。

これらの節に対する興味深い注釈として、イタリア・ジェノバにあるミケランジェロの著名なモーセ像が挙げられます。29 節にはモーセの顔が、主との対話により「肌が光を放った」と記されています。この「光を放った」つまり輝いた、という意味の語は、「角」という意味のヘブライ語から来ています。聖書をラテン語に翻訳した教父ジェロームは、シナイ山から降りたモーセの頭に角が生えているように見えたと言明しました。この解釈に基づき、ミケランジェロはモーセの像に光の光線ではなく、角をつけた頭部を表現しました。

これらの節で、34 章は終わりを迎えます。主の契約は復元されました。イスラエルの子牛崇拜の罪による深刻な中断があったにもかかわらず、主の慈悲によって、その関係の断絶は修復されました。民はこれにより、主の計画に則した幕屋の建設という課題に取り組む準備が整いました。

出エジプト記 35 章

安息日の規定

- 1 モーセはイスラエル人の全会衆を集めて彼らに言った。「これは、【主】が行えと命じられたことばである。
- 2 六日間は仕事をしてもよい。しかし、七日目には、【主】の聖なる全き休みの安息を守らなければならない。この日に仕事をする者は、だれでも殺されなければならない。
- 3 安息の日には、あなたがたのどの住まいのどこでも、火をたいてはならない。」

主とイスラエル人の間に新たな契約が成立したのち、モーセは人々を集めて、幕屋建設の神聖な命令を告げました。さらに、安息日の重要性を再確認し、その日には一切の労働を行わず、火も焚かないという指示を強調しました。安息日の命令に違反した場合は、死をもって償わなければなりませんでした。

この警告が発せられたのは、建設作業への熱意を抑え、人々が安息日の規則を尊重するようにするためでした。確かにその仕事は主の栄光のためであり、非常に大切なものでした。それでも、安息日の遵守は、主にとってはそれ以上に重要であり、その日は幕屋の建築を行うべきではありませんでした。

安息日の遵守がなぜそれほど重要だったのでしょうか？それは主の好意を得るための手段ではありませんでした。実際、安息日の休息は、救世主による主の民への完全な休息の約束の象徴であり、主の来臨によって成就し、永遠に続くものでした。それはキリストの影でした。安息日の成就者であるイエスが来られたとき、イエスはこう宣言しました。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイ 11:28) イエスは罪のゆるしの確信を通して魂の休息を提供し、救いの業を通じて全人類のためにこの休息を勝ち取りました。そして今日も、イエスの福音の宣教を通じて全ての人々にこの休息を提供しています。

ヘブル人への手紙の筆者は、神の民に与えられたこの安息日の休息について触れ、福音の説教に耳を傾けるようにと奨励しています。「きょう、もし御声を聞くならば、荒野での試みの日に御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにすることはならない。」(ヘブル 3:7,8)

私たち新約時代のクリスチャンにとって、この励ましを心に留めることは良いことです。週の特定の日に休むという旧約聖書の安息日の規則は、今の私たちには当てはまりません。キリストは旧約聖書の安息日を完璧に成就されました。これは、多くの人が誤解していますが、救い主の言葉を軽んじてよいという免罪符を私たちに与えるわけではありません。神のみ言葉は、永遠の命へと歩む私たちを強めます。神のみ言葉を聞く機会を逃し、礼拝で神の

み名を賛美することを怠ると、私たちは自己中心的な欲望の奴隷になり、永遠の安息を受け継ぐ代わりに、永遠の滅びを招くことになります。

主の日に捧げる私たちの礼拝が、黙示録にヨハネが描いた、主との完全な休息と交わりの前兆となることを願います。「そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。『見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。』」(黙示録 21:3,4) 私たちが天において永遠に享受を願う休息は、まさにこれです。

幕屋のための材料

- 4 モーセはイスラエル人の全会衆に告げて言った。「これは、【主】が命じて仰せられたことである。
- 5 あなたがたの中から【主】への奉納物を受け取りなさい。すべて、心から進んでささげる者に、【主】への奉納物を持って来させなさい。すなわち、金、銀、青銅、
- 6 青色、紫色、緋色の撚り糸、亜麻布、やぎの毛、
- 7 赤くなめした雄羊の皮、じゅごんの皮、アカシヤ材、
- 8 燈油、そそぎの油とかおりの高い香のための香料、
- 9 エポデや胸当てにはめ込むしまめのうや宝石である。
- 10 あなたがたのうちの心に知恵のある者は、みな来て、【主】が命じられたものをすべて造らなければならない。
- 11 幕屋、その天幕と、そのおおい、その留め金とその板、その横木、その柱と、その台座、
- 12 箱と、その棒、『贖いのふた』とおおいの垂れ幕、
- 13 机と、その棒とそのすべての用具と供えのパン、
- 14 燈火のための燭台と、その用器とともしび皿と、燈火用の油、
- 15 香の壇と、その棒とそそぎの油とかおりの高い香と幕屋の入口につける入口の垂れ幕、
- 16 全焼のいけにえの祭壇とそれに付属する青銅の格子、その棒とそのすべての用具、洗盤と、その台、
- 17 庭の掛け幕、その柱とその台座と庭の門の垂れ幕、
- 18 幕屋の釘と庭の釘と、そのひも、
- 19 聖所で仕えるための式服、すなわち、祭司アロンの聖なる装束と、祭司として仕える彼の子らの装束である。」

モーセは、幕屋の建設のため、イスラエルの全共同体に主への献げ物をするよう呼びかけました。献げ物は、彼らが所有するものから捧げることとされました。主は不可能なことを望んでいませんでした。主は豪華で高価な材料を要求しました。しかし、以前述べたように、これらの材料はイスラエル人がエジプト人から受け取ったもの、またはイスラエル人が宿営する場所で様々な方法で手に入れることができました。確かに、これらの材料を集めるには実際の努力が必要だったでしょうし、場合によっては個人的な犠牲を伴ったでしょう。しかし、主の名誉を高める目的であれば、主は最良を求めることを躊躇しませんでした。

また、幕屋に必要な物品は詳細にリストされていました。主は民に情報を隠さず、曖昧な表現で要求をぼかすこともありませんでした。貴金属や海牛^{じゅごん}の皮、宝石、石だけでなく、テントの釘やロープのような小さな品物もリストに含まれていました。主の奉仕のためには、高価であろうと些細であろうと、すべて捧げるに値しました。

おそらく、金や貴重な宝石に恵まれていないイスラエル人もいたでしょう。それでも彼らはこの共同プロジェクトに参加することができました。モーセは、「技術を持つ者は全員が来て、主によって命じられた全てを作るべきだ」と述べました。彼らは、手作業による労力を捧げて、その技術を主にささげることができました。男性は雄羊の皮や海牛^{じゅごん}の皮を集めて準備することが可能でした。女性は指示された複雑な種の糸を紡ぎ、指定された方法で布を作ることができました。職人は、指示通りに木工や金属加工を施すことができました。オリブオイルや香料は、主の厳密なレシピに基づいて準備されました。すべての人が何らかの形で自分の才能を用いることができました。

これらすべてを通じて、私たちは主要な指示に注目します。「意志がある者は、主に捧げる献げ物を持って来るべきだ」と。材料と労働に関する献げ物は、喜んで行う贈り物である必要がありました。人々には不当な圧力はかけられませんでしたし、法的な脅しも行われませんでした。主は、この贈り物が民の心から自然に湧き出ることを望んでいました。主は、その贈り物が主の恵みに対する感謝と、主の聖なるみ名の栄光をあらわす精神で捧げられることを望んでいました。

現代の教会における賢明な管理の原則を探る際、出エジプト記のこの章以上の例はありません。主への献げ物は、今日においても私たちの教会生活における重要な要素です。寛大な寄付は、地域の教会の活動を支え、広範な宣教活動を行うために必要です。地元の教会のニーズと教団の活動に関する年間予算を一目見れば、この必要性が明確になります。建築プログラムはこれらの必要性の中でも特に重要な部分を占めます。改善や拡張プロジェクトがない教会や教団は、将来への展望が不足していると言えます。したがって、「主に献げ物を持っていく」という要請は常に私たちに課されています。私たちはどのようにして、「教会はただお金が欲しいだけだ」という、しばしば繰り返される苦情を聞かずに、人々に何度もアプローチすることができるのでしょうか。

出エジプト記 35 章は、「これは、【主】が行えと命じられたことばである。」と強調して始まります。献げ物は「主のためのもの」です。主は理由もなく、根拠もなく要求することはありません。これは、ご自身の恵みと慈悲を示し、永遠の契約を結んだ主であり、民がその感謝を表現し、主との交わりを持つために献げ物が必要だと知る救い主です。主が私たちの贈り物を求めるのは、私たちを必要としているからではなく、私たちが主を必要としており、私たちの生活と礼拝の中でそのことを表現する必要があるからです。また、主の恵みが私たちにとって価値があるならば、できるだけ多くの人々とそれを共有したいと願うはずですよ。

献げ物の呼びかけを行う際、なぜ収入に応じた評価をしないのか？なぜ特定の金額を求めないのか...？と、自由意志にもとづく献げ物への信頼を失い、資金調達を成功させるために法的な圧力を課すことは、人間の弱さから来る考えです。ここで新約聖書が自由意志の献げ物の精神をどのように表現しているかを学びましょう。第二コリント 5:14 にあるように、キリストの福音が私たちを動機付けています。主イエス・キリストの恵みが、神に受け入れられる贈り物を喜んで捧げる心をクリスチャンに授けます。第一コリント 16 章 14 節、第二コリント 8 章および 9 章の研究は、この重要な聖書の教えを理解し確固たるものとするのに非常に有効です。

これは、献金を集めることが楽な仕事であるという意味ではありません。モーセが人々に正確に必要なものを伝えたように、私たちも教会や教区のニーズを他の信徒に明確に伝えるべきです。これらの要求について謝る必要はありません。これは主の仕事です。主の仕事は私たちの最優先事項です。また、すべての信徒が主に捧げる贈り物を持ち寄ることも意味します。モーセは全イスラエル共同体に呼びかけました。彼は金や銀の寄付だけでなく、様々な技能も主の奉仕に役立てるよう配慮しました。このような努力は、私たち全員の関与を必要とし、仕事を伴います。それは組織を必要とします。しかし、キリストの体である各信者に主への愛を示す機会を提供します。

アフリカの遠隔地の村々では、人々はほとんどお金を持っていません。しかし、彼らは主への愛やその仕事への献身を示す他の方法を持っています。彼らは自らの手で、アフリカの森林から得られる材料を使って自分たちの教会を建設できます。主への特別な感謝の日には、彼らのトウモロコシ、ピーナッツ、キャッサバの根を主の祭壇に捧げることができます。彼らは「主の畑」として土地の一部を確保し、その収穫物を市場で「主の恵み」として売ることができます。主は不可能を求めることはありません。感謝の心があるところでは、キリスト教の運営は喜びとなり、一部の人が思い描くような苦痛ではなくなります。

捧げもの

20 イスラエル人の全会衆は、モーセの前から立ち去った。

21 感動した者と、心から進んでする者とはみな、会見の天幕の仕事のため、また、そのすべての作業のため、また、聖なる装束のために、【主】への奉納物を持って来た。

- 22 すべて心から進んでささげる男女は、飾り輪、耳輪、指輪、首飾り、すべての金の飾り物を持って来た。金の奉獻物を【主】にささげた者はみな、そうした。
- 23 また、青色、紫色、緋色の撚り糸、亜麻布、やぎの毛、赤くなめした雄羊の皮、じゅごんの皮を持っている者はみな、それを持って来た。
- 24 銀や青銅の奉納物をささげる者はみな、それを【主】への奉納物として持って来た。アカシヤ材を持っている者はみな、奉仕のすべての仕事のため、それを持って来た。
- 25 また、心に知恵のある女もみな、自分の手で紡ぎ、その紡いだ青色、紫色、緋色の撚り糸、それに亜麻布を持って来た。
- 26 感動して、知恵を用いたいと思った女たちはみな、やぎの毛を紡いだ。
- 27 上に立つ者たちはエポデと胸当てにはめるしまめのうや宝石を持って来た。
- 28 また、燈火、そそぎの油、かおりの高い香のためのバルサム油とオリーブ油とを持って来た。
- 29 イスラエル人は、男も女もみな、【主】がモーセを通して、こうせよと命じられたすべての仕事のために、心から進んでささげたのであって、彼らはそれを進んでささげるささげ物として【主】に持って来た。

これらの節は、イスラエル人がモーセの神の幕屋建設のための献金の呼びかけに応えた様子を描写しています。その結果は、第 36 章で報告されています。ここでは、全コミュニティが参加したことが伝えられています。応答は心からのものでした。貴重な材料が惜しみなく与えられました。技能を持つ人々は喜んで自らの技術を提供しました。女性たちは指定された精巧なデザインの素材を紡ぎました。部族の指導者たちは貴重な石や宝石を持ちよりました。これらの節において、この応答の自発的な性質は何度も強調され、最後の節で次のように要約されています。「イスラエル人は、男も女もみな、【主】がモーセを通して、こうせよと命じられたすべての仕事のために、心から進んでささげたのであって、彼らはそれを進んでささげるささげ物として【主】に持って来た。」

このような反応を見ることは、モーセにとって本当の喜びだったに違いありません。この直前に、この同じ国民は黄金の子牛の周りで踊っていました。主は怒りの中で、彼らを契約の恵みから断ち切ると脅し、モーセは人々のために仲介しました。主は恵み深く彼らの罪を許し、契約の関係を回復しました。この暗い背景から、熱心な返答は特に心温まるものだったに違いありません。

今日、主のみわざにおいて、キリスト教徒の集会が喜んで奉仕を提供するような呼びかけに応じることほど大きな喜びはありません。使徒パウロも、マケドニアの教会がエルサレムの貧しいキリスト教徒を助けるための呼びかけに対して惜しみなく寄付したとき、喜びを感じました。パウロはこの自発的な反応について、すべての栄光を神に捧げました。彼はコリント人への手紙第二 9 章 7、8 節で次のように書いています。「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。

神は喜んで与える人を愛してください。神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。」

福音の勝利を祝うこれらの喜びの瞬間にも、私たちはすべての栄光を神に捧げるべきです！

ベツアルエルとオホリアブ

30 モーセはイスラエル人に言った。「見よ。【主】はユダ部族のフルの子であるウリの子ベツアルエルを名ざして召し出し、

31 彼に、知恵と英知と知識とあらゆる仕事において、神の霊を満たされた。

32 それは彼が金や銀や青銅の細工を巧みに設計し、

33 はめ込みの宝石を彫刻し、木を彫刻し、あらゆる設計的な仕事をさせるためである。

34 また、彼の心に人を教える力を授けられた。彼とダン部族のアヒサマクの子オホリアブとに、そうされた。

35 主は彼らをすぐれた知恵で満たされた。それは彼らが、あらゆる仕事と巧みな設計をなす者として、彫刻する者、設計する者、および、青色、紫色、緋色の撚り糸や亜麻布で刺繍する者、また機織りする者の仕事を成し遂げるためである。

モーセは、ベツアルエルとオホリアブを、幕屋の建設及びその設備の監督を務める主任建築家として紹介しました。再び、モーセは「神の霊」がこれらの男性とその助手たちに特別な才能を与えて指定された任務を遂行させたことを繰り返し称賛しています。

私たちも「すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来る」（ヤコブ 1:17）と理解し、神が私たちの内で働き、主の善い目的に従って意志と行動を起こさせることを認識すべきです。また、私たちに与えられた神の実用的な技能に感謝し、神の家を美しくする努力に対しても同様に「いと高き神にすべての栄光を。」と言うべきです。

アフリカで住民自らによって建設された最初の村の教会は、モーゼス・ムランガによって寄付された土地に建てられました。彼はまた、大部分の労働を提供し、工事を指揮しました。献堂式の日、ムランガ氏の貢献を称賛しようとする人々がいましたが、彼は「この家を建てたのは主です。私たちは単に遊びながら手伝っただけです」と答えました。より洗練された社会で、より複雑な手法を用いる場合でも、結局は家を建てるのは主です。

出エジプト記 36 章

十分であり、あり余るほど

- 1 ベツアルエルとオホリアブ、および、聖所の奉仕のすべての仕事をするのできる知恵と英知を【主】に与えられた、心に知恵のある者はみな、【主】が命じられたすべてのことを成し遂げなければならない。」
- 2 モーセは、ベツアルエルとオホリアブ、および、【主】が知恵を授けられた、心に知恵のある者すべて、すなわち感動して、進み出てその仕事をしたいと思う者すべてを、呼び寄せた。
- 3 彼らは、聖所の奉仕の仕事をするためにイスラエル人が持って来たすべての奉納物をモーセから受け取った。しかしイスラエル人は、なおも朝ごとに、進んでささげるささげ物を彼のところに持って来た。
- 4 そこで、聖所のすべての仕事をしていた、知恵のある者はみな、それぞれ自分たちがしていた仕事から離れてやって来て、
- 5 モーセに告げて言った。「民は幾たびも、持って来ています。【主】がせよと命じられた仕事のために、あり余る奉仕です。」
- 6 それでモーセは命じて、宿営中にふれさせて言った。「男も女も、もはや聖所の奉納物のための仕事をしないように。」こうして、民は持って来ることをやめた。
- 7 手持ちの材料は、すべての仕事をするのに十分であり、あり余るほどであった。

モーセへの献金の応答は圧倒的でした。提供されたものは必要量を大幅に上回りました。ベザレル、オホリアブ、および彼らの助手たちに材料が届けられた際、量が多かったため、さらなる献金をする人々を制止する必要があったほどです。

自由意志に基づく献金制度は効果的なのでしょうか？はい。それは、人々が福音に動機付けられ、必要性が明確に説明され、すべての人に対して助けを求める呼びかけが行われる場合においては、効果的だと言えます。

神の霊は、「私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方」です。その方に、「教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。」(エペソ 3:20,21)。

既に述べた通り、パウロもマケドニアの教会から同様の反応を経験しました。彼はコリント人への手紙で彼らについて次のように書いています。「苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。私はあかしします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、

熱心に私たちに願ったのです。そして、私たちの期待以上に、神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげ、また、私たちにもゆだねてくれました。」(Ⅱコリント 8:2-5)。

上記の節から分かる通り、寛大な献金の秘訣は、「まず自分自身を主にささげる」ことです。人々が多大なる献金をしたのは、神が彼らに与えた恵みを感謝していたからです。パウロはさらに、「あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」(Ⅱコリント 8:9) と付け加えます。キリスト教徒がこの神の恵み、すなわち御子イエス・キリストという贈り物について理解し始めると、おのずと主に自分自身を捧げるようになります。そうすれば、教会の仕事や福音の伝道のために贈り物が豊かに注がれ、教会の財庫は溢れるほどになるでしょう。

したがって、私たちの財産管理プロジェクトでは、パウロがコリント人に訴えたように呼びかけるべきです。「私が求めているのは、あなたがたの持ち物ではなく、あなたがた自身だからです。」(Ⅱコリント 12:14)。

次に続く出エジプト記 36 章 8 節から 38 章 31 節には、幕屋の建設が詳細に記述されています。これらの節は、主がシナイ山でモーセに与えた指示の記録とほぼ一致しています(出エジプト 25-27,30 章を参照)。このセクションは無意味な繰り返しではありません。むしろ、イスラエル人が主の指示にいかに慎重に従ったかを明示しています。(エペソ 3:20,21)。

出エジプト記 36 章 8 節から 38 章 31 節

8 仕事に携わっている者のうち、心に知恵のある者はみな、幕屋を十枚の幕で造った。撚り糸で織った亜麻布、青色、紫色、緋色の撚り糸で作り、巧みな細工でケルビムを織り出した。

9 幕の長さは、おのおの二十八キュビト、幕の幅は、おのおの四キュビト、幕はみな同じ寸法とした。

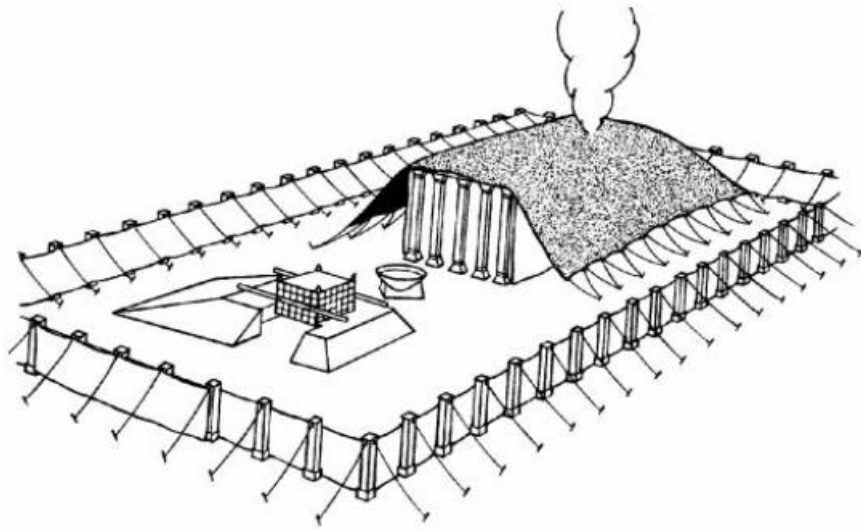
10 五枚の幕を互いにつなぎ合わせ、また、他の五枚の幕も互いにつなぎ合わせた。

11 そのつなぎ合わせたものの端にある幕の縁に青いひもの輪をつけた。他のつなぎ合わせたものの端にある幕の縁にも、そのようにした。

12 その一枚の幕に輪五十個をつけ、他のつなぎ合わせた幕の端にも輪五十個をつけ、その輪を互いに向かい合わせにした。

13 そして、金の留め金五十個を作り、その留め金で、幕を互いにつなぎ合わせて、一つの幕屋にした。

- 14 また、幕屋の上に掛ける天幕のために、やぎの毛の幕を作った。その幕を十一枚作った。
- 15 その一枚の幕の長さは三十キュビト。その一枚の幕の幅は四キュビト。その十一枚の幕は同じ寸法とした。
- 16 その五枚の幕を一つにつなぎ合わせ、また、ほかの六枚の幕を一つにつなぎ合わせ、
- 17 そのつなぎ合わせたものの端にある幕の縁に、輪五十個をつけ、他のつなぎ合わせた幕の縁にも輪五十個をつけた。
- 18 また、青銅の留め金五十個を作り、その天幕をつなぎ合わせて、一つにした。
- 19 また、天幕のために、赤くなめした雄羊の皮のおおいと、じゅごんの皮でその上に掛けるおおいを作った。
- 20 さらに、幕屋のためにアカシヤ材で、まっすぐに立てる板を作った。
- 21 板一枚の長さは十キュビト、板一枚の幅は一キュビト半であった。
- 22 板一枚ごとに、はめ込みのほぞ二つを作った。幕屋の板、全部にこのようにした。
- 23 幕屋のために板を作った。南側に板二十枚。
- 24 その二十枚の板の下に銀の台座四十個を作った。一枚の板の下に、二つのほぞに二個の台座、ほかの板の下にも、二つのほぞに二個の台座を作った。
- 25 幕屋の他の側、すなわち、北側に板二十枚を作った。
- 26 銀の台座四十個。すなわち、一枚の板の下に二個の台座。ほかの板の下にも二個の台座。
- 27 幕屋のうしろ、すなわち、西側に板六枚を作った。
- 28 幕屋のうしろの両隅のために、板二枚を作った。
- 29 底部では重なり合い、上部では一つの環で一つに合わさるようにした。二枚とも、そのように作った。それが両隅であった。
- 30 板は八枚、その銀の台座は十六個、すなわち一枚の板の下に、二つずつ台座があった。
- 31 ついで、アカシヤ材で横木を作った。すなわち、幕屋の一方の側の板のために五本、
- 32 幕屋の他の側の板のために横木五本、幕屋のうしろ、すなわち西側の板のために横木五本を作った。
- 33 それから、板の中間を、端から端まで通る中央横木を作った。
- 34 板には金をかぶせ、横木を通す環を金で作った。横木には金をかぶせた。
- 35 ついで、青色、紫色、緋色の撚り糸、撚り糸で織った亜麻布で、垂れ幕を作った。これに巧みな細工でケルビムを織り出した。



神の幕屋

36 そのために、アカシヤ材の四本の柱を作り、それに金をかぶせた。柱の鉤は金であった。そしてこの柱のために銀の四つの台座を鑄造した。

37 ついで、天幕の入口のために、青色、紫色、緋色の撚り糸、撚り糸で織った亜麻布で、刺繍をした幕を作った。

38 五本の柱と、その鉤を作り、その柱の頭部と帯輪に金をかぶせた。その五つの台座は青銅であった。

出エジプト記 37 章

- 1 ベツァルエルはアカシヤ材で一つの箱を作った。長さは二キュビト半、幅は一キュビト半、高さは一キュビト半。
- 2 その内側と外側を純金でかぶせ、その回りに金の飾り縁を作った。
- 3 箱のために、金の環四つを鑄造し、その四隅の基部に取りつけた。一方の側に二つの環を、他の側にほかの二つの環を取りつけた。
- 4 また、アカシヤ材で棒を作り、これを金でかぶせ、
- 5 その棒を、箱をかつぐために箱の両側にある環に通した。
- 6 ついで彼は、純金で「贖いのふた」を作った。長さは二キュビト半、幅は一キュビト半。
- 7 また、槌で打って作った二つの金のケルビムを「贖いのふた」の両端に作った。
- 8 一つのケルブを一方の端に、他のケルブを他方の端に。ケルビムを「贖いのふた」の一部として、その両端に作った。
- 9 ケルビムは翼を上の方に伸べ広げ、その翼で「贖いのふた」をおおい、ケルビムは互いに向かい合い、その顔は「贖いのふた」に向いていた。
- 10 彼は、アカシヤ材で、一つの机を作った。長さは二キュビト、幅は一キュビト、高さは一キュビト半。
- 11 これを純金でかぶせ、その回りに金の飾り縁を作った。
- 12 その回りに、手幅のわくを作り、そのわくの回りに金の飾り縁を作った。
- 13 その机のために、金の環四個を鑄造し、その四本の足のところの四隅に、その環を取りつけた。
- 14 その環はわくのわきにつけ、机をかつぐ棒を入れる所とした。
- 15 アカシヤ材で、机をかつぐ棒を作り、これを金でかぶせた。
- 16 さらに、机の上の器、すなわち、注ぎのささげ物を注ぐための皿や、ひしゃく、水差しや、びんを純金で作った。
- 17 また彼は、純金で燭台を作った。その燭台は、槌で打って作り、その台座と、支柱と、がくと、節と、花卉とで一個の燭台とした。
- 18 六つの枝をそのわきから、すなわち、燭台の三つの枝を一方のわきから、燭台の他の三つの枝を他のわきから出した。
- 19 一方の一つの枝に、アーモンドの花の形をした節と花卉のある三つのがくを、また、他方の一つの枝にも、アーモンドの花の形をした節と花卉のある三つのがくをつけた。こうして燭台から出る六つの枝をみな、そのようにした。
- 20 燭台の支柱には、アーモンドの花の形をした節と花卉のある四つのがくをつけた。

- 21 それから出る一對の枝の下に一つの節、それから出る次の一對の枝の下に一つの節、それから出るその次の一對の枝の下に一つの節。このように六つの枝が燭台から出ていた。
- 22 それらの節と枝とは燭台と一体にし、その全体は一つの純金を打って作った。
- 23 また、そのともしび皿七つと、その心切りばさみと、心取り皿とを純金で作った。
- 24 すなわち、純金一タラントで、燭台とそのすべての用具を作った。
- 25 彼は、アカシヤ材で香の壇を作った。長さは一キュビト、幅は一キュビトの四角形で、高さは二キュビト。これの一部として角をつけた。
- 26 そして、上面と回りの側面と角を純金でかぶせ、その回りに金の飾り縁を作った。
- 27 その壇のために、その飾り縁の下の両わきに、相対する両側に二つの金環を作った。それは、壇をかつぐ棒を通す所である。
- 28 その棒をアカシヤ材で作り、それに金をかぶせた。
- 29 彼はまた、調合法にしたがい、聖なるそそぎの油と純粋なかおりの高い香を作った。

出エジプト記 38 章

- 1 ついで、彼は、アカシヤ材で全焼のいけにえのための祭壇を作った。長さ五キュビト、幅五キュビトの四角形で、高さは三キュビト。
- 2 その四隅の上に、角を作った。その角はその一部である。彼は祭壇に青銅をかぶせた。
- 3 彼は、祭壇のすべての用具、すなわち、つぼ、十能、鉢、肉刺し、火皿を作った。そのすべての用具を青銅で作った。
- 4 祭壇のために、その下のほうに、すなわち、祭壇の出張りの下で、祭壇の高さの半ばに達する青銅の網細工の格子を作った。
- 5 彼は四つの環を鑄造して、青銅の格子の四隅で棒を通す所とした。
- 6 彼はアカシヤ材で棒を作り、それに青銅をかぶせた。
- 7 その棒を祭壇の両側にある環に通して、それをかつぐようにした。祭壇は板で中空に作った。
- 8 また彼は、青銅で洗盤を、また青銅でその台を作った。会見の天幕の入口で務めをした女たちの鏡でそれを作った。
- 9 彼はまた、庭を造った。南側では、庭の掛け幕は百キュビトの撚り糸で織った亜麻布でできていた。
- 10 柱は二十本、その二十個の台座は青銅で、柱の鉤と帯輪は銀であった。
- 11 北側も百キュビトで、柱は二十本、その二十個の台座は青銅で、柱の鉤と帯輪は銀であった。
- 12 西側には、五十キュビトの掛け幕があり、柱は十本、その台座は十個。柱の鉤と帯輪は銀であった。
- 13 前面の東側も、五十キュビト。
- 14 その片側には十五キュビトの掛け幕があり、柱は三本、その台座は三個であった。
- 15 庭の門の両側をなすもう一方の片側にも十五キュビトの掛け幕があり、柱は三本、台座は三個であった。
- 16 庭の周囲の掛け幕はみな、撚り糸で織った亜麻布であった。
- 17 柱のための台座は青銅で、柱の鉤と帯輪は銀、その柱の頭のかぶせ物も銀であった。それで、庭の柱はみな銀の帯輪が巻きつけられていた。
- 18 庭の門の幕は、刺繍されたもので、青色、紫色、緋色の撚り糸と、撚り糸で織った亜麻布とでできていた。長さは二十キュビト。高さ、あるいは幅は五キュビトで、庭の掛け幕に準じていた。
- 19 その柱は四本。その台座は四個で青銅であった。その鉤は銀であり、柱の頭のかぶせ物と帯輪とは銀であった。
- 20 ただし、幕屋と、その回りの庭の釘は、みな青銅であった。

- 21 幕屋、すなわち、あかしの幕屋の記録は、次のとおりである。これは、モーセの命令によって調べたもの、祭司アロンの子イタマルのもとでの、レビ人の奉仕である。
- 22 ユダ部族のフルの子であるウリの子ベツアルエルは、【主】がモーセに命じられたことを、ことごとく行った。
- 23 彼とともに、ダン部族のアヒサマクの子オホリアブがいた。彼は彫刻をし、設計をする者、また青色、紫色、緋色の撚り糸や亜麻布で刺繍をする者であった。
- 24 仕事すなわち聖所のあらゆる仕事のために用いられたすべての金は、奉献物の金であるが、聖所のシェケルで二十九タラント七百三十シェケルであった。
- 25 会衆のうちの登録された者による銀は、聖所のシェケルで百タラント千七百七十五シェケルであった。
- 26 これは、ひとり当たり一ベカ、すなわち、聖所のシェケルの半シェケルであって、すべて、二十歳以上で登録された者が六十万三千五百五十人であったからである。
- 27 聖所の台座と垂れ幕の台座とを鑄造するために用いた銀は、百タラントであった。すなわち、一個の台座に一タラント、百の台座に百タラントであった。
- 28 また、千七百七十五シェケルで彼は柱の鉤を作り、柱の頭をかぶせ、柱に帯輪を巻きつけた。
- 29 奉献物の青銅は七十タラント二千四百シェケルであった。
- 30 これを用いて、彼は会見の天幕の入口の台座、青銅の祭壇と、それにつく青銅の格子、および、祭壇のすべての用具を作った。
- 31 また、庭の回りの台座、庭の門の台座、および、幕屋のすべての釘と、庭の回りのすべての釘を作った。

上記の長い部分には、特に注目すべき重要な項目がいくつか含まれています。

出エジプト記 38 章 8 節には、「また彼は、青銅で洗盤を、また青銅でその台を作った。会見の天幕の入口で務めをした女たちの鏡でそれを作った。」と記されています。ここでは当時の女性たちが外見を確認するために鏡を使用していたという事実が確認でき、それは磨かれた青銅でできていたことが分かります。彼女たちはこれらを進んで提供し、祭司たちが自分たちを洗い清めるための青銅の洗面器の材料として使用されました。さらに注目に値するのは、女性たちが幕屋の入り口で仕えていたという事実です。彼女たちの存在は、サムエル記第一 2 章 22 節でも言及されています。これらの女性がどのような奉仕を行ったかは説明されていません。彼女たちは恐らく、ルカによる福音書 2 章 36、37 節で言及されるキリストの時代のアンナのように、祈りと断食に専念する生活を捧げたのかもしれませんが。また、彼女たちは、士師記 11 章 39 節で記録されているエフタの娘の場合にあったとされるように、祈りと断食によって主に仕えるために処女性を捧げた女性たちだったのかもしれませんが。聖書はこの件に関して詳細を記していません。

幕屋で最も重要な品物である契約の箱に関して、プロジェクト全体の主任建築家であるベザレルが個人的に監督したことが伝えられています。出エジプト記 37 章 1 節から 9 節はこの事実に注目を呼びかけています。

38 章 21 節から 31 節では、幕屋の建設に使用された金、銀、青銅の総量が示されています。金の重さは約 1 トン以上、銀は約 3 と 3/4 トン以上、青銅は約 2 と 1/2 トンと推定されています。現代の価値で、金がオンス当たり約 500 ドルであることを考慮すると、幕屋は計り知れない価値のあるものであることが分かります。当時でさえその価値は相当なものでした。言及されている銀には、贖い金として集められたもののみが含まれました。この金額を集めるために、20 歳以上の全男性が登録されました。その総数は 603,550 人であり、これは民数記 1 章 46 節に記された人口調査の報告と同じ数字です。

出エジプト記 39 章

- 1 彼らは、青色、紫色、緋色の撚り糸で、聖所で仕えるための式服を作った。また、【主】がモーセに命じられたとおりに、アロンの聖なる装束を作った。
- 2 彼はまた、金色、青色、紫色、緋色の撚り糸と、撚り糸で織った亜麻布で、エポデを作った。
- 3 彼らは金の板を打ち延ばし、巧みなわざで青色、紫色、緋色の撚り糸に撚り込み、亜麻布に織り込むために、これを切って糸とした。
- 4 彼らは、エポデにつける肩当てを作った。それぞれ、エポデの両端につけられた。
- 5 エポデの上で結ぶあや織りの帯は、エポデと同じ材料で、【主】がモーセに命じられたとおりに、金色、青色、紫色、緋色の撚り糸、撚り糸で織った亜麻布で、エポデと同様に作った。
- 6 彼らは、しまめのうを、金のわくにはめ込み、これに印を彫るようにして、イスラエルの子らの名を彫った。
- 7 彼らはそれをエポデの肩当てにつけ、【主】がモーセに命じられたとおりに、イスラエルの子らの記念の石とした。
- 8 彼はまた、胸当てを巧みな細工で、エポデの細工と同じように、金色や青色、紫色、緋色の撚り糸、撚り糸で織った亜麻布で作った。
- 9 四角形で二重にし、その胸当てを作った。長さ一あたり、幅一あたりで、二重であった。
- 10 それに、四列の宝石をはめ込んだ。第一列は赤めのう、トパーズ、エメラルド。
- 11 第二列はトルコ玉、サファイヤ、ダイヤモンド。
- 12 第三列はヒヤシンス石、めのう、紫水晶。
- 13 第四列は緑柱石、しまめのう、碧玉。これらを金のわくに入れてはめ込んだ。
- 14 これらの宝石は、イスラエルの子らの名によるもので、彼らの名にしたがい、十二個で、十二の部族のために印の彫り物が、一つの名につき一つずつあった。
- 15 ついで、編んで撚った純金の鎖を、胸当ての上に作った。
- 16 彼らは金のわく二個と金の環を二個作り、二個の環を胸当ての両端につけた。
- 17 そして彼らは、二筋の金のひもを胸当ての両端の二個の環につけた。
- 18 その二筋のひもの他の端を、先の二つのわくにつけ、エポデの肩当てに外側に向くようにつけた。
- 19 ほかに、二個の金の環を作り、これを胸当ての両端、すなわち、エポデの前に来る胸当ての内側の縁につけた。
- 20 ほかに、二個の金の環を作り、エポデの二つの肩当ての下端の外側に、すなわち、エポデのあや織りの帯の上部の継ぎ目に接した面の上につけた。

- 21 胸当ては青ひもで、その環のところをエポデの環に結びつけ、エポデのあや織りの帯の上にあるようにし、胸当てがエポデからずり落ちないようにした。【主】がモーセに命じられたとおりである。
- 22 また、エポデの下に着る青服を青色の撚り糸だけで織って作った。
- 23 青服の口は、その真ん中であって、よろいのえりのようで、その口の周囲には縁をつけて、ほころびないようにした。
- 24 青服のすその上に、青色、紫色、緋色の撚り糸で、撚ったざくろを作った。
- 25 また彼らは、純金の鈴を作り、その鈴を青服のすそ回りの、ざくろとざくろとの間につけた。
- 26 【主】がモーセに命じられたとおりに、仕えるための青服のすそ回りには、鈴にざくろ、鈴にざくろがあった。
- 27 彼らは、アロンとその子らのために、織った亜麻布で長服と、
- 28 亜麻布でかぶり物と、亜麻布で美しいターバンと、撚り糸で織った亜麻布でももひきを作った。
- 29 撚り糸で織った亜麻布や青色、紫色、緋色の撚り糸で、刺繍してできた飾り帯を作った。【主】がモーセに命じられたとおりである。
- 30 ついで、聖別の記章の札を純金で作り、その上に印を彫るように、「【主】の聖なるもの」という文字を書きつけた。
- 31 これに青ひもをつけ、それをかぶり物の回りに上から結びつけた。【主】がモーセに命じられたとおりである。
- 32 こうして、会見の天幕である幕屋の、すべての奉仕が終わった。イスラエル人は、すべて、【主】がモーセに命じられたとおりにした。そのようにした。
- 33 彼らは幕屋と天幕、および、そのすべての用具をモーセのところに持って来た。すなわち、それは、その留め金、その板、その横木、その柱、その台座、
- 34 赤くなめした雄羊の皮のおおい、じゅごんの皮のおおい、仕切りの垂れ幕、
- 35 あかしの箱と、その棒、「贖いのふた」、
- 36 机と、すべての器、供えのパン、
- 37 純金の燭台と、そのともしび皿、すなわち、一列に並べるともしび皿と、そのすべての用具、および、その燈火用の油、
- 38 金の祭壇、そそぎの油、かおりの高い香、天幕の入口の垂れ幕、
- 39 青銅の祭壇と、それにつく青銅の格子と、棒と、そのすべての用具、洗盤とその台、
- 40 庭の掛け幕とその柱と、その台座、庭の門のための垂れ幕とそのひもと、その釘、また、会見の天幕のための幕屋に用いるすべての用具、
- 41 聖所で仕えるための式服、祭司アロンの聖なる装束と、祭司として仕える彼の子らの装束である。

42 イスラエル人は、すべて、【主】がモーセに命じられたとおりに、そのすべての奉仕を行った。

43 モーセが、すべての仕事を彼らが、まことに【主】が命じられたとおりに、したのを見たとき、モーセは彼らを祝福した。

この章では、祭司用の様々な衣服について再び触れられています。これらの衣服は、主の指示に基づいて作成されました。「主がモーセに命じられたとおりに」、というフレーズが、この章に 9 回登場します。すべてが正確に仕様通りに作られました。幕屋の材料の準備と祭司の衣服の作成が完了すると、モーセが全てを慎重に検査しました。モーセは見たものに満足し、献身的に仕事をした民を祝福しました。これにより、幕屋を使用するための全ての準備が整いました。

出エジプト記 40 章

幕屋を建てなければならない

- 1 【主】はモーセに告げて仰せられた。
- 2 「第一の月の一日に、あなたは会見の天幕である幕屋を建てなければならない。
- 3 その中にあかしの箱を置き、垂れ幕で箱の前を仕切り、
- 4 机を入れ、その備品を並べ、燭台を入れ、そのともしび皿を上げる。
- 5 あなたは香のための金の壇をあかしの箱の前に置き、垂れ幕を幕屋の入口に掛ける。
- 6 会見の天幕である幕屋の入口の前に、全焼のいけにえの祭壇を据え、
- 7 会見の天幕と祭壇との間に洗盤を据えて、これに水を入れる。
- 8 回りに庭を設け、庭の門に垂れ幕を掛ける。
- 9 あなたは、そそぎの油を取って、幕屋とその中のすべてのものにそそぎ、それと、そのすべての用具とを聖別する。それは聖なるものとなる。
- 10 あなたは全焼のいけにえの祭壇と、そのすべての用具に油をそそぎ、その祭壇を聖別する。祭壇は最も聖なるものとなる。
- 11 洗盤とその台とに油をそそいで、これを聖別する。
- 12 アロンとその子らを会見の天幕の入口に近づかせ、水で彼らを洗い、
- 13 アロンに聖なる装束を着けさせ、彼に油をそそぎ彼を聖別する。彼は祭司としてわたしに仕える。
- 14 彼の子らを近づかせ、これに長服を着せなければならない。
- 15 あなたは、彼らの父に油をそそいだように、彼らにも油をそそぐ。彼らは祭司としてわたしに仕える。彼らが油をそそがれることは、彼らの代々にわたる永遠の祭司職のためである。」
- 16 モーセはそのようにした。すべて【主】が彼に命じられたとおりに行った。

「幕屋を建てなければならない」と主がモーセに命じました。作業員たちは彼らの任務を完了していました。すべての準備は整っていました。この主の命令は「第一の月の一日に」出されました。同じ 40 章の 17 節によると、これは「第二年目の第一月、その月の第一日」に起こりました。

私たちは、イスラエル人が主の指示に従い、過越祭から年を始めたことを覚えています。現代の暦では、これは 4 月に当たります。イスラエル人はエジプトを出てから「第三の月」にシナイ山に到着しました（19 章 1 節）。モーセはシナイ山で 2 回にわたって 40 日間を過ごしたことが知られています。律法を授けるための準備にも、イスラエルの金の子牛への礼拝のためにモーセが山に最初と 2 度目に滞在した間にも、時間がかか

りました。これらの要因を踏まえると、イスラエル人が幕屋とその中身を主の指示に従って準備するのに約半年かかったと推測されます。

さまざまな項目が主の指示に従って配置された後、それらは油で塗油され、主の奉仕のために聖別されました。油で塗油することは、これらのものが聖なる神の使用のため、そして主の聖なるみ名の礼拝のために特別に選ばれたことを意味しました。

12 節から 15 節では、アロンと彼の息子たちも主の奉仕のために油で塗油されたと伝えられています。レビ記 8 章によると、この祭司たちの聖別は、主がモーセに幕屋の奉仕で祭司たちが行うさまざまな犠牲に関する指示を与えた後、しばらくしてから行われたに違いありません。

幕屋の材料が準備された後、幕屋自体の設置は大きな作業ではありませんでした。主はそれを移動式の構造として設計し、場所から場所への移動のために設置したり解体したりできるようにされました。これは次の節でさらに詳しく見ることができます。

幕屋は建てられた

17 第二年目の第一月、その月の第一日に幕屋は建てられた。

18 モーセは、幕屋を建てるとき、台座を据え、その板を立て、その横木を通し、その柱を立て、

19 幕屋の上に天幕を広げ、その上に天幕のおおいを掛けた。【主】がモーセに命じられたとおりである。

20 また、彼はさとしを取って箱に納め、棒を箱につけ、「贖いのふた」を箱の上に置き、

21 箱を幕屋の中に入れ、仕切りのために垂れ幕を掛け、あかしの箱の前を仕切った。

【主】がモーセに命じられたとおりである。

22 また、彼は会見の天幕の中に、すなわち、幕屋の北のほうの側で垂れ幕の外側に、机を置いた。

23 その上にパンを一行に並べて、【主】の前に供えた。【主】がモーセに命じられたとおりである。

24 彼は会見の天幕の中、机の反対側の幕屋の南側に、燭台を置いた。

25 そうして彼は【主】の前にともしび皿を上げた。【主】がモーセに命じられたとおりである。

26 それから彼は、会見の天幕の中の垂れ幕の前に、金の壇を置き、

27 その上でかおりの高い香をたいた。【主】がモーセに命じられたとおりである。

28 彼は、幕屋の入口に垂れ幕を掛け、

29 全焼のいけにえの祭壇を、会見の天幕である幕屋の入口に置き、その上に全焼のいけにえと穀物のささげ物とをささげた。【主】がモーセに命じられたとおりである。

30 また彼は、会見の天幕と祭壇との間に洗盤を置き、洗いのために、それに水を入れた。

31 モーセとアロンとその子らは、それで手と足を洗った。

32 会見の天幕に入るとき、または、祭壇に近づくとき、彼らはいつも洗った。【主】がモーセに命じられたとおりである。

33 また、幕屋と祭壇の回りに庭を設け、庭の門に垂れ幕を掛けた。こうして、モーセはその仕事を終えた。

この部分では、幕屋の各部品の組み立て方と、幕屋内の各アイテムの配置場所が段階的に説明されています。棒が取り付けられた状態の契約の箱は、至聖所のカーテンの後ろに設置されました。パンの供えのテーブルは聖所の北側に配置され、黄金の燭台は南側に置かれました。（幕屋の入口は、以前述べた通り、東向きでした。）香の祭壇も聖所内にあり、聖所と至聖所を隔てるカーテンの前に立っていました。焼き尽くす犠牲の祭壇は中庭の東側入口に向けて設置され、その祭壇と幕屋の入口の間には、祭司が身を洗うための洗面器が設置されていました。すべてが主の承認のために準備され、40 章の最後の節に記されているように、その承認は非常にユニークで効果的な方法で人々に示されました。

主の栄光

34 そのとき、雲は会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた。

35 モーセは会見の天幕に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていたからである。

36 イスラエル人は、旅路にある間、いつも雲が幕屋から上ったときに旅立った。

37 雲が上らないと、上る日まで、旅立たなかった。

38 イスラエル全家の者は旅路にある間、昼は【主】の雲が幕屋の上に、夜は雲の中に火があるのを、いつも見ていたからである。

この書の最終節では、私たちは2種類の雲について学びます。どちらも以前に説明されていました。一つ目は、イスラエル人がエジプトを出発する際に現れた雲でした。これは昼間は「道を導く雲の柱」として、夜は「彼らに光を与える火の柱」として現れ、「昼でも夜でも旅を続けることができた」のです。この雲によって、主はイスラエル人をその旅路で導きました。

彼らが宿営したどこにでも、雲はその宿営地の上にありました。イスラエル人は、雲が上がって道を導くまでは宿営地を立ち去らず、旅を続けることはありませんでした。神によるこの導き方は、イスラエルがシナイ山の宿営地を出発する際、民数記9章15-

23 節で更に詳細に述べられています。幕屋が設置される場所ではいつも、雲がそれを覆いました。夜になると、それは火のように見えました。この雲は、彼らが最終的に約束の地カナンに到着するまで彼らを導き続けました。

最後の節で言及されるもう一つの雲は、幕屋の上に留まる雲とは異なっています。この雲は幕屋を満たし、モーセでさえこの場所に入ることができませんでした。ここでは、この雲は「主の栄光」と呼ばれています。私たちはこの表現がこの本で何度も使われているのを聞いています。雲は、時に火や主の善良さと結びつけられることがありました。それは常に主の恵みと慈悲の特別な啓示を示していました。ここでは主の栄光が雲の形で幕屋に満ち、主がこの構造物を自らの住まいとして真に受け入れたことをイスラエル人に示しています。後に主は、エルサレムの神殿の奉献に際して、同様の方法で自らの救いの存在を民に示しました。これは列王記第一 8 章 10、11 節で説明されています。

出エジプト記が、主の栄光のこの最終的かつ目に見える示しで締めくくられることは、ふさわしいことです。主の栄光が今までにどう現れたかを、いくつか思い出しましょう。出エジプト記のはじめの数章は、主の栄光が燃える茂みの中に現れ、モーセに約束の地へイスラエル人を導くよう呼びかけたことを記しています。紅海では、主がモーセに、「パロとその全軍勢を通してわたしは栄光を現し、エジプトはわたしが主であることを知るようになる。」と述べました（14 章 4 節）。その時、主は、海を通る安全な道を与えながらファラオの軍隊を滅ぼす、という奇跡的な手段でご自分の民を救いました。シンの荒野では、モーセは民に「朝には、主の栄光を見る。」と告げました（16 章 7 節）。そして朝になると、彼らは主が約束した通り、夕方には肉（うずら）を、朝にはパン（マナ）を与える雲の中に主の栄光を見ました。シナイ山での主の栄光の現れは、主がご自分の律法を与え、その民との契約を結ぶことでした。契約が確認されたとき、主の栄光は雲の形でシナイ山に留まりました。イスラエルが金の子牛を崇拜し罪を犯した後、主はモーセにご自身を啓示し、主の栄光を通じて、その御名である主、慈悲深く寛大な神、そして同時に罪人を罰する神であることを宣言しました。モーセの顔は、主とイスラエルの契約が再び確認された後、山から降りるときに、主の栄光を反映していました。

幕屋が建てられた後、主の栄光が幕屋を満たし、主の民に、罪のゆるしと救いの神との交わりをここに見いだせることが示されました。ここで彼らは、罪の償いのために供え物を捧げることができました。ここで彼らは、主の祭司たちの王国として、主の聖なる民として主に対する献身を、供え物を通して示すことができました。ここで彼らは主の御名を賛美し感謝をささげ、あわれみ深い神と交わることができました。

こうしてイスラエル人は、主の恵みの玉座に自分たちの祈りを捧げることができました。この幕屋において、主は、彼らの神として人々の間に住みました。イスラエルは主の民でした。

出エジプト記を締めくくるのに、これほど効果的な終わり方があったでしょうか！エホバは、イスラエル人にご自身が彼らの契約の主であることを明確に証明しました。主

は彼らをエジプトから救い出しました。主はシナイ山で彼らとの契約を結びました。主はご自身の住まいとなる契約の場、すなわち幕屋を彼らに与えました。これで主の民の、約束の地カナンへ向けての旅の準備が整いました。これはまさしく、最高の救済の歴史です！

出エジプト記の研究を締めくくるにあたり、荒野の幕屋が私たちの印象に残ります。ここで主は、この契約の神聖な場所を主の栄光で満たしています。

新約聖書に基づく、この幕屋が、旧約時代の神の民に与えられた祝福の「天にあるものの写しと影」であったことが分かります（ヘブル 8:5）。それによって、神はご自身の民との間における臨在を示し、約束の地カナンへの旅を続ける人々を力づけました。そこで主はアブラハム、イサク、ヤコブと結んだ契約を果たし、全人類のための救い主の約束に重きを置いた契約を成就することになります。その救い主が来るまで、旧約の神の民は律法のもとにあり、シナイ山で確立された契約関係のもとにありました。ガラテヤ人への手紙 4 章 1 節から 3 節に記されている通り、彼らは「監督者や管理者」による規律を必要とする子どものようなものでした。「相続人というものは、全財産の持ち主なのに、子どものうちは、奴隷と少しも変わらず、父の定めた日までは、後見人や管理者の下にあります。私たちもそれと同じで、まだ小さかった時には、この世の幼稚な教えの下に奴隷となっていました。」（ガラテヤ 4:1-3）

私たちは特に、シナイ山の契約の一部として主がその民に与えたすべての儀式的規則や規制においてこの事実を確認しました。

パウロは続く 4 節と 5 節で「しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。」と教えています。モーセの時代に神が幕屋に住んだのと同様に、神の御子イエスがこの世に来たとき、主は私たちの間に住みました。肉体をもち、人となった「ことば」こそ、永遠の主イエスでした。（ヨハネ 1:14）パウロはコロサイ人への手紙 2 章 9 節で「キリストにはすべての神性の満ち満ちた姿が体に宿っています」と、宣言しています。

まことの神は、地上の人々と共に住んだだけでなく、罪深い人類の身代わりとなりました。イエスは神の律法のもとにある全人類の代理となり、神の要求を完璧に満たしました。主は世界の罪を背負い、犠牲となって苦しみ、死にました。キリストの死に際して、エルサレムの神殿で聖所と至聖所を隔てていたカーテンが「上から下まで真っ二つに裂けた」と記されています（マタイ 27:51）。私たちの大祭司として、イエスは「手で造った物でない、言い替えれば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋」を通して行きました（ヘブル 9:11）。その「さらに完全な幕屋」とは、キリストが「自らの血によって、永遠の贖いを得て」私たちのために購入し、勝ち取った天の家です（同 12 節）。

そしてイスラエルが約束の地カナンへと旅をしたように、私たちも天の父の永遠の住まいである、神と人の幕屋へと向かっています。そこで私たちは主の民となります。そ

こは、主が私たちの神となる場所、古い秩序が過ぎ去った場所です。これが私たちの目標、旅の終わりです。この旅の途上、私たちはしばしば古いイスラエルのようになります。マラヤシンの荒野、またはレフィディムでのイスラエルの人々のように神の祝福を感謝しなくなります。しかし、あわれみ深い主は、荒野でのマナや、岩から流れ出た水のように、私たちの必要を豊かに満たします。

私たちは時折、紅海でのイスラエルのように恐れを感じます。しかし、主はその威厳ある力で私たちを導き、イスラエルが海を安全に通り抜けた後に、大水が敵を打ち砕いたように私たちを守ります。私たちはしばしば、金の子牛を拝んだときのイスラエルのように神に反抗する誘惑に駆られます。しかしキリストを通して、神は私たちが自分自身を見つめ直し、悔い改めるための時間を与えます。それは、モーセの取りなしの後、主がイスラエルを悔い改めに導き、頑固な民との契約を寛大に更新した時のようです。

神の導きにより、私たちの旅が恵みから栄光へと続き、地上での日々において、天の約束の地へと安全に導かれることを祈ります。この出エジプト記の研究を通じて、天国への希望が、私たちの中で強められたことを心から願います！

